

公開 令和 3 年 9 月 1 日



教員研究業績

芦屋大学



臨床教育学部

教育学科

窪田 幸子	学長 教授	1
杉島 威一郎	学部長 教授	6
青木 敦英	教授 学科主任	7
大石 徹	教授	20
三羽 光彦	教授	27
三浦 正樹	教授	37
伊藤 武徳	准教授	40
奥野 拓司	准教授	41
金 相煥	准教授	43
西光 哲治	准教授	45
石川 峻	講師	48
別當 和香	講師	56
武田 光平	助教	59

臨床教育学部

児童教育学科

渡 康彦	教授	60
石田 愛子	教授 学科主任	63
林 知代	教授	67
大江 まゆ子	准教授	73
大谷 彰子	准教授	84
竹安 知枝	准教授	89
丹下 秀夫	准教授	113
中村 整七	准教授	117
福山 恵美子	准教授	122
毛利 康人	准教授	126
安藝 雅美	講師	129

経営教育学部
経営教育学科

西光 晴彦	副学長 教授	132
藤本 光司	学部長 教授	137
齋藤 治	教授	146
瀧 巖	教授	148
中村 宏敏	教授	150
森下 博行	教授	154
盛谷 亨	教授	156
池田 聡	准教授 学科主任	158
井上 徹	准教授	163
林 泰子	准教授	165
成瀬 優享	講師	169
井村 薫子	助教	172

① 教育研究業績書
教育研究業績書
氏名 窪田 幸子

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
【著書】				
1 『ワンロードー現代ア ボリジニ・アートの世界』	共著・ 監修	2016年	現代企画室	151頁
2 “Social Learning and Innovation in Contemporary Hunter- Gatherers Evolutionary and Ethnographic Perspectives”	共著 共著	2016	Springer.	‘Innovation of Paintings and Its Transmission: Case Studies from Aboriginal Art in Australia’ pp.229-234,
3 “Entangled Territorialities: Negotiating Indigenous Lands in Australia and Canada”	共著	2017	University of Toronto Press, Toronto, Canada	‘Transmission of Knowledge, Clans, and Lands among the Yolng (Northern Territory, Australia)’ pp.163-185,
4 Tokoro & Kawai eds. “An Anthropology of Things”	共著	2017	Kyoto University Press	‘Globalization of Aboriginal Paintings, Localization of “Art” ’ pp.315-320
5 田中・松嶋編『トラウ マ研究Ⅱートラウマを共 有する』	共著	2018.4.10.	京都大学学術出版会	「ナショナルな歴史経験とトラウ マー先住民への謝罪と和解」 pp.195-218
6 関根ほか編『オーストラ リア多文化社会論ー移民・難民・先住民族との共 生をめざして』	共著	2020.2.15.	法律文化社	「政治的ダイナミズムと遠隔地 のアボリジニ」pp.79-93
7 Nakatani ed. “Fashionable Traditions - Asian Handmade Textiles in Motion”		2020	Lexington Books, London, UK.	“Crafts” to “Arts” ?- A Trajectory of Aboriginal Women’s Weavings in Arnhem Land, Australia. , pp. 177-191,
8 月村太郎編『部族紛争 後状況の多元的研究』、		2020年3月20 日	法律文化社	「和解という道筋の可能性を考 える」, 77-104頁
【学術論文】				
1 ‘Conflict and Peacebuilding rituals in North Australia - Traditional and	単著	2017	“Conflicts and Peacebuilding: Toward the Sustainable	pp.83-88 Doshisha University GRM Program.

contemporary contexts’ 2 「1988年をふりかえる：入植200周年以降の先住民・非先住民関係」	単著	2019.3.	Society” , 『オーストラリア研究』第32号、pp.114-117, オーストラリア学会。	
【その他(講演や発表)】 1「アボリジニ・アートの変貌ー工芸のグローバルイゼーションと芸術ー」	単	2016年1月31日	共同研究会「表象のポリティックス」国立民族学博物館	研究発表
2' Comment: Interecultural Property rights and Ethnic Authenticity'	単	2016年3月11-13日	Authentic Change in the Transmission of Intangible Cultural Heritage National Museum of Ethnology, Osaka	国立民族学博物館国際シンポジウムコメント
3 「アボリジニの編組品の展開ー美術 vs 工芸、ジェンダー」	単	2016年4月10日	布科研研究会@ 岡山大学	科学研究費補助金・共同研究(代表・中谷文美)、研究発表
4 「One Road 展ーキャニオン半追いのルートの物語ーの展示」	単	2016年4月24日	オーストラリア研究会ルブラ王山(名古屋市)	研究発表
5 'Challenges of anthropology and the humanities in 21st century Japan'	単	2016. 5. 4-9.	IUAES Inter Congress, Dubrovnik, Croatia	国際学会セッション発表
6 'Museums and Indigenous people: Case studies from local and mainstream museums in Australia'	単	2016. 5. 4-9.	IUAES Inter Congress, Dubrovnik, Croatia	国際学会研究発表
7 「ジェンダーから考えるオーストラリアとアボリジニ社会」	単	2016年6月11日	科研費研究会:「ジェンダー視点に立つ「新しい世界史」の構想と「市民教養」サピアタワー甲南大学オフィス	科研費補助金研究会(代表:三成美保) 研究発表
8 「ミッションの再来?ー新しいプロジェクトをめぐる近代知と Indigenous Knowledge」	単	2016年6月6日	「在来知と近代科学」(IK&MS)2015年度第1回全体研究会 大阪大学豊中キャンパス	研究発表
9 「One Road 展から表象を考える」	単	2016年7月9日	共同研究会「表象のポリティックス」国立民族学博物館	研究発表
10 'Museum and Indigenous people in National/Global context - Comparative	単	2016. 7. 15.	2016 International Conference on the Culture of Jeju	招待講演

perspective from Australia and Japan'			Haenyeo @Jeju KAL Hotel	
11 'Conflict and Peacebuilding rituals in North Australia - Traditional and contemporary contexts'	単	2016. 7. 16-17.	GRM International Conference I 2016 Conflicts and Peacebuilding: Toward the Sustainable Society, Doshisha University, Kyoto	国際シンポジウム発表
12 'Why Japanese Museum Goers appreciate Australian Indigenous paintings'	単	2016. 12. 13.	Australian Anthropological Society Annual meeting 2016 The University of Sydney, Australia	オーストラリア人類学会発表
13 'Crafts' to 'Arts'? - Weavings of Aboriginal Women and its change'	単	2017. 5. 4.	IUAES/CASCA University of Ottawa, Canada	Panel: fashionable tradition: innovation and continuity in the production and consumption of handmade textiles and crafts (chair:Nakatani & Kubota)アメリカ・カナダ合同人類学会発表
14「少数者を表象から考えるという	単	2017年5月27-28日	日本文化人類学会 第51回研究大会 神戸大学	分科会 D① 少数者表象のポリティックス - 展示、衣装、観光、芸術の文脈にあらわれる「もの」を中心に 代表者 窪田幸子
15 'Representations and Acceptance of Australian Aboriginal Arts in Japan'	単	2017. 10. 15.	EAAA (East Asian Anthropological Association), Hong Kong Conference 2017, Hong Kong Chinese University	東アジア人類学会発表
16 「国家的暴力と和解オーストラリアとカナダの事例から」	単	2017年11月12日	紛争科研集会 於同志社大学	科学研究費補助金研究会研究発表
17 'Aboriginal arts and changes of their acceptance in different 'states''	単	2017. 12. 14.	AAS/ASA/ASAANZ 2017 Adelaide University	オーストラリア・ニュージーランド人類学会連合大会発表
18 「'クラフト' から 'アート' へ? - アボリジニ女性の編組品とその変化」	単	2018年1月28日	布科研研究集会 於岡山大学	科研費研究会発表
19 'Different	単	2018. 6. 2.	Art, Materiality	大英博物館・ロンドン大学合同学会 研究発表

relationships- Indigenous people and the museum in Japan and Australia			and Representation BRITISH MUSEUM/SOAS	
20「1988 年をふりかえる: 入植 200 周年以降の先住 民・非先住民関係」	単	2018 年 6 月 9 日～10 日	2018 年度全国研究大 会 筑波大学筑波キャ ンパス	招聘・コメント
21 「人類学と博物館ーア ボリジニの遺物返還をめぐ って」	単	2018 年 7 月 4 日	南山学会人文・自然科 学系列研究例会 南 山大学	招聘・研究発表
22 Japanese Anthropology and its Change”	単	2018. 7. 17.	PL II - Education in Anthropology in different national contexts IUAES 2018 Florianopolis, Brazil	国際学会・研究発表
23 Aboriginal Alternative Tourism in Arnhem Land -Tourism as Cultural Learning”	単	2018. 7. 24.	'The role of "new tourism" in post - /sustaining hunting and gathering societies' CHAGS Malaysia, Penang	国際学会・研究発表
24「海外における遺骨返還 ーオーストラリアの事例」	単	2018 年 9 月 29 日	日本学術会議・歴史的 遺物の返還の分科会 甲南大学東京オフィス	研究発表
25"Repatriation in Australia"	単	2018 年 10 月 3 日	返還科研研究会 神 戸大学	研究発表
26 「海外における先住民 遺骨返還ーオーストラリア の事例ー」	単	2018 年 10 月 20 日	第 72 回日本人類学会 大会 国立遺伝学研 究所	招聘
27 「'クラブト' から'ア ート' へ? ーアボリジニ女性の 編組品とその変化ー」	単	2018 年 12 月 8 日	民博共同研究会「伝統 染織品の生産と消費 ー文化遺産化・観光化 によるローカルな意味 の変化をめぐって」(代 表 中谷文美) 国立 民族学博物館	研究発表
28 「赦しと和解の可能 性」	単	2019 年 2 月 28 日	紛争科研研究会 同 志社大学	研究発表
29 「和解という道筋の可能 性」	単	2019 年 5 月 18 ～19 日	紛争科学研究費研究 会 金沢兼六荘	研究発表
30 'Repatriation of Ainu human remains'	単	2019 年 8 月 22 日	Kwansei Gakuin Workshop, seminar room 1401, Osaka-	研究発表

31 AINU, the Japanese Indigenous peoples- its history and changes'	単	2019年9月18日	Umeda Campus of Kwansai Gakuin University Anthropology Seminar, Waikato University, Hamilton, New Zealand	招聘
32 民研究とオーストラリア グローバルな視座と地域」	単	2019年10月4日	学術会議地域研究委員会地域基盤分科会公開シンポジウム「危機を超えて 地域研究からの価値の創造」日本学術会議 講堂	招聘・シンポジウム講演
33 'Changes in the repatriation –Australia and Japan comparatively',	単	2019年11月21日	American Anthropological Association conference /CASCA, Vancouver Convention Centre	アメリカ人類学会発表
34 'Changes in the repatriation – Issues concerning Ainu people, Japan, and involvement of academics',	単	2020年3月3日	ICAS: MP Workshop 'New Roles of professional historians in politics and new forms of public use of history', Center for the Study of Developing Societies(CSDS) 3-4 March, Delhi, India	国際ワークショップ発表・招聘
35 'Dealing with Negative Legacies in Japan – Why we do not apologize ?'	単	2020.9.28.	Keynote, Annual Conference of The Taiwan Society for Anthropology and Ethnology (TSAE) 、 National Chi Nan University	台湾人類学会キーノート講演・招聘
36 「コロナ禍におけるフィールドワーク研究の困難と課題」	単	2021年2月19日	「2020年度全国公正研究推進会議」COVID-19を経験した世界のニューノーマルな公正研究と教育分科会3「コロナが変える？コロナで変わる？人文学・社会科学における研究公正と研究の質」	研究発表・招聘
37 .「先住民族との和解、謝罪とヒーリングーオーストラリアとカナダの比較から」	単	2021. 2. 16.	北海道大学アイヌ・先住民研究センター講演会	講演・招待
38 Continuous Attempts for Further involvements- Museums and Indigenous People in Australia	単	2021.3.12.	IUAES 2020 Congress Sibenik, Croatia, March 9-14 2021	国際学会・研究発表

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 杉島 威一郎						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ページ 数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
日本史概論 I 日本文化 史研究 宗教学 社会概論	【著書】 1.和田神 社と和田 岬	単	平成 27 年 7 月	和田神社	131 ペー ジ	本書は和田神社小史、和田岬の歴史と 信仰、和田岬を訪れた人々の3章から なる。和田神社小史では和田神社が鎮 座した年の推定、江戸時代の氏子論 争、近代における神社の変容について 考察した。和田岬の歴史と信仰と和田岬 を訪れた人々では一般読者にわかりや すく郷土の歴史を紹介した。
日本史概論 I 日本文化 史研究 宗教学 社会概論	2(歴史コロ ム) 神戸市に おける市 民祭の成 立と展開	単	平成 25 年 3 月	都市政策	2ペ ージ	公益財団法人神戸都市問題研究所に 依頼を受け、研究所の季刊誌である『都 市政策』に毎号連載されている歴史コロ ムに神戸市の市民祭について執筆し た。昭和八年に誕生した神戸市の市民 祭が戦前、戦中、戦後とどのような変遷 を辿ってきたか要点をまとめた。

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
【その他(講演や発表)】 1 講演 「みなとの祭」について	単	平成 25 年 9 月	都市問題研究所	都市問題研究所が行っている定 例の歴史研究会で、「みなとの 祭」を中心に神戸市の市民祭や 博覧会について時代背景を踏ま えつつ、研究発表を行った。特に 戦前の郷土意識の高まりと市民 祭の誕生が密接な関係を持つこ とについて、指摘した。
2【研究発表】 神道にみられる渡来文化の 影響～シルクロードの終着 点、日本の視点から～	単	平成29年11月	関西学院大学シルクロ ード研究センター 国際シンポジウム	古代の神道において、主にシル クロードを経由して伝えられた文 化に着目し発表した。日本独自 の宗教と考えられる神道が成立 期において外来文化の影響を受 けていたことを指摘した。

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 青木 敦英					
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は発 表学会等の名 称	概 要
中等教科教育 法Ⅰ【保健体 育】	(学術論文) 1. 保健体育科教育 実習生の不安と教育実習 前後の教員志 望の変化につ いて	単	平成 29 年 1 月	芦屋大学論叢 (No.66, 1-6)	芦屋大学の保健体育科での教育実習生の不安について調査するとともに、教育実習が教員志望に与える影響について調査し、体育教員養成課程での課題について検討した。その結果、「授業実践力」が最も大きな不安因子であり、授業内容に関する不安が多数を占めた。また、教育実習前後の教員志望の変化では実習後に有意に高くなっており、66.7%の学生の教員志望率が増加していた。今後の学内での指導において、教育実習生の不安を出来るだけ早期に払拭できる指導を行うとともに、「授業実践力」を高めるための指導を充実させ、教職の意欲の高い学生を教育実習に参加させることが、教員採用試験の合格者を輩出するために必要であることを論じた。
	2. 保健体育科での教育実習の経験が教師の資質・能力と教員志望度に及ぼす影響	単	令和 1 年 7 月	芦屋大学論叢 (No.71, 1-8)	本研究は、芦屋大学の保健体育科で教育実習を経験した学生を対象に、教師に必要な資質・能力に関する自信尺度の自己評価アンケート(自己評価得点)と、教育実習前後の教員志望の度合いの変化について調査し、教育実習の経験が教師の資質・能力の自己評価と教員志望にどのように影響を及ぼしているか検討を行った。その結果、教育実習前後の教員志望度の変化について明らかな変化はみられなかった。しかし自己評価得点と教育実習の前後で教員志望度が変化した割合(変化率)には、有意な正の相関関係が認められた。教育実習前後で志望度が維持または向上した学生と、教育実習前後で志望度が低下した学生では、教育実習で身につけた教員としての資質・能力に違

	3. 大学の特徴を生かした教員の就職支援に関する一考察 －芦屋大学での教員採用試験対策をもとに－	共	令和1年7月	芦屋大学論叢 (No.71, 21-30)	いがあることが示唆された。 本研究においては、小規模な教員養成系大学における教採受験学生の傾向・実態を踏まえ、受験に向けた効果的な支援方策の在り方に着目した。①受験生が集える年間通した受験対策講座の設定、②講座を継続受講できるための有効な支援方策、③講座受講生の力を高める講師団編成の在り方について、それぞれ仮説を立て3年間にわたって実践研究し、年度ごとの受験結果を踏まえて考察した。受験生との協議をもとに、ニーズを踏まえて各対策講座を設定し実施してきたことや、本学の少人数教育の成果を生かした受験生ごとに対応する指導・支援の継続、学内教員を核にした講師団編成等が受験対策に有用であるという重要な手掛かりを得ることができた。 (共著者 笠原清次, 竹安知枝, 盛谷亨, 青木敦英, 若杉祥太, 石川峻, 辻尚士, 雄倉春来) (※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能)
中等教科教育 法Ⅲ【保健体育】	(学術論文) 1. 保健体育科教育実習生の不安と教育実習前後の教員志望の変化について	単	平成29年1月	芦屋大学論叢 (No.66, 1-6)	(再掲のため、略)
	2. 保健体育科での教育実習の経験が教師の資質・能力と教員志望度に及ぼす影響	単	令和1年7月	芦屋大学論叢 (No.71, 1-8)	(再掲のため、略)
	3. 大学の特徴を生かした教員の就職支援に関する一考察 －芦屋大学での教員採用試験対策をもとに－	共	令和1年7月	芦屋大学論叢 (No.71, 21-30)	(再掲のため、略)

運動生理学	(学術論文)				
	1. 肘屈曲運動における力-速度関係からみた両側性および一側性の筋パワー特性	共	平成 24 年 12 月	日本運動・スポーツ科学学会 運動とスポーツの科学 (No.18, 9-15)	本研究は、これまで筋力を中心にみられた両側性機能低下 (Bilateral deficit: BLD) と呼ばれる現象が、力-速度関係および力-パワー関係についても出現するか否かについて、一般男子大学生 13 名を対象に検討した。その結果、力-速度曲線および力-パワー曲線において、一側条件が両側条件よりも高い値を示し、とくに軽い負荷条件において速度に有意な差が認められ、力-速度-パワー関係においても BLD が出現することが確認された。 (共著者 青木敦英, 荒木香織, 田路秀樹) (※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能)
	2. 女子中学生における音響的骨評価値による骨密度と運動習慣との関連について	単	平成 27 年 1 月	芦屋大学論叢 (No.62, 1-7)	女子中学生を対象に、安全かつ簡易に行える音響的骨評価値 (OSI) を用いて、思春期における運動習慣および運動内容が骨の形成に与える影響について検討を行った。その結果、OSI は学年が進むにつれ大きくなる傾向を示し、2 年生と 3 年生で運動部に所属している生徒が運動部に所属していない生徒よりも OSI は有意に高値を示した。また、運動種目と OSI の関係については、跳躍運動を主体とした群において体育以外で運動を行わない群よりも有意に高い OSI を示し、跳躍運動を主体としたスポーツが骨形成に好影響を与えている可能性が示唆された。
	3. 中学生陸上競技選手の指導に関する一考察：無酸素パワーと脚筋力の分析から	共	平成 27 年 3 月	兵庫県立大環境人間学部研究報告 (No.17, 57-67)	中学生陸上競技選手を対象に競技力向上を図るための有効な指導のあり方を検討することを目的に、無酸素パワーと脚筋力の分析を行った。体重当たり等速性筋力については女子の伸展が高校生のトップクラスに近い値を示したが、屈曲は低く、男子は伸展、屈曲ともに高校生のトップクラスより低いことが明らかになり、今後の指導の方向性について示唆することができた。 (共著者 田路秀樹, 青木敦英, 福田厚治) (※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能)
4. 高齢者の肘屈	共	平成 27 年 8 月	兵庫県体育ス	本研究は、荷重法を用いた力-	

	<p>曲運動による力ー速度ーパワー関係からみた両側性機能低下</p>			<p>ポーツ科学学会 体育・スポーツ科学(No.24, 11-17)</p>	<p>速度ーパワー関係から、高齢者の両側性機能低下(BLD)について検討を行った。その結果、力ー速度曲線および力ーパワー曲線のいずれも一側条件が両側条件よりも高い値を示し、とくに速い収縮速度条件において顕著であった。また、筋パワーにおいてとくに BLD が大きくなることから、高齢者においても明らかな BLD が出現することを明らかにした。 (共著者 青木敦英, 田路秀樹) (※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能)</p>
<p>5. 肘屈曲運動における一側性と両側性の筋力トレーニングが力ー速度ーパワー関係に及ぼす影響</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 4 月</p>	<p>トレーニング科学(No.29 第 3 巻, 255-265)</p>	<p>本研究は、肘関節屈曲を対象として一側性と両側性の筋力トレーニングを課し、力ー速度ーパワー関係からトレーニング効果について検討した。被験者は男子大学生 13 名である。トレーニングは一側群 (n=6) がダンベル・カールを、両側群 (n=7) がバーベル・カールを用い、負荷は最大挙上重量の 80% で、できるだけ速い収縮で 1 日 10 回 3 セット、週 3 日の頻度で 8 週間行わせた。その結果、一側性トレーニングにより一側の最大筋力 (Fmax) と最大パワーが、両側性トレーニングにより両側の Fmax が有意に増加した。また、一側性トレーニングの一側にのみ肘関節屈曲速度に有意な増加がみられた。以上から、一側性のパワー改善という点から片側ずつの一側性トレーニングの方が、両側性のトレーニングよりも効果的であることが示唆された。 (共著者 青木敦英, 田路秀樹) (※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能)</p>	
<p>6. ジュニアバレーボール選手の栄養素等摂取状況について</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 10 月</p>	<p>芦屋大学論叢 (No.70, 51-56)</p>	<p>本研究は兵庫県内の小学校 5 年生から中学校 1 年生までのバレーボールクラブチームに所属する女子選手 15 名を対象として、簡易自記式食事歴法質問票 (BDHQ15y) を用いて、栄養素等の摂取量について調査を行い、今後の栄養指導の課題を模索した。その結果、BDHQ15y から得られた栄養素の 1 日当たりの摂取状況を、平成 27 年国民健康・栄養調査結果の栄養素等摂取量 7-14 歳 (女性) の平均値 (全国値) と比較したところ、1</p>	

	7. 男性高齢者における肘関節屈曲運動の一側性と両側性のトレーニングが力-速度-パワー関係に及ぼす影響	共	令和1年6月	教育医学 (No.64, 283-292)	<p>項目(ビタミン B1)を除いて全国値を上回っており、栄養摂取状況は比較的良好であった。しかし、バレーボールの競技特性や活動量からみると、栄養素摂取状況は必ずしも適正な摂取量とはいえない可能性が示唆された。</p> <p>(共著者 青木敦英, 鈴木麻希) (※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能)</p> <p>本研究は、高齢者を対象にトレーニング条件の違いが肘関節屈曲運動のパワー特性に与える効果について明らかにすることを目的に、ダンベル・カールで片側ずつ交互にトレーニングを行う群(一側群:n=4)と、バーベル・カールで両側同時にトレーニングを行う群(両側群:n=5)の2群に、80%1RM(最大挙上重量)の負荷で7~10回の肘関節屈曲運動を1日3セット、週3日の頻度で8週間トレーニングを実施させた。その結果、1RM や力-速度関係からみたパワー発揮において一側群が両側群と比較して高いトレーニング効果が認められ、高齢者にとって一側条件でトレーニングを行うことが筋力および筋パワーを高めるのに効果的であることが示唆された。</p> <p>(共著者 青木敦英, 田路秀樹) (※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能)</p>
	8. 異なる動作速度の組み合わせによる等速性膝伸展トレーニングの効果と性差	共	令和1年12月	体育学研究 (No.64, 603-612)	<p>本研究は、異なる動作速度の組み合わせによる等速性膝伸展トレーニングを、特別なトレーニングを行っていない男女大学生に行わせ、トレーニング効果の性差について検討を行った。その結果、体重当たりの最大トルクの増加率については男女で有意な差は認められなかったが、女性では中高速でトレーニングを行った群において最大トルクの増加率が有意に高かった。これらのことから、女子においては高速度を組み合わせたトレーニングが有効であるという性差がみられることが示唆された。</p> <p>(共著者 田路秀樹, 溝畑潤, 青木敦英, 福田厚治) (※共同研究につき、本人担当執筆部分抽出不可能)</p>

トレーニング演習	(学術論文) 1. 肘屈曲運動における一側性と両側性の筋力トレーニングが力-速度-パワー関係に及ぼす影響	共	平成 30 年 4 月	トレーニング科学(No.29 第3巻, 255-265)	(再掲のため、略)
	2. 異なる動作速度の組み合わせによる等速性膝伸展トレーニングの効果と性差	共	令和 1 年 12 月	体育学研究(No.64, 603-612)	(再掲のため、略)

研究業績等に関する事項(5年以内)

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
【学術論文】 1. 保健体育科教育実習生の不安と教育実習前後の教員志望の変化について	単	平成 29 年 1 月	芦屋大学論叢(No.66, 1-6)	芦屋大学の保健体育科での教育実習生の不安について調査するとともに、教育実習が教員志望に与える影響について調査し、体育教員養成課程での課題について検討した。その結果、「授業実践力」が最も大きな不安因子であり、授業内容に関する不安が多数を占めた。また、教育実習前後の教員志望の変化では実習後に有意に高くなっており、66.7%の学生の教員志望率が増加していた。今後の学内での指導において、教育実習生の不安を出来るだけ早期に払拭できる指導を行うとともに、「授業実践力」を高めるための指導を充実させ、教職の意欲の高い学生を教育実習に参加させることが、教員採用試験の合格者を輩出するために必要であることを論じた。
2. バスケットボールにおけるポジション別にみたリバウンド獲得状況と勝敗との関係	共	平成 29 年 12 月	芦屋大学論叢(No.68, 1-8)	芦屋大学バスケットボール部を対象に、公式試合の BOX SCORE からポジション別のリバウンド獲得状況を明らかにすると共に、勝敗との関係を分析したところ、ポジション別ではインサイドプレイヤーのリバウンド獲得が高いこと、ディフェンスリバウンド(DR)の獲得が勝敗に影響すること、特にインサイドプレイヤーの DR 獲得数が影響すること、そしてインサイドプレイヤーの DR 獲得数が 15 本以上だと勝率が上がることが明らかになった。このことから、インサイドプ

<p>3. バスケットボールにおける個人のパフォーマンス評価に関する研究- Offensive Efficiency 算出の試み-</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>芦屋大学論叢(No.69, 11-18)</p>	<p>レイヤーがしっかり仕事をし、DR を獲得することが勝利につながることを示唆された。また、インサイドプレイヤーがリバウンドを獲得できない場合は、他のプレイヤーが獲得する必要があり、特にガードのリバウンドが有効ではないかと考えられた。 (共著者 石川峻, <u>青木敦英</u>)</p> <p>バスケットボールにおける個人のパフォーマンスを評価できる Offensive Efficiency(OE) を用いて芦屋大学バスケットボール部のオフェンスの個人パフォーマンス並びに勝敗別の分析を行ったところ、平均得点ではみえてこないオフェンスの個人パフォーマンスの評価やチーム貢献度の分析をおこなうことができ、これはコーチと選手の共通理解や、チーム戦術の重要性の理解を深めることができる可能性がうかがえるものであった。 (共著者 石川峻, <u>青木敦英</u>, 別當和香)</p>
<p>4. 肘屈曲運動における一側性と両側性の筋力トレーニングが力-速度-パワー関係に及ぼす影響</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 4 月</p>	<p>トレーニング科学 (No.29 第 3 巻, 255-265)</p>	<p>本研究は、肘関節屈曲を対象として一側性と両側性の筋力トレーニングを課し、力-速度-パワー関係からトレーニング効果について検討した。被験者は男子大学生 13 名とし、トレーニング前後に腕エルゴメーターを用いて一側性・両側性による等尺性最大筋力(Fmax)および0%—60%Fmaxでの肘関節屈曲速度を測定し、パワーを算出した。トレーニングは一側群(n=6)がダンベル・カールを、両側群(n=7)がバーベル・カールを用い、負荷は最大挙上重量の80%で、できるだけ速い収縮で1日10回3セット、週3日の頻度で8週間行わせた。その結果、一側性トレーニングにより一側のFmaxと最大パワーが、両側性トレーニングにより両側のFmaxが有意に増加した。また、一側性トレーニングの一側にのみ肘関節屈曲速度に有意な増加がみられた。以上から、一側性のパワー改善という点から片側ずつの一側性トレーニングの方が、両側性のトレーニングよりも効果的であることが示唆された。 (共著者 <u>青木敦英</u>, 田路秀樹)</p>
<p>5. ジュニアバレーボール選</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 10 月</p>	<p>芦屋大学論叢(No.70,</p>	<p>本研究は兵庫県内の小学校 5 年</p>

<p>手の栄養素等摂取状況について</p> <p>6. 中学生女子バレーボール選手の身体特性と体力がスパイク速度に及ぼす影響</p> <p>7. 男性高齢者における肘関節屈曲運動の一側性と両側性のトレーニングが力-速度-パワー関係に及ぼす影響</p>	<p>共</p> <p>共</p>	<p>平成 31 年 3 月</p> <p>令和 1 年 6 月</p>	<p>51-56)</p> <p>スポーツサイエンスフォーラム スポーツサイエンス(No.13, 17-32)</p> <p>教育医学(No.64, 283-292)</p>	<p>生から中学校 1 年生までのバレーボールクラブチームに所属する女子選手 15 名を対象として、簡易自記式食事歴法質問票 (BDHQ15y)を用いて、栄養素等の摂取量について調査を行い、今後の栄養指導の課題を模索した。その結果、BDHQ15y から得られた栄養素の1日当たりの摂取状況を、平成 27 年国民健康・栄養調査結果の栄養素等摂取量 7-14 歳(女性)の平均値(全国値)と比較したところ、1 項目(ビタミン B1)を除いて全国値を上回っており、栄養摂取状況は比較的良好であった。しかし、バレーボールの競技特性や活動量からみると、栄養素摂取状況は必ずしも適正な摂取量とはいえない可能性が示唆された。 (共著者 青木敦英, 鈴木麻希)</p> <p>本研究では中学生女子バレーボール選手を対象に、スパイク速度と身体特性や体力の測定を行い、身体特性や体力がスパイク速度にどのような影響を及ぼしているのかについて検討を行った。その結果、身体特性とスパイク速度との関係について、体重および BMI とスパイク速度との間に有意な相関が認められた。また、体力とスパイク速度との関係について、立ち幅跳びとスパイク速度との間に有意な相関が認められた。さらにスパイク速度に影響を及ぼす体力因子の影響の度合いを探るために、スパイク速度を従属変数、体力測定 6 項目を独立変数として、重回帰分析(ステップワイズ法)を行ったところ、立ち幅跳びと垂直跳びの 2 項目が抽出された。以上のことから、中学生女子バレーボール選手において、立ち幅跳びがスパイク速度に影響を及ぼす重要な体力因子であることが示唆された。 (共著者 青木敦英, 石川峻, 竹安知枝)</p> <p>本研究は、高齢者を対象にトレーニング条件の違いが肘関節屈曲運動のパワー特性に与える効果について明らかにすることを目的に、ダンベル・カールで片側ずつ交互にトレーニングを行う群(U 群:n=4)と、バーベル・カールで両側同時にトレーニングを行う群</p>
---	-------------------	--------------------------------------	---	--

<p>8. 保健体育科での教育実習の経験が教師の資質・能力と教員志望度に及ぼす影響</p>	<p>単</p>	<p>令和1年7月</p>	<p>芦屋大学論叢(No.71, 1-8)</p>	<p>(B群:n=5)の2群に、80%1RMの負荷で7~10回の肘関節屈曲運動を1日3セット、週3日の頻度で8週間トレーニングを実施させた。その結果、最大挙上重量(1RM)や力-速度関係からみたパワー発揮においてU群がB群と比較して高いトレーニング効果が認められ、高齢者にとって一側条件でトレーニングを行うことが筋力および筋パワーを高めるのに効果的であることが示唆された。 (共著者 青木敦英, 田路秀樹)</p> <p>本研究は、芦屋大学の保健体育科で教育実習を経験した学生を対象に、教師に必要な資質・能力に関する自信尺度の自己評価アンケート(自己評価得点)と、教育実習前後の教員志望の度合いの変化について調査し、教育実習の経験が教師の資質・能力の自己評価と教員志望にどのように影響を及ぼしているか検討を行った。その結果、教育実習前後の教員志望度の変化について明らかな変化はみられなかった。しかし自己評価得点と教育実習の前後で教員志望度が変化した割合(変化率)には、有意な正の相関関係が認められた。教育実習前後で志望度が維持または向上した学生と、教育実習前後で志望度が低下した学生では、教育実習で身につけた教員としての資質・能力に違いがあることが示唆された。</p>
<p>9. 大学の特徴を生かした教員の就職支援に関する一考察 - 芦屋大学での教員採用試験対策をもとに -</p>	<p>共</p>	<p>令和1年7月</p>	<p>芦屋大学論叢(No.71, 21-30)</p>	<p>本研究においては、小規模な教員養成系大学における教採受験学生の傾向・実態を踏まえ、受験に向けた効果的な支援方策の在り方に着目した。①受験生が集える年間通した受験対策講座の設定、②講座を継続受講できるための有効な支援方策、③講座受講生の力を高める講師団編成の在り方について、それぞれ仮説を立て3年間にわたって実践研究し、年度ごとの受験結果を踏まえて考察した。受験生との協議をもとに、ニーズを踏まえて各対策講座を設定し実施してきたことや、本学の少人数教育の成果を生かした受験生ごとに対応する指導・支援の継続、学内教員を核にした講師団編成等が受験対策に有</p>

10. 日本プロバスケットボール選手の誕生月分布に関する相対的年齢効果についてー2018-19シーズンの場合ー	共	令和1年7月	芦屋大学論叢(No.71, 57-63)	<p>用であるという重要な手掛かりを得ることができた。 (共著者 笠原清次, 竹安知枝, 盛谷亨, 青木敦英, 若杉祥太, 石川峻, 辻尚士, 雄倉春来)</p> <p>本研究では、Bリーグ選手の誕生月分布に関する相対的年齢効果(RAE)について調査し、今後の選手育成を検討するための基礎的資料を収集することを目的とした。対象は2018-2019シーズン開幕前から登録されていた日本人選手、B1およびB2リーグの322人である。調査の結果、4-6月生まれの選手が多くなっており、誕生月と選手数には有意な相関関係があった。過去の全国出生数から推計される期待度数とBリーグ選手の観測度数には有意な差が認められた。以上のことから、Bリーグ所属選手にはRAEが認められた。今後、とくに成長期の育成に関わる指導者がRAEについて理解し、早生まれの選手だけでなく、将来的な可能性を持った晩熟型の選手を見逃さないこと、さらに早生まれの選手をドロップアウトさせない仕組みの構築が必要であることが示唆された。 (共著者 石川峻, 青木敦英)</p>
11. 異なる動作速度の組み合わせによる等速性膝伸展トレーニングの効果と性差	共	令和1年12月	体育学研究(No.64, 603-612)	<p>本研究は、異なる動作速度の組み合わせによる等速性膝伸展トレーニングを、特別なトレーニングを行っていない男女大学生に行わせ、トレーニング効果の性差について検討を行った。その結果、体重当たりの最大トルクの増加率については男女で有意な差は認められなかったが、女性では中高速でトレーニングを行った群において最大トルクの増加率が有意に高かった。これらのことから、女子においては高速度を組み合わせたトレーニングが有効であるという性差が示唆された。 (共著者 田路秀樹, 溝畑潤, 青木敦英, 福田厚治)</p>
12. 大学生男子バスケットボール競技におけるゲーム分析ー本学における関西学生バスケットボール2部リーグからの検討ー	共	令和2年3月	芦屋大学論叢(No.72, 57-64)	<p>本研究では過去3年間の2部リーグ戦での戦いにおいて、BOX SCOREから算出できる各スタッツについて勝ち試合と負け試合で比較を行い、勝利するために重要と思われる客観的な視点について検討を行った。その結果、①80点以上の得点と80点未満の</p>

				<p>失点が勝利するための目安、②3P シュートを確率よく決めること、③チームとして高確率のショットを狙えるシチュエーションについて今後検討する必要があること、④リバウンドについては獲得率で相手を上回ることで勝利につながる可能性が高いことが明らかになった。本研究から得られた客観的なデータを今後有効活用し練習に取り組んでいくとともに、ゲーム中における修正点の1つの視点とすることで、より勝利の可能性を高めることが期待できる。 (共著者 石川峻, 青木敦英)</p>
<p>13. ミニテニスのイメージに関する調査—大学生を対象に—</p>	共	令和2年3月	芦屋大学論叢(No.72, 57-64)	<p>本研究では、生涯スポーツであるミニテニスに着目し、このスポーツの今後の普及・活性化に向けての手がかりを得ることを目的に、大学生(兵庫県内の大学に通う教育学部所属の男女1~4年生)103名を対象に、ミニテニスの認知度とイメージに関するアンケート調査を実施した。その結果、ミニテニスの認知度に関しては、低い結果(全く知らなかった人の割合が85.4%)であったが、このスポーツに関して肯定的なイメージ(「健康に良さそう」「楽しそう」「安全なスポーツ」等のイメージ)ととらえた学生の割合が多いことがわかった。また、「健康的」「楽しい」「ルールが簡単」の3つのキーワードがミニテニスの普及につながる可能性があるポイントと考えられた。今後、ミニテニス在国内で広く認知されていくことで、このスポーツが普及・活性化していく可能性があると考えられた。 (共著者 竹安知枝, 青木敦英, 白井達矢)</p>
<p>14. バasketボール競技におけるクォーターごとの得点傾向と勝敗との関係—関西学生Basketボールリーグを対象として—</p>	共	令和2年9月	芦屋大学論叢(No.73, 1-7)	<p>本研究は平成30年度関西学生Basketボールリーグの1部リーグおよび2部リーグの173試合を対象として、Basketボールの4つのクォーターの得点傾向について、勝敗別およびリーグ(競技レベル)別に比較し、得点傾向と勝敗との因果関係について検討を行った。その結果、クォーターごとの得点傾向として1部リーグおよび2部リーグともに2Q<4Qとなっていることを明らかにした。さらに、得点差の大きな試合(20点差以上)では1Q>2Qの有意な差が認められ、1Qに大きな得点</p>

<p>15. ミニテニスに対する意識調査－経験者を対象に－</p>	共	令和2年9月	芦屋大学論叢(No.73, 97-105)	<p>差がついていること、接戦となった試合(19点差以内)では1部リーグでは3Q, 2部リーグでは1Qが勝敗に影響すると考えられ、競技レベルで勝敗に影響するクォーターが異なっていることが推察された。(共著者 <u>青木敦英</u>, 石川峻, 竹安知枝)</p> <p>本研究では、生涯スポーツとして普及が期待されるミニテニスに着目し、ミニテニスのイベントに参加した55名(男性9名、女性46名)を対象に、ミニテニスの魅力に関する意識調査を実施した。その結果、多くの対象者が「健康によく、楽しく、安全にできるスポーツである」と認識していること、さらに「年齢・生物・レベルを問わずできるスポーツ」で有ることを魅力として捉えていることがわかった。今後この種目を普及するためには地域のイベントや学校体育などで積極的に取り入れられていくことが求められると考えられた。(共著者 竹安知枝, <u>青木敦英</u>, 臼井達矢)</p>
<p>16. 大学男子バスケットボール競技における選手評価の検討－指導者と選手の評価に着目して－</p>	共	令和3年3月	芦屋大学論叢(No.74, 103-110)	<p>本研究の目的は、大学男子バスケットボール選手のスキル面とパーソナリティ面における指導者と選手の評価の差を明らかにし、今後のチームビルディングの方策を検討することである。本研究を通してスキル面では、全体は20項目中11項目、Guardは3項目、Wingは1項目、Bigmanは6項目で有意な差があったこと、パーソナリティ面では、20項目中15項目で有意な差があったことから、監督と選手の評価に違いがあることが明らかになった。これらの評価の差を改善するために、スキル面ではこれまでの数値と目標とする数値を明確に提示すること、VTRを用いてできていない場面を指導者と選手が一緒に確認し、戦術や指導者の考えを確認することを提案した。パーソナリティ面では、選手との会話を増やすこと、学生スタッフやトレーナー、他の教職員との連携を密にすること、バスケットボール以外の活動を行うことを提案した。これらのことを今後実行することで競技力の向上が期待できると考えられる。</p>

				(共著者 石川峻, 青木敦英)
【その他(講演や発表)】				
1. バスケットボールにおけるポジション別にみたりバウンド獲得状況と勝敗との関係(学会発表)	共	平成 29 年 9 月	日本体育学会第 68 回大会	(共同発表者 石川峻, 青木敦英)
2. 中学生バレーボール選手のスパイク速度に及ぼす体格と体力の影響(学会発表)	共	平成 30 年 8 月	日本体育学会第 69 回大会	(共同発表者 青木敦英, 石川峻)
3. 等速性膝伸展運動における複合トレーニングの効果-男子大学生を対象として-(学会発表)	共	平成 30 年 8 月	日本体育学会第 69 回大会	(共同発表者 田路秀樹, 溝畑潤, 青木敦英, 福田厚治)
4. 児童期における外遊びの多寡がその後の運動に対する主観的評価に与える影響(学会発表)	共	平成 30 年 9 月	日本体力医学会第 73 回大会	(共同発表者 竹安知枝, 青木敦英, 臼井達矢, 織田恵輔, 辻慎太郎, 松尾貴司)
5. バスケットボールにおけるクォーターごとの得点と勝敗の関係-関西学生バスケットボールリーグを対象として-(学会発表)	共	令和 1 年 9 月	日本体育学会第 70 回大会	(共同発表者 青木敦英, 石川峻, 竹安知枝)
6. 障がい者のスポーツイベントに関する一考察(学会発表)	共	令和 1 年 9 月	日本体育学会第 70 回大会	(共同発表者 竹安知枝, 青木敦英, 石川峻)
7. 等速性膝伸展運動における複合トレーニングの効果-女子大学生を対象として-(学会発表)	共	令和 1 年 9 月	日本体育学会第 70 回大会	(共同発表者 田路秀樹, 溝畑潤, 青木敦英, 福田厚治)
8. ミニテニスの普及に関する一考察(学会発表)	共	令和 1 年 9 月	日本体力医学会第 74 回大会	(共同発表者 竹安知枝, 青木敦英, 臼井達矢, 織田恵輔, 辻慎太郎, 松尾貴司)
9. 片脚と両脚のプライオメトリックトレーニングが跳躍能力に及ぼす影響-大学バレーボール選手を対象として-(学会発表)	共	令和 2 年 6 月	兵庫体育・スポーツ科学学会第 31 回大会	(共同発表者 青木敦英, 石川峻, 竹安知枝)
10. ミニテニスに対する意識調査-経験者を対象に-(学会発表)	共	令和 2 年 6 月	兵庫体育・スポーツ科学学会第 31 回大会	(共同発表者 竹安知枝, 青木敦英, 石川峻)

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 大石 徹						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ページ 数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合 は執筆箇所を詳述)
社 会 学 概 論 I II	(著書) 1. 「使い捨てら れる若者たち」は 格差社会の象徴 か——低賃金で 働く若者たちの学 力と構造	共	平成 21 年 5 月	ミネルヴァ書 房	43 (251)	この論考は、原清治と山内乾史のインタ ビューに答える形式のものである。日本 や米国やカナダやフランスの若い低賃 金労働者の状況について、さまざまな 点に着目して検討した。 <u>その着目点と は、グローバル化、産業構造の変化、 文化資本(この三つは「社会学概論」の トピック)、社会階層、学びからの逃走、 アルバイト、職業教育、学歴、進路選択 (この7つは「教育社会学」と「情報化社 会と仕事の世界」のトピック)などであ る。</u> (執筆担当部分: 日本版「使い捨てられ る若者たち」——大石徹先生(芦屋大 学准教授)へのインタビュー) 著者: 原清治、山内乾史、 <u>大石徹</u> 、植 田みどり
	2. 大阪社会労働 運動史 第9巻 世紀の交差	共	平成 21 年 11 月	有斐閣	12 (784)	一般飲食店(料亭やバーやキャバレー や酒場などの遊興飲食店ではない飲 食店)のチェーン店や小売のチェーン 店(コンビニやスーパー)が 1990 年代 まで大阪府において事業を展開してき た状況を分析した。「社会学概論」のト ピック(<u>グローバル化、産業構造やライ フスタイルの変化</u>)、「教育社会学」のト ピック(<u>アルバイト、進路選択</u>)、「情報化 社会と仕事の世界」のトピック(<u>仕事の 規格化、非正規雇用、業務評価、過 労、転職</u>)も検討している。 (執筆担当部分: 九〇年代大阪の一般 飲食店と小売業——チェーン店を中心 に(査読付)) 主要な著者: 玉井金五、宇仁宏幸、高 松亨、服部良子、久本憲夫、明石芳 彦、廣田義人、 <u>大石徹</u> 、駒川智子、新 納克広、富田安信、山田和代、熊沢 誠、伊田久美子、神原文子、木村涼 子、西村智、森詩恵、居神浩、樋口明 彦、弘本由香里、吉村臨兵 著者の合計人数 40 名

<p>3. ひとが優しい博物館:ユニバーサル・ミュージアムの新展開</p>	共	平成 28 年 8 月	青弓社	16 (307)	<p>株式会社セガが開発したお化け屋敷「マダーロッジ」では、暗闇のなか、視覚を遮断された入場者の聴覚や皮膚感覚が刺激される。この画期的な体感アトラクションはまた、視覚障害者も楽しめた。このような「マダーロッジ」の仕組みはユニバーサル・ミュージアム(誰もが楽しめるミュージアム)の設備にも応用できる。<u>「社会学概論」と「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる感覚情報や知的な楽しみについても論じている。</u> (執筆担当部分:娯楽・余暇の幅を広げる——見えない恐怖を共遊する「マダーロッジ」の衝撃) 主要な著者:広瀬浩二郎、相良啓子、大高幸、篠原聰、黒澤浩、石塚裕子、大石徹、堀江典子、小山修三 著者の合計人数 23 名</p>
<p>(学術論文) 1. 大阪(日本)流のおもてなしは国境を越える——上海万博大阪館の接客</p>	単	平成 24 年 3 月	『上海万博の経営人類学的研究(研究課題番号 21242035 平成 21 年度～23 年度 科学研究費補助金 基盤研究 A) 研究成果報告書』(国立民族学博物館発行)	11 (317)	<p>上海万博の大阪館について、どのように館のスタッフが接客したりトラブルに対処したりしていたのか、そして館のスタッフや中国人客が大阪流の「おもてなし」をどう受けとめていたのかを検討した。<u>「社会学概論」のトピック(グローバル化、グローカル化、ライフスタイルの変化)や「教育社会学」のトピック(進路選択)や「情報化社会と仕事の世界」のトピック(組織論、接客業、非正規雇用、転職)も扱っている。</u> 主要な著者:中牧弘允、市川文彦、秦兆雄、陳天璽、飯笹佐代子、大石徹、日置弘一郎、王英燕、広瀬浩二郎、竹内恵行、三井泉、周佐喜和、橋爪紳也 著者の合計人数 22 名</p>
<p>2. 映画の副音声をめぐると考察——創造的観念を通して</p>	単	平成 30 年 11 月	『芦屋大学論叢』(芦屋大学発行)70 号	12	<p><u>「社会学概論」と「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる情報化社会や感覚情報、「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる特別支援教育に関連する論考である。</u>副音声は、映像の主音声を聴くだけではわかりにくい情報を視覚障害者に伝えるものである。この論考では、映画の副音声について、その先行研究・普及・作成手順を検討したのち、映画の主音声および副音声に対する批評の必要性を主張した。</p>
<p>(その他) 1. 娯楽のユニバーサル化——映画の副音声</p>	単	平成 30 年 4 月	『月刊みんなばく』(国立民族	1 (20)	<p><u>「社会学概論」と「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる情報化社会や感覚情報、「教育社会学」と</u></p>

				学博物館発行)487号		「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる特別支援教育に関連している論考である。この論考では、映画の副音声の普及・媒体・作成手順を紹介したのち、副音声作成と学問的フィールドワークの間には、副音声の作成者やフィールドワークの調査者が情報を選択し、それを解釈しながら、言葉に翻訳しているという共通点があることを指摘した。
教育社会学	(著書) 1. 「使い捨てられる若者たち」は格差社会の象徴か——低賃金で働く若者たちの学力と構造	共	平成 21 年 5 月	ミネルヴァ書房	43 (251)	再掲のため、略。
	2. 大阪社会労働運動史 第9巻 世紀の交差	共	平成 21 年 11 月	有斐閣	12 (784)	再掲のため、略。
	3. ひとが優しい博物館——ユニバーサル・ミュージアムの新展開	共	平成 28 年 8 月	青弓社	16 (307)	再掲のため、略。
	(学術論文) 1. 大阪(日本)流のおもてなしは国境を越える——上海万博大阪館の接客	単	平成 24 年 3 月	『上海万博の経営人類学的研究(研究課題番号 21242035 平成 21 年度～23 年度 科学研究費補助金 基盤研究 A) 研究成果報告書』(国立民族学博物館発行)	11 (317)	再掲のため、略。
	2. 映画の副音声をめぐる一考察——創造的観念を通して	単	平成 30 年 11 月	『芦屋大学論叢』(芦屋大学発行)70号	12	再掲のため、略。
(その他) 1. 娯楽のユニバーサル化——映画の副音声	単	平成 30 年 4 月	『月刊みんなばく』(国立民族学博物館発行)487号	1 (20)	再掲のため、略。	

情報化社会と仕事の世界ⅠⅡ	(著書) 1. 「使い捨てられる若者たち」は格差社会の象徴か——低賃金で働く若者たちの学力と構造	共	平成 21 年 5 月	ミネルヴァ書房	43 (251)	再掲のため、略。
	2. 大阪社会労働運動史 第9巻 世紀の交差	共	平成 21 年 11 月	有斐閣	12 (784)	再掲のため、略。
	3. ひとが優しい博物館——ユニバーサル・ミュージアムの新展開	共	平成 28 年 8 月	青弓社	16 (307)	再掲のため、略。
	(学術論文) 1. 大阪(日本)流のおもてなしは国境を越える——上海万博大阪館の接客	単	平成 24 年 3 月	『上海万博の経営人類学的研究(研究課題番号 21242035 平成 21 年度～23 年度 科学研究費補助金 基盤研究 A) 研究成果報告書』(国立民族学博物館発行)	11 (317)	再掲のため、略。
	2. 映画の副音声をめぐる一考察——創造的観念を通して	単	平成 30 年 11 月	『芦屋大学論叢』(芦屋大学発行)70 号	12	再掲のため、略。
(その他) 1. 娯楽のユニバーサル化——映画の副音声	単	平成 30 年 4 月	『月刊みんぱく』(国立民族学博物館発行)487 号	1 (20)	再掲のため、略。	

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【著書】 1. ひとが優しい博物館——ユニバーサル・ミュージアムの新展開	共	平成 28 年 8 月	青弓社(307 頁)	株式会社セガが開発したお化け屋敷「マダーロッジ」では、暗闇のなか、視覚を遮断された入場者の聴覚や皮膚感覚が刺激される。この画期的な体感アトラクションはまた、視覚障害者も楽しめた。このような「マダー

				<p>「マーダーロジ」の仕組みはユニバーサル・ミュージアム(誰もが楽しめるミュージアム)の設備にも応用できる。「社会学概論」と「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる感覚情報や知的な楽しみについても論じている。</p> <p>(執筆担当部分: 娯楽・余暇の幅を広げる——見えない恐怖を共遊する「マーダーロジ」の衝撃: pp.261～276)</p> <p>主要な著者: 広瀬浩二郎、相良啓子、大高幸、篠原聰、黒澤浩、石塚裕子、大石徹、堀江典子、小山修三</p> <p>著者の合計人数 23 名</p>
<p>【学術論文】</p> <p>1. 娯楽のユニバーサル化——映画の副音声</p>	単	平成 30 年 4 月	『月刊みんぱく』(国立民族学博物館発行) 487 号(20 頁)	<p>「社会学概論」と「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる情報化社会や感覚情報、「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる特別支援教育に関連している論考である。この論考では、映画の副音声の普及・媒体・作成手順を紹介したのち、副音声作成と学問的フィールドワークとの間には、副音声の作成者やフィールドワークの調査者が情報を選択し、それを解釈しながら、言葉に翻訳しているという共通点があることを指摘した。(p.6)</p>
<p>2. 映画の副音声をめぐると一考察——創造的観念を通して</p>	単	平成 30 年 11 月	『芦屋大学論叢』(芦屋大学発行)70 号	<p>「社会学概論」と「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる情報化社会や感覚情報、「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる特別支援教育に関連する論考である。副音声は、映像の主音声を聴くだけではわかりにくい情報を視覚障害者に伝えるものである。この論考では、映画の副音声について、その先行研究・普及・作成手順を検討したのち、映画の主音声および副音声に対する批評の必要性を主張した。(pp.1～12)</p>
<p>【その他(講演や発表)】</p> <p>1. 研究発表「触常者も見常者も満喫できる音響娯楽施設——マーダーロジの事例」</p>	単	平成 27 年 3 月	国立民族学博物館共同研究会「触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手	<p>株式会社セガが開発したお化け屋敷「マーダーロジ」では、暗闇のなか、視覚を遮断された入場者の聴覚や皮膚感覚が刺</p>

			<p>学問”理論の構築」 (於:国際基督教大学)</p>	<p>激される。この体感アトラクションはまた、視覚障害者も楽しめる。「マードラーロッジ」の仕組みはユニバーサル・ミュージアム(誰もが楽しめるミュージアム)の設備にも応用できる。この発表では、「<u>社会学概論</u>」と「<u>教育社会学</u>」と「<u>情報化社会と仕事の世界</u>」で取り上げる情報化社会や知的な楽しみや感覚情報についても論じた。</p>
<p>2. 講演「娯楽・余暇の幅を拓げる——見えない恐怖を共遊する『マードラーロッジ』の衝撃」</p>	<p>単</p>	<p>平成 27 年11月</p>	<p>国立民族学博物館の公開シンポジウム「ユニバーサル・ミュージアム論の新展開——展示・教育から観光・まちづくりまで」(於:国立民族学博物館)</p>	<p>娯楽施設は、娯楽や余暇や芸術表現の幅を拓げる可能性も秘めている。そのような施設の例として、株式会社セガのお化け屋敷のマードラーロッジを紹介した。この施設は、日本社会にユニバーサル・ミュージアムやダイアログ・イン・ザ・ダークや暗闇体験ワークショップが普及する前に成功した。言わば聴覚や闇の復権の先駆けだ。この講演は、「<u>社会学概論</u>」と「<u>教育社会学</u>」と「<u>情報化社会と仕事の世界</u>」で取り上げる情報化社会や知的な楽しみや感覚情報にも触れている。</p>
<p>3. 講演「娯楽から人生を考える——お化け屋敷の音響の場合」</p>	<p>単</p>	<p>平成 30 年 2 月</p>	<p>芦屋大学公開講座 (於:芦屋市民センター)</p>	<p>臨場感が表現されるようなタイプの娯楽は、現実の人生を捉えられるし、臨場感があるおかげで鑑賞者の人生の一部分になれると言えよう。そういうタイプの娯楽の例として、お化け屋敷の音響を取り上げ、そのような音響を応用することによって人生を表現したり実感したりできる可能性について考えた。「<u>社会学概論</u>」や「<u>教育社会学</u>」や「<u>情報化社会と仕事の世界</u>」で取り上げる情報化社会や知的な楽しみや感覚情報についても論じている。</p>
<p>4. 研究発表「大切なのは考え抜くこと——映画の副音声を作るために」</p>	<p>単</p>	<p>平成 30 年 7 月</p>	<p>国立民族学博物館共同研究会「『障害』概念の再検討——触文化論に基づく『合理的配慮』の提案に向けて」 (於:国立民族学博物館)</p>	<p>映画の主音声には出演者の声、背景音、BGM などの聴覚情報が含まれ、それらの情報は映画に立体感も与える。視覚障害者は、映画の主音声を補足する副音声を聴きながら、主音声の聴覚情報を組み合わせて画面を想像している。そして副音声を作るとき、いちばん大切なのは、どのような副音声をどこ</p>

				<p>に入れるのかを考え抜くことなのだ。<u>この発表では、「社会学概論」と「教育社会学」と「情報化社会と仕事の世界」で取り上げる情報化社会や感覚情報についても論じた。</u></p>
--	--	--	--	--

① 教育研究業績書

教育研究業績書				
氏 名 三 羽 光 彦 印				
著書、学術論文等の名称 (著書)		発行又は 発表の年 月	発行所、発表雜 誌又は 発表学会等の 名称	概 要
『教育行政研究』第3号. 戦後日本の教育行政改革	共著	昭和57年8月	名古屋大学教育学部教育行政及び制度研究室	「CIEの教育分権化政策の成立」を分担執筆。占領文書を主要史料として、CIE(民間情報教育局)の教育分権化政策、とりわけ教育委員会制度構想の形成過程を解明し、CIEと文部省の議論の論点を整理した。共著者：鈴木英一・井深雄二・大橋基博・小野田正利・伊藤良高。(12ページ)
文部省戦後教科書一解説一	共著	昭和59年5月	大空社	戦前の高等小学校・国民学校高等科・戦後直後の国民学校高等科そして新制中学校の農業と工業の教科書、特に戦後直後の「暫定教科書」の内容分析を行い、戦前から戦後の農業と工業の小学校教科課程上の性格および特徴を歴史的に考察した。共著者：佐々木享(11ページ)
教育改革読本	共著	昭和61年8月	教育開発研究所	「新日本建設の教育方針」および「新教育指針」を分担執筆。「新日本建設の教育方針」は来るべき戦後教育改革で占領軍の関与を最小限におさえるために先取的にだされたものであったことを論じた。また「新教育指針」は戦後民主主義の手引き書として占領軍の示唆のもとにだされた優れた啓蒙書であったことを論じた。共著者：新井郁男他25名。(4ページ)
図表でみる愛知の学校教育	共著	昭和62年10月	東海自治体問題研究所	「教育委員会と学校の役割」および「職員会議と校長の役割」を分担執筆。「教育委員会と学校の役割」では地方教育行政法のもと学校管理規則による教育委員会による学校への画一的管理が進んだが、他方では住民の意思を反映するシステムが模索されていることを論じた。「職員会議と校長の役割」では調査をもとに教職員の力量形成に校長の民主的リーダーシップが関係していることを論じた。共著者：坪井由実・川口彰義・榊達雄・近藤正春。(4ページ)
占領期日本教育に関する在米史料の調査研究	共著	昭和63年3月	国立教育研究所	文部省科学研究費補助金 海外学術調査の報告書。昭和60年・61年度の在米調査で確認・収集した占領期日本教育に関する公文書・個人文書・面接結果等の史料を整理・解説した。このうちマッカーサー・メモリアルの史料の解説を分担執筆。研究代表者：佐藤秀夫。共著者：鈴木英一・寺崎昌男・片上宗二・土持法一・星健一・大橋基博。(3ページ)
むらおこし・まちづくりの検証	共著	平成2年3月	東海自治体問題研究所	「11章 山村留学で町に新しい波を—藤原町立田地区(三重県)—」を分担執筆。三重県藤原町立田地区で昭和62年度から取り組まれた「山村留学」が、学校教育を前面におしだした地域ぐるみの村おこしとして推進されている点を明らかにし、教育を軸とした地方自治の一つの姿である点を指摘した。編者：東海自治体問題研究所。共著者：野原敏雄・岡田知弘ら11名と共著。(8ページ)
県内産業振興策としての人材確保の問題	共著	平成2年3月	財団法人岐阜県シンクタンク	「5-2 職業観」を分担執筆。80年代後半の労働市場および青年の意識の変化の中で、今後の若年労働力確保の方策を検討した。分担箇所では、アンケート調査を基礎に高校生・大学生の職業観の変化を考察した。共著者：池永輝之・岡田知弘・黒田恒蔵・北村俊之。(28ページ)
新教育学大事典	共著	平成2年7月	第一法規出版	全8巻の本大事典は、激動する新しい時代を背景にして、今日の学会の最先端の知見を網羅したものである。「高等小学校」および「認定講習」の項目を分担執筆し、学会の水準を整理した。編集代表：細谷俊夫・奥田真丈・河野重男・今野喜清。(2ページ)
高齢者雇用の現状と展望(岐阜県高齢者雇用開発事業調査研究)実業補習学校制度に関する歴史的研究	共著	平成3年3月	岐阜県商工労働部・財団法人岐阜県シンクタンク	「6 高齢者の就業意識」を分担執筆。高齢者雇用促進のために、55歳以上の高齢者にアンケートをとり、高齢者の就業意欲を調査・分析した。その結果、高い就業意欲と共に、勤務条件への要望もみられた。これにもとづき、勤務条件を改善しつつ65歳定年制の実現を提言した。共著者：池永輝之・黒川博・石原健一。(47ページ)
米国対日教育使節団に関する総合的研究	共著	平成3年3月	国立教育研究所	「7 初等および中等段階の教育行政」を分担執筆。共同研究で発見した新しい史料等をもとに、米国教育使節団報告書(第1次・第2次)を新たに翻訳し、その内容を詳細に検討した。分担箇所では第1次報告書の教育行政に関する部分を考察した。研究代表者：佐藤秀夫。共著者：鈴木英一・寺崎昌男・土持法一・片上宗二・古野博明・明神勲・羽田貴史・大橋基博・小野雅昭章。(13ページ)

教育法学辞典	共著	平成4年4月	学陽書房	本辞典は、今日的視点から、教育と法の学際的問題を整理することを目的として刊行された。「大学設置基準」の項目を分担執筆し、戦後の大学設置基準の沿革と大綱化に向かう状況を解説した。編集：日本教育法学会。(1ページ)
教育と教育行政	共著	平成4年5月	勁草書房	「第8章 学校制度改革と教育行政」分担執筆。80年代以降の新しい時代状況をふまえて、日本の教育と教育行政の展開をまとめた。分担箇所では、戦後の学校制度改革の意義を整理し、高校入試や中等教育の多様化など今日の学校制度改革の状況を検討した。編者：鈴木英一・川口彰義・近藤正春。共著者：榊達雄・坪井由実・井深雄二・大橋基博ら30名。(12ページ)
高等小学校制度史研究(岐阜経済大学叢書5)・博士学位論文	単著	平成5年3月	法律文化社	近代日本教育史の基礎的・実証的研究として、これまで盲点となっていた高等小学校制度史を明らかにした。中等教育の代替機能を有した明治前半期、高等小学校の大衆化が進んだ明治後半以降、実業科が導入され単置制が期待された昭和戦前期の3期を特徴づけ、実証的・総合的に考察した。岐阜経済大学出版助成制度により出版。平成6年2月本書により博士学位取得。平成6年10月日本教育行政学会奨励賞受賞。(310ページ)
教育改革と教育行政	共著	平成7年3月	勁草書房平	「戦後日本の六・三・三制の成立…『学校再編成委員会』と千葉県の調査…」の部分執筆。占領軍史料等を利用して、文部省内の「学校再編成委員会」が六・三制実施のために積極的に活動したこと、および占領軍CI&E教育課との交渉過程を明らかにし、米国教育使節団報告書以降の六・三・三制成立の政策立案過程の不明な部分を解明・考察した。編者：鈴木英一。(20ページ)
技術教育・職業教育の諸相	共著	平成8年3月	大空社	「第三章 戦間期実業補習学校改革に関する一考察…農村部と都市部の比較を通して…」の部分執筆。実業補習学校史を第1期「形成期」第2期「発展期」第3期「再編期」に区分し、第3期に注目し、大衆社会成立との関係で実業補習学校が都市部では職業技術教育機関として、農村部では中等教育の代替物としてそれぞれ発展する過程を明らかにした。編者：佐々木享。(23ページ)
現代学校教育大事典	共著	平成10年3月	ぎょうせい	第4巻「尋常小学校」(260頁)および第3巻「高等小学校」(105～106頁)を部分執筆。1886年の第一次小学校令から1941年の国民学校令までの小学校制度において、その前半と後半をなす尋常小学校と高等小学校の制度上の特徴と法制を概説した。尋常小学校は小学校のうちの義務教育課程として学校制度の基礎段階に位置づけられ、高等小学校は義務教育後の中等教育諸学校と並列する位置に置かれた。そのことが、近代日本の複線型学校体系の基本的要因となったことを論じた。監修：奥田真丈・河野重男。全7巻。
実業補習学校制度に関する歴史的研究	単著	平成10年3月	平成7～9年度 文部省科学研究費補助金基盤研究(C)(2)の研究 成果報告書、論文「実業補習学校史の諸相」(1998.3)所収	本書は平成7～9年度の文部省科学研究費補助金研究「実業補習学校制度に関する歴史的研究」の報告書である。当該補助金研究に関わる論文「実業補習学校史の諸相」を収めている。同論文の構成は、第1章実業補習学校史の時期区分とその特徴、第2章戦間期の実業補習学校改革、第3章都市教育と実業補習学校論である。また、実業補習学校に関する資料の翻刻を掲載した。(総ページ数188ページ)
教育刷新委員会教育刷新審議会会議録(全13巻)	共著	平成7年10月～平成10年10月	岩波書店	日本近代教育史料研究会(国立教育研究所内設置、代表菱村幸彦国立教育研究所長)の一員として、編集(佐藤秀夫日本大学教授編集代表)に加わる。戦後日本の教育改革を構想するため、昭和21年8月に内閣に設置された教育刷新委員会の議事速記録およびその周辺史料を校訂・編集し、基礎資料文献として刊行。
六・三・三制の成立(岐阜経済大学叢書9)	単著	平成11年3月	法律文化社	戦後日本の六・三・三制の成立過程を、戦前にまでさかのぼり、また占領文書にあたりながら実証的に明らかにした。特に、文部省とCIEとが共同して作成した六・三・三制への転換計画、学校教育法の成立経緯、中学校・高等学校の教育課程およびその性格、内容の決定過程を事実に基づいて解明した。結論として、六・三・三制が未完で終わった部分が多いことを明らかにしたが、学校制度改革の今日的課題はこの未完に終わった部分を再構築する点にあることを論じた。岐阜経済大学出版助成制度により出版。(総ページ数430ページ)
岩波 日本史辞典	共著	平成11年10月	岩波書店	永原慶二監修、石上栄一・加藤哲郎他編。日本史研究の今日的水準をふまえて多方面にわたる事象を歴史的視点から幅広く立項した辞典。青空教室、旭丘中学事件、教科書裁判、いじめ、憂うべき教科書問題、おちこぼれ、塾、学習指導要領、学力テスト、学校給食、学校教育法、学校主任制、家庭科、帰国子女、義務教育、義務教育費国庫負担法、教科書、教科書検定、教職追放、勤務評定、くこのあゆみ、校内暴力、社会科、社会教育、唱歌、小学校、男女共学、定時制、登校拒否、日教組、PTA、偏差値、文部省、夜間中学、やまびこ学校、6・3制の36項目を分担執筆。

岐阜県教育史 史料編(近代4)	監修	平成11年10月	岐阜県教育委員会編	岐阜県教育委員会の企画による、『岐阜県教育史』(史料編17巻、通史編11巻、別編2巻の計30巻)の一部。昭和元年から昭和11年までにおける教育関係資料を収載した史料編。内容構成、収載史料の選定、解説、脚注等について、校閲・監修を行なう。(総ページ901ページ)
いま、読む『新制中学校 新制高等学校 望ましい運営の指針』	共著	平成14年8月	民主教育研究所	文部省が戦後初期に示した中等教育改革の基本指針を内容とする文書を復刻し、その今日的意義を解説した。堀尾輝久との分担執筆。この指針が、中等学校の設置・運営の自由と、学校教育の公共性と水準維持の保障を二つの柱としていることを指摘し、中等教育の学校評価制度の一試案とになすことができることを論じた。『『新制中学校 新制高等学校 望ましい運営の指針』の今日的意義』の部分執筆。(1～15ページ)
岐阜県史 通史編 続現代	共著	平成15年3月	岐阜県	戦後から平成12年(2000年)までの岐阜県の通史を概説した。本書の、教育・文化関係部分(第1部第4章、第2部第4章の箇所)を分担執筆。岐阜県下の戦後教育改革、高度成長下の教育の諸矛盾を中央の政策、県の教育方針、県民世論、教育界の動向などをふまえて多角的に考察して岐阜県戦後教育史のイメージを再構成した。(128～215および689～796ページ分担)
いま、読む『小学校経営の手引』	共著	平成15年8月	民主教育研究所	文部省が戦後初期に示した小学校の学校経営の原理・原則の指針を内容とする文書を復刻し、その今日的意義を解説した。堀尾輝久との分担執筆。この指針が、学校教育法体制下の小学校の管理・経営のあり方、学校運営の組織と校長の役割などを明らかにしたもので、現在においても学校づくりの参考として意義深い内容を持っていることを明らかにした。『『小学校経営の手引』の今日的意義』の部分執筆。(13～29ページ)
戦後日本における中等教育と高等教育の接続関係に関する研究	単著	平成15年3月	平成12～14年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C)(2)の研究成果報告書。論文「戦後日本における中等教育と高等教育の接続関係」(2003.3)所収	本書は平成12～14年度の文部省科学研究費補助金「戦後日本における中等教育と高等教育の接続関係研究に関する研究」の報告書である。当該補助金研究に関わる論文「戦後日本における中等教育と高等教育の接続関係」を収めている。同論文は、学校教育法制定当初から1970年代に至る、高等学校と大学との接続の在り方の議論の整理と、入学試験科目の変遷および高校教育課程の実態上の変化を追跡したものである。(総ページ数225ページ)
岐阜県教育史 通史編(近代4)	共著 (執筆代表)	平成16年3月	岐阜県教育委員会編	岐阜県教育委員会の企画による、『岐阜県教育史』(史料編17巻、通史編11巻、別編2巻の計30巻)の一部。昭和元年から昭和21年までの岐阜県教育史を記述。本巻執筆代表者として、総説、第1章教育行財政、第2章初等教育(前半)、第3章中等教育(前半)、第4章高等教育(後半)、第7章教員養成、第9章戦争と教育(後半)部分を執筆。(全350ページ執筆)
新修彦根市史 史料編(近代二・現代)	共著	平成18年3月	彦根市史編集委員会編、彦根市発行	彦根市の企画による、『新修彦根市史』(史料編5巻、通史編4巻、別編3巻・計12巻)の一部。現代史部会長上野輝将のもと専門委員として資料調査を行い。昭和20年から現在までの滋賀県彦根市の現代史料を翻刻・編集した。上野輝将・岡田知弘・小松秀雄・高木和美・野田公夫と共著。全934ページ。うち教育関係部分762-836ページを分担。
教育刷新委員会教育刷新審議会会議録(全13巻)重版	共著	平成16年10月～平成19年10月	岩波書店	日本近代教育史料研究会(国立教育研究所内設置、代表菱村幸彦国立教育研究所長)の一員として、編集(佐藤秀夫日本大学教授編集代表)に加わる。戦後日本の教育改革を構想するため、昭和21年8月に内閣に設置された教育刷新委員会の議事速記録およびその周辺史料を校訂・編集し、基礎資料文献として刊行。その重版を平成16年から19年かけて、寺崎昌男らとともに校訂・編修し刊行した。
新修 彦根市史 第4巻 通史編 現代	共著	平成27年1月	彦根市発行	上野輝将・岡田知弘・小松秀雄・高木和美・野田公夫・井伊岳夫と共著。第2次大戦終結後から平成21年までの滋賀県彦根市域の歴史を叙述した自治体史、総ページ699。教育関係分野：第1章第6節(「教育の民主化と新教育」149-195ページ)、第2章第6節(「教育政策の変容と教育問題」405-431ページ)、第3章第6節(「社会構造の変化と教育改革」621-640ページ)、コラム(167ページ・640ページ)を担当した。
三重県史 通史編 近現代1	共著	平成27年3月	三重県発行	原始から現代にわたる三重県の自治体史通史編6巻のうち1巻。編集委員・執筆委員として参加。本書は明治から大正期前半までを対象とする。この第3編「近代三重の教育・文化・生活と社会」のうち、第1章の第2節「中等諸学校と専門学校」(537-546ページ)と第3節「若者組から青年団へ」(570-580ページ)、第3章第2節「近代化と青年団体」(693-695ページ)を執筆した。

近代日本における農本的地域教育実践に関する研究	単著	平成27年3月	平成22～25年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C)(2)の研究 成果報告書。	2008年度から2014年度までに作成した論文・資料のうち、農村教育の歴史に関連したものを取り上げて本論集に収載した。これらは、学術振興会科研費研究・基盤研究(C)「近代日本における農本的地域教育実践に関する調査研究」(研究代表者:三羽光彦・2010年度～2013年度・課題番号:22530838)の成果である。これらの諸論稿は、全体として、戦前農村における地域教育実践のなかに、民衆的・自治的な性格を見だし、それらを新たに教育史の文脈に位置づけ、近代日本教育史を再構成することをめざしたものである。
教育と教育行政	共著	平成27年10月	勁草書房	本書は大学のテキストとして使用する目的で作成した。「第9章 学校制度の歴史と原理」を分担執筆。近代学校の成り立ちから複線型学校体系、戦後日本の学校制度改革の特質、6・3・3性の意義、2007年学校教育法改正の問題点を論じた。編者:井深雄二・大橋基博・中嶋哲彦・川口洋譽。(執筆箇所115-127ページ)
教育勅語と学校教育	共著	平成30年3月	世織書房	日本教育学会教育勅語問題ワーキンググループ編、中嶋哲彦・小野雅章・有本真紀・三羽光彦・本田伊克・大橋基博・米田俊彦・瀧澤利行・折出健二・西島央・広田照幸・共著。本書は、教育勅語の教材使用問題など教育勅語をめぐる諸問題を考察するため開かれたシンポジウムをもとに作成された研究書である。このうち本編・第3章「戦後における教育勅語の原理的排除」(p.95-p.129)を執筆。
三重県史 通史編 近現代2(上)	共著	平成31年3月	三重県発行	原始から現代にわたる三重県の自治体史通史編6巻のうち1巻。編集委員・執筆委員として参加。本書は明治から大正期前半までを対象とする。このうち第3編「転換期三重の教育」の第1章「第一次大戦後の教育」と第2章「昭和恐慌期・戦時体制期の教育」および第5編「転換期三重の生活と社会」の第1章・第2節「社会運動のなかの青年」部分、およびコラム「奥鹿野の全村教育」を執筆した。
三重県史 通史編 近現代2(下)	共著	平成31年3月	三重県発行	原始から現代にわたる三重県の自治体史通史編6巻のうち1巻。編集委員・執筆委員として参加。本書は第2次大戦終結後から1980年代までを対象とする最終巻である。このうち第3編「現代三重の教育」の第1章「復興期の教育」第2章「高度成長期の教育」第3章「安定成長期の教育」(計456-635ページ)を執筆した。
(論文)				
教育審議会における初等教育と中等教育の接続関係に関する論議の一考察	単著	昭和54年8月	名古屋大学大学院教育学研究科『教育論叢』第22号	中等教育の国民教育化の観点から、戦前昭和期の教育審議会の中等教育改革構想を、初等教育と中等教育の接続関係の変容という観点から考察し、そこでだされた3年制中学校の歴史的意義を論じた。(11ページ)
大正期における高等小学校の制度史的検討	単著	昭和54年8月	名古屋大学教育学部教育行政及び制度研究室『教育行政研究』第2号	高等小学校教育の拡大につれて、高等小学校における実業科や手工科の設置、尋常・高等併置校の増大などの現象がみられた。こうしたなかで、高等小学校が大衆化し国民教育の上部段階として定着したことを、統計資料および審議会議事録をもとに論じた。(37ページ)
高等小学校制度の歴史的研究	単著	昭和55年1月	名古屋大学大学院教育学研究科修士論文	義務教育の6年への延長後の高等小学校の大衆化を明らかにし、大正期以降の高等小学校改革論がこうした実態を背景とし、中等教育大衆化の要求と密接に関連しながら展開されたこと、そうした議論やその結果実施された1926年の改革は高等小学校教育のなかで大衆的中等教育の原型とでもいうべき性格を形成したことを明らかにした。(400字780枚)
大正期高等小学校改革に関する考察	単著	昭和56年3月	『名古屋大学教育学部紀要—教育学科—』第27巻	大正期の高等小学校改革論の多くが、高等小学校の単独設置、実業科の必修化、三年制高等小学校の増設、英語科の設置等を要求している。これは中等教育の大衆化要求にほかならないこと、こうした要望を背景として1926年の改革が実施されたことなどを論じた。(11ページ)
現代教育法学論争の検討	共著	昭和56年3月	名古屋大学大学院教育学研究科『教育論叢』第24号	「第7章 法による教育目的・目標規定をめぐる論争」を分担執筆。一部で、法に教育目的等を掲げることを見解がみられるが、戦後改革では、法に教育目的を掲げることと教育の民主化は不可分の関係にあったことを明らかにし、こうした見解を批判した。共著者:井深雄二・大橋基博・小野田正利。(10ページ)
1920～30年代における高等小学校改革に関する考察—都市部の単置制高等小学校を中心に—	単著	昭和56年10月	教育史学会紀要『日本の教育史学』第24集、講談社	1930年代の都市部では、高等小学校を尋常科から離して単置制とする改革を進める傾向があった。こうしたなかで、教科担任制・実業科目の必修化・職業指導の導入などが効果的に行われ、神戸・東京などでは高等小学校教育において大衆的中等教育のいくつかの性格が形成されていたことを明らかにした。(12ページ)

戦後日本の中等学校制度改革に関する研究(2)—設置基準設定をめぐる議論を中心として—	単著	平成2年12月	岐阜経済大学学会編『岐阜経済大学論集』第24巻第3号	「新制高等学校実施の手引」「新制中学校・新制高等学校 望ましい運営の指針」「新しい中学校の手引」のそれぞれの作成過程を検討し、それらは、新しい中等教育の望ましい基準を示すものとして出されたもので、中学校・高等学校の設置基準に準ずる性格をもつものであったことを明らかにした。(38ページ)
日本教育史研究の視座と時代(時期)区分—いわゆる『School System』論に関連して—	単著	平成4年8月	日本教育史研究会『日本教育史研究』第11号	近代日本教育史研究の現状と課題を整理し、前近代や諸外国との比較、学校教育と社会教育の両方を複眼的にみる必要などがあることを指摘。さらに全国的・有機的な学校制度の発展を教育における近代の指標のひとつと考えるべきことを論じ、学校制度と教育構造との区別と統一の視点が必要なことを明らかにした。(12ページ)
揺籃期の商業学校—大垣商業学校の場合	単著	平成6年3月	岐阜県歴史資料館編『岐阜県歴史資料館報』第17号	岐阜県大垣商業学校の創設に関する住民の議論を整理し、ついで中等段階への昇格に関する経緯と、それにもなう商業教育の内容改善について論じた。特に、実践的な「行商」の教育的意義が重視されていた点を、戦前の商業教育の特徴として位置づけた。(4ページ)
戦後教育改革における新学制実施準備協議会の意義と役割	単著	平成7年6月	岐阜県教育史研究会編『岐阜県教育史研究』第2号岐	占領軍史料を利用して、戦後初期の「新学制実施準備協議会」(市町村・郡・県に設置)の構想を解明し、実際の設置運営過程については岐阜県の実態を考察した。その結果、同協議会は六・三・三制の実施主体として、住民の意思を教育に反映させることをめざした点が注目されることを論じた。(17ページ)
現代日本の社会と学校教育—社会と教育の関連認識の視角—	単著	平成7年9月	東海教育自治研究会編『教育自治研究』第8号	現代の教育問題を戦後教育史の流れのなかに位置づけるために、その前提として、教育と社会の関連構造の視角について、近年の研究者の諸説を吟味し、社会経済の構造的な変動の従属変数として教育の諸問題を位置づける必要があることを論じた。(9ページ)
六・三・三制の概念と中等教育の一貫性	単著	平成9年4月	中等教育史研究会編『中等教育史研究』第5号	六・三・三制の概念および六・三・三制の成立事情を検討し、六・三・三制の基本的な制度原則として中学校と高等学校とを連続的にみる中等教育の一貫性の原理があったことを明らかにした。ただし、この原則は、単線型学校体系を前提とする原理であって、1998年に実施された中高一貫教育の一部導入の制度改革とは方向性を異にしたものであることを論じた。(17～32ページ)
戦間期日本の都市教育行政に関する—考察教	単著	平成9年6月	岐阜経済大学学会編『岐阜経済大学論集』第31巻第1号	日本においては都市教育に対する関心は第一次大戦後にみられるようになった。こうした都市教育の独自性の自覚、都市教育行政の対象や課題などの議論、とりわけ川本宇之介の1920年代から30年代にかけての東京市政調査会における都市教育論を素材にして、戦間期の都市教育行政の特質について考察を加え、日本の教育行政史における戦間期都市教育行政の意義について検討した。(99～124ページ)
六・三・三制の原点と中高一貫教育	単著	平成9年7月	東海教育自治研究会『教育自治研究』第10号	準義務教育としての高等学校の理念など、戦後初期の中学校と高等学校の接続関係の理念を明らかにし、1960年代の高等学校入学者選抜の「適格者主義」への転換を批判的に論じた。さらに、中高一貫制度の一部導入など、今日の中央教育審議会の中等教育複線化への指向は、こうした高校教育問題を解決するものではなく、問題をより深刻なものにせざるをえないことを指摘した。(65～73ページ)
教育の機会均等と六・三・三制五〇年	単著	平成10年3月	日本教育法学会編『教育基本法五〇年…その総括と展望…日本教育法学会年報』第27号	戦後日本の六・三・三制を学校制度の体系的な構造としてとらえ、その理念の二つの柱を、教育の機会均等と教育の分権化として位置づけた。そして、こうした当初構想されたような制度として実現しなかった点にこそ、六・三・三制が画一的教育を蔓延させたといわれる要因があったことを論じた。そこで、制度改革の方向性としては、六・三・三制の原点に立ち戻る必要があることを論じた。(62～71ページ)
日本経済の構造改革と現代の教育政策	単著	平成10年3月	東海教育自治研究会『教育自治研究』第11号	心の教育の充実、個性に応じた多様な学校制度の実現、地方教育行政の改革、大学教育の充実と研究の振興など、今日の教育政策の動向を、経済活動全般に関する規制緩和と自由競争原理の強化、日本型雇用慣行の廃止、公共サービスの地方分権化などの日本経済の構造転換に由来する経済諸政策との関連で考察し、そこにおけるいくつかの問題点を指摘した。(95～103ページ)
戦後教育史における「個」と「集団」	単著	平成12年3月	国立歴史民族博物館編『歴博』第99号	個の開放のように見えた戦後の教育改革も、実は国家的契機は強く、集団を梃子にした学級経営にみられるように、小集団づくりを基礎にして、地域や課程の教育力を支えながら教育実践は展開した。その典型が「地域に根ざす教育」であった。社会経済的な変容の中で、地域と家庭の教育力が脆弱化している現在、こと集団の緊張感を社会的リアリズムをもとにして追及することは、教育の重要な課題となっているが、その条件はますます弱まっている。以上の点を論じた。(16～19ページ)

教育危機の本質——その史的考察	単著	平成14年3月	岐阜県歴史資料館編『岐阜県歴史資料館報』第25号	近代ヨーロッパ文明の根幹には、ギリシア・ローマ以来の伝統的な教養とキリスト教的な絶対的規範が存在する。これに対してわが国の歴史においても、知の伝統と学びのエートスは存在したが、明治以降の近代化と第二次大戦以降の高度成長下の共同体の変容の中で、そうした伝統はついでに失われている。今日の教育危機の本質はこうした教養と規範の喪失に求めるべきであることを論じた。(2~4ページ)
地域社会と六・三・三制——その理論的諸問題——	単著	平成18年5月	全国地方教育史学会『地方教育史研究』(全国地方教育史学会紀要)第27号	近代日本の地域と中等教育について、歴史的・理論的な問題について論じた。戦後日本の六・三・三制を、中等教育一元化と教育の地方自治を二つの要素とする学校制度として理解すべきこと、しかしながら、近代日本の中等教育は、歴史的・本質的な固有の概念を持たず、また確固とした中等教育内容(バカロレア資格を形成するような)を有していなかった点に特徴および問題の本質があることなどを論じた(27~31ページ)
地方教育委員会設置に先行する戦後初期地域教育自治の試み——岐阜・三重両県の事例を中心に——	単著	平成19年12月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』第47号	本論文では、地方教育委員会の役割に関する問題と可能性を考察することを目的として、岐阜県と三重県を取り上げ、地方教育委員会制度に先行する戦後直後の様々な地域教育自治のシステムを、地域からの教育(教育実践、教育課程、教育内容)創造という観点から検討した。(11-22ページ)
1930年代における農本的全村教育の思想と実践(1)——民衆教育の視座からの理論的検討——	単著	平成20年6月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』第48号	民衆教育の視座から「全村教育」などの農本的教育を再評価すべきことを論じた。すなわち、1930年代に日本各地でみられた「全村教育」名で呼ばれた地域に根ざした教育計画・教育実践に関し、その教育の思想と実践は、農本思想に基づくものであるが、そこで見られる農本思想は、ファシズムの温床となった前近代的な思想ではなく、在地的・民衆的な思想であり、近代公教育に対する重要なアンチテーゼとしての意味を持っていたことを指摘した。(31-42ページ)
1930年代における農本的全村教育の思想と実践(2)——三重県矢持村奥鹿野の事例——	単著	平成20年12月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』第50号	農村恐慌を契機とした農山漁村更正計画の一環として全国的に展開される農本主義的な全村教育(地域教育計画)に関して、三重県伊賀地方の矢持村奥鹿野で1930年代に実践された高等公民学校(青年学校)を中心とする村落自治の思想と実践を事例として、その歴史的意義を考察した。(21~32ページ)
近代日本思想史における教育刷新委員会——いわゆる自由主義的知識人の国家観・社会観に関連して——	単著	平成21年3月	岐阜経済大学紀要『岐阜経済大学論集』第42巻第3号	戦後教育改革を構想した最も主要な担い手であった教育刷新委員会は、委員長の南原繁をはじめとして自由主義的知識人が重要な位置を占めていたといわれているが、そのいわゆる自由主義的といわれる思想の内実を再検討し、刷新委員会を全体として日本の近代思想史のうねりに位置付けることを目指した。その結果、刷新委員会は強い国家主義的な傾向が見られ、地域自治の中から教育の発展を考えるという考え方が弱いことが明らかとなった。よって自由主義的という評価には疑問があることを論じた。(73-91ページ)
日本における中等教育の基本問題に関する史的考察——2007年学校教育法改正に関連して——	単著	平成21年4月	中等教育史研究会編『中等教育史研究』第16号	2007年の学校教育法改正においては、小学校と中学校を義務教育として一体のものにとらえたことにより、中学校と高等学校の間のギャップをより広げることになり、両者の中等教育としての意義や機能を希薄なものにしたと考えられる。こうした、日本の中等教育に特徴的な脆弱性の背景・要因を、歴史的に考察した。
1930年代における農本的全村教育の思想と実践(3)——岐阜県恵那郡蛭川村の「興村教育」——	単著	平成21年6月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』第51号	1930年代の農本的全村教育の事例として、岐阜県恵那郡蛭川村で実施された「興村教育」を取り上げて考察した。「興村教育」は西尾彦朗を中心として蛭川村の全村教育として実施されたもので、労作教育・郷土教育を内容とする独自の教育で、地域共同体を基礎にした農本主義的な思想に立脚している。ただしそれは一概に全体主義的・非民主主義的と決め付けることはできない。むしろ戦後の恵那の地域に根ざす民主教育の源流となったと考えられることができる。以上を論じた。(17~28ページ)
陸軍特別大演習と教育——1917年滋賀県の事例——	単著	平成22年6月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』第53号	陸軍特別大演習の学校教育に与えた影響について、第一次大戦末期の1917(大正6)年11月に実施された滋賀県地域における陸軍特別大演習を事例として、滋賀県湖東地域、なかんずく彦根中学校など彦根市内の小・中学校の教育との関係で考察した。(35~46ページ)
戦後改革における二つの中等教育論——教育刷新委員会における天野貞祐と牛山栄治——	単著	平成22年9月	芦屋女子短期大学『芦屋女子短期大学研究紀要』第36号	戦後の中等教育成立期の構想を対象として、それまでの中等教育の歴史的遺産の何を否定し何を継承しようとしたのかという視点から、その改革論の論点を整理した。旧制高等学校校長としての経験から、旧制高校にみられた教養教育の長所を残すことを強く求めた天野貞祐と、青年学校校長としての経験から、勤労青年教育の義務制を主張した牛山栄治に焦点をあて、教育刷新委員会における中等教育改革の議論を考察した。(19~30ページ)

近代日本の学校教育形成過程における仏教系僧侶養成機関の位置と役割---真宗高田派の貴練教校・勸学院の場合---	単著	平成22年12月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』第54号	真宗高田派によって設立された真宗勸学院は全国でいち早く近代学校として組織された僧侶養成機関であったが、当初から一般民衆にも開かれ、近代学校の形成を牽引する性格をもっていた。そうしたなかで、宗教教育と普通教育が、より密接でより広く豊かな結びつきを形作る可能性を持っていたことを論じた。(35-46ページ)
宗教教育禁止訓令後の仏教系教育機関の対応に関する一考察---真宗高田派の勸学院(高田中学・高田専門学校)の場合---	単著	平成23年6月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』第55号	真宗高田派によって設立された勸学院(高田中学校・高田専門学校)を対象として、宗教教育禁止訓令に対する対応を考察した。勸学院では仏教教育を中等教育から専門学校へ移し、進学資格や徴兵猶予、官吏任用資格等を得ることとなった。こうしたなかで中等教育は極めて「世俗性」の強いものとなっていったことを論じた。(35-46ページ)
12、戦前昭和期の農村における塾風教育の教育史的意義に関する一考察---福岡県農士学校を事例として---	単著	平成24年1月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』56号	昭和戦前期に一世を風靡した塾風教育について、福岡県農士学校を事例としてその教育史的意義を検討した。結論的には、塾風教育は日本の伝統に依拠しながらラディカルに近代公教育を批判したものであり、時代錯誤的なもの、ファシズムの温床となったものと評価するのは間違いであることを論じた。(1-13ページ)
戦前昭和期における松本学の全村学校論に関する一考察	単著	平成25年1月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』58号	戦前の有力な内務官僚である松本学は、「全村学校連盟」を組織し、全国的に「全村学校」を広めようとした。しかし、それは教育という前に行政であり、政治であり統治の手段であった。いわば、国家の「基礎細胞」を教化するための官治的な上からの運動であった。その点、地域自治の観点から取り組まれた「全村教育」とは本質的に異なるものであったことを明らかにした。(1-12ページ)
戦前昭和期の地域計画と教育自治に関する一考察(1)---秋田県由利郡西目村の事例---	単著	平成26年1月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』60号	戦前昭和期・農山漁村経済更生運動に先立ち秋田県由利郡西目村で実施された村ぐるみの「全村教育」の実態を、佐々木孝一郎村長、米山重助小学校長の教育思想、年番制などの部落自治、夜学会と青年指導の在り方などから実証的に明らかにした。下記論文の前編。(11-21ページ)
戦後初期奄美地域における新制高等学校創設に関する一考察---青年学校の町村立実業高等学校への改革に着目して---	単著	平成26年4月	中等教育史研究会編『中等教育史研究』第21号	戦後直後の奄美地域では、戦前からの鹿児島県による青年学校の充実という遺産を背景として、高等女学校や実業学校を設置し、これら中等教育機関や青年学校を母体として、本土に先駆けて実業高等学校を設置することとなった。こうしたプロセスを自生的な中等教育創出の営みとして論じた。(41-64ページ)
戦前昭和期の地域計画と教育自治に関する一考察(2)---秋田県由利郡西目村の事例---	単著	平成26年7月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』61号	前期論文の後編。秋田県由利郡西目村の「全村教育」を、近代公教育への批判、農村共同体の伝統的な自己形成の営みの活性化、独自の理念・制度・内容をもつ地域教育創造の志向が内在していたことを実証し、それが戦前日本における地域教育自治の一つの試みであったことを論じた。(15-26ページ)
近代日本における教育自治の一形態(1)---鳥取県日野郡山上村の「全村教育」を事例として---	単著	平成27年1月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』62号	鳥取県日野郡山上村において、個性ある教師・内藤岩雄が大正期に取り組んだ全村教育の実態を明らかにし、その意義を考察した論文の前編。内藤は妹尾村長との二人三脚によって山上村の近代化に取り組みとともに、村の発展の基礎として全村的教育を組織し、塾風教育を推進した。そこには、日本の伝統的な教育方法を尊重すると同時に、近代的な教育の在り方も積極的に取り入れるという複眼的視野があったことを論じた。(19-30ページ)
1920年代における信濃教育会の実業補習学校論---地域に根ざした青年期の「人格教育」---	単著	平成26年4月	中等教育史研究会編『中等教育史研究』第22号	長野県の実業補習学校の普及や充実を果たした信濃教育会の役割に焦点を当て、信濃教育会の実業補習学校改革論の特質を考察した。1920年代の信濃教育会では人格的陶冶をめざす教養教育として理想主義的な青年教育を、実業補習学校で行おうとする考え方が色濃くうかがえること。それは在来的・自生的な青年教育を目指すものでもあったことを論じた。(1-22ページ)
近代日本における教育自治の一形態(2)---鳥取県日野郡山上村の「全村教育」を事例として---	単著	平成27年7月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』63号	鳥取県日野郡山上村における内藤岩雄の全村教育は、昭和期になっても木村正義や山形正春らによって継承された。この山上村で1910年代から1940年代にかけて展開された全村教育は、近代日本において追求された地域教育計画であり、地域民たちの自己形成の組織化であったことを論証した。(1-13ページ)
現代日本の高等学校における地域教育実践の歴史的意義---地域に根ざす青年期教育として---	単著	平成28年1月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』64号	著者の研究室で実施した鳥取県立智頭農林高校、島根県立島前高校、岐阜県立可児高校、伊丹市立伊丹高校の教育実践をもとに、今日展開されているキャリア教育の地域教育実践を、戦前の地域社会学校、戦後の地域教育計画、学習指導要領などの歴史的な視角から、その実践の意義を考察した。(9-19ページ)
戦後初期滋賀県における無争学園中等部の教育に関する一考察---新学制発足に先行する私塾的中等教育創造の試み---	単著	平成28年4月	中等教育史研究会編『中等教育史研究』第23号	1946年滋賀県愛知郡西押立村に皇文郁によって設立された無争学園中等部について考察した。この学園は、少人数・師弟同行・寄宿舎生活・自学自習を重視した私塾的な学校で、生活・労働・教育を一体化した地域に根ざす学校であったこと、それは戦後の新たな中等教育創造への下からの一つの動きであったことを論じた。(29-51ページ)

戦後初期長野県上郷農工技術学校の生産教育に関する一考察——地域自治的青年教育創造の視点から——	単著	平成28年5月	佐々木享先生追悼集編集委員会編『人間いたるところに青山あり』大空社	1946年長野県下伊那郡上郷村で、新学制以前に村立青年学校を青年学校令の枠内で上郷農工技術学校と改称・改組して生産と教育を結合し、地域に即した青年教育を実施した。これは、地域が求める青年教育を生産教育という形で、自治的に創造することによって、地域からの中等教育創造への下からの一つの動きであったことを論じた。(87-120ページ)
岡山県における実業補習学校の発展と邑久土曜学校	単著	平成28年7月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』65号	主に農村部の実業補習学校の類型として、岡山県を取り上げ、明治から昭和初期にかけて、裁縫を重視した女子実業補習学校に特色があることなど実業補習学校の発展のプロセスを明らかにした。またその岡山県の実業補習学校の事例として、当時個性的な実業補習学校として全国に知られていた「邑久土曜学校」について、その設立趣旨や教育の特質、実態などを詳しく考察することとした。(29-41ページ)
戦前昭和期長野県の農村部における実業補習学改革に関する一考察——下條実科中等学校を事例として	単著	平成29年1月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』66号	全国的に見て実業補習学校が最も普及発展していた長野県では、農村部においても村単独で中等教育レベルの学校へと改革していたところがあった。ここで取り上げた下條村の実科中等学校はその典型である。高等小学校、高等女学校などと組織的に連携しながら、地域に根ざした青年期教育創りあげている。規模は小さいが、かえって私塾的な教育実践をおこなっている。いわば地域からの中等教育創造の事例ということができる。長野県の実業補習学校政策の動向とともにその点を明らかにした。(7-18ページ)
戦前昭和期の仏教にもとづく教育思想と実践に関する一考察——小嶋政一郎の真宗思想と全村教育	単著	平成29年7月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』67号	小嶋政一郎の教育思想は、教育という営為・作用への根本的疑問から出発し、内面的な問題を根底に据え、全村教育・興村教育などと称する戦前日本の教育実践は、「非西欧的で自生的」であるだけでなく、しばしば宗教的な思惟形態がその根底にあったことを、中内敏夫が論じている。また、本論文では、そうした「非西欧的で自生的」な教育の思想と実践がその根底にあった戦前昭和期の教育実践の一例として、宮崎県延岡市における小嶋政一郎の教育実践を考察することにした(1-12ページ)
西山庸平の生活教育思想と地域教育実践に関する一考察(1)——J・デューイにもとづく教育理論の形成——	単著	平成29年12月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』68号	従来、デューイの生活教育思想の影響といわれてきた西山庸平の教育論は、丁寧に見ていくとデューイの「思考の方法」(1910年)の思考の段階説・発見学習説に強く影響されていることがわかる。西山はそれをデューイの心理学と理解したが、それは後に定式化される問題解決型学習論の構造の初期の型である。さらに読解指導における「両断法」は、西山の独創ともいえる方法であったが、この『思考の方法』の応用という性格を持っている。以上のことを明らかにした。(21-32ページ)
西山庸平の生活教育思想と地域教育実践に関する一考察(2)——高知県夜須村における全村教育について	単著	平成30年3月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』69号	西山庸平の教育思想、教育理論は初期のJ・デューイの影響によって形成されたものであったが、その教育は単なる児童中心主義でも自由教育でもない。教師の「教権」を無条件に認めていることや、読み方における「点検」の重視など、教育の主導性を強調している点に特徴がある。自学自習を重視しながら児童中心主義は否定しているのである。むしろ児童心理の原理に基礎づけられた合理的指導とでもいえるものであった。以上のことを明らかにした。(27-36ページ)
青年学校における塾風教育に関する一考察——高知県橋原村立孝山塾について	単著	令和元年7月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』71号	戦前昭和期には、全国的にしばしば塾の形式で青年教育が実施された。これらの塾風教育については、農村におけるファシズム形成に影響を与えたものと評価する傾向が強いが、宮坂広作は、こうした塾風教育は近代公教育とは異なる性格を有し、「近代の論理」をのりこえる「現代的」意義をもっていると評価している。「近代の論理」をのりこえようとした塾風教育の教育史的意義とは何であったのか。本論文では、村立青年学校を塾風教育として運営した橋原村の孝山塾を例に、その点を考察することにした(31-43ページ)
戦後6・3・3制の先導的施行に関する一考察(1)——新潟県の「関谷学園」、その構想と理念	単著	令和2年3月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』72号	戦後6・3・3制はその立案から実施まで時間が短かったが、全く試行実験がなかったわけではない。千葉県の本更津市や山武郡地域で6・3・3制への転換の可能性を調査したり、文部省の教育研修所が6・3・3制の研究指定校を全国各地に設定する計画を立てた。その第1号が、新潟県関谷村に設けられた「関谷学園」である。本論文では、この「関谷学園」の設立経緯とその理念・思想を明らかにし、その実態を分析することをおこなった。その結果、そこには城戸幡太郎の教育思想が色濃く反映されていることが明らかとなった(23-34ページ)
戦後6・3・3制の先導的施行に関する一考察(2)——新潟県の「関谷学園」、全村的生産教育の実態	単著	令和2年9月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』73号	新潟県関谷村の「関谷学園」は城戸幡太郎の教育思想の影響を色濃く受けていたが、本論文では、この「関谷学園」の実態を投じの資料に基づき明らかにした。その結果、全村教育と生産教育という柱が明らかとなった。こうした教育観は当時の6・3・3制への農村部の地域住民の期待を反映したものということができる。(32-42ページ)

北海道における実業補習学校制度の発展過程に関する一考察(1)——1922年の高等国民学校準則と空知高等国民学校——	単著	令和3年3月	芦屋大学紀要『芦屋大学論叢』74号	北海道庁は1922年、デンマークの「国民高等学校」に範をとった「高等国民学校」(実業補習学校の種類)を10数校設置した。私塾的な運営のもと教師・指導者との人格的交流を基礎とした青年の人間形成・修養に重きが置かれていた。この当時、地域の実態に応じて柔軟に発展させようとしたユニークな勤労青年教育の事例であったことを明らかにした。本論文では空知高等国民学校について論じた。(23-34ページ)
報告・書評・図書紹介・解説・新聞記事・その他				
報告・職業指導(進路指導)制度の国際比較研究—日本とフランスを中心に—	共著	昭和62年7月	『財団法人カシオ科学振興財団昭和61年度『年報』	カシオ科学振興財団研究助成金による共同研究。日本の職業指導の問題点を広い視野から検討するため諸外国との比較を計画、まず日本での紹介や研究の少ないフランスをとりあげ、日仏両国の職業指導制度を比較検討した。研究代表者:佐々木享。共著者:夏日達也。(2ページ)
カリキュラム改革のキーワード	単著	平成5年7月	東海高等教育研究所編『大学と教育』第8号	現在進行中の大学改革に関するキーワードを解説。「教育課程」の項目を分担。1991年の大学設置基準の改正から、大学においても初等中等教育と同様に「教育課程」という用語が使われるようになったことを指摘し、これが大学のカリキュラム観の変化を象徴していることを論じた。(2ページ)
大学を読むキーワード1…「大学」	単著	平成5年9月	東海高等教育研究所編『大学と教育』第9号	「大学」という名称が近代日本で用いられた復古的・儒教的背景と、それを近代中国が逆輸入したことを論じ、日本の大学がヨーロッパのそれと出自を異にしていることを指摘した。(2ページ)
学会奨励賞 受賞者による著書紹介『高等小学校制度史研究』	単著	平成7年10月	日本教育行政学会編『日本教育行政学会年報』第21号	平成6年10月に日本教育行政学会奨励賞を受賞した『高等小学校制度史研究』(法律文化社、平成5年)の内容を著者として紹介。本研究の特徴、研究の概要、今後の課題からなる
書評:岡村達雄著『日本近代公教育の支配装置——教員処分体制の形成と展開をめぐって』	単著	平成15年10月	日本教育行政学会編『日本教育行政学会年報』第29号	本書が、教員処分をめぐる視点から公教育の形成と展開を論じたものとして特徴があること、公教育形成に教員処分法制という視点を投じたことが評価できること、また、植民地における教員処分法制はこれまでの研究でみられない新たな研究であることなどを論じた。
書評:三上敦史『近代日本の夜間中学』を読んで	単著	平成18年7月	日本教育史研究会編『日本教育史研究』第25号	本書が、戦前の夜間中学に関するはじめてともいえる体系的・実証的な研究であり、植民地まで含めた全国にわたる克明な調査を基礎に完成させたことを評価した。なお、中等教育概念や中等教育史上の夜間中学の位置などについて疑問を呈した。
日本教育史の研究動向(近現代)	単著	平成22年9月	教育史学会紀要『日本の教育史』第53集	教育史学会の編集委員会に依頼され、2009年1月～12月に刊行された著書・論文などを渉猟し、論評を加えながら、1年間の日本教育史研究の近現代分野の各領域の研究動向を論じた。(6-19ページ)
書評:湯田拓史『都市の学校設置過程の研究—阪神間文教地区の成立』を読んで	単著	平成23年8月	日本教育史研究会『日本教育史研究』30号	湯田拓史『都市の学校設置過程の研究—阪神間文教地区の成立』(平成22年刊)について、数少ない都市教育行政市の研究書で阪神間の都市形成期における学区や学校設置のありかたが変容したことを実証的に考察した点で意義があること、ただし、研究課題に掲げられた都市教育行政の系統的な分析には至っていないことを批判した。(164-172ページ)
図書紹介:米田俊彦編著『近代日本教育関係法令体系』	単著	平成23年10月	教育史学会紀要『日本の教育史』54号	米田俊彦編著『近代日本教育関係法令体系』(平成21年刊)について、各法令の制定から廃止までを系統的に収録した本格的な教育法令集として、教育学研究者にとっては待ち焦がれていた資料集で、画期的な労作であること、補注なども貴重な研究成果を盛り込み、今後、研究者の座右の書とすべきことなどを論評した。(256-258ページ)
図書紹介:石岡 学著『「教育」としての職業指導の成立』	単著	平成24年10月	教育史学会紀要『日本の教育史』55号	石岡学著『「教育」としての職業指導の成立』(平成23年刊)について、これまでにない戦前の職業指導の成立過程を扱った本格的な研究書であることを評価した上で、職業指導については学校の教育活動全体を通じた職業教育のあり方と関連づけながら考察する必要がある点を指摘し、職業指導の特設をめぐる論争(職業指導の領域論と機能論)を再検討することが必要であることを論じた。(181-183ページ)
書評:田中智子『近代日本高等教育体制の黎明:交錯する地域と国とキリスト教界』	単著	平成25年4月	中等教育史研究会編『中等教育史研究』第20号	田中智子著『近代日本高等教育体制の黎明:交錯する地域と国とキリスト教界』(平成24年刊)について、内外の一次史料や地方新聞などを縦横に活用し、幅広い視野から多くの興味深い事実を明らかにしていることを評価した上で、アメリカ医学の導入が高等教育の形成に寄与した本質的な点が明らかになっていないこと、高等中学校及びその前身をア priori に高等教育機関として位置づけていることなどを、教育制度史の観点から批判した。(33-37ページ)
記事:御真影と教育勅語	単著	平成26年5月	滋賀彦根新聞(平成26年5月31日)	戦後直後、教育勅語の否定に伴って、教育勅語謄本と御真影の処分について、彦根市域ではどのような状況であったかを、新修彦根市史の成果を踏まえて考察した。

記事: 米軍政官ジョージ・カワグチと彦根	単著	平成26年6月	滋賀彦根新聞 (平成26年6月4日)	占領軍の地方組織・滋賀軍政部には、彦根市出身のジョージ・カワグチがいた。彼の地方占領政策とのかかわりについて、新修彦根市史の成果を踏まえて考察した。
資料: 精道尋常高等小学校文集『青空』	共著	平成26年7月	芦屋大学紀要 『芦屋大学論叢』 61号	若林 伸和との共著。兵庫県芦屋市の精道小学校の戦前の学校文集の総目次を作成し、資料として提供すると共に、奈良女子高等師範学校から数学者を校長として招聘するなど、当時の精道小学校の学校経営の発展を素描して解説とした。(107-112ページ・共同研究により抽出不可能)
書評: 大谷奨著『戦前北海道における中等教育制度整備政策の研究――北海道庁立学校と北海道会』	単著	平成27年10月	日本教育行政学会編『日本教育行政学会年報』 第41号	この書が戦前の北海道会の審議内容を通覧し、時もと新聞や行政資料を丹念に渉猟した実証的な研究で、北海道に関しては初の研究であることを評価した。しかしながら、なぜ地方の事例研究として北海道を取り上げたのかが明確でないこと、地方での中等教育の発展過程のダイナミズムが十分に論究されてないことなどを批判した。(224-225ページ)
書評: 高橋裕子著『明治期地域学校衛生史研究――中津川興風学校の学校衛生活動』	単著	平成28年5月	全国地方教育史学会編『地方教育史研究』第37号	この書は、「学校現場の視点から明治期の学校衛生の実態」を明らかにすることを目的とした研究書である。早くから学校医を設置した岐阜県の中津川興風学校を事例とした丹念な実証研究であり、明治期における地方の学校での学校衛生の問題点や、自由民権と学校衛生との関係など興味深い論点を摘出しており、研究史に大きな礎石を築いたものとして評価した。(25-30ページ)
図書紹介: 新修彦根市史編纂委員会編『新修 彦根市史 第4巻 通史編 現代』	単著	平成28年5月	全国地方教育史学会編『地方教育史研究』第37号	三羽を含む6名が執筆した『新修 彦根市史 第4巻 通史編 現代』を紹介すると共に、その発刊停止問題について考察した。市史内容への市長の介入が学問の自由の侵害になること、現代史の軽視や否定の傾向が見られること、住民運動の力によって発行できるようになったことなどを論じ、住民と共につくる自治体史の在り方について検討した。(45-50ページ)
書評: 大畠菜穂子著『戦後日本の教育委員会――指揮監督権はどこにあったか』	単著	平成28年10月	日本教育行政学会編『日本教育行政学会年報』 第42号	この書が、「合議制執行機関の意志決定構造の定式化」という行政組織論を基礎にして、合議制執行機関としての教育委員会の形骸化という現象を、教育委員会の教育長への指揮監督権の有り様を検討しながら考察したもので、重要な論点と実態を明らかにした研究であることを論評した。(266-269ページ)
書評: 佐々木貴文 著『近代日本の水産教育―「国境」に立つ漁業者の養成―』	単著	令和元年7月	日本産業教育学会編『産業教育学研究』第49号 第2号	この書は希少な水産教育史の研究書で、學術手w氣に高い水準にあることを評価した。しかしながら、水産教育も農業教育と同様、国家統制になじまない性質を持つと考える。水産教育においても、さまざまな地域の諸相を地域漁民の視点からつぶさに見ていくと、近代日本の水産教育の構図がはっきり浮上するのではないかと論評した。(18-19ページ)ように思われる。

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 三浦(前川) 正樹						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
教育心理学 (単独)	(著書) 1. 発達と教育の心理学	共	平成 26 年 3 月	八千代出版	44 (193)	<u>教育心理学の中の、特に発達と学習分野を中心にまとめた教科書。教職課程履修者を意識し心理学の初学者にも理解できるように、また教育現場に資するように編集された。発達や学習の過程について記述するとともに、心身の障害についても特に特別支援教育の章を独立してもうけ記述した。</u> (執筆担当部分:第 1 章「教育心理学とは何か」pp. 1-16、第 10 章「学習意欲」pp. 137-151 第 11 章「学習の諸相」pp. 153-165) 著者、 <u>三浦正樹</u> 、共同執筆、高木典子、三溝雄史、石王敦子
	2. 心理学概論	共	平成 23 年 4 月	ナカニシヤ出版	11 (201)	新しい授業形式である協同学習を意識し、 <u>協同学習に対応できるように編集された心理学の概論的教科書。</u> (執筆担当部分:第 8 章「感情と動機づけ」pp. 86-96 担当。 <u>動機づけ研究の基礎、動機づけ研究の新しい流れ、情動研究の基礎、情動研究の新しい流れ、情動と動機づけ研究の応用についてまとめた。</u>) 著者:小野寺孝義、小川俊樹、磯崎三喜年、共同執筆、鈴木由起生、櫻井研三、大藤弘典、石崎千景、高木典子、北川歳昭、並川努、 <u>三浦正樹</u> 、岡林春雄、古澤照幸、伊藤宗親、石川幹人、相川充
	(学術論文等) 1. 発達特性質問紙の信頼性・妥当性の検討	共	令和元年 7 月	芦屋大学論叢、第 71 号 pp. 45-56	6 (12)	<u>発達特性質問紙は、発達障害の 4 領域(注意欠陥障害、多動性障害、自閉症スペクトラム障害、学習障害)の重複およびスペクトラムを見る質問紙である。これまでに、臨床場面や教育場面で使用してきたが、今回、質問紙としての信頼性、妥当性について検討した。因子分析の結果、4 因子構造が確認された。また信頼性も十分なものであった。論文ではいくつかの事例について検討した。ただし、項目として妥当でないものも見られたため、今後いくつかの項目を見直し、改訂版を作ることが課題となった。</u>

<p>2. 感情の言語化についての心理学的考察(4)－神経心理学の視点から－</p>	<p>単</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>芦屋大学論叢、第 69 号 pp. 77-88</p>	<p>12 (12)</p>	<p>(執筆担当部分:信頼性、妥当性の検討、因子分析について担当) 著者:林知代、<u>三浦正樹</u>)</p> <p><u>これまで感情の言語化のメカニズム、その効用、個人差について検討してきたが、それらについてみる際、神経心理学的視点が必要になってくる。感情の理論はジェームズのはじめから生物学的色彩が濃かったが、近年の脳科学の発展により、かなり詳細なことがわかってきている。感情処理の神経メカニズム、あるいは感情と言語の相互作用のメカニズムについてみた。次に、言語化そのものの神経学的メカニズム解明のため、失語症を手がかりに言語化についてまとめた。さらに、左右半球機能差と言語・感情の関係について神経心理学的にみた。これらを通じて情動処理の認知モデルと神経心理学モデルを関係させながら、感情の言語化について考察した。</u></p>
<p>3. 感情の言語化についての心理学的考察(3)－再び感情心理学の視点から－</p>	<p>単</p>	<p>平成 29 年 7 月</p>	<p>芦屋大学論叢、第 67 号 pp. 35-46</p>	<p>12 (12)</p>	<p>本稿では、<u>感情の言語化について、感情の理論、感情についての著作、最近の感情心理学のトピックから考察した。感情の言語化には、認知的側面から見た情動の情報処理モデル(情動処理モデル)がそのメカニズムの、感情制御研究がその機能・効果の解明に直接関わると思われる。感情の言語化の障害であるアレキシサイミアの神経心理学的仮説として、左右半球の連絡不全説がある。バックの総合理論でも、感情の認知的評価とラベルづけ過程の統合には 2 つの半球の統合が必要であると述べている。感情の言語化についての説明には「情動処理モデル」「神経心理学的感情理論」「左右半球の連絡モデル」が必要になってくるであろう。</u></p>
<p>4. 半球間相互作用の個人差に関する実験研究 － 両視野提示課題を用いて －</p>	<p>単</p>	<p>平成 28 年 1 月</p>	<p>芦屋大学論叢、第 64 号 pp. 49-60</p>	<p>12 (12)</p>	<p>本論文では、<u>半球間相互作用の個人差をみるために、両側提示課題を用いて、個別実験と集団実験を行った。その結果、性差は認められなかったが、キメラ課題との関連が示され、左半球覚醒者の方が全体として成績が良くなるという相関が見られた。アレキシサイミア傾向との関連もみられ、とくに下位因子である感情伝達困難が高くなるほど両側提示条件の成績が悪くなるという相関が示された。これらのことから、半球間相互作用の個人差研究において両側提示課題というパラダイムが有効であることが示された。性差も含め、さまざまな個人差指標との</u></p>

	5. 感情の言語化についての心理学的考察(2)－感情心理学の視点から－	単	平成 23 年 6 月	芦屋大学論叢、第 55 号 pp. 97-106	10 (10)	<u>関連が予想されることから、今後このパラダイムを用いてさらに研究を進める必要がある。</u> <u>感情の言語化の問題を考察するにあたって、感情心理学の視点からその前提条件を探った。感情表出のタイプでは内在化と外在化の概念が示され、これが今後言語化を考察する際参考になると思われた。感情の分類にはさまざまなものがあるが、ルイスによる 1 次的感情/2 次的感情の区別が有効である。2 次感情とは内省あるいは自己言及という要素が関与し自己意識的感情とよばれている。2 次感情の方がより言語的関与が大きいと思われる。ここで、2 次感情と感情の個人間調節機能の対応が議論された。感情の理論ではジェームズ以前のデカルト、スピノザに遡りみた。彼らは感情を心身問題としてとらえており、その現代的意義が示された。今後の課題として引き続き感情の理論、自己意識感情について、あるいは新たに感情制御の問題について検討する必要がある。</u>
発達心理学 (単独)	(著書) 1. 発達と教育の心理学	共	平成 26 年 3 月	八千代出版	44 (193)	(再掲のため、略)
	2. 心理学概論	共	平成 23 年 4 月	ナカニシヤ出版	11 (201)	(再掲のため、略)
	(学術論文等) 1. 発達特性質問紙の信頼性・妥当性の検討	共	令和元年 7 月	芦屋大学論叢、第 71 号 pp. 45-56	6 (12)	(再掲のため、略)
	2. 感情の言語化についての心理学的考察(4)－神経心理学の視点から－	単	平成 30 年 3 月	芦屋大学論叢、第 69 号 pp. 77-88	12 (12)	(再掲のため、略)
	3. 感情の言語化についての心理学的考察(3)－再び感情心理学の視点から－	単	平成 29 年 7 月	芦屋大学論叢、第 67 号 pp. 35-46	12 (12)	(再掲のため、略)
	4. 半球間相互作用の個人差に関する実験研究－両視野提示課題を用いて－	単	平成 28 年 1 月	芦屋大学論叢、第 64 号 pp. 49-60	12 (12)	(再掲のため、略)
5. 感情の言語化についての心理学的考察(2)－感情心理学の視点から－	単	平成 23 年 6 月	芦屋大学論叢、第 55 号 pp. 97-106	10 (10)	(再掲のため、略)	

① 教育研究業績書
教育研究業績書
氏名 伊藤 武徳

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【その他(講演や発表)】 1 剣道の打突向上について ～振り上げ動作の意識に関する指 導法の一考察～	単	2019年5月	日本産業科学学会	剣道における指導法の一考察と して、打突向上における意識付 けを大きさの異なるボールを用い て行う。

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 奥野拓司						
※1 担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数 (総ページ数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
中等教科教育法Ⅰ(社会)	(著書) 1 神戸発新たな教育創造へ	共	平成 22 年 12 月 1 日	みるめ書房	15(220)	平成 15 年度策定された「特色ある神戸の教育推進アクティブプラン」に基づく「分かる授業・楽しい学校」などの検証とともに、「教えるプロを目指す」神戸の教員育成システムを紹介している 共著者:長瀬荘一、洲脇一郎、 <u>奥野拓司</u> 、他
中等教科教育法Ⅱ(社会)	(学術論文等) 1 OJT ガイドライン	共	平成 23 年 3 月	神戸市総合教育センター	編集統括兼執筆 15(74)	教員のキャリアライフについて、教員の成長意識をアンケートにより分析し、キャリアアップとその方法を OJT という形で示している 監修:浅野良一、共著者:総合教育センター職員 <u>奥野拓司</u>
	2 教育ジャーナル	単	令和 3 年 3 月	芦屋大学	6(55)	中等教科教育法に関して、授業の構成要素(デザイン)や学習指導案の作成、授業評価のあり方を示すとともに、授業者としての心がけなどを綴っている
中等教科教育法Ⅰ(社会・公民)	(著書) 1 神戸発新たな教育創造へ	共	平成 22 年 12 月 1 日	みるめ書房	15(220)	平成 15 年度策定された「特色ある神戸の教育推進アクティブプラン」に基づく「分かる授業・楽しい学校」などの検証とともに、「教えるプロを目指す」神戸の教員育成システムを紹介している 共著者:長瀬荘一、洲脇一郎、 <u>奥野拓司</u> 、他
中等教科教育法Ⅱ(社会・公民)	(学術論文等) 1 OJT ガイドライン	共	平成 23 年 3 月	神戸市総合教育センター	編集統括兼執筆 15(74)	教員のキャリアライフについて、教員の成長意識をアンケートにより分析し、キャリアアップとその方法を OJT という形で示している 監修:浅野良一、共著者:総合教育センター職員 <u>奥野拓司</u>
	2 教育ジャーナル	単	令和 3 年 3 月	芦屋大学	6(55)	中等教科教育法に関して、授業の構成要素(デザイン)や学習指導案の作成、授業評価のあり方を示すとともに、授業者としての心がけなどを綴っている
教育実習事前・事後指導	(著書) 1 神戸発新たな教育創造へ	共	平成 22 年 12 月 1 日	みるめ書房	15(220)	平成 15 年度策定された「特色ある神戸の教育推進アクティブプラン」に基づく「分かる授業・楽しい学校」などの検証とともに、「教えるプロを目指す」神戸の教員育成システムを紹介している 共著者:長瀬荘一、洲脇一郎、 <u>奥野拓司</u> 、他
	(学術論文等) 1 OJT ガイドライン	共	平成 23 年 3 月	神戸市総合教育センター	編集統括兼執筆 15(74)	教員のキャリアライフについて、教員の成長意識をアンケートにより分析し、キャリアアップとその方法を OJT という形で示している 監修:浅野良一、共著者:総合教育センター職員 <u>奥野拓司</u>
	2 教育ジャーナル	単	令和 3 年 3 月	芦屋大学	6(55)	中等教科教育法に関して、授業の構成要素(デザイン)や学習指導案の作成、授業評価のあり方を

						示すとともに、授業者としての心がけなどを綴っている
教育社会学	(著書) 1 神戸発新たな教育創造へ (学術論文等) 1 OJT ガイドライン 2 教育ジャーナル	共 共 単	平成 22 年 12 月 1 日 平成 23 年 3 月 令和 3 年 3 月	みるめ書房 神戸市総合教育センター 芦屋大学	15(220) 編集統括 兼 執筆 15(74) 6(55)	平成 15 年度策定された「特色ある神戸の教育推進アクティブプラン」に基づく「分かる授業・楽しい学校」などの検証とともに、「教えるプロを目指す」神戸の教員育成システムを紹介している 共著者:長瀬荘一、洲脇一郎、 <u>奥野拓司</u> 、他 教員のキャリアライフについて、教員の成長意識をアンケートにより分析し、キャリアアップとその方法を OJT という形で示している 監修:浅野良一、共著者:総合教育センター職員 <u>奥野拓司</u> 中等教科教育法に関して、授業の構成要素(デザイン)や学習指導案の作成、授業評価のあり方を示すとともに、授業者としての心がけなどを綴っている
教育実践演習	(著書) 1 神戸発新たな教育創造へ (学術論文等) 1 OJT ガイドライン 2 教育ジャーナル	共 共 単	平成 22 年 12 月 1 日 平成 23 年 3 月 令和 3 年 3 月	みるめ書房 神戸市総合教育センター 芦屋大学	15(220) 編集統括 兼 執筆 15(74) 6(55)	平成 15 年度策定された「特色ある神戸の教育推進アクティブプラン」に基づく「分かる授業・楽しい学校」などの検証とともに、「教えるプロを目指す」神戸の教員育成システムを紹介している 共著者:長瀬荘一、洲脇一郎、 <u>奥野拓司</u> 、他 教員のキャリアライフについて、教員の成長意識をアンケートにより分析し、キャリアアップとその方法を OJT という形で示している 監修:浅野良一、共著者:総合教育センター職員 <u>奥野拓司</u> 中等教科教育法に関して、授業の構成要素(デザイン)や学習指導案の作成、授業評価のあり方を示すとともに、授業者としての心がけなどを綴っている
演習	(教育実践記録等) 【 校長室だより 】 <i>Agitation</i> vol. I <i>Agitation</i> vol. II <i>Agitation</i> vol. III	単	平成 31 年 5 月	なし	I :151 II :287 III :147 計:585	校長時の全校朝集での講話を「たより」の形で製本

研究業績等に関する事項(5年以内)

著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行 年月	出版社又は発行雑誌 等の名称	概 要
(学術論文等) 「教育ジャーナル 創刊号」 「中等教科教育法についての雑考」	単	令和 3 年 3 月	芦屋大学臨床教育学部	中等教科教育法に関して、授業の構成要素(デザイン)や学習指導案の作成、授業評価のあり方を示すとともに、授業者としての心がけなどを綴っている

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 金 相煥					
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は発 表学会等の名 称	概 要
体育実技 C サッカー	(研究ノート) 1. 育成年代における監督の一考察	単	平成 24 年 3 月	芦屋大学 論叢 56 号	育成年代の高校生と中学生のデータをとり、理想像の違いを研究した。 中学生も高校生も理想の指導者像で最低限必要な要素はサッカーの知識と指導のわかりやすさであり、それに加えて中学生年代には楽しみの要素を多く含み、高校生年代は選手をコントロールするモチベーションが不可欠であることがわかった。
スポーツ演習 II (フットサル・ サッカー指導 法)	(教育実践報告) 1. 二部昇格への軌跡(チームアプローチ)	単	平成 25 年 7 月	芦屋大学 論叢 59 号	芦屋大学サッカー部が創部 48 年目、監督に就任してから 3 年目での 2 部昇格を果たした経緯と実践してきた活動を報告した。
	2. スペインのサッカーコーチにみる指導法についての一考察	単	平成 26 年 7 月	芦屋大学 論叢 61 号	世界でも有数のサッカー王国スペインから 2 名の指導者を招聘し、クリニックを行った活動を報告。スペインのサッカー観と指導方法に着目して考察した
	(論文) 3. 大学におけるスポーツ教育に関する一試論～課外クラブ活動を積極的に意味付ける A 大学の事例を通して～ ＜修士論文＞ (研究ノート) サッカー競技における戦術のメソッド化とフィジカル測定の結果と課題～関西学生サッカー 2 部 A リーグ昇格へのアプローチ～	単	令 1 年 8 月	兵庫教育大学	教育の 3 本柱である体育におけるスポーツ教育のあり方を問いいただき、いかに学生に教養と実践を追求した大学カリキュラム(課外活動も含め)を実践するべきかを考察する。
		単	令 2 年 9 月	芦屋大学 論叢 73 号	サッカー部の成果が出た要因に「戦術の言語化」を行い、メソッド化したこと、その戦術を発揮するためのフィジカル面でのデータ化したことが 1 つ上位のカテゴリーに上げられる要因になったことを記した。

スポーツ社会学	(実践報告)	単	平成 25 年 1 月	芦屋大学 論叢 58 号	日本サッカー界はめまぐるしい発展を遂げているが、都市部においては十分なサッカー環境が与えられていない生徒が存在する。その生徒たちにサッカー環境を与え、サッカークラブとして活動する場を提供した実践活動報告。
	1. 地域密着型サッカークラブ設立について ～三宮フットボールクラブジュニアユースの機能と役割～				
	2. 地域密着型サッカークラブについて ～三宮フットボールクラブジュニアユースの発展と課題～				
	3. 芦屋学園サッカースクール設立について ～芦屋学園の地域貢献事業～	単	平成 27 年 7 月	芦屋大学 論叢 63 号	3 年間で 85 名の選手にサッカー活動環境を与えた「三宮フットボールクラブジュニアユース」を設立して、今年で 10 年を経過した。5 年目以降からの生徒たちのサッカークラブへのニーズの変化に対応し、サッカー面と学習面において新たなる発展を試みたクラブの実践報告である。
(論文)	単	平成 30 年	芦屋大学 論叢 70 号	芦屋学園の地域貢献事業として立ち上げた芦屋学園サッカースクールの設立経緯や趣旨を報告する。芦屋地域の子供たちのスポーツ活動の現状をより豊かにする目的がある。	
4. 課外活動における一貫指導システム構築の現状と課題～芦屋学園サッカー部門の改革事例から～	共	令和 3 年	芦屋大学 論叢 74 号	芦屋学園サッカー部門の一貫指導システムにおける募集人数増加と学校経営安定の成功に至った経緯と今後の一貫指導システムをより効率よく展開するための課題を明らかにし、サッカー競技を含む課外活動における一貫指導システム構築のための有用な知見を得ることを目的とした。	

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
【その他(講演や発表)】 1 サッカーにおけるコーディネーショントレーニングの実践と効果	共	2013 年 12 月	ユーハイムスポーツ フォーラム	サッカーは様々なプレッシャー環境下の中での動きが要求される。コーディネーショントレーニングは、ジュニア期の選手に必要な基礎的な運動能力を効果的に身につけることが出来、潜在能力を高める効果があることを立証した

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 西 光 哲 治					
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は発 表学会等の名 称	概 要
スポーツ演習Ⅳ (護身術・スポーツ チャンバラ)	(学術論文) 格技・日本拳法 の指導技術研 究論(その1)「初 心者に対する指 導法と物理学的 見地から考察し た技術解説(拳 突技を中心に)」	共	平成26年8月	日本産業科 学学会全国 大会	格技は近世に入り欧米ではス ポーツとして確立し身体能力を 科学的に研究するという分野 に着目し指導法と技術開発が 成されてきた。しかし、我が国 の格技は武道という精神文化 が先行し、根性論や各指導者 経験値から判断されてきた。そ こで本研究は格技の技術の中 で最初に指導される『撃ち技』 で、『拳の撃ち出し速度』を生 むために技術研究してきたこ とを実験検証のもと科学的論証 行うことで今後のスポーツ演習 Ⅳ及び拳法(部活)指導の役立 つ知見を得ることを目的とした。
	(学術論文) 格技・日本拳法 の指導技術研 究論(その2)「拳 突技の撃ち出し 速度を未経験 者と経験者で比 較し指導方法と 技術解説の確 立	共	平成27年8月	日本産業科 学学会全国 大会	前号(その1)で「拳の撃ち出し 速度」を上げるための技術に ついて考察・検証し、指導方法 を確立するための研究であつ た。我々が考察した指導方法 を格技未経験者対象に検証を 行った所、予想以上に拳の速 さを生み出す結果が得られた。 そこで本稿では、格技(ボク シング・空手・日本拳法)を対 象として未経験者と同様の検 証を行い、どのような結果が得 られるかを知ることにより今後 のスポーツ演習Ⅳ及び拳法(部 活)指導の役立つ知見を得るこ とを目的とした。
水泳実習(前期) 及び スキー実習(後期)	(学術論文) 1. 芦屋大学新入 生の体力特性お よび全国平均と の比較について	共	平成29年7月	芦屋大学論叢 第67号	近年、4年間の学生生活で全く 運動・スポーツを行わずに卒業 する学生が多く、厚生労働省の 国民健康・栄養調査結果(H27 年度)からも年齢階級別で20歳 代の運動習慣が最も低い割合と なっており大学生の体力低下が 確認でき、大学現場での学生の 健康づくりの方策・効果的な健

					<p>康教育の実践が必要であると言える。現在、芦屋大学では一年次に「体育の実技と講義」の授業を開講しており、運動不足の解消と体力の維持・増進、自己の健康状態の把握や改善、心身の健康づくりなど、獲得することを目的として授業展開している。また実技の授業では現状の大学1年生の体力状況を把握することを目的に体力測定を継続的に実施している。そこで本研究は2011年から2014年の新体力テストの結果を用い、全国平均データとの比較から体力水準の検討を行い、本学生の体力特性を明らかにすることで、今後の「水泳実習・スキー実習」の授業内容改善に役立つ知見を得ることを目的とした。</p>
--	--	--	--	--	--

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
<p>【学術論文】</p> <p>1 格技・日本拳法の指導技術研究論(その1)「初心者に対する指導法と物理学的見地から考察した技術解説(拳突技を中心に)」</p>	共著	平成26年3月	日本産業科学学会関西部会	<p>格技は近世に入り欧米ではスポーツとして確立し身体能力を科学的に研究するという分野に着目し指導法と技術開発が成されてきた。しかし、我が国の格技は武道という精神文化が先行し、根性論や各指導者経験値から判断されてきた。そこで本研究は格技の技術の中で最初に指導される『撃ち技』で、『拳の撃ち出し速度』を生むために技術研究してきたことを実験検証のもと科学的論証を行った。</p>
<p>【学術論文】</p> <p>2 格技・日本拳法の指導技術研究論(その1)「初心者に対する指導法と物理学的見地から考察した技術解説(拳突技を中心に)」</p>	共著	平成26年8月	日本産業科学学会全国大会	上記1と同じ
<p>【学術論文】</p> <p>3 格技・日本拳法の指導技術研究論(その2)「拳突技の撃ち出し速度を未経験者と経験者で比較し指導方法と技術解説の確立</p>	共著	平成27年5月	日本産業科学学会関西部会	<p>前号(その1)で「拳の撃ち出し速度」を上げるための技術について考察・検証し、指導方法を確立するための研究であった。我々が考察した指導方法を格技未経験者対象に検証を行った所、予想以上に拳の速さを生</p>

<p>【学術論文】</p> <p>4 格技・日本拳法の指導技術研究論(その 2)「拳突技の撃ち出し速度を未経験者と経験者で比較し指導方法と技術解説の確立</p>	共著	平成 27 年 8 月	日本産業科学学会全国大会	<p>み出す結果が得られた。そこで本稿では、格技(ボクシング・空手・日本拳法)を対象として未経験者と同様の検証を行い、どのような結果が得られるかを知ることにより拳法の指導方法の確立を目指す。</p> <p>上記 3 と同じ</p>
<p>【学術論文】</p> <p>5 芦屋大学新入生の体力特性および全国平均との比較について</p>	共著	平成 29 年 7 月	芦屋大学論叢 第 67 号	<p>近年、大学での体育の授業が選択制となり4年間の学生生活で全く運動・スポーツを行わずに卒業する学生が多く、厚生労働省の国民健康・栄養調査結果(H27年度)からも年齢階級別で 20 歳代の運動習慣が最も低い割合となっていることから、大学生の体力低下が確認でき、大学現場での学生の健康づくりの方策・効果的な健康教育の実践が必要であると言える。現在、芦屋大学(本学)では一年次に「体育の実技と講義」の授業を開講しており、実技では運動不足の解消と体力の維持・増進、講義では自己の健康状態の把握や改善、心身の健康づくりなど、獲得することを目的として授業展開している。また実技の授業では現状の大学1年生の体力状況を把握することを目的に体力測定を継続的に実施している。そこで本研究は 2011 年から 2014 年の新体力テストの結果を用い、全国平均データとの比較から体力水準の検討を行い、本学生の体力特性を明らかにすることで、今後の「体育実技」実技項目改善及び1年次後期に開講される「体育講義」の授業内容改善に役立つ知見を得ることを目的とした。</p>

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 石川 峻						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数(総ページ数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場合は執筆箇所を詳述)
体力測定と評価	1. 中学生女子バレーボール選手の身体特性と体力がスパイク速度に及ぼす影響	共	平成 31 年 2 月	スポーツサイエンス第13巻第1号	17-32 (16)	本研究では、中学生女子バレーボール選手 11 名を対象に体格データ7項目(身長、体重、BMI、体脂肪率、指極、比指極、指尖高)と体力測定データ6項目(垂直跳び、最高到達地点、立ち幅跳び、背筋力、握力、全身反応時間)とスパイク速度との関係について検討を行った。中学生においてはスパイク速度に体格や体力が影響を及ぼしており、とくに体力ではジャンプ力がスパイクの速度に影響を与えていることが示唆された。 (共同研究につき、本人担当 執筆部分抽出不可能) 著者:青木敦英・石川峻・竹安知枝
	2. バスケットボールにおける個人のパフォーマンス評価に関する研究- Offensive Efficiency 算出の試み-	共	平成 30 年 3 月	芦屋大学論叢第 69 号	11-18 (8)	本研究では、OE を活用しての個人パフォーマンスの評価と分析を勝敗別に試みた。その結果、以下の知見が明らかになった。 1)本学のウイングは得点源となっているが、より良い判断をして、確率の高いシュートを打つこと、オフenseリバウンドの獲得に積極的に参加することが必要である。 2)効率の良いプレーを安定して発揮できる選手を育成していく必要がある。 3)選手全員の OE の平均では、勝ち試合が有意に高く、勝ち試合の方が効率良くオフenseできていたことが推察されるとともに、OE が有効評価指標となり得ることがわかった。 (執筆担当分:全体) 著者:石川峻・青木敦英・別當和香
	3. 大学男子バスケットボール競技における選手評価の検討:指導者と選手の評価の差に着目して	共	令和 3 年 3 月 (掲載予定)	芦屋大学論叢第 74 号	103-110 (8)	本研究の目的は、大学男子バスケットボール選手のスキル面とパーソナリティ面における指導者と選手の評価の差を明らかにし、今後のチームビルディングの方策を検討することである。本研究を通して、監督と選手の評価に違いがあることが明らかになった。これらの評価の差を改善するために、スキル面ではこれまでの数値と目標とする数値を明確に提示すること、VTRを用いてできて

						いない場면을指導者と選手と一緒に確認し、戦術や指導者の考えを確認することを提案した。パーソナリティ面では、選手との会話を増やすこと、学生スタッフやトレーナー、他の教職員との連携を密にすること、バスケットボール以外の活動を行うことを提案した。 (執筆担当分:全体) 著者:石川峻・青木敦英
体育実技B (バスケットボール)	1. 小学生年代のバスケットボールにおける3人制と5人制の比較:ポジション別の触球数に着目して	共	令和3年3月 (掲載予定)	広島体育学研究第47巻	1-7 (7)	本研究では小学生年代において、3人制と5人制のポジションごとの1人当たりの触球数の違いを明らかにし、練習方法の留意点について検討することを目的とした。本研究の結果から、次のことが示唆された。1)3人制は個人技能の改善に有効な可能性がある。2)Cや低い技能レベルの子のボール触球数が少なくなる可能性があることをコーチが理解する必要がある。3)練習においてすべての選手の触球数を高めるためには、人数を減らすだけでなく、さらなるルール設定の工夫も必要である。 (執筆担当分:全体) 著者:石川峻・上田毅・橋本真
	2. 小学生年代のバスケットボールにおける3人制と5人制の比較-生体負担度,技能・戦術,ゲーム後の主観的評価から-	共	令和2年11月	バスケットボール研究第6号	101-110 (10)	本研究の目的は、3人制と5人制のバスケットボールの試合の違いを明らかにすることであった。生体負担および主観的運動強度、技能・戦術的指標、そして主観的評価指標を比較した。2つのゲームタイプがほぼ同一の生体負担および主観的運動強度をもたらすことがわかった。技能・戦術的な指標に関しては、3人制は5人制よりも攻撃頻度と攻撃完了率が高かった。さらに、3人制は、5人制よりも1人あたりの触球数やショット数が多くなった。触球数に関するプレイヤーの主観的評価も、5人制よりも3人制の方が高かった。したがって、5人制よりも3人制の方が参加者にとって満足のいくものと思われる。 (執筆担当分:全体) 著者:石川峻・上田毅・橋本真
	3. 教員養成課程の模擬授業における学生のリフレクションに関する一考察-体育実技科目「バスケットボール」を対象として-	共	令和2年9月	芦屋大学論叢第73号	77-88 (12)	再掲のため、略
	4. バスケットボール競技におけるクォーターごとの得点傾向と	共	令和2年9月	芦屋大学論叢第73号	1-7 (7)	本研究は平成30年度関西学生バスケットボールリーグの1部リーグおよび2部リーグの173試合を対象として、バスケットボールの4つのクォーターの得点

	勝敗との関係- 関西学生バスケットボールリーグを対象として-					傾向について、勝敗別およびリーグ(競技レベル)別に比較し、得点傾向と勝敗との因果関係について検討を行った。その結果、クォーターごとの得点傾向として1部リーグおよび2部リーグともに $2Q < 4Q$ となっていることを明らかにした。さらに、得点差の大きな試合(20点差以上)では $1Q > 2Q$ の有意な差が認められ、1Qに大きな得点差がついていること、接戦となった試合(19点差以内)では1部リーグでは3Q、2部リーグでは1Qが勝敗に影響すると考えられ、競技レベルで勝敗に影響するクォーターが異なっていることが推察された。 (共同研究につき、本人担当 執筆部分 抽出不可能) 著者:青木敦英・石川峻・竹安知枝
5.	大学生男子バスケットボール競技におけるゲーム分析-本学における関西学生バスケットボール2部リーグ戦からの検討-	共	令和2年3月	芦屋大学論叢第72号	57-63 (7)	本研究では過去3年間の2部リーグ戦での戦いにおいて、BOX SCORE から算出できる各スタッツについて勝ち試合と負け試合で比較を行い、勝利するために重要と思われる客観的な視点について検討を行った。その結果、①80点以上の得点と80点未満の失点が勝利するための目安、②3P シュートを確率よく決めること、③チームとして高確率のショットを狙えるシチュエーションについて今後検討する必要があること、④リバウンドについては獲得率で相手を上回ることで勝利につながる可能性が高いことが明らかになった。 (執筆担当分:全体) 著者:石川峻・青木敦英
6.	中学生女子バレーボール選手の身体特性と体力がスパイク速度に及ぼす影響	共	平成31年2月	スポーツサイエンス第13巻第1号	17-32 (16)	再掲のため、略
7.	バスケットボールにおける個人のパフォーマンス評価に関する研究- Offensive Efficiency 算出の試み-	共	平成30年3月	芦屋大学論叢第69号	11-18 (8)	再掲のため、略
8.	バスケットボールにおけるポジション別にみたリバウンド獲得状況と勝敗との関係	共	平成29年10月	芦屋大学論叢第68号	1-8 (8)	本研究では、公式試合のBOX SCORE からポジション別のリバウンド獲得状況を調査し、勝ち試合と負け試合の差について分析を行い、今後の指導の一助となることを目的とした。ビッグマンがインサイドプレイヤーの仕事であるDRの獲得をすることが勝利につながると示

					唆された。また、ビッグマンがリバウンドを獲得できない場合は、他のプレイヤーが獲得する必要があると考えられる。 (執筆担当分:全体) 著者:石川峻・青木敦英
--	--	--	--	--	---

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【学術論文】				
1. 小学生年代のバスケットボールにおける3人制と5人制の比較:ポジション別の触球数に着目して	共	令和3年3月	広島体育学研究第47巻	再掲のため, 略
2. 大学男子バスケットボール競技における選手評価の検討:指導者と選手の評価の差に着目して	共	令和3年3月	芦屋大学論叢第74号	再掲のため, 略
3. 小学生年代のバスケットボールにおける3人制と5人制の比較-生体負担度, 技能・戦術, ゲーム後の主観的評価から-	共	令和2年11月	バスケットボール研究第6号	再掲のため, 略
4. 教員養成課程の模擬授業における学生のリフレクションに関する一考察:体育実技科目「バスケットボール」を対象として	共	令和2年9月	芦屋大学論叢第73号	再掲のため, 略
5. バスケットボール競技におけるクォーターごとの得点傾向と勝敗との関係-関西学生バスケットボールリーグを対象として-	共	令和2年9月	芦屋大学論叢第73号	再掲のため, 略
6. 大学生男子バスケットボール競技におけるゲーム分析-本学における関西学生バスケットボール2部リーグ戦からの検討-	共	令和2年3月	芦屋大学論叢第72号	再掲のため, 略
7. 日本プロバスケットボール選手の誕生月分布に関する相対的年齢効果について-2018-19シーズンの場合-	共	令和元年8月	芦屋大学論叢第71号	本研究では、2018-19シーズンBリーグ選手の誕生月分布に関するRAEについて調査し、今後の選手育成を検討するための基礎的資料を収集することを目的とした。Bリーグ選手にはRAEが認め

8. 大学の特徴を生かした教員の就職支援に関する一考察－芦屋大学での教員採用試験対策をもとに－	共	令和元年 8 月	芦屋大学論叢第 71 号	<p>られた。今後、とくに成長期の育成に関わる指導者が RAE について理解し、早生まれの選手だけでなく、将来的な可能性を持った晩熟型の選手を見逃さないこと、さらに早生まれの選手をドロップアウトさせない仕組みの構築が必要であることが示唆された。 著者：<u>石川峻</u>・青木敦英</p> <p>再掲のため、略</p>
9. 障がい者のスポーツイベントに関する一考察	共	平成 31 年 4 月	アダプテッド体育・スポーツ学研究第 5 巻第 1 号	<p>「近畿アンリミテッド・パラ陸上」(2017)に着目し、ボランティア・スポンサー企業の視点より、大会の有用性について検討を行った。その結果、このような新しい取り組みは、ボランティア・スポンサー企業の両者にとって好意的に捉えられ、さらにボランティアだけでなく協賛企業にとっても価値のあるイベントである可能性が高いということが推察された。 著者：竹安知枝・青木敦英・<u>石川峻</u></p>
10. 中学生女子バレーボール選手の身体特性と体力がスパイク速度に及ぼす影響	共	平成 31 年 2 月	スポーツサイエンス第 13 巻第 1 号	再掲のため、略
11. わが国のバスケットボールにおける競技者育成システムの動向に関する一考察	単	平成 30 年 11 月	芦屋大学論叢第 70 号	<p>これまでの研究、報告から諸外国と従来の日本の選手育成システムを比較すると共に、今後の日本のバスケットボールにおける選手育成システムについて考察することを目的とした。諸外国では地域クラブで普及、強化されており、様々なメリットがある。日本では学校運動部が中心であったが、地域クラブが増え、Bクラブ U-15 チームの活動も活発になってきた。今後は諸外国の良い部分を取り入れながら、ルールの創意工夫も含めた日本ならではの選手育成システムの構築を期待したい。</p>
12. わが国のバスケットボールにおける競技者育成システム構築のための基礎的研究－地域クラブと学校運動部の二重登録に焦点を当てて－	単	平成 30 年 3 月	広島体育学研究第 44 号	<p>本研究の目的は、愛知ジュニアバスケットボール連盟の事例から、今後の競技者育成システムを構築する上での課題を得ることである。本研究の成果は次の通りである。クラブ員は指導者や仲間から自由にクラブを選択している。</p>

				登録制度に関しては、今後も二重登録を望むクラブ員が多く、連盟理事もメリットと考えている。しかし、二重登録が故のトラブルも多い。さらに、出場できる大会が少なく、この状況に不満な者もいる。今後のシステムを構築する上で、二重登録や出場できる大会数などの問題を解決することが考えられる。
13. バasketボールにおける個人のパフォーマンス評価に関する研究- Offensive Efficiency 算出の試み-	共	平成 30 年 3 月	芦屋大学論叢第 69 号	再掲のため、略
14. バasketボールにおけるポジション別にみたりバウンド獲得状況と勝敗との関係	共	平成 29 年 12 月	芦屋大学論叢第 68 号	再掲のため、略
【その他(講演や発表)】				
1. 片脚および両脚のプライオメトリックトレーニングの効果に関する研究- 大学バレーボール選手を対象として-	共	令和 2 年 6 月	第 31 回兵庫体育・スポーツ科学学会	本研究では女子バレーボール選手を対象に、片脚と両脚のそれぞれのプライオメトリックトレーニングを行うグループを設定し、トレーニング前後のジャンプ能力、パワー発揮能力の変化を調査し、いずれのトレーニング方法が効果的であるのか検証を行った。結果は、バレーボール選手のプライオメトリックトレーニングにおいて、片脚でのトレーニングを積極的に取り入れるべきであることが示唆された。 (青木敦英・石川峻・竹安知枝)
2. ミニテニスの意識に対する調査: 経験者を対象に	共	令和 2 年 6 月	第 31 回兵庫体育・スポーツ科学学会	ミニテニスの経験者男女 55 名(40~80 歳代)を対象に、このスポーツに対する意識についてアンケート調査を実施した。その結果、ミニテニスに対して「健康に良く安全に実施でき、かつ経済的である」と捉えている人が大半を占めていることが明らかになり、今後の我が国における生涯スポーツの一つとして、ミニテニス普及していくことが望ましいと考えられる。 (竹安知枝・青木敦英・石川峻・臼井達矢)
3. 小学生年代のBasketボールにおける3人制と5人制の比較-ポジション別の触球数に着目して-	共	令和元年 9 月	第 70 回日本体育学会	本研究では小学生年代において、3人制と5人制のポジションごとの触球数の違いを明らかにし、練習方法の留意点について検討することを目的とした。3人制ではGとFの個人の触球数が増加す

4. バスケットボールにおける「流れ」と勝敗の関係ー関西学生バスケットボール2部リーグについてー	共	令和元年9月	第70回日本体育学会	<p>るので個人技能の改善に有効であること、人数に関わらずCの触球数が少なくなる可能性があることを指導者が理解する必要があること、すべての選手の触球数を高めるルールの設定が必要であることが示唆された。</p> <p>(石川峻・上田毅・橋本真)</p>
5. 障がい者のスポーツイベントに関する一考察	共	令和元年9月	第70回日本体育学会	<p>本研究では関西バスケットボール連盟2部リーグを対象にピリオドごとの得点の変化に着目し、その違いについて検討を行った。対象となった2部リーグの全試合(90試合)についてピリオドごとの得点、得失点差を記録し、勝ちチームと負けチームで比較を行った。バスケットボール競技において「流れ」をつかむために、ハーフタイム以降のピリオドにおいて得点を積み重ねることが重要であると考えられた。</p> <p>(青木敦英・石川峻・竹安知枝)</p>
6. 中学生バレーボール選手のスパイク速度に及ぼす体格と体力の影響	共	平成30年8月	第69回日本体育学会	<p>本研究では2017年に開催された国内初の3つの取り組み【「障がいの有無に関係なく実施」「夏のナイター開催」「民間出資」】により行われた「近畿アンリミテッド・パラ陸上」に着目し、この大会の有用性について、ボランティアとスポンサー企業の視点より検討・考察を行った。この大会のような新しい取り組みは、ボランティアやスポンサー企業の両者にとって好意的に捉えられ、さらにボランティアだけでなく協賛企業にとっても価値のあるイベントである可能性が高いことが推察された。</p> <p>(竹安知枝・青木敦英・石川峻)</p>
7. バスケットボールにおけ	共	平成29年9月	第68回日本体育学会	<p>本研究では、中学生女子バレーボール選手11名を対象に体格データ7項目(身長、体重、BMI、体脂肪率、指極、比指極、指尖高)と体力測定データ6項目(垂直跳び、最高到達地点、立ち幅跳び、背筋力、握力、全身反応時間)とスパイク速度との関係について検討を行った。</p> <p>中学生においてはスパイク速度に体格や体力が影響を及ぼしており、とくに体力ではジャンプ力がスパイクの速度に影響を与えていることが示唆された。</p> <p>(青木敦英・石川峻)</p>

るポジション別にみたリバウンド獲得状況と勝敗との関係			<p>SCORE からポジション別のリバウンド獲得状況を明らかにすると共に、勝敗との関係を分析し、今後の指導の一助となることを目的とした。</p> <p>①ポジション別にみるとインサイドのリバウンド獲得が高い。</p> <p>②DR の獲得は勝敗に影響する</p> <p>③特にインサイドの DR が影響する</p> <p>④インサイドが DR を 15 本以上獲得することが勝利への鍵となる以上ことから、インサイドがしっかり仕事をし、DR を獲得することが勝利につながることを示唆された。</p> <p>(石川峻・青木敦英)</p>
----------------------------	--	--	---

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 渡邊(別當) 和香						
担当授業科目に関する研究業績等（10年以内）						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数 (総 ページ 数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
	【学術論文】 1. 芦屋大学新入生の 体力特性及び全国平 均との比較について	共	2017年7月 発行	第67号 芦屋 大学論叢	P13～ P17 P19～ P22	現代社会では、高齢化やライフスタイルの 多様化などから派生する様々な問題が指 摘されている。このような社会をより良く 生き抜くためには、個々が内面的な充実感 を高め、生活の質の向上や自己実現の機会 拡充に向けた取り組みを模索し行動して いくことが重要であると考え。そこで本 研究では、2011年から2014年の新体力テ ストの結果を用い、全国平均データとの比 較から、体力水準の検討をおこない、本学 生の体力特性を明らかにすることで、今後 の「健康スポーツ科学実習」実技項目改善 及び1回生後期に開講される「健康スポ ーツ科学概論」(講義)の授業内容改善に役立 つ知見を得ることを目的とした。 著者：西光哲治 金相煥 伊藤武徳 別當 和香 武田光平

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又 は発表学会等の名称	概要
【学術論文】 1 発育期における子どもの現代的運動 課題について	共著	2014年3月	日本産業科学学会	発育期の子どもの健康の保持増進のためには、運動・栄養・休養の3つの条件を満たす生活リズムを確立することが重要であり、特に、発育期における適切な身体活動は、望ましい発育発達 の基盤づくりとして、重要視しなければならぬ。そこで、本研究では、子供の健康問題や生活環境を考慮した上で、発育期における子どもの現代的運動課題について分析し、今後の対応策の検討をおこなった。 (執筆担当部分：発育期の子どもの生活リズムや運動環境について)
2 バスケットボール競技のスクリーン プレイにおける状況判断に関する研 究	単著	2016年1月	第64号芦屋大学論叢	バスケットボールの戦術には、集団戦術と個人戦術があり、集団戦術は、「プレイ状況の分析」「プレイの選択」「味方との時間的・空間的調整」「動作の遂行」など、個人の戦術行為に一定の方向性を与える。本研究では、バスケットボールの代表的なグループ戦術であるオフザボール・スクリーンプレイを例に、オフザボール・スクリーンプレイにおけるパッサーが、いつ、どこを見てプレ

				イ状況を把握し、どの時点でパスを遂行しているかを、注視傾向とパス動作のタイミングに着目し、熟練者と非熟練者間で比較をおこない、グループ戦術達成力の養成に寄与できる知見を導くことを目的とした。
3 芦屋大学新入生の体力特性及び全国平均との比較について	共著	2017 年 7 月	第 67 号芦屋大学論叢	現代社会では、高齢化やライフスタイルの多様化などから派生する様々な問題が指摘されている。このような社会をより良く生き抜くためには、個々が内面的な充実感を高め、生活の質の向上や自己実現の機会拡充に向けた取り組みを模索し行動していくことが重要であると考え。そこで本研究では、2011 年から 2014 年の新体力テストの結果を用い、全国平均データとの比較から、体力水準の検討をおこない、本学生の体力特性を明らかにすることで、今後の「健康スポーツ科学実習」実技項目改善及び 1 回生後期に開講される「健康スポーツ科学概論」(講義)の授業内容改善に役立つ知見を得ることを目的とした。 (執筆担当部分:序論、調査方法、結果及び考察)
4 バスケットボールにおける個人のパフォーマンス評価に関する研究 - Offensive Efficiency 算出の試み -	共著	2018 年 3 月	第 69 号芦屋大学論叢	本研究では、芦屋大学の学生を対象とし OE を活用しての個人パフォーマンスの評価と分析を勝敗別に試みることで、今後の個人のパフォーマンス評価やコーチングに OE を活用することを目的とした。 (執筆担当部分:結果・考察部分)
5 自チームのメンバーチェンジでのリリーフサーバー出場時に起こるサーブ継続による得点変動がセット勝敗に与える影響	共著	2020 年 5 月	日本スポーツパフォーマンス学会 (2020vol. 12)	近年、2012 年ロンドン五輪の女子バレーボール競技で金メダルを獲得したブラジル、銀メダルを獲得した米国がレシーバー枠を採用し、好成績につなげたことや 2016 年リオデジャネイロ五輪においても日本女子代表チームである真鍋ジャパンが 12 名の競技出場選手の中にレシーバー枠を採用し戦術の 1 つとして活用するなどメンバーチェンジによるリザーブメンバー出場の戦術的な有効性が再認識されている。そこで、本研究では、メンバーチェンジによるリリーフサーバー投入時に起こる得点変動が与える影響を明らかにすることを目的とした。これまで、試合に関する様々な要因から生み出された試合状況から判断される試合の主観的優劣とされていた「流れ」を今回、セット中のメンバーチェンジによるリリーフサーバー投入に着目することで意図的に「流れ」を獲得するための客観的な視点からのベンチワークに関する有用な知見を得ることに本研究を行う意義があるだろう。 (共同研究につき本人担当分抽出不可)。
6 課外活動における一貫指導システム構築の現状と課題 - 芦屋学園サッカー部門の改革事例から -	共著	2021 年 3 月 22 日	第 74 号芦屋大学論叢	芦屋学園のサッカー事業に関わる芦屋大学サッカー部および芦屋学園高校サッカー部は、2006 年の就任時から 14 年が経過した。今年度 (2020 年) は総勢 300 名を超える部員数であり、2010 年から構築してきたサッカー事業における一貫指導システムにより、募集人数増加と学校経営安定の成功に至った。そこで本研究では、芦屋学園サッカー事業の

			<p>改革事例を分析することで、一貫指導システムをより効率よく展開するための課題を明らかにし、サッカー競技を含む課外活動における一貫指導システム構築のための有用な知見を得ることを目的とした。 (共同研究につき本人担当分抽出不可)</p>
--	--	--	--

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 武田 光平						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ページ 数)	概 要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
健康 スポ ーツ 科学 概論 健康 スポ ーツ 科学 実習	(学術論文) 芦屋大学新入生の 体力特性および全 国平均との比較に ついて	共	平成 29 年 7 月 18 日	芦屋大学論叢 第 67 号	10	著者:西光哲治 金相煥 別當和香 伊 藤武徳 武田光平 本研究では、2011年から2014年の新 体力テストの結果を用い、全国平均デ ータとの比較から体力水準の検討をお こおない、本学生の体力特性を明らか にすることで、今後の「健康スポーツ科 学実習」実技項目改善及び1年次後期 に開講される「健康スポーツ科学概論」 の授業内容改善に役立つ知見を得るこ とを目的とした。

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【 1 女性の雇用問題と政策に 関する一考察-女性を取り巻 く社会環境- 2	共	平成 30 年 11 月 21 日	芦屋大学論叢 第 70 号	著者:池田聡 押田美穂 清水真 武田光平 本研究では、現代の働く女性の 労働環境及び女性の子育て等の 問題点を明らかにする。そのため、 労働基準法と育児休業法に 焦点をあて現行の制度の仕組み やそれがどのように機能している のか、また働く女性にとって有益 であるものなのか検討した。

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 渡康彦						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆ペー ジ数(総 ページ 数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
理 科 概 論	1. アクトグラフを用いたタマネギバエの自然条件下での歩行活動の記録ー小学校理科教育での応用の可能性ー	共著	平成 27 年 6 月	芦屋大学論叢 63 号	27-35 (9)	野外に近い条件下でのタマネギバエの成虫の歩行活動リズムを明らかにするとともに、得られたデータを実験室(矩形波光周期・一定温度)で得られたデータと比較することで、自然界において時々刻々と変化する照度や温度が本種の活動リズムにおよぼす影響を示した。これらの実験結果の概要を報告するとともに、 <u>小学校理科の現場でのアクトグラフの利用可能性や問題点についても検討した</u> 。著者 渡康彦、齋藤治、田中一裕(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
	2. 温度と湿度がキイロショウジョウバエの羽化におよぼす影響ー小学校理科教育での応用の可能性ー	共著	平成 28 年 6 月	芦屋大学論叢 67 号	47-52 (6)	キイロショウジョウバエは高温で死亡率が高くなり、30℃ではほとんど羽化しない。ところが、湿度を高くすると死亡率は減り、羽化率は高くなった。これらの実験結果の概要を報告するとともに、 <u>簡単な装置で出来ることから、小学校理科の現場での同様な実験を行う可能性や問題点についても検討した</u> 。著者 渡康彦、森田健一、田中一裕(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
	3. 小学校理科教育における活動記録装置の導入検討報告ー簡易ミニ電卓を用いた計装カウンタの教員免許更新講習講座での利用事例ー	共著	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢 74 号	119-124 (6)	昆虫の活動記録装置を安価で作ることによって <u>小学校理科の現場での使用可能性を探り、令和 2 年 8 月に行われた芦屋大学での免許更新講習で先生たちに使用してもらい感想を聞いた</u> 。齋藤治、黒木出、渡康彦(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
【著書】 1 大学生生活入門(共著)	共著	平成 31 年 4 月	開成出版	「教育上の能力に関する事項」を参照

【学術論文】					
1 Temperature cycle amplitude alters the adult eclosion time and expression pattern of the circadian clock gene period in the onion fly	共著	平成 28 年 1 月	Journal of Insect Physiology, Vol. 86, 54-59	温度格差反応に遺伝子がどう関わっているかを調べた。時計遺伝子 <i>per</i> が8度較差と比較して 1 度較差のときの方が早く発現し、それらの差は羽化時刻の温度較差反応に対応していた。Miyazaki, <u>Watari</u> , Tanaka and Goto(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)	
2 Resetting of the circannual rhythm of the varied carpet beetle <i>Anthrenus verbasci</i> by low-temperature pulses	共著	平成 28 年 10 月	Physiological Entomology, Vol. 41, 390-399	春に蛹になり概年リズムを示すヒメマルカツオブシムシの幼虫期のいろんな時期に数週間の低温パルスを与えた。その結果、低温パルスは冬のシグナルとして、カツオブシムシの概年リズムをリセットすることが分かった。Miyazaki, <u>Watari</u> and Numata. (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)	
3 Day-to-day variations in the amplitude of the soil temperature cycle and impact on adult eclosion timing of the onion fly	共著	平成 29 年 6 月	International Journal of Biometeorology Vol. 61, 1011-1016	タマネギバエは、土中の温度較差が小さいほど羽化を早める。自然界では土中の温度較差は日々変異し、変異幅は深さによって異なるが、それらの変異は温度較差反応にあまり影響しないことがわかった。Tanaka and <u>Watari</u> (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)	
4 温度と湿度がキイロシヨウジョウバエの羽化におよぼす影響ー小学校理科教育での応用の可能性ー	共著	平成 29 年 6 月	芦屋大学論叢 67 号 47-52	「教職課程における担当授業科目に関する研究業績等」を参照	
5 Dependence of phase setting on temperature amplitude in the circadian eclosion rhythm of the onion fly <i>Delia antiqua</i>	共著	平成 30 年 9 月	Physiological Entomology Vol. 43, 346-354.	タマネギバエの蛹を 1℃較差から 20℃較差までの矩形波と正弦波の温度周期(平均温度 20℃と 25℃)に置いて羽化を比較した。Miyazaki, Tanaka and <u>Watari</u> (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)	
6 Northward expansion of the bivoltine life cycle of the cricket over the last four decades	共著	平成 30 年 11 月	Global Change Biology Vol. 24, 5622-5628.	日本各地からシバズズを採集し頭幅を測った結果、40 年前(Masaki, 1978)と比較してノコギリ型のクラインが北に移動していることが分かった。これは温暖化の影響と考えられる。Matsuda 他 7 名(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)	

7 Robustness of latitudinal life-cycle variations in a cricket <i>Dianemobius nigrofasciatus</i> (Orthoptera: Trigonidiidae) in Japan against climate warming over the last five decades	共著	令和元年 11 月	Applied Entomology and Zoology Vol. 54, 349-357.	日本各地からマダラスズを採集し頭幅を測った結果、50 年前と比較してノコギリ型のクラインに統計的な差がなかった。これは温暖化に対してクラインが北に移動したシバズの結果と異なるが、マダラスズの成長速度の光周反応がシバズのそれと違うことによるのかもしれない。Matsuda 他 7 名(共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
8 Circadian rhythm in locomotor activity of the common house centipede, <i>Thereuonema tuberculata</i> (Scutigermorpha: Scutigeridae)	共著	令和 2 年 6 月	Acta Arachnologica, Vol. 69, 31-35.	ゲジを明暗サイクルに置くと暗期前半にピークをもつ歩行活動リズム示した。全暗、全明においては、自由継続リズムを示し、スケルトン光周期にも同調した。Tanaka and <u>Watari</u> (共同研究につき本人担当部分抽出不可能)
9 小学校理科教育における活動記録装置の導入検討報告 一簡易ミニ電卓を用いた計装カウンタの教員免許更新講習講座での利用事例一	共著	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢 74 号	「教職課程における担当授業科目に関する研究業績等」を参照

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 石田(住本)愛子						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ペー ジ数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
器楽 I II III IV	(著書) 1.大学生生活入門～ 幼・小・特支教員、 保育士を目指す学 生のためのキャリア デザイン～ (教育実践記録等) 1.《研究ノート》 学生の主体的な学 びを支える指導 ーピアノ個別指導 の場合ー	共 共	平成 31 年 4 月 平成 30 年 3 月	開成出版 芦屋大学論叢 第 69 号	6 (75) (抽 出 不 可) (10)	幼・小・特支教員、保育士を目指す学生 のための、大学生活の心構え、一般教 養、実習関連、免許状取得までのプロセ スについてまとめた指南書。(執筆担当 部分: I 心構え、III 実習に向けて) 第 III 章において、 <u>ピアノ実技についてどのよ うな事前準備が必要か、楽譜の取扱い や選曲のポイントなどを解説した。</u> 著者: 笠原清次、渡康彦、石田愛子(編 著)、竹安知枝、他、全 11 名 <u>ピアノ演奏実技の習得</u> には日々の練習 が不可欠であり、教員免許取得希望学 生には授業時間外の主体的な練習が 求められる。ピアノ学習経験が乏しい学 生に対して、 <u>主体的な取り組みを促すに は何か必要か、どのような指導が効果的 か。「器楽」履修学生の実態と、「器楽」 担当教員 7 名による指導の工夫、日々 の具体的な指導方法や学生とのコミュニ ケーションの取り方について紹介し、望 ましい個別指導のあり方について考察し ている。</u> 著者: 石田愛子、稲葉修子、井上邦子、 岩崎智早、柿本久美子、野尻智子、三 宅澄子
初等 教科 教育 法VI (音 楽)	(教育実践記録等) 1.《研究ノート》 小学校音楽科指導 に対する苦手意識 克服のための試み	単	平成 27 年 1 月	芦屋大学論叢 第 62 号	11	小学校教員を目指す本学学生の多くが 音楽に苦手意識を持ち、小学校での指 導に不安を感じている。その要因とし て、ピアノや歌唱の技術不足、音楽全般 の知識と経験の不足、自分自身が音楽 好きでない、などが挙げられる。「初等教 科教育法(音楽)」では、 <u>ピアノの苦手意 識で委縮することなく前向きに音楽科指 導に取り組めるように工夫し、リコーダー 実技や器楽合奏などピアノ以外の要素 の向上をはかっている。</u> その実践を通し て見えてくる学生の実態と課題を明らか にするとともに、今後の指導の在り方 について考察した。

保育内容 VI (表現-音楽リズム)	(学術論文) 1.幼稚園年長児を対象とした鍵盤ハーモニカ指導に関する一考察-芦屋大学附属幼稚園での実践を通して-	共	令和1年7月	芦屋大学論叢第71号	8 (11)	鍵盤ハーモニカは、小学校低学年の器楽指導に使用されることが一般的であるが、小学校での音楽学習にスムーズに移行できるようにとの期待もあり、幼稚園における器楽活動にも広く採用されるようになっている。本稿では、芦屋大学附属幼稚園での実践を通して、 <u>就学前教育としての望ましい鍵盤ハーモニカ指導のあり方と、年長児を対象とした効果的な教材や具体的指導法、また指導上の課題や対応策について</u> 考察した。 著者:石田愛子、安藝雅美
	2. 幼稚園における課外活動についての一考察-鍵盤ハーモニカ指導の場合-	共	令和3年3月	芦屋大学論叢第74号	8 (11)	芦屋大学論叢第71号「幼稚園年長児を対象とした鍵盤ハーモニカ指導に関する一考察-芦屋大学附属幼稚園での実践を通して-」の続編である。鍵盤ハーモニカ指導の課外活動について2019年と2020年の実践を比較し、その変更点(教材の選び方や指導の工夫、外部講師と幼稚園教員の連携、課外活動と日常の保育の関連づけ等)について効果を検証した。(執筆担当部分:第1、3~6章)著者:石田愛子、安藝雅美
	(教育実践記録等) 1.《授業実践》実践的な音楽力を養うために-「保育内容VI(表現-音楽リズム)」での試み-	単	平成29年12月	芦屋大学論叢第68号	11	保育者に求められる確かな音楽スキルと豊かな音楽性、実践的な音楽力を身につけるために、平成29(2017)年度前期の「保育内容VI(表現-音楽リズム)」では、これまでの学びを活かし、関連づけるような授業内容を展開した。保育のためのピアノ演習、ソルフェージュ、[音楽リズム、製作、言葉など]の融合と模擬保育、などの授業実践を報告し、本学学生の到達度と実態、課題と今後の指導のあり方について考察している。

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
【著書】 1.大学生活入門~幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン~ (※再掲)	共	平成31年4月	開成出版	幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のための、大学生活の心構え、一般教養、実習関連、免許状取得までのプロセスについてまとめた指南書。(執筆担当部分:Ⅰ心構え、Ⅲ実習に向けて) 著者:笠原清次、渡康彦、石田愛子(編著)、竹安知枝、他、全11名
【学術論文】(再掲) 1.幼稚園年長児を対象とした鍵盤ハーモニカ指導に関する一考察-芦屋大学附属幼稚園での実践を通して-	共	令和1年7月	芦屋大学論叢第71号	鍵盤ハーモニカは、小学校低学年の器楽指導に使用されることが一般的であるが、小学校での音楽学習にスムーズに移行できるよ

(※再掲)				うにとの期待もあり、幼稚園における器楽活動にも広く採用されるようになっている。本稿では、芦屋大学附属幼稚園での実践を通して、就学前教育としての望ましい鍵盤ハーモニカ指導のあり方と、年長児を対象とした効果的な教材や具体的指導法、また指導上の課題や対応策について考察した。 著者:石田愛子、安藝雅美
2. 幼稚園における課外活動についての一考察－鍵盤ハーモニカ指導の場合－ (※再掲)	共	令和3年3月	芦屋大学論叢第74号	芦屋大学論叢第71号「幼稚園年長児を対象とした鍵盤ハーモニカ指導に関する一考察－芦屋大学附属幼稚園での実践を通して－」の続編である。鍵盤ハーモニカ指導の課外活動について2019年と2020年の実践を比較し、その変更点(教材の選び方や指導の工夫、外部講師と幼稚園教員の連携、課外活動と日常の保育の関連づけ等)について効果を検証した。(執筆担当部分:第1、3～6章)著者:石田愛子、安藝雅美
【その他(講演や発表)】 (演奏会、公開講座における演奏)				
1.京都市立芸術大学音楽学部第35期生はんなりコンサート	共	平成28年8月	堀江アルテ	ヘンデル《ヴァイオリンと通奏低音のためのソナタ イ長調 Op1-3 HWV361》、モーツァルト《フィガロの結婚》より、チェンバロ/オルガン演奏
2.藤原台コーラル・カリヨン30周年記念コンサート	共	平成28年9月	ありまホール	合唱曲ピアノ伴奏、ドビュッシー《ヒースの茂る荒地》ピアノ独奏
3.ザ・ハープシコード・カンパニー コンサート No.20	共	平成28年9月	アクア文化ホール音楽室	J.S.バッハ《ゴルトベルク変奏曲 BWV988》より、チェンバロ独奏、曲目解説、マンチーニ《リコーダーと通奏低音のためのソナタ ト短調》通奏低音
4.特別授業(児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験)「3拍子の舞曲を踊ってみよう」	共	平成29年2月	兵庫県立西宮高校音楽科	チェンバロ演奏、講師・共演:樋口裕子(バロックダンス)
5.ザ・ハープシコード・カンパニー コンサート No.21	共	平成29年9月	アクア文化ホール音楽室	J.S.バッハ《半音階的幻想曲とフーガ BWV903》チェンバロ独奏、曲目解説、ベッリンツァーニ《リコーダーと通奏低音のためのソナタハ短調》通奏低音
6.特別授業(児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験)「バロ	共	平成30年2月	兵庫県立西宮高校音楽科	チェンバロ演奏、講師・共演:樋口裕子(バロックダンス)

ック時代のダンス」				
7.エルンスト・ザイラー先生追悼コンサート	共	平成30年6月	京都府立府民ホールアルティ	シューマン、ブラームスの歌曲ピアノ伴奏、共演:島村泰子(ソプラノ)
8.ザ・ハーブシコード・カンパニー コンサート No.22	共	平成30年9月	アクア文化ホール音楽室	J.S. バッハ《フランス序曲 BWV831》より、チェンバロ独奏、曲目解説、J.S.バッハ《リコーダーと通奏低音のためのソナタ ホ長調 BWV1035》通奏低音
9.指導者研修(中級研修)「一感性を磨くーコンサート」	共	平成30年12月	加佐ノ岬倶楽部音楽療法研究所主催、神戸ホテルフルーツフラワー	メンデルスゾーン《無言歌集》より〈甘い思い出〉〈狩りの歌〉〈ベネチアの舟歌〉他、ピアノ独奏、歌曲・合唱曲ピアノ伴奏
10.藤原台コール・カリヨン水無月コンサート	共	令和1年6月	ありまホール	合唱曲ピアノ伴奏、ブラームス《ワルツ》、ビゼー《メヌエット》ピアノ独奏

① 教育研究業績書
教 育 研 究 業 績 書
氏 名 林 知 代

※1 担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は発 表学会等の名 称	概 要
カウンセリング 心理学	アスペルガー症候 群を通してみた発 達障害の重複性 スタディグループ 4 発達障害治療薬の 現状と展望:		平成 20 年 9 月 平成 22 年 9 月	日本心理臨床 第 27 回大会 学会発表 第 20 回日本 臨床精神神経 薬理学会・第 40 回日本神 経精神薬理学 会 合同年	一口に発達障害といってもその現 れ方は千差万別であり、単純にA DD(不注意・注意欠陥障害), H D(多動・衝動性障害), ASP(ア スペルガー症候群), LD(学習障害) に分類して語ることは、肝心の 個々の独自性・特性を見過ごし てしまう可能性がある。個々の特 性や傾向を知ることは適切な援助 ・支援につながる。発達障害の重 複性を事例を用いながら検討考 察している。 PDD 治療全般の中での薬物療 法の位置づけを中心に、疫学的 (浜松大土屋)、認知機能特性(京 大十一)、医師の臨床現場(阪大 安田、名古屋大吉川)、心理的 (芦屋大林)が各専門的立場から 橋本(阪大)の進行でディスカッ ション。
教育相談の理 論と方法(初等)	英国ロンドンにお ける特別支援教育 の現状—2008 年 9 月視察報告書 英国における特別 支援教育の実情		平成 21 年 3 月 平成 20 年 11 月	芦屋大学大学 院発達障害教 育研究所 芦 屋市教育委員 会と連携した 小中学校にお ける特別支援 教育の補助講 師養成プログ ラム pp9-26 芦屋大学発達 障害教育研究 所報告発表	2008 年 9 月の英国ロンドン市 にある教師、特別支援などの養 成とトレーニングをしている国 の行政機関 TDA,ヨーロッパで いちばん設備の整った養護学 校”White Field”、ロンドン、 ランベス区教育局、地元の小 学校 2 校を視察した報告書。 英国における発達支援教育を 行政の提示していることや提 示しているものを地方教育局 がどのように受け止め、各学 校に浸透しているかまたその 独自性と合わせ発表した。
教育相談の理 論と方法(中等)	今どんな「生徒指導 の手引き」改訂が必 要か。特別支援教 育から見た生徒指 導の課題		平成 21 年 12 月	明治図書学校 マネジメント 特集「生徒指 導の手引き」 改訂と規範意 識の育成 Vol.637 pp20- 21	依頼原稿。個々の子どものニ ーズを理解し、子どもの成長 に基づいた支援に目を向け ることが特別支援教育に求 められていることである。 個々のニーズとは個々の発 達の仕方に注意することでも ある。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
【著書】 漫画でもわかるアスペルガー 読本	共著	平成 20 年	メディカルレビュー社 pp25-39	アスペルガー症候群に見られる 感覚の特異性について事例を上 げて述べている。コミュニケーション の困難について言及されるアス ペルガーであるが、まず彼らがど のような感じ方をしているかへの 理解を促している
天才の秘密 —アスペルガー症候群と芸 術的独創性—the Genesis of Artistic Creativity	共訳	平成 21 年 平成 30 年 改訂版	世界思想社	歴史上偉大な仕事をし、名を残し ている天才的な芸術家(作家、哲 学者、音楽家、画家)の中にはア スペルガー症候群の診断基準を 満たす人たちがいるが、そうした 人たちのどこがアスペルガー的 であったかをひも解く。
先生！ぼくのこころ知っ てる？お母さん！わたしの気 持ちわかってる？	単	平成 22 年	明治図書	アスペルガーの子どもの対応は、 スキルを教えることではない。子 どもが安定した個として育って いくためには、子どもがどんな主 観的情緒体験をしているかを理 解することから始まる。アスペル ガーの子どもが世界をどのように 感じているかを臨床現場を通し て描かれている。
蘇る教師のために	単	平成 23 年 3 月	川島書店pp17-24、p p159-166	望ましい教師像とはどのような ものであるかを、発達障害系の子 どもへの対応や姿勢に焦点を当 てて述べている。教科書的理屈 ではなく、実際に子どもと接して いる教師の対応の具体的事例を 取り上げつつ、解説をしている。
【書評】 福本修・平井正三編著『精 神分析から見た成人の自 閉スペクトラム』書評	単	平成 30 年 2 月	心理臨床学研究 Vol.35 No.6, p66	近年自閉症圏の問題は多様な 広がりを見せ、精神分析的アプ ローチも自閉スペクトラム(AS) の概念を念頭に入れずに治療 を進めることはできない。本書 はクライン派の視点からの臨床 実践である。筆者は自己心理 学的視点からクライン派の重 視する解釈と AS の実際の臨 床とのずれを指摘した。

<p>【学術論文】 英語がカウンセリング効果に及ぼす事例研究(修士論文)</p>	単	平成 14 年 3 月	武庫川女子大学大学院	不登校や引きこもりの中・高生のクライアントに、それぞれの特性に沿った英語をカウンセリングに導入することがカウンセリング効果を促すことを事例を挙げ実証的に、その理由を挙げながら検証している。
<p>情報発達からみたひきこもりへの間主観的アプローチ(博士論文)</p>	単	平成 18 年 3 月	武庫川女子大学大学院	引きこもりの問題は、引きこもりという現象について語られることが多いが、引きこもらざるを得ない心的状況を理解することなしには、対応の方法を誤る。情動発達の過程で発達不全領域があるという見方により、臨床的アプローチを促進させる。情動調律を基底とした共感的理解を事例から実証する。
<p>ひきこもりの息子を持つ母親との心理療法過程－代理内省としての共感による断片化した情動統合へのプロセス－</p>	単	平成 17 年 6 月	心理臨床学研究 Vol.23 No.2 pp185-196	本事例は、引きこもりを息子を持つ母親がセラピストの代理内省による共感と受容によって自己愛の傷つきから立ち直り息子への対応が変化する過程を描いている。息子への罪悪感と子育ての努力が報われなかった怒りのアンビバレントな情動が次第に分化し統合していく過程である。
<p>器質的特性を持つひきこもり者への間主観的アプローチ－アスペルガー症候群と診断された青年との心理療法過程－</p>	単	平成 20 年 2 月	心理臨床学研究 Vol.25 No.6 pp659-670	アスペルガー症候群の成人クライアントに対し、情動の閾値に焦点をあてた心理療法過程である。本論では、母親とクライアントの関係性がセラピストの介在によっていかに変化するか、並びにアスペルガー症候群の情動の閾値に焦点を当てた間主観的アプローチとはどのようなものかを示している。
<p>自閉的パーソナリティ女子への精神療法過程</p>	単	平成 25 年 7.19.	芦屋大学論叢 Vol.60 pp41-52	自閉的パーソナリティを持ち、症状として境界例特徴を呈するクライアントにおいて、その起因として健康な愛着関係の形成の失敗によることがある。軽度の自閉性がなぜ母子関係の情緒的繋がり形成へ影響するのかについて事例を示して記述している。

<p>心理アセスメントにおける自己の構成要素の発達という視点-テストバッテリーに現れるクライアントの内的現実を通して-</p>	<p>単</p>	<p>平成 28 年 7 月</p>	<p>芦屋大学論叢第 64 号 pp21-33</p>	<p>間主観的な概念に基づく心理療法の課題は、行動を導く基盤となるオーガナイズングプリンシプルを解明することである(Nurski, 2001)。本論ではその課題を実践するためには、発達論的視点とともに、今のクライアントの状態を的確に把握し、内的世界に焦点を当てることの重要性を事例を通して提示する。</p>
<p>自己感の発達における外的刺激に対する閾値の個人差への注目(1)</p>	<p>単</p>	<p>平成 29 年 1 月</p>	<p>芦屋大学論叢第 65 号 pp45-56</p>	<p>刺激に関する感受性は、普通と見える子どもにおいても個人差がある。外界刺激に対する感受性の質と量の閾値の違いは、養育者と乳児の相互交流のあり方に影響を及ぼす要因の一つである。刺激耐性が自己統合与える影響を考察した。</p>
<p>自閉スペクトラム症の特質に注目した心理療法過程-学校恐怖を訴える女兒の刺激閾値への気づきを通して-</p>	<p>単</p>	<p>平成 29 年 7 月</p>	<p>芦屋大学論叢第 66 号 pp31-40</p>	<p>DSM5 がアスペルガー症候群をはじめとする広汎性発達障害の呼称をなくした。自閉圏の発達障害特性レベルの量的示唆も 3 段階に提示したがそのレベルに該当するほどではないグレーゾーンの子どもの注意が必要である。現実生活においては学校恐怖の形をとる。何に注目して心理療法をするかを提示した。</p>
<p>誕生最早期における自己の統合に関する臨床的考察-感覚の閾値に代表される気質的差異-</p>	<p>単</p>	<p>平成 29 年 12 月</p>	<p>芦屋大学論叢第 67 号 pp23-34</p>	<p>Stern D.の自己感発達における最早期に誕生する萌芽自己感領域に焦点を当て、原初の自己の統合とは何かを明らかにし、精神療法過程における発達の視点の重要性を考察した。</p>
<p>自己発達における中核自己感領域の発達構成要素に関する心理臨床学的考察</p>	<p>単</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>芦屋大学論叢第 68 号 pp51-60</p>	<p>本論文では主体的自己として存在し続けている感覚の樹立及び発達の源となる「中核自己領域」に焦点を当て、それを構成している不変要素について考察を深める。その上で、乳幼児発達の概念が心理臨床実践とどのように繋がっているかを提示する。</p>
<p>自己発達における Intersubjective(間主体的)自己領域に関する心理臨床学的考察-Kohut から Stern への自己の発展的概念を中心に-</p>	<p>単</p>	<p>平成 30 年 2 月</p>	<p>芦屋大学論叢第 69 号 pp67-75</p>	<p>Stern D. の intersubjective relatedness とよぶ領域発達論を臨床に応用するにあたり、筆者は Intersubjective の訳を間主観とせず間主体とすることの意味を深める。Stern D.が研究において最も注目した情動 affects に基づく内的体験に基づく理論展開は心的発達が向かうところ、即ち心理臨床の目標であることの考察を深める。</p>

<p>自己発達の言語的關係性領域に関する心理臨床学的考察 —Stern D.の発達論に基づく言語機構—</p>	<p>単</p>	<p>平成 30 年 9 月</p>	<p>芦屋大学論叢第 70 号</p>	<p>本論では、4 つ目の自己発達領域である言語的關係性領域 Domain of verbal relatedness を取り上げる。言語が操作可能になるまでに既に芽生え成長を続けている3領域の自己感に加え、言語は、統合された自己感形成に関与する重要な役割をする一方、自己の断片化を起こす危険性についても論議し考察を深めている。</p>
<p>発達特性質問紙の信頼性・妥当性の検討</p>	<p>共</p>	<p>令和元年</p>	<p>芦屋大学論叢第 71 号</p>	<p>注意欠陥・不注意(AD)、衝動・多動(HD)、アスペルガー・高機能自閉(AS)、学習障害(LD)の特性の重複性を質問紙で提示した。</p>
<p>自己発達概念に基づく刺激閾値の明確化 —感覚プロフィール(SP)検査から手繰る自己統合へのアセスメント—</p>	<p>単</p>	<p>令和元年</p>	<p>芦屋大学論叢第 72 号</p>	<p>本論では D.Stern の発達の視点に基づく精神分析的な心理療法におけるアセスメントの際、有効だと思われるツールとして国際的に広く利用されている感覚プロフィール(SP)日本版を使用する意義を、事例を紹介しながら明らかにしたい。</p>
<p>【その他(講演や発表)】 思春期女子をめぐる家族力動と自己発達のプロセス</p>	<p>単</p>	<p>平成 26 年 1 月</p>	<p>日本カウンセリング学会第 46 回大会</p>	<p>不登校になった中学生女子の 7 年にたる心理療法過程を中心に発表した。本人が持つ自己中心性に見えるものが、本人にとっては傷つきの補償であることをメンタライゼーション理論から検討した。</p>
<p>アスペルガー症候群女子の分離の痛みと主体的自己の獲得</p>	<p>単</p>	<p>平成 25 年 11 月</p>	<p>芦屋大学大学院教育相談研究所研修講座講師</p>	<p>発達障害教育にまつわる注意点や、心理臨床学的考察として発達という視点がいかに重要であるかについて典型的な事例を提示して述べた。</p>
<p>高機能自閉症女子への心理療法—埋没からメンタライゼーションの回復という見方—</p>	<p>単</p>	<p>平成 24 年 10 月</p>	<p>芦屋大学大学院発達障害教育研究所・秋季研修講座講師</p>	<p>思春期には家族が抱える病理が問題化する時期でもある。本学会では、特に母親と子どもの情緒的繋がり断絶が惹き起こすその起因と、子ども発達の概念を Stern の発達論に即して考察した。</p>
<p>発達障害周辺群の理論と臨床—臨床で出会う“独自の発達群”の自己発達</p>	<p>単</p>	<p>平成 26 年 10 月</p>	<p>日本心理臨床学会第 31 回大会 学会発表</p>	<p>母親からの脱同一化を課題にした青年期の女子の自己発達の過程を取り上げ発表した。考察として、本人の持つ軽度の自閉性と母親の子どもへの依存性を中心に、クライアントが母親からの自律に苦しみつつそれを支える心理</p>

HTP テスト ＜家・木・人の描画＞から読み解く理論と実際	単	令和元年 8 月	芦屋大学大学院教育 相談研究所研修講座 講師	療法とは何かについて明らかにした。 描画療法の一つである HTP テストをワークショップ形式で実践してもらいその読み解きを講義した。
『箱庭療法』 ～その理論と実際～	単	令和元年 2 月	芦屋大学大学院教育 相談研究所研修講座 講師	縦 57 cm、横 72 cm の箱で繰り広げられる世界は、その人の内面世界の表現でもあります。箱庭療法をどう読み解いていくかについて専門家へ向けて話した。

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 大江 まゆ子						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ペー ジ数)	概 要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
幼児 理解 の理 論と 方法 (単 独)	(著書) 1. 新しい保育・幼 児教育方法論	共	平成 25 年 3 月	ミネルヴァ書 房	52 (208)	(再掲のため、略)
	2. 保育実習 基本 保育シリーズ⑳	共	平成 28 年 1 月	中央法規	12 (290)	(再掲のため、略)
	3. 保育実習 基本 保育シリーズ⑳ [第 2 版]	共	平成 31 年 2 月	中央法規	12 (292)	(再掲のため、略)
	(学術論文) 1. ルソー思想にお ける「子ども」概 念成立の周辺概 念に関する一考 察	単	平成 23 年 10 月	芦屋学園短期 大学研究紀要 第 38 号	26	主著『エミール』を中心に、ルソーの「子 ども」概念を成立させる周辺概念を考察 することにより、ルソーの重視する「子ど も」には、“時期としての子ども”と社会に おける“存在としての子ども”が意味され ていることを明らかにした。これは「自然」 との直接性、無媒介性を志向する結果、 見出された概念であり、ルソー思想にお ては人間が自己実現して生きていくこと を求めた結果として、「子ども」概念が産 出されたことを考察した。
	(教育実践記録等) <学会発表> 1. 保育者志望学生 の幼児理解にお ける複眼的思考 の涵養(1)	共 (筆 頭)	平成 27 年 5 月	日本保育学会 第 68 回大会 於 椋山女学園 大学	1	自己の一面的理解でなく、多様な視点 から物事を捉える複眼的思考の涵養を ねらい導入したエピソード形式の実習記 録を用いて、学生の実習ごとの学びの 実情を明らかにすることを目的とした発 表。最初の実習では子ども理解よりも観 察による保育者理解に学びの関心があり、 徐々に子ども理解へと関心が移って いくことが示された。実習累積により、子 どもの表面的言動の変容ではなく、内面 的変容を重視する保育観の萌芽と、子 どもの主体性を大事にする子ども理解 及び自己変容が示唆されたと考えられ る。
	2. 保育者志望学生 の幼児理解にお ける複眼的思考 の涵養(2)	共	平成 27 年 5 月	日本保育学会 第 68 回大会 於 椋山女学園 大学	1	附属幼稚園で 1 人の子どもの学びに焦 点を当てた観察実習を行い、幼児理解 における成績上位者と下位者の学びの 特性を明らかにした。上位者は、保育者 としての使命を自分の力で子どもを成長 (変容)させていくことと捉えているのに 対し、下位者は子どもの視点に立ち側 面からの援助を行うことと捉えている。ま た上位者は、様々な経験から総合的に 学んでいくが、下位者は保育現場など での体験を通して学んでおり、子どもに 合わせ柔軟に自己変容する能力に優れ ていることが示唆された。
	3. 保育者志望学生 の幼児・障 碍児 理解にお ける複 眼的思考 の涵養	共	平成 27 年 5 月	日本保育学会 第 68 回大会 於 椋山女学園 大学	1	障害者と学生によるふれあい体験の実 施から、体験学習の効果測定を行った。 学生は体験学習の前後で、実習への意 欲、自己肯定意識、他者意識、学習意 欲の4群を全 27 項目のブリコード式と自 由記述によるアンケートを実施した。そ の結果、平均値比較では、全項目にお いて体験学習の効果は上昇していること がわかった。特に、学習意欲に関する意

						欲低下の逆転項目に関する数値は改善している傾向があり、障害者体験を通して多様性理解に通じる学習に刺激を与えていることを示唆する結果となった。
教育 実習 事前 指導 【幼 稚園】 (複 数)	(著書)					
	1. 教職をめざす人のための教育用語・法規	共	平成 24 年 6 月	ミネルヴァ書房	5 (312)	(再掲のため、略)
	2. 保育実習 基本保育シリーズ⑳	共	平成 28 年 1 月	中央法規	12 (290)	(再掲のため、略)
	3. 保育実習 基本保育シリーズ⑳ [第 2 版]	共	平成 31 年 2 月	中央法規	12 (292)	(再掲のため、略)
	4. 大学生活入門～幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン～	共	平成 31 年 4 月	開成出版社	17 (75)	(再掲のため、略)
	5. 教職をめざす人のための教育用語・法規 改訂新版	共	令和 3 年 5 月	ミネルヴァ書房	4 (366)	(再掲のため、略)
	(学術論文)					
	1. 保育者養成における模擬保育の教育的効果—実習の充実に向けた指導案作成力向上と教員による模擬保育の意義—	共 (筆頭)	平成 26 年 3 月	芦屋学園短期大学研究紀要第 40 号	16	保育者養成校における実習指導法の一環として、学生間での模擬保育と教員による模擬保育の教育効果に関する研究である。質問紙調査から、学生主体の模擬保育のみでは保育者及び子どもの動きをイメージしにくく、特に指導案作成力の向上という点からは学びが深まりにくいことが明らかになり、教員による模擬保育は、保育者及び子どもの姿のイメージが得られやすく、指導内容の工夫や保育者の配慮という点で、有効に作用するという結果が明らかになった。大江まゆ子、西條喜博、新家智子
	2. 保育者志望学生の実習累積による変容過程に関する一考察—エピソード形式の実習記録からみる学生の学びと育ち—(査読付)	共 (筆頭)	平成 28 年 3 月	全国保育士養成協議会『保育士養成研究』第 33 号	10	本論文では、エピソード形式の実習記録から、学生の学びの視点と実習段階ごとの学びの実情を浮上させ、実習累積による学生の変容過程モデルを探索的に生成した。その結果、最初の実習では保育者の姿から全体的な保育イメージと保育者役割を掴み、次の実習で子どもとの関わりを模索し始め、最後の実習では関わりを生む過程に焦点を当てて学ぶ実習生の実情が示された。大江まゆ子、木下隆志、大谷彰子、片岡章彦
	3. エピソード実習記録を用いた学生の学びの実情—記録時に感じる学生の困難感に焦点を当てて—	共 (筆頭)	平成 28 年 3 月	芦屋学園短期大学研究紀要第 42 号	20	エピソード形式の実習記録を用いた学生の学びの実情の内、学生が感じる困難さに焦点を当て、困難を生む問題を探索的に調査し、分析、構造化することを目的とした論文である。その結果、困難を生む潜在的要因として【忙しさによる感動の喪失】【強いられる矛盾】【記録化の困難】【理解に向かう揺れ】という概念が浮上し、構造的要因としては書く困難と捉える困難に大別された。構造化により、実習で深い学びを得るためには、実習生特有の忙しさと強制感からの脱却が鍵となることが示唆された。大江まゆ子、大谷彰子、木下隆志、片岡章彦

	(教育実践記録等) <その他> 1. 保育実習・幼稚園教育実習のハンドブック	共	令和2年3月		84	実習の意義と目的、実習先の決定、オリエンテーション、実習生としての心構え、実習記録、エピソード記録、指導案、細案の書き方、お礼状の書き方など、実習に求められる全般的な内容について記入例と共に具体的な資料を作成、掲載した。
教育実習事後指導【幼稚園】	(著書) 1. 教職をめざす人のための教育用語・法規	共	平成24年6月	ミネルヴァ書房	5 (312)	(再掲のため、略)
	2. 保育実習 基本保育シリーズ⑳	共	平成28年1月	中央法規	12 (290)	(再掲のため、略)
	3. 保育実習 基本保育シリーズ⑳〔第2版〕	共	平成31年2月	中央法規	12 (292)	(再掲のため、略)
	4. 大学生活入門～幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン～	共	平成31年4月	開成出版社	17 (75)	(再掲のため、略)
	5. 教職をめざす人のための教育用語・法規 改訂新版	共	令和3年5月	ミネルヴァ書房	4 (366)	(再掲のため、略)
	(学術論文) 1. 保育者養成における模擬保育の教育的効果—実習の充実に向けた指導案作成力向上と教員による模擬保育の意義—	共 (筆頭)	平成26年3月	芦屋学園短期大学研究紀要第40号	16	(再掲のため、略)
	2. 保育者志望学生の実習累積による変容過程に関する—考察—エピソード形式の実習記録からみる学生の学びと育ち—(査読付)	共 (筆頭)	平成28年3月	全国保育士養成協議会『保育士養成研究』第33号	10	(再掲のため、略)
3. エピソード実習記録を用いた学生の学びの実情—記録時に感じる学生の困難感に焦点を当てて—	共 (筆頭)	平成28年3月	芦屋学園短期大学研究紀要第42号	20	(再掲のため、略)	
	(教育実践記録等) <その他> 1. 保育実習・幼稚園教育実習のハンドブック	共	令和2年3月		84	
教育実習【幼稚園】	(著書) 1. 教職をめざす人のための教育用語・法規	共	平成24年6月	ミネルヴァ書房	5 (312)	(再掲のため、略)
	2. 保育実習 基本保育シリーズ⑳	共	平成28年1月	中央法規	12 (290)	(再掲のため、略)
	3. 保育実習 基本保育シリーズ⑳〔第2版〕	共	平成31年2月	中央法規	12 (292)	(再掲のため、略)

	2版]					
	4. 大学生生活入門 ～幼・小・特支 教員、保育士 を目指す学生 のためのキャリア デザイン～	共	平成 31 年 4 月	開成出版社	17 (75)	(再掲のため、略)
	5. 教職をめざす人 のための教育用 語・法規 改訂新 版	共	令和 3 年 5 月	ミネルヴァ書 房	4 (366)	(再掲のため、略)
	(学術論文) 1. 保育者養成に おける模擬保育 の教育的効果 —実習の充実 に向けた指導案作 成力向上と教員 による模擬保育 の意義—	共 (筆 頭)	平成 26 年 3 月	芦屋学園短期 大学研究紀要 第 40 号	16	(再掲のため、略)
	2. 保育者志望学 生の実習累積に よる変容過程に 関する—考察 —エピソード形 式の実習記録か らみる学生の学 びと育ち— (査読付)	共 (筆 頭)	平成 28 年 3 月	全国保育士養 成協議会『保 育士養成研 究』第 33 号	10	(再掲のため、略)
	3. エピソード実 習記録を用いた 学生の学びの実 情—記録時に感 じる学生の困難 感に焦点を当て て—	共 (筆 頭)	平成 28 年 3 月	芦屋学園短期 大学研究紀要 第 42 号	20	(再掲のため、略)
	(教育実践記録等) <その他> 1. 保育実習・幼 稚園教育実習 のハンドブック	共	令和 2 年 3 月		84	(再掲のため、略)
観察 実習 【幼 稚園】	(著書) 1. 教職をめざす人 のための教育用 語・法規	共	平成 24 年 6 月	ミネルヴァ書 房	5 (312)	(再掲のため、略)
	2. 保育実習 基本 保育シリーズ⑩	共	平成 28 年 1 月	中央法規	12 (290)	(再掲のため、略)
	3. 保育実習 基本 保育シリーズ⑩ 〔第 2 版〕	共	平成 31 年 2 月	中央法規	12 (292)	(再掲のため、略)
	4. 大学生生活入門 ～幼・小・特支 教員、保育士 を目指す学生 のためのキャリア デザイン～	共	平成 31 年 4 月	開成出版社	17 (75)	(再掲のため、略)
	5. 教職をめざす人 のための教育用 語・法規 改訂新 版	共	令和 3 年 5 月	ミネルヴァ書 房	4 (366)	(再掲のため、略)
	(学術論文) 1. 保育者養成に おける模擬保育	共 (筆 頭)	平成 26 年 3 月	芦屋学園短期 大学研究紀要	16	(再掲のため、略)

記録を用いた学生の学びの実情—記録時に感じる学生の困難感に焦点を当てて— (教育実践記録等) <その他> 1. 保育実習・幼稚園教育実習のハンドブック	(筆頭)	月	大学研究紀要第42号		
	共	令和2年3月		84	(再掲のため、略)

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
【著書】 1 保育実習 基本保育シリーズ②[第2版](中央法規)(共著)	共	平成31年2月	中央法規	(再掲のため、略)
2 教職をめざす人のための教育用語・法規 改訂新版	共	令和3年5月	ミネルヴァ書房	(再掲のため、略)
【学術論文】 1 保育者養成校における「保育体験学習」の教育効果に関する一考察—保育体験学習は学生にどのような変容をもたらしているのか—	共(筆頭)	平成29年3月	芦屋学園短期大学研究紀要第43号	保育体験学習の教育効果の検証を目的とし3校の学生を調査し、効果的な保育体験学習の実施について考察した論文。学生変容の図解化により、【保育者を目指す自覚】と【保育者意識】をつなぎ、保育者としての自覚と意識の往還を可能にするものとして「子どものための保育者になりたい」という変容が示された。また、事前学習の充実と体験学習に振り返りとして実施園保育者と質疑応答時間を設けるといった保育現場との協働による体験プログラムが教育効果を高める上で有効であると示唆された。大江まゆ子、大谷彰子、木下隆志、その他3名、p.25~p.44、頁数19
5 保育者養成校における「体験学習」による学びの深化—体験内容の質的差異による学生の学びの認識から—	共	平成29年3月	芦屋学園短期大学研究紀要第43号	3 大学で共同調査した6種類の体験学習の質的差異による学生の学びの深化を比較検証した。体験学習での学びを生起させる要因として、対象者の有無やふれあい時間の長さ、自己裁量度合い、体験内で自己省察できる時間的余裕などに影響されている。体験学習の際には、感染動機を刺激する体験環境の構成、教育的意図に合わせた体験の自由度、自己裁量度合いの工夫、事前・事後学習の充実、体験自体をアセスメントする視点が肝要であることが示された。大谷彰子、大江まゆ子、木下隆志、その他3名、p.45~p.62、頁数18
6 保育者養成の質の向上につながる体験学習のしくみを考察する	共	平成29年3月	芦屋学園短期大学研究紀要第43号	保育士養成校の実習前教育の補助的授業として、体験学習を取り入れている3大学の比較検証を行った。体験学習の習得目的に添った内容について、その検証や、どの時期に効果的な体験学習を実施するかといった測定を行った先行研究は少ない。今回、実習への意欲、自

<p>7 生涯発達の視点からみた養育者—子ども関係におけるバウンダリーズ概念の重要性について</p>	<p>共(筆頭)</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>芦屋学園短期大学研究紀要第 44 号</p>	<p>己肯定意識、学習意欲、他者評価の 4 類型における 27 項目のアンケート調査より体験学習事前事後の効果測定の結果をまとめた。木下隆志、<u>大江まゆ子</u>、大谷彰子その他 3 名、p.5～p.24、頁数 19</p> <p>生涯発達の視点から親や保育者といった養育者—子ども関係における境界線形成についての考察を目的とし、バウンダリーズ理論とスター・ペアレンティング理論及びNPO 法人教育政策ラボラトリの子育てワークショップ理論との比較検討を実施。養育者が子どもとの主体的関係を実現するには、一貫した姿勢で境界線を示す具体的方法や選択肢の紹介に加え、養育者同士の励まし合いを重視する点が共通に確認された。関係形成の鍵を握る養育者を支えることで、養育者自身が自律的に判断する力を身に付け、子どもの主体的成長を実現する相互の成長プロセスを重視する視点が浮上した。<u>大江まゆ子</u>、太田雅子、福田充男、p.59～p.83、頁数 25</p>
<p>8 『バウンダリーズ』概念の保育(育児)実践への適応</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>聖隷クリストファー大学社会福祉学部研究紀要第 16 号</p>	<p>アメリカの臨床心理学者であるヘンリー・クラウドとジョン・タウンゼントが提唱したバウンダリーズ概念の保育・育児実践への適用を目的とした論文。バウンダリーズの原則や方法の整理、評価を行い、対話的保育理論やNPO 教育政策ラボラトリの実施する子育てワークショップとの理論比較により、バウンダリーズ理論との共通性と差異性の検討を行った。養育者、子ども双方が主体的で自立的な関係形成を目指す際、バウンダリーズ概念が他律から自律に向かうアプローチに有効であることを確認した。太田雅子、<u>大江まゆ子</u>、福田充男、p.11～p.29、頁数 19</p>
<p>9 幼児の規範意識に対する学生の援助と保育観の変容—入学直後と卒業間近のエピソード記述の比較から—</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>芦屋学園短期大学研究紀要第 44 号</p>	<p>ルール違反を行った子どもへの援助と保育観の捉え方について、入学時と卒業時に変容する保育観をエピソード記録より分析を行った。その結果、入学時にはルールを逸脱する子どもへの指摘、「権力的かかわり」が多いのに対し、子どもの葛藤や喜びに共感する子どもの主体的な学びを尊重する「子どもの主体性重視」を大切にすることがわかった。大谷章子、木下隆志、<u>大江まゆ子</u>、岸本朝予 p.85～p.104、頁数 16</p>
<p>10 保育士養成校における体験学習の効果と実用性を検証する—重度心身障害者との触れ合い体験から—</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>芦屋学園短期大学研究紀要第 44 号</p>	<p>体験学習における学びの主体性を伸ばすことを目的とした「重度心身障害者との触れ合い体験」をとおして実施前後のアンケート結果より、学習効果についての検証を行った。その結果、「実習に必要な姿勢」、「学習意欲」、「他者意識」、「自己肯定意識」において、体験を通して学ぶ意欲は高くなっている</p>

<p>11 「保育体験学習」を通じた学生の学びの変化に関する一考察-3校の保育者養成における質問紙調査から-</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>大阪人間科学大学紀要</p>	<p>ことがわかった。しかし、回数を重ねるごとに、実習への意欲が顕著に高くなり、評価のための学びへの傾向や形骸化する回答といった要因もみられることがわかり、今後の課題とした。木下隆志、大江まゆ子、大谷章子、岸本朝子 p. 17~p. 35、頁数 14</p> <p>保育養成校の3校における体験学習の効果について調査を行った結果、体験学習の事前から事後において学びの効果が確認できた。各アンケート項目の要因分析を行った結果、学生の心理的側面に影響を与えていることが検証できた。野呂育未、木下隆志、大江まゆ子、大谷章子、小林志保、原田健次 p. 103~p. 110、頁数 8</p>
<p>12 夜間保育の歴史的変遷と夜間保育を取りまく環境の考察 夜間保育をめぐる文献研究から(査読付)</p>	<p>単</p>	<p>令和元年 12 月</p>	<p>人間環境学研究 17 巻 2 号</p>	<p>夜間保育に関する文献研究から日本の夜間保育の歴史的変遷を概観し、夜間保育を要する子ども、保護者、保育者を取り巻く環境を考察することで保育者な今日の議論の一つの問題提起を行うことを目的とした論文。本研究により社会環境の観点では夜間保育における汰領域の課題の存在が示され、個人の観点では多くの人々による「夜間保育」への多様な考えや葛藤が確認された。これにより夜間保育を必要とする家族への支援が十分に提供されていないことが示唆されたと考えられる。 p. 127-138</p>
<p>【その他(講演や発表)】 1 保育者養成課程における体験学習と学生の変容(1)</p>	<p>共(筆)</p>	<p>平成 28 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 69 回大会, 於東京学芸大学</p>	<p>保育者養成課程における効果的な体験学習(内容・時期等)の検討・構築の一助とすることを目的とし、体験学習「赤ちゃん先生」(0~3歳の乳幼児とその母親との触れ合い体験)による学生の学年別変容を検証した発表。その結果、1年は目の前の相手理解に学び意識が働く傾向が高いのに対し、2年は関わり手としての自己意識を前提とし、相手理解に向けて相手の状況、抱えている気持ち理解に努め、その上でどう関わるべきかを考える傾向が高い実情が窺えた。</p>
<p>6 保育者養成課程における体験学習と学生の変容(2)</p>	<p>共</p>	<p>平成 28 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 69 回大会, 於東京学芸大学</p>	<p>学生の学習意欲や基礎的能力の課題を明らかにし、乳幼児ふれあい体験の効果を検証した。学生は、自身の能力や認められた経験の不足、実習の困難感から自己効力感の低下と学習・保育者への意欲の減退を招いており、意欲の向上には、実習の達成感や能力の向上、学びの面白さといった内発的要因が有効である。乳幼児ふれあい体験では、「自己受容」「自己肯定感」「授業・実習・保育者への意欲」や「学びへの興味」の向上に有効であり、2年生の変容が顕著で、体験を自身のことに引き付けて考察する能力の育ちが体験をより効果的にしていることが窺えた。</p>

7 保育者養成の質の向上に繋がる、体験学習の仕組みを考察する	共	平成 28 年 8 月	全国保育士養成協議会第 55 回研究大会、於いわて県民情報交流センター「アイーナ」	体験学習の構造化に関する指標について、3大学の共同調査を実施した。各大学で実施される体験学習について、その前後で、27項目、および、各大学のディプロマポリシーに関する8項目について、プリコード式と自由記述によるアンケートを実施した。その結果、平均値比較では、全項目において体験学習の効果は上昇していることがわかった。3大学の共通した体験学習の結果として、学生が将来像を推測しやすい体験では、ほとんどの項目で有意差を示す結果となり、学習効果の有用性を示すことができた。また、関連のある項目から実施時期と学習内容の関係を示すことを試みた。
8 体験学習「赤ちゃん先生」による学生・母親の変容(1)	共	平成 29 年 5 月	日本保育学会第 70 回大会、於川崎学園(川崎医療福祉大学・川崎医療短期大学・川崎医療大学)	短期大学 2 年間 4 回の継続した「赤ちゃん先生」実施による学生の変容と学びの深化検証を目的とした発表。学生は内発的な「理解動機」を持ち、「赤ちゃん・母親理解」や「子育て理解」することを学びと捉える傾向が高く、全体の 40%以上を占めていた。他の学びの視点である「技」は開催ごとに減少し「保育の本質理解」は増加している。初めは表層的理解、次にその行為意図を自分なりに読み取り、それに即した援助をしようと即応的实践力が育っている学生も多く見られた。教育的意図があっても表層的学びに止まる者、意図以上に創発的な学びをする者もあり、体験学習での個々の学びの評価と学びの共有化のシステム構築が課題である。
9 体験学習「赤ちゃん先生」による学生・母親の変容(2)	共(筆)	平成 29 年 5 月	日本保育学会第 70 回大会、於川崎学園(川崎医療福祉大学・川崎医療短期大学・川崎医療大学)	「赤ちゃん先生」実施による母親の変容を調査、検証することを目的とした発表。母親に最も変容が見られたのは自己肯定意識で変容の 51%を占め、次いで学習意識 33%、他者意識 16%の上昇が見られ、「赤ちゃん先生」実施は母親の自己肯定意識の高まりに最も効果があり、2 年を対象とした開催の方が、変容が大きいと示された。養成校における「赤ちゃん先生」の実施が、母親に特有のある種のカミからの解放を齎すものであれば、学生、子ども、母親にとって大きな意味を持ち、社会により循環を齎す取り組みと位置づけられると推察される。
10 乳幼児ふれあい体験の効果的プログラムの実践 一学年全体開催とゼミでの少人数継続開催との比較を通して一	共	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会第 33 回年会 於芦屋大学	乳幼児ふれあい体験における集団開催と少人数開催の学びの変容を比較、検証し、より効果的な体験学習を考える一助とすることを目的とした発表。すべての体験学習が能動的学修に繋がるのではなく、主体的に関わらざるを得ない人数設定、同じ母子との密接な関わりからくる関係形成など、没頭できる環境や時間の保障が肝要であることが示された。学生と母親(教員)との関係が互恵的である時、効果的変容と学生の能動性が引き出されていた。
11 妊娠期から育児期の情報	共	平成 30 年 3 月	日本保育者養成教育	妊娠期・育児期の情報および支

<p>ニーズおよび支援ニーズに関する予備調査 I</p>			<p>学会第 2 回大会 於共立女子大学</p>	<p>援ニーズを把握し、超早期からの子育て支援の構築を目的とし、妊婦、経産婦及び最終出産後4年以内の育児中の母親を対象に質問紙調査を行った。妊娠期・育児期の情報源はインターネットや友人・知人など身近で手軽な資源が利用され、公的機関による専門知識はあまり活用されていない実情が示された。また1子から3子の親準備プログラムの参加率および不安・関心の選択率の推移から、1子と2子以降では準備に対する意識や不安・関心も異なることが示された。</p>
<p>12 妊娠期から育児期の情報ニーズおよび支援ニーズに関する予備調査 II</p>	<p>共(筆)</p>	<p>平成 30 年 3 月</p>	<p>日本保育者養成教育学会第 2 回大会 於共立女子大学</p>	<p>1子と2子以降での妊娠期、育児期の関心と不安の違いについて、得られたテキストデータの分析結果から質的検討を行った。妊娠、育児期は育児経験を問わず「子育て」への関心が高く、2子以降は「きょうだいの子育て」に関心が最も高い。また、特に2子以降は妊娠期から育児期にかけて「上の子どもへの関わり」に不安が最も高く示された。1子と2子以降の妊娠、育児では経験により軽減される不安がある一方、「きょうだいの子育て」という新たな関心・不安への支援が必要とされていることが明らかになった。</p>
<p>13 人間関係の育みにつながる乳幼児ふれあい体験</p>	<p>共(筆)</p>	<p>平成 30 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 71 回大会、於宮城学院女子大学</p>	<p>ゼミの一環として実施した乳幼児ふれあい体験の内、「ベビーシッター体験」がもたらす学生と母親への変容を人間関係の育ちを中心に考察した発表。子どもとの濃密な関わりを迫られる環境で、学生は【子どもと関わる喜びの強まり】と【子育ての大変さ】を実感し、【保育者意識の深まり】が変容として示され、母親の変容には自らの【育児姿勢】を省み、【関係の喜び】【他者への信頼感の強まり】が示された。両者の変容はその後、自らや他者との向き合いに対する肯定的な心情の変化を持続していることが示された。</p>
<p>14 言葉の育ちにつながる乳幼児ふれあい体験</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 71 回大会、於宮城学院女子大学</p>	<p>能動的に「聞く」環境設定に変更した乳幼児ふれあい体験の効果と、赤ちゃんの言語、非言語メッセージを理解する学生と母親の視点を検証した。事前準備が赤ちゃんを共感的理解し、母親から関わりのヒントを得たいと能動的に「聞く」姿勢に変容している。学生は課題解決型の援助をしており、泣くことを自己表現と肯定的に捉え、関係構築を成長とみる学生は少数であった。一方、母親は他者との関係を築けるようになった自信のある表情などを読み取り、成長と捉え喜びとしている。</p>
<p>15 人的環境の学びにつながる乳幼児ふれあい体験</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 71 回大会、於宮城学院女子大学</p>	<p>授業の一環で行った乳幼児ふれあい体験の中で、学生と乳幼児が互いに唯一の存在となる託児体験を行い、学生と乳幼児がそれぞれ人的環境としてどのような影響を与え合う存在であるかを検証した。学生は乳幼児にとって自</p>

<p>16 夜間保育の現状についての探索的検討—夜間保育をめぐる文献調査から—</p>	<p>単</p>	<p>平成 31 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 72 回大会、於大妻子大学</p>	<p>分は不安をもたらす否定的存在と自己評価していた。一方母親は楽しさや興味を示しているわが子の姿は、学生を肯定的存在として受け止めているとし、全く対照的な捉えであった。しかし学生にも、乳幼児の声や表情を読み取ろうと積極的に関わろうとする姿があり、自分を肯定的存在へと向かわそうとする変容も表れていた。</p> <p>ニーズと制度があるにもかかわらず、認可夜間保育所が増えないのはなぜかという問題意識のもと、夜間保育がこれまでどのような観点から検討されてきたのかを文献展望を通して探索的に構造化することにより、夜間保育の現状を明確化することを目的とした発表。</p>
<p>17 全国夜間保育園利用児(者)実態調査—子ども・子育て支援新制度下での夜間保育園—【完成版】</p>	<p>共</p>	<p>令和元年 9 月</p>	<p>全国夜間保育園連盟</p>	<p>夜間保育を実施する認可保育施設の多くが加盟する全国夜間保育園連盟による約 10 年ぶりの実態調査の実査を櫻井慶一氏(文教大学名誉教授)とともに担当。全 43 頁。</p>
<p>18 夜間保育施設に求められる家庭支援:2019 年度全国夜間保育園連盟実態調査から</p>	<p>共(筆)</p>	<p>令和元年 10 月</p>	<p>第 16 回子ども学会議、於首都大学東京</p>	<p>約 10 年ぶりに実施する全国夜間保育園連盟による「2019 年度全国夜間保育園利用児(者)実態調査」から夜間保育施設に求められる家庭支援について考察することを目的とした研究発表。降園時間の深夜化に伴い、母子家庭の子育てに関する特記事項の増加が確認され、深夜に及ぶ夜間就労を必要とする母子家庭の困難さを支えている認可夜間保育施設の実情が示された。</p>
<p>19 夜間保育施設に求められる家庭支援(前編)、(後編)</p>	<p>単</p>	<p>令和2年 4 月</p>	<p>チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)</p>	<p>CRN による依頼原稿。全国夜間保育園連盟による実態調査から夜間保育施設に求められる家庭支援を考察した論考。調査から降園時間の深夜化に伴い、母子家庭の子育てに関する特記事項の増加が示され、親子の気になる姿として、親の養育力や家庭の孤立感、ひとり親家庭の子育て困難といった家庭の状況が浮上した。夜間保育施設に求められる家庭支援の役割の最重要事項の一つに、夜間保育を要する親子の子育てを含む生活の困難を軽減させ、親子ともに安心して生活することが保障される、地域のセーフティネットとしての機能が示唆された。</p>
<p><研究助成> 1 保育養成校協議会近畿ブロック研究助成</p>	<p>共同</p>	<p>平成 27 年 9 月～平成 28 年 8 月</p>	<p>保育養成校協議会近畿ブロック研究会</p>	<p>各養成校それぞれの体験学習を受ける学生を対象とし、体験学習の事前事後にアンケート調査を実施する。また、各養成校における体験学習の実施時期、ねらい、効果を比較、検証し、体験学習の在り方について考察する。助成 150 千円</p>

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 大谷 彰子						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著	発行 年月	出版社又は発 行雑誌等の名 称	執筆 ページ 数(総 ペー ジ数)	概 要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
保育 内容 IV (言 葉)	(著書) 1.『教職を目指す 人のための教育用 語・法規』	共	平成 25 年 3 月 (改訂平成 29 年 3 月)	ミネルヴァ書 房	4 (297)	教員志望者等の学生・一般が対象であるため平易な用語解釈を基本とする教育に関する法規とそれに関する用語解説書である。資料として、「教育ニ関スル勅語」や日本および西洋の教育史年表等も巻末に掲載されている。 以下の用語を解説した。「保育士」「児童福祉法」「児童権利宣言」「幼保一元化」「保育制度」「平和教育」 共著者: 広岡義之、猪田裕子、 <u>大谷彰子</u> 計 17 名
	2.『新しい幼児教育 方法・指導法』改訂	共	平成 25 年 3 月 (改訂平成 29 年 3 月)	ミネルヴァ書 房	6 (197)	学生や保育者を対象にした幼児の教育方法や指導法についてのテキスト。 具体的な事例をまじえ、保育現場における幼児教育方法の理論と保育の展開を分かりやすく解説している。(全 12 章) 以下の項目を執筆。 第 2 章 保育方法の本質 1 節 保育の方法とは何か 共著者: 広岡義之、 <u>大谷彰子</u> 他
	(学術論文) 1.「保育者養成課程における実習での自己評価と課題—実習記録の言葉と音楽に関する場面の読み取りから—」 (査読あり)	共	平成 24 年 3 月	保育士養成研 究 29 号 59— 68 頁	7 (10)	学生が実習において自身の保育を振り返り省察し、実習において何を学び得たのかを明らかにした。学生は、初回の実習では、保育技術や意欲・態度に関する省察を行なっている。一方、子どもの言葉の発達に対する援助として、最後の实習では、子どもの反応を見て、気持ちを考えながら言葉を掛けるなどの双方向的な保育をしようと工夫している。経験を積むことで、子どもの内面の声を捉えようとする保育者としての姿勢への変化が明らかとなった。 (執筆担当部分: はじめに、問題と目的、研究方法、結果と考察(1読み聞かせ部分)まとめ、引用文献) 共著者: <u>大谷彰子</u> 、今井順子、上田智佳
	(教育実践記録等) 1. 学生・赤ちゃん 相互の言葉の育ち につながる乳幼児	単	平成 31 年 3 月	芦屋学園短期 大学紀要 45 号 21—41 頁	21	乳幼児ふれあい体験を通し、学生の非言語メッセージ理解の深化と、赤ちゃんの母親以外の人とのふれあいが、言葉

	ふれあい体験－母親・学生の子ども理解の視点比較から－ (その他)学会発表 1.言葉の育ちにつながる乳幼児ふれあい体験	共	平成 30 年 5 月	日本保育学会第 71 回大会発表	2 (2)	の育ちに繋がるのかを検証することが目的であった。赤ちゃんは、学生と関わる際、信用できる人かを母親の様子を見て【相手を見極め】、学生に働きかけを促す【誘いかけ】をおこない、非言語メッセージを【意図的道具性】として使用し、そのサインに学生との間で通用する【協約性】を感じ、その子独自の【原言語】を使用し、【共感】し【愛着・安心】できる関係を築いている。 乳幼児ふれあい体験を通し、赤ちゃんの言語、非言語メッセージを学生と母親はどのような視点で「聞き」理解しているのか検証した。学生は非言語メッセージを丁寧に読み取り、赤ちゃんの「笑顔」を目指して不安な感情に共感、代弁し言葉の育ちの基礎としての心の通い合いが認められた。しかし、笑顔になることを目標とした課題解決型の援助になっており、泣くことを自己表現と肯定的に捉え、関係構築を成長とみる学生は少数であった。一方、母親は赤ちゃんが親以外の他者との関係を成長と捉え喜びとしている。 共著者:太谷彰子、木下隆志、大江まゆ子、岸本朝予
幼稚園参加実習	(著書) 1.『教職を目指す人のための教育用語・法規』	共	平成 25 年 3 月(改訂平成 29 年 3 月)	ミネルヴァ書房	4 (297)	再掲のため、略
	2.『新しい幼児教育方法・指導法』改訂	共	平成 25 年 3 月(改訂平成 29 年 3 月)	ミネルヴァ書房	6 (197)	再掲のため、略
	(学術論文) 1.「保育者養成課程における実習での自己評価と課題－実習記録の言葉と音楽に関する場面の読み取りから－」 (査読あり)	共	平成 24 年 3 月	保育士養成研究 29 号 59－68 頁	7 (10)	再掲のため、略
	2.「子ども理解」の捉えの変容プロセス－保育者養成学生と保育者の自己認識と相互の差異認識の比較を通して－ (査読付)	共	平成 27 年 3 月	社団法人全国保育士養成協議会 保育士養成研究第 32 号 11－20 頁	8 (10)	保育者養成校の学生、保育者を対象に、実習・保育経験による「子ども理解」の捉えの変容プロセスの検証を行った。入学直後の学生は、援助を通して自己有用感を味わう「自己満足の理解」。実習前の学生は、対応困難な子どもの「行動理由の理解」。保育実習Ⅱ終了後の学生は、保育者意識の芽生えの「保育者に向かう理解」。保育経験 1～3 年の保育者は、責任の重さと子どもを引き受

(教育実践記録等) 1. 「二年生保育者養成校における実習での幼児理解—保育者との比較から—」 (査読付)	単	平成 25 年 3 月	甲子園短期大学紀要 31 号 55—66 頁	12	ける「抱える理解」。経験 4 年以上の保育者は、その子の発達の「見極めの理解」と捉えており、保育者としての幼児理解の深化プロセスについて示唆する結果であった。 共著者： <u>太谷彰子</u> 、西條喜博
	単	平成 26 年 3 月	芦屋学園短期大学紀要 40 号 17—32 頁	16	実習におけるエピソード記録に着目し、学生は子どもが友達、保育者、実習生との関わりを通して、人間関係などの育ちをどのように認識し、そのための自身と保育者との援助の違いをどう捉えているのかについて明らかにした。学生はエピソード記録を描くことが幼児理解に有効であると捉えているが、1 年生は表層的な可視化できる姿や関わりに止まり、子どもの気持ちより「自分主体」の幼児理解である。2 年になると関係性の育ちなどの「子ども主体」の視点での幼児理解に意識が変容している。 共著者： <u>太谷彰子</u> 、西條喜博
	単	平成 30 年 3 月	芦屋学園短期大学紀要 44 号 85—103 頁	18	ルールに反した行動に対する周囲の子どもの対応を、人間関係における規範意識という視点で観察し、入学直後と卒業前の保育観と援助の変容を明らかにした。入学直後に「否定的理解」であった子ども理解の姿勢が、卒業間近には「肯定的理解」「共感的理解」に、主体者が「保育者主体」から「子ども主体」「相互主体」に、援助方法が「規範重視の権力的かかわり」から「受容・共感的かかわり」に変容していた。しかし、保育者の指示性や指導性を否定的に捉えるようになる学生も多く、子どもと保育者の主体性のバランスが「子ども主体」に傾いている学生もいる。保育者として子どもの規範意識を育成する責任感の醸成が課題としてあげられた。

研究業績等に関する事項(5 年以内)

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
-------------	----------------	----------------	------------------------	-----

【著書】 1.『新しい幼児教育方法・指導法』改訂	共	平成 25 年 3 月 (改訂平成 29 年 3 月)	ミネルヴァ書房	再掲のため、略
【学術論文】 1.アクティブラーニングとしての「赤ちゃん先生」プログラムの検討ー学年での集団開催とゼミでの少人数継続開催との比較を通してー 2. 学生・赤ちゃん相互の言葉の育ちにつながる乳幼児ふれあい体験ー母親・学生の子ども理解の視点比較からー 3. 子育てにおける母親の意識変容ー自己評価への影響要因ー 4. 母親としての役割認識による育児行動の変容ー母親概念と自己評価に着目してー	共 単 単 単	平成 29 年 8 月 平成 31 年 3 月 令和 2 年 3 月 令和 2 年 9 月	地域福祉サイエンス第 4 号 75ー84 頁 芦屋学園短期大学紀要 45 号 21ー41 頁 芦屋大学論叢 72 号 1-13 頁 芦屋大学論叢第 73 号 9-20 頁	乳幼児ふれあい体験における集団開催と少人数制開催での学びの効果と深化を可視化し、アクティブラーニングとなる体験学習の要因を検証した。その結果、①正解のない解決すべき課題がある ②理解したいと思う赤ちゃんとの愛着関係 ③自己開示と相互受容による自己肯定感の補強 ④自らの関わりを省察し、学びを俯瞰できるメタ認知 ⑤「聞く」より「体験」の先行 ⑥他人を意識せず能動的に関われる少人数設定 ⑦没頭できる環境と時間の保障の要件を満たした際にアクティブラーニングとなり、学生は能動的学修者となっていた。 共著者:大谷彰子・木下隆志・大江まゆ子・岸本朝予 再掲のため、略 子育てにおける母親意識の認識と変容、その要因について検証をおこなった。母親たちは、子育てに充実感や人間的成長を実感しており、柔軟性、自己抑制力、周囲との関係調整力、自己主張力の能力の成長が認められた。母親意識の醸成に一番効果的な時期は、「育休・産休中」であり、この時期に多様な社会や人との繋がり頻度が高いことが、意識向上に好影響を与えている。 母親アイデンティティの認識ごとに、自己評価や母親概念を分析し、その意識差が育児行動に与える影響を、820 名の母親を対象に調査し検証を行った。母親認識が不十分な母親は、未熟な準備期としての子ども観を持ち、子どもを変容させることが母親役割であると、他人に迷惑をかけないための他律的で指示的な育児を行っている。母親意識が醸成された母親は、子どもを信じて他者貢献の意識を育て自律的な行動規範を持っている。また、生き方モ

<p>5. 森のようちえんの子どもの生活習慣と学びに向かう力ー保護者アンケートによる既存園との比較よりー</p>	<p>単</p>	<p>令和3年3月</p>	<p>芦屋大学論叢第74号 21-35頁</p>	<p>デルとして側面的な援助をし、母親としての自信を得た前向きな育児を行っていた。</p> <p>森のようちえんの子どもの生活習慣と学びに向かう力の特性を既存園と比較することで明らかにした。森のようちえんの子どもたちは、《がんばる力》《自己主張》に優れ、《協調性》《自己抑制》に弱さがあることが明らかとなった。《がんばる力》は、自然環境に関わる時間に影響を受け、森(自然)を主たる生活の場所とし1日4時間以上身を置く場合に育まれており、園舎がないことで、逃げ場のない自然環境に身を置き続けることが《がんばる力》の育ちにつながっている。</p>
<p>【その他(講演や発表)】 1.母親になることの意味と役割認識ー母親としての自己評価と育児行動に着目してー</p>	<p>単</p>	<p>令和2年5月</p>	<p>日本保育学会第73回 大会研究発表論文集</p>	<p>母親アイデンティティの認識ごとに、母親としての自己評価や母親役割を分析し、その意識差が育児行動に与える影響を明らかにした。母親アイデンティティを受容した母親は、子どもを主体者として社会の一員に成長するために、自身が変容する柔軟さが認められた。受容していない母親は、新しい母親観を模索しようとしており、未熟な準備期としての子ども観を持ち、必要な規範や挨拶などを教え躰けるといった子どもを成長(変容)させることが母親の役割であるといった母親の主観的判断が尊重されていた。</p>

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 竹安 知枝					
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は発 表学会等の名 称	概 要
初等教科教育 法Ⅸ(体育)	(著書) 1.『これならわかる！健康科学入門』	単	平成 25 年 6 月	開成出版社 (73 頁)	栄養・運動・睡眠・免疫・病気などに関する基礎知識と健康に影響を与える要因について記した書籍である。(全頁数 73 頁) 神戸海星女子学院大学の「健康科学」の科目において、テキストとして使用した。また大阪成蹊短期大学の専門演習Ⅱの科目にて使用した。
	2.『小学校教諭をめざす学生のための一般教養リメディアルワーク	共	平成 24 年 4 月	開成出版社 (68 頁)	第6章「健康」を担当(pp.55-64)(全頁数68頁、樋口勝一編)小学校教諭を目指す学生のための一般教養を習得するためのテキストである。神戸海星女子学院大学の一般教養科目においてテキストとして採用された。
	3.『子どもの保健と安全』	共	令和2年3月	教育情報出版 (192 頁)	再掲のため、略
	(学術論文) 1. 遊びの教育的意義と現状—幼児期の外遊びを中心として—	単	平成 25 年 7 月	芦屋大学論叢 (第 59 号) pp.35-43	教育的観点から、子どもの遊びについて記し、子どもたちの遊びの現状を調査し明らかにすることを通して、現在の子どもたちを取り巻く環境を考察し、子どもにとっての遊びの重要性について記した論文である。
	2. 児童期の遊びの好みと青年期の運動に対する好き・嫌いに与える影響	共 (代表)	平成 28 年 4 月	大阪成蹊短期 大学研究紀要 (第 13 号) pp.37-41	児童期の遊びの好み(室内遊びが好きだったか・外遊びが好きだったか)が、食習慣と体育や運動に対する好き・嫌いに与える影響について兵庫県下の女子大学生を対象にアンケート調査を実施し考察した。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)
3. 子どもの頃の外遊びの頻度がその後の運動に対する主観的評価(好き・	単	平成 30 年 11 月	芦屋大学論叢 (第 70 号) pp.23-30.	大阪市内の女子短期大学生を対象に児童期の遊び(外遊びの頻度)と小学校体育やその後(現在)の運動に対する主観的	

	嫌いに与える影響 (教育実践記録等) 1. 小学校時代における運動の「好き」・「嫌い」が体力に及ぼす影響について—女子大学生を対象に— 2. 児童期の遊びの好みがその後の運動に対する主観(好き・嫌い)に与える影響	単 単	平成 26 年 6 月 平成 29 年 6 月	兵庫教育大学 嬉野体育研究会『健』(第 36 号) pp.7-14 兵庫教育大学 嬉野体育研究会『健』(第 39 号) pp.5-9	評価(好き・嫌い)に関するアンケート調査を実施した。その結果、外遊びをほぼ毎日している場合、週に1・2回(もしくはほとんどしていない)場合と比較して、小学校体育とその後(青年期)の運動に対して好意的に捉える可能性が高い($p < 0.01$)という事が示唆された。 小学校時代に運動・体育が好きであったかどうかと、中学校・高校時代の運動の習慣との関連について検証し、また体育を好意的に捉えるために重要な要素について考察した。 再掲のため、略
児童体育	(学術論文) 1. 遊びの教育的意義と現状—幼児期の外遊びを中心として— 2. 児童期の遊びの好みが青年期の運動に対する好き・嫌いに与える影響 3. 子どもの頃の外遊びの頻度がその後の運動に対する主観的評価(好き・嫌い)に与える影響 (教育実践記録等) 1. 小学校時代における運動の「好き」・「嫌い」が体力に及ぼす影響について—女子大学生を対象に	単 共(代表) 単 単	平成 25 年 7 月 平成 28 年 4 月 平成 30 年 11 月 平成 26 年 6 月	芦屋大学論叢(第 59 号) pp.35-43 大阪成蹊短期大学研究紀要(第 13 号) pp.37-41 芦屋大学論叢(第 70 号) pp.23-30. 兵庫教育大学 嬉野体育研究会『健』(第 36 号) pp.7-14	再掲のため、略 再掲のため、略 再掲のため、略 再掲のため、略
幼児体育	(学術論文) 1. 幼稚園児を対象に体力の向上を目的とした運動遊びに関する一考察 2. 幼児の運動能力の要素間におけ	共(代表) 単	平成 24 年 3 月 平成 25 年 1 月	神戸海星女子学院大学研究紀要(第 50 号) pp.61-67 芦屋大学論叢(第 58 号)	幼児の体力向上に寄与する運動遊びについて多種多様な運動遊びを実践し、運動介入前後に体力測定(筋力・巧緻性・柔軟性など)を実施し、考察した論文である。(竹安知枝・山本忠志・岡田隆造) 幼児期における各運動能力(筋力・瞬発力・敏捷性・柔軟性な

	<p>る関連性についての一考察</p> <p>3. 幼児の運動能力の性差に関する一考察</p> <p>4. 体力の向上を目的とした幼児の運動遊びに関する研究—縄跳び遊びを通して—</p> <p>5. 幼児の外遊びに関する一考察</p> <p>6. 幼少期の遊びがその後の運動習慣・体力に与える影響についての一考察</p> <p>7. 遊びが運動能力と体格に及ぼす影響についての一考察—年長児を対象に—</p> <p>8. 都市部と農村部における幼児の運動能力の比較～大阪市と姫路市の年長児を対象に</p> <p>9. 幼少期の遊びがその後の人格形成に与える影響</p>	<p>単</p> <p>単</p> <p>単</p> <p>単</p> <p>共 (代表)</p> <p>共 (代表)</p> <p>共 (代表)</p>	<p>平成 25 年 3 月</p> <p>平成 25 年 9 月</p> <p>平成 26 年 3 月</p> <p>平成 26 年 3 月</p> <p>平成 28 年 4 月</p> <p>平成 29 年 4 月</p> <p>平成 31 年 9 月</p>	<p>pp.43-54</p> <p>神戸海星女子学院大学研究紀要(第 51 号)pp.39-44</p> <p>日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第5 卷)pp.29-38</p> <p>神戸海星女子学院大学研究紀要(第52 号) pp.25-29</p> <p>日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第6 卷)pp.43-51</p> <p>日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第8 卷) pp.7-13</p> <p>大阪成蹊短期大学研究紀要(第 14 号) pp.81-84</p> <p>日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第 11 卷第 2 号) pp.1-7.</p>	<p>ど)の要素間の関連(相関関係)について体力測定を行い、結果について男女別に考察した。</p> <p>幼児(年長児を対象)の運動能力(筋力・瞬発力・調整力・柔軟性など)において、各要素の性差について調査し考察を行なった論文である。</p> <p>効率的に短期間で、幼児の運動能力を伸ばす運動遊びを検討した研究である。縄跳び遊びに着目し、短期間(約 40 日間)での縄跳び遊びの効果について検証した論文(原著)である</p> <p>幼児期における遊びの重要性と子どもの遊びの現状(室内遊びを中心としているか外遊びを中心としているか)について考察し、遊びと社会性の発達の観点からも考察した論文である。</p> <p>幼少期の遊び(室内遊び・外遊び)の習慣が、その後の運動習慣にどのように影響を与え、またどのような体力要素(筋力・瞬発力・敏捷性・柔軟性など)に影響を与えるかについて検証した論文(原著)である。</p> <p>幼児期の遊びの好みは運動能力に及ぼす影響について、また子どもの居住環境(都市部と農村部)と体格との関連について考察した論文(原著)である。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)</p> <p>都市部と農村部の幼児を対象に運動能力テストと保護者を対象にアンケート調査を実施した。その結果、農村部に居住している幼児は都市部に居住している幼児と比べて運動能力が高い水準であることが示唆された。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)</p> <p>大阪市内の短期大学の1年生 236 名を対象に幼少期の遊びに関するアンケート調査を実施し、遊びの好み(外遊び・室内遊び)と、遊びがその後の人格形成(性格・社会性)や体力に与える影響について考察し、幼少期の遊びの重要性について示した。</p>
--	--	---	--	---	--

(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)					
保育内容 I (健康)	(著書) 1.『これならわかる！健康科学入門』	単	平成 25 年 6 月	開成出版社 (73 頁)	再掲のため、略
	2.『幼稚園教諭・保育士をめざす学生のための一般教養リメディアルワーク』	共	平成 25 年 9 月	開成出版社 (96 頁)	第5章「子どもの健康」を担当(p p.75-90)(全頁数96頁、樋口勝一編)幼稚園教諭・保育士を目指す学生のための一般教養を習得するためのテキストである。神戸海星女子学院大学の一般教養科目においてテキストとして採用された。
	3.『生活事例からはじめるー保育内容ー健康』	共	平成 28 年3月	青踏社 (208 頁)	保育内容の領域「健康」に関する内容であり、第4章1節「遊びの実際」(pp.58-70)と2節「健康な生活習慣の自立とリズム」(pp.79-95)担当(全 208 頁中、計 30 頁)。「保育内容 健康」の科目において、テキストとして複数の大学にて使用されている。(徳安敦他編著 著者竹安知枝他)
	4.『保育・教職実践演習 ーわたしを見つめ、求められる保育者になるためにー』	共	平成 29 年 10 月	ミネルヴァ書房 (190 頁)	保育内容の全領域から、保育における現在の課題に至るまで、具体的に示した書籍であり、複数の大学で(保育・教職実践演習の科目において)テキストとして採択されている。保育内容「健康」の領域について(pp.20-21)担当した。(全頁数190頁、寺田恭子・榊原志保・高橋一夫編著)
	5.『生活事例からはじめるー保育内容ー健康』	共	平成 30 年3月	青踏社 (222 頁)	保育内容の領域「健康」に関する内容であり、第4章「健康な生活習慣」pp.90-106(17 頁)を担当。「保育内容 健康」の科目において、テキストとして複数の大学にて使用されている。全 222 頁。(近藤幹夫監修 著者竹安知枝 他)
	6.『子どもの保健と安全』	共	令和2年3月	教育情報出版 (192 頁)	再掲のため、略
(学術論文) 1. 遊びの教育的意義と現状ー幼児期の外遊びを中心としてー	単	平成 25 年 7 月	芦屋大学論叢 (第 59 号) pp.35-43	再掲のため、略	
2. 幼少期の遊びがその後の運動習	単	平成 26 年 3 月	日本幼児体育学会 幼児体	再掲のため略	

	<p>慣・体力に与える影響についての一考察</p> <p>3. 遊びが運動能力と体格に及ぼす影響についての一考察一年長児を対象に一</p> <p>4. 幼少期の遊びがその後の人格形成に与える影響</p> <p>(教育実践記録等)</p> <p>1. 「子どもの頃の体験が大人になってどのような影響を及ぼすか」に関する調査 ～未来へはばたく子どもたちのために～</p> <p>2. 環境が幼児の運動能力に与える影響 ～幼児の居住環境に着目して～</p>	<p>共 (代表)</p> <p>共 (代表)</p> <p>共</p> <p>単</p>	<p>平成 28 年 4 月</p> <p>平成 31 年 9 月</p> <p>平成 25 年 3 月</p> <p>平成 30 年 6 月</p>	<p>育学研究(第6巻)pp.43-51</p> <p>日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第8巻)pp.7-13</p> <p>日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第11 巻第2号) pp.1-7.</p> <p>兵庫県青少年団体連絡協議会 (全 32 頁)</p> <p>兵庫教育大学 嬉野体育研究会『健』(第 40 号)</p>	<p>再掲のため、略</p> <p>再掲のため、略</p> <p>再掲のため、略</p> <p>大阪市の都市部と姫路市の農村部に居住する幼児を対象に、運動能力テストと保護者を対象としたアンケート調査を実施した。その結果、農村部に居住する幼児は、都市部に居住している幼児と比べて運動能力が高い傾向にあることが示唆された。</p>
--	---	---	---	---	---

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
<p>【著書】</p> <p>1. 『共感と思いやりの心理』</p> <p>2. 『これならわかる！健康科学入門』</p>	<p>共著</p> <p>単著</p>	<p>2013 年 4 月</p> <p>2013 年 6 月</p>	<p>開成出版社</p> <p>開成出版社</p>	<p>第2章(2)「子どもの身体による感情表現」を担当 (pp.8-11) (全頁数56頁、澤田瑞也、<u>竹安知枝</u>編) 援助職を目指す人のための心理(共感と思いやり)についての指導本である。神戸海星女子学院大学の心理系科目においてテキストとして採用されている。</p> <p>栄養・運動・睡眠・免疫・病気などに関する基礎知識と健康に影響を与える要因(主に飲酒・喫煙など)について記した書籍である。(全頁数 73 頁) 神戸海星女子学院大学の「健康科学」の科目において、テキストと</p>

3. 『幼稚園教諭・保育士をめざす学生のための一般教養リメディアルワーク』	共著	2013年9月	開成出版社	<p>して使用した。また大阪成蹊短期大学の専門演習Ⅱの科目にて使用した。</p> <p>第5章「子どもの健康」を担当(pp.75-90)(全頁数96頁、樋口勝一編)</p> <p>幼稚園教諭・保育士を目指す学生のための一般教養を習得するためのテキストである。神戸海星女子学院大学の一般教養科目においてテキストとして採用された。</p>
4. 『小学校教諭をめざす学生のための一般教養リメディアルワーク』	共著	2014年4月	開成出版社	<p>第6章「健康」を担当(pp.55-64)(全頁数68頁、樋口勝一編)小学校教諭を目指す学生のための一般教養を習得するためのテキストである。神戸海星女子学院大学の一般教養科目においてテキストとして採用された。</p>
5. 『レジリエンスの心理』	共著	2014年9月	開成出版社	<p>第9章「レジリエンスと運動」を担当。(pp.35-38)(全頁数42頁、澤田瑞也、中植満美子編)トラウマや重い病気からの精神的回復や運動が精神に与える影響などについて記したテキストである。神戸海星女子学院大学の心理系科目においてテキストとして採用されている。</p>
6. 『生活事例からはじめるー保育内容ー健康』	共著	2016年3月	青踏社	<p>保育内容の領域「健康」に関する内容であり、第4章1節「遊びの実際」(pp.58-70)と2節「健康な生活習慣の自立とリズム」(pp.79-95)担当(全208頁中、計30頁)。「保育内容 健康」の科目において、テキストとして複数の大学にて使用されている。(徳安敦他編著 著者竹安知枝 他)</p>
7. 『保育・教職実践演習ーわたしを見つめ、求められる保育者になるためにー』	共著	2017年10月	ミネルヴァ書房	<p>保育内容の全領域から、保育における現在の課題に至るまで、具体的に示した書籍であり、複数の大学で(保育・教職実践演習の科目において)テキストとして採択されている。</p> <p>保育内容「健康」の領域について(pp.20-21)担当した。(全頁数190頁、寺田恭子・榊原志保・高橋一夫編著)</p>
8. 『生活事例からはじめるー保育内容ー健康』	共著	2018年3月	青踏社	<p>保育内容の領域「健康」に関する内容であり、第4章「健康な生活習慣」pp.90-106(17頁)を担当。「保育内容 健康」の科目において、テキストとして複数の大学に</p>

9. 『大学生生活入門～幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザイン～』	共著 (編著)	2019年4月	開成出版社	て使用されている。全222頁。(近藤幹夫監修 著者竹安知枝 他) 大学生対象(教育系学部所属の学生用)の初年次教育科目で使用されるテキストである。幼稚園教諭・小学校教諭・特別支援教諭・保育士を目指すための重要な要素に関する事柄、また基礎学力を身に付けるための内容となっている。全75頁。Ⅰ-1、Ⅱ-1、Ⅱ-3 計16頁担当。(笠原清次・渡康彦 監修、石田愛子・竹安知枝 編著)
10. 『子どもの保健と安全』	共著	2020年4月	教育情報出版	子どもの心身の健康(生理機能・運動機能の発達など)と保健(病気の予防と手当・感染症対策・保健指導)、安全管理等に関する事柄について記された書籍であり、「子どもの保健」関連科目の大学生用のテキストとして、複数の大学において使用予定。(全192頁)第1章3節と第6章1節の計4頁を担当。(高内正子編著、著者竹安知枝他)
【学術論文】 1. 幼稚園児を対象に体力の向上を目的とした運動遊びに関する一考察 2. 幼児の運動能力の要素間における関連性についての一考察 3. 幼児の運動能力の性差に関する一考察 4. 遊びの教育的意義と現状—幼児期の外遊びを中心として— 5. 体力の向上を目的とした幼児の運動遊びに関する研	共著 (代表) 単著 単著 単著	2012年3月 2013年1月 2013年3月 2013年7月 2013年9月	神戸海星女子学院大学研究紀要(第50号) pp.61-67 芦屋大学論叢(第58号) pp.43-54 <u>査読あり</u> 神戸海星女子学院大学研究紀要(第51号) pp.39-44 芦屋大学論叢(第59号) pp.35-43 <u>査読あり</u> 日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第5	幼児の体力向上に寄与する運動遊びについて多種多様な運動遊びを実践し、運動介入前後に体力測定(筋力・巧緻性・柔軟性など)を実施し、考察した論文である。(竹安知枝・山本忠志・岡田隆造) 幼児期における各運動能力(筋力・瞬発力・敏捷性・柔軟性など)の要素間の関連(相関関係)について体力測定を行い、結果について男女別に考察した論文(調査報告書)である。 幼児(年長児を対象)の運動能力(筋力・瞬発力・調整力・柔軟性など)において、各要素の性差について調査し考察を行なった論文である。 教育的観点から、子どもの遊びについて記し、子どもたちの遊びの現状を調査し明らかにすることを通して、現在の子どもたちを取り巻く環境を考察し、子どもにとっての遊びの重要性について記した論文である。 効率的に短期間で、幼児の運動能力を伸ばす運動遊びを検討し

究一縄跳び遊びを通して— (<u>原著論文</u>)			卷)pp.29-38 <u>査読あり</u>	た研究である。縄跳び遊びに着目し、短期間(約 40 日間)での縄跳び遊びの効果について検証した論文(原著)である。
6. 運動の好き嫌いと体力の関連性についての一考察	<u>単著</u>	2014 年1月	芦屋大学論叢(第 60 号)pp.63-72 <u>査読あり</u>	運動に対する主観的評価(好き・嫌い)と体力(筋力・瞬発力・敏捷性・柔軟性など)との関連性について、103 名を対象に体力測定とアンケート調査を実施し考察した論文(調査報告)である。
7. 幼児の外遊びに関する一考察	<u>単著</u>	2014 年3月	神戸海星女子学院大学研究紀要(第 52 号)pp.25-29	幼児期における遊びの重要性と子どもの遊びの現状(室内遊びを中心としているか外遊びを中心としているか)について考察し、遊びと社会性の発達の観点からも考察した論文である。
8 幼少期の遊びがその後の運動習慣・体力に与える影響についての一考察(<u>原著論文</u>)	<u>単著</u>	2014 年 3 月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第 6 卷)pp.43-51 <u>査読あり</u>	幼少期の遊び(室内遊び・外遊び)の習慣が、その後の運動習慣にどのように影響を与え、またどのような体力要素(筋力・瞬発力・敏捷性・柔軟性など)に影響を与えるかについて検証した論文(原著)である。
9. 子どもの頃の体験がその後に及ぼす影響について—遊びの体験を中心に—	<u>単著</u>	2014 年 7 月	芦屋大学論叢(第 61 号)pp.77-86 <u>査読あり</u>	20~60 歳代の男女 250 名を対象に「子どもの頃の体験が現在どのような事に役立っているか」についてアンケート調査を行い、子どもの頃の遊びの効用について考察を行った論文(研究ノート)である。
10. 運動ストレスが及ぼす口腔内抗菌性ペプチドおよび虫歯菌への影響	共著	2014 年 12 月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 24 号 pp.1-4 <u>査読あり</u>	運動ストレスに伴う口腔内免疫機能の変化と虫歯菌活性との関連について検討したものであり、唾液抗菌性ペプチド群である HBD-2 濃度は、運動終了 6 時間後、24 時間後に減少し、虫歯菌に対する唾液抗菌能力が低下することが示唆された。(臼井達矢・辻慎太郎・織田恵輔・ <u>竹安知枝</u>)
11. スポーツの重要性和普及に関する一考察—テニスに着目して—	<u>共著(代表)</u>	2015 年4月	大阪成蹊短期大学研究紀要(第 12 号)pp.31-34	スポーツの重要性和普及に関して、生涯スポーツであるテニスに着目し、大学生を対象にアンケート調査を実施し、考察を行なった。結果、テニスの普及のために重要な要因について示唆された。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎)
12. 高強度長時間運動に伴う口腔内免疫および虫歯菌活性度の変化	共著	2015 年 4 月	大阪成蹊短期大学研究紀要(第 12 号)pp.14-19	高強度長時間運動に伴う口腔内免疫の変化と虫歯菌活性の関連性について検討した論文である。(臼井達矢・辻慎太郎・織田恵

13. 体力と注意機能の関係性	共著	2015年4月	大阪成蹊短期大学研究紀要(第12号) pp.20-24	輔・ <u>竹安知枝</u>) 体力(運動を行い体力を高めること)と注意機能との関連性について検討した論文である。(織田恵輔・ <u>竹安知枝</u> ・辻慎太郎・臼井達矢)
14. 遊びが運動能力と体格に及ぼす影響についての一考察—年長児を対象に— (<u>原著論文</u>)	共著 (<u>代表</u>)	2016年4月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第8巻) pp.7-13 <u>査読あり</u>	幼児期の遊びの好みは運動能力に及ぼす影響について、また子どもの居住環境(都市部と農村部)と体格との関連について考察した論文(原著)である。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)
15. 児童期の遊びの好みは青年期の運動に対する好き・嫌いに与える影響	共著 (<u>代表</u>)	2016年4月	大阪成蹊短期大学研究紀要(第13号) pp.37-41	児童期の遊びの好み(室内遊びが好きだったか・外遊びが好きだったか)が、食習慣と体育や運動に対する好き・嫌いに与える影響について兵庫県下の女子大学生を対象にアンケート調査を実施し考察した。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)
16. 6ヶ月間の中等度運動トレーニングが口腔内粘膜免疫および虫歯菌活性に及ぼす影響	共著	2016年4月	大阪成蹊短期大学研究紀要(第13号) pp.1-5	中等度のトレーニングを6ヶ月間実施し、それが口腔内の免疫と虫歯菌の活性にどのような影響を与えるかについて調査した。その結果6ヶ月間の定期的な運動実践はこれらに影響を与えることが示唆された。(臼井達矢・辻慎太郎・松尾貴司・織田恵輔・ <u>竹安知枝</u>)
17. 加齢による Trail Making Test の変化	共著	2016年4月	大阪成蹊短期大学研究紀要(第13号) pp.13-18	Trail Making Test (TMT) は注意の探索性、選択や転換性を評価する尺度として用いられており、加齢と注意力との関連性について、これを用いて調査した。その結果、TMT の測定値は加齢と共に延長すること(これらの関係性について)が示唆された。(織田恵輔・ <u>竹安知枝</u> ・辻慎太郎・松尾貴司・臼井達矢)
18. 長距離マラソンランナーにおける唾液抗菌性ペプチドと虫歯菌および上気道感染症との関連	共著	2016年12月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 26号 pp.1-4 <u>査読あり</u>	マラソントレーニングを行っているアスリートを対象に唾液 HBD-2 濃度を測定するとともに、その上清の存在下で培養した場合の菌の発育程度と上気道感染の発生頻度を調べ、それらの関連性について考察した。(臼井達矢・永井伸人・辻慎太郎・ <u>竹安知枝</u>)
19. 都市部と農村部における幼児の運動能力の比較 ～大阪市と姫路市の年長児	共著 (<u>代表</u>)	2017年4月	大阪成蹊短期大学研究紀要(第14号) pp.81-84	都市部と農村部の幼児を対象に運動能力テストと保護者を対象にアンケート調査を実施した。その結

<p>を対象に～</p> <p>20.高強度運動による口腔内抗菌性ペプチドの変化と神経内分泌応答との関連</p>	<p>共著</p>	<p>2018年3月</p>	<p>教育医学第63巻3号 <u>査読あり</u></p>	<p>果、農村部に居住している幼児は都市部に居住している幼児と比べて運動能力が高い水準であることが示唆された。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)</p> <p>唾液抗菌性ペプチドに対する一過性の高強度運動の影響とストレスホルモンとの関連性について検討した。その結果、一過性の高強度運動は唾液抗菌性ペプチドを有意に増加させるが、ストレスホルモンであるコルチゾールの分泌に伴い、その分泌が抑制されることが示唆された。(臼井達矢・辻慎太郎・永井伸人・竹安知枝)</p>
<p>21.障がい者スポーツの普及促進に向けた取り組みに関する一考察 ～「近畿アンリミテッド・パラ陸上(ナイター)」における国内初の試みに着目して～</p>	<p>共著 (代表)</p>	<p>2018年3月</p>	<p>芦屋大学論叢(第69号)pp.49-60. <u>査読あり</u></p>	<p>国内初の3つの試み(障がいの有無に関わらず参加が可能・夏のナイターでの開催・民間からの出資100%により実施)により開催された「近畿アンリミテッド・パラ陸上」に着目し、参加選手に大会の有用性について調査を実施した結果、この3つの試みにおける大会の有用性について示唆され、今後の障がい者スポーツを普及促進させるための一助を得ることができた。(竹安知枝・北林直哉・織田恵輔)</p>
<p>22.サッカースクールに所属する幼児の足趾把持筋力と体力因子との関連性</p>	<p>共著</p>	<p>2018年3月</p>	<p>日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第10巻)pp.101-108. <u>査読あり</u></p>	<p>サッカースクール(週2回)に所属する幼児(その他のスポーツは実践していない)を対象に、足趾把持筋力が体力因子(スピード・静的バランス・反応性・敏捷性等)との関連性について調査した。その結果、足趾把持筋力とスピード・反応性・バランスに関する体力因子との関連性が認められた。(辻慎太郎・永井伸人・竹安知枝・臼井達矢)</p>
<p>23. 子どもの頃の外遊びの頻度がその後の運動に対する主観的評価(好き・嫌い)に与える影響</p>	<p>単著</p>	<p>2018年3月</p>	<p>芦屋大学論叢(第70号)pp.23-30. <u>査読あり</u></p>	<p>大阪市内の女子短期大学生女子236名を対象に児童期の遊び(外遊びの頻度)と小学校体育やその後(現在)の運動に対する主観的評価(好き・嫌い)に関するアンケート調査を実施した。その結果、外遊びをほぼ毎日している場合、週に1・2回(もしくはほとんどしていない)場合と比較して、小学校体育とその後(青年期)の運動に対して好意的に捉える可能性が高い($p < 0.01$)という事が示唆された。</p>

24. 中学生女子バレーボール選手の身体特性と体力がスパイク速度に及ぼす影響	共著	2019年2月	スポーツサイエンス第13号(1) pp.17-32. <u>査読あり</u>	中学生女子バレーボール選手を対象に、スパイク速度と身体特性や体力測定を行い、身体特性や体力がスパイク速度に与える影響について検討した。その結果、体重およびBMIとスパイク速度との間に有意な相関が認められた。また、体力とスパイク速度との連については、立幅跳びとスパイク速度との間に有意な相関が認められ、立ち幅跳びがスパイク速度に影響を及ぼす重要な体力因子であることが示唆された。(青木敦英・石川俊・竹安知枝)
25. 障がい者(子ども)のスポーツイベントの普及に向けて	<u>単著</u>	2019年3月	日本産業科学学会 研究論叢 第24号 pp.51-56. <u>査読あり</u>	障がい者スポーツの今後の普及・促進に向け、有効的なイベント・取り組み等を行っていくために重要とされる要素について検討した。障がい者スポーツ施設で実施された、障がい者(子ども)のスポーツイベントにおいて41名を対象にアンケート調査を実施した。そして、アンケート結果について多角的な観点から考察し、今後の障がい者スポーツのイベント開催に向けて、重要な要素と課題について示した。
26. 大学の特徴を生かした教員への就職支援に関する一考察－芦屋大学での教員採用試験対策講座をもとに－	共著	2019年7月	芦屋大学論叢(第71号)pp.21-30. <u>査読あり</u>	小規模大学(定員1000名)の大学における教員採用試験対策講座への参加を促す方策について取り上げ、考察することで、小規模大学における教員就職支援のための取り組み方法について検討した。(笠原清次・竹安知枝・森谷享・青木敦英・若杉祥太・石川峻・辻尚志・雄倉春来)
27. 幼少期の遊びがその後の人格形成に与える影響	<u>共著(代表)</u>	2019年9月	日本幼児体育学会 幼児体育学研究(第11巻第2号) pp.1-7. <u>査読あり</u>	大阪市内の短期大学の1年生236名を対象に幼少期の遊びに関するアンケート調査を実施し、遊びの好み(外遊び・室内遊び)と、遊びがその後の人格形成(性格・社会性)や体力に与える影響について考察し、幼少期の遊びの重要性について示した。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)
28. 障がい者のスポーツイベントに関する一考察	<u>共著(代表)</u>	2019年12月	アダプテッド体育・スポーツ学研究 第5号 pp.18-21	民間出資100%で実施された国内初の障がい者スポーツイベントに関して、協賛企業やボランティアから見た有用性についてアンケート調査を実施し考察した。その結果、今後の障がい者スポーツイベントを活性化させる手がかりを得ることができた。(竹安知

29. 要支援・要介護高齢者の運動機能改善に向けたRedcoRd 運動の効果について	共著	201年12月	神戸医療福祉大学研究紀要 20 卷(1) pp.41-4	枝・青木敦英・石川峻) RedcoRd を用いた運動療法が要介護高齢者の運動能力に与える影響について検討した。調査方法は、41名の要介護者41名を対象に1回60分のRedcoRdを用いた運動を週に2回1年間実施した。そして、介入前後に運動機能を評価した結果、この運動は運動機能の改善に効果的であることが示された。(辻慎太郎・織田恵輔・永井伸人・ <u>竹安知枝</u> ・臼井達矢・涌井忠昭)
30. 1年間の中等度運動トレーニングの実践が口腔内粘膜免疫および虫歯菌活性に及ぼす影響	共著	2020年2月	日本教育医学会 65巻3号 pp.184-190. <u>査読あり</u>	中等度強度の運動トレーニングの実践が口腔内局所免疫機能に及ぼす影響について検討した。その結果、唾液 HBD-2 は 35.9 ± 7.4 から 60.4 ± 8.7 pg/mL と有意に増加し、虫歯菌に対する菌抑制効果は介入後に有意に高まった。1年間の中等度強度での運動トレーニングの実践は安静時の唾液 HBD-2 濃度を高め、さらに虫歯菌抑制効果が有意に高まることが示唆された。(臼井達矢・辻慎太郎・永井伸人・ <u>竹安知枝</u> ・織田恵輔)
31 ミニテニスのイメージに関する調査—大学生を対象に—(調査報告)	共著 (代表)	2020年3月	芦屋大学第論叢第 72号) pp.79-88 <u>査読あり</u>	ミニテニスの普及・活性化に向けての手がかりを得ることを目的に、大学生 103 名を対象に認知度とイメージに関するアンケート調査を実施した。その結果、ミニテニスの認知度に関しては、低い結果であったが、このスポーツに関して肯定的なイメージを持っている人の割合が多いことがわかった。また、「健康的」「楽しい」「ルールが簡単」の3つのキーワードが普及につながる可能性があると考えられた。(竹安知枝・青木敦英・臼井達矢)
32 ミニテニスの意識に対する調査—経験者を対象に—	共著 (代表)	2020年9月	芦屋大学論叢(第73号) pp.97-105 <u>査読あり</u>	ミニテニスの経験者男女55名(40~80歳代)を対象に、このスポーツに対する意識についてアンケート調査を実施した。その結果、ミニテニスに対して「健康に良く安全に実施でき、かつ経済的である」と捉えている人が大半を占めていることが明らかになり、今後の我が国における生涯スポーツの一つとして、ミニテニスが普及していくことが望ましいと考えられる。(竹安知枝・青木敦英・石川峻・臼井達矢)

33. バスケットボール競技におけるクォーターごとの得点傾向と勝敗との関係 —関西学生バスケットボールリーグを対象として—	共著	2020年9月	芦屋大学論叢(第73号)pp.1-7 <u>査読あり</u>	バスケットボール競技における試合の「流れ」について、4つのクォーターの得点傾向から明らかにすることを目的として調査を実施した。その結果、バスケットボールの競技特性として2Q<4Qの得点傾向となることを明らかにするとともに、競技レベルによって勝敗と関係するクォーターが異なることが示唆された。これらの知見は今後の試合に活かすことで勝率を高めることが期待できる。 (青木敦英・石川峻・竹安知枝)
34. 中年女性におけるオーラルフレイル予防に向けた水中運動トレーニングの有効性 (原著論文)	共著	2021年3月	日本教育医学会 第66巻3号 pp.202-210, <u>査読あり</u>	口腔内免疫機能を高めると考えられる水中運動トレーニングに焦点を当て、口腔局所免疫機能およびストレプトコッカスニュータンス増殖阻害効果に対する水中運動トレーニングの影響を調査した。 (臼井達矢・辻慎太郎・松尾貴司・永井伸人・竹安知枝・織田恵輔)
35 テニスの UTR(Universal Tennis Ratings)システムについて	単著	2021年3月	日本産業科学学会 研究論叢 第26号 pp.71-74 <u>査読あり</u>	テニスの UTR(Universal Tennis Ratings)システム(テニスのレーティングシステム、いわゆる選手の「格付け」を示すものであり、アメリカを中心にヨーロッパに広まっている。日本を含むアジアでは、まだまだあまり認知されていない)について取り上げ、国内の普及に向けた課題について考察した。
36. 男子大学生における足趾把持筋力と動作遂行能力の関係：走力、跳躍力、敏捷性およびバランス能力に着目して	共著	2021年3月	関西大学大学院人間健康研究科院生協議会 人間健康研究論集(4)pp.1-20	足趾把持筋力と動作遂行能力である、走力および跳躍力、敏捷性との間に有意な相関が認められた。以上の結果から、男子大学生における足趾把持筋力は、動作遂行能力である走力、跳躍力および敏捷性と関連があることが明らかとなり、スポーツにおいて欠かせない体力の一つであることが確認された。(辻慎太郎・臼井達矢・松尾貴司・竹安知枝・織田恵輔・涌井忠昭)
37. 児童における姿勢制御能力と足趾把持筋力との関連	共著	2021年4月	大阪成蹊大学研究紀要第7号 P221-225	立つ動作や歩く動作時に必要とされる足趾把持筋力に注目し小学生20名の足趾把持筋力と姿勢制御能力の指標である重心動揺性を測定した。その結果から足趾把持筋力と姿勢制御能力との関連について検討した。この結果より、姿勢制御能力向上のために、足趾把持筋力を強化することが有効であることが示唆さ

				れた。(松尾貴司・辻慎太郎・永井伸人・織田恵輔・ <u>竹安知枝</u> ・白井達矢)
【その他(講演や発表)】 (学会発表)				
1. 運動能力の向上を目指した運動遊びに関する研究	(共) (代表)	2011年8月	日本幼児体育学会 第7回大会 研究発表抄録集 p.62	幼児におけるの多種目(鉄棒・縄跳び・ミニハードル・ボール遊びなど)による運動遊びが、どのように運動能力の向上に寄与するかについての実践研究である。(竹安知枝・岡田隆造)
2. 年長児における調整力・筋力・柔軟性の関係について	(単)	2012年8月	日本体育学会 第63回大会 大会予稿集 p.289	幼児の運動能力の要素間における関連性について(筋力・瞬発力・調整力・柔軟性などの相関関係において検討した)調査し、考察した。
3. 幼児の運動能力と体格の関連性についての一考察	(単)	2012年8月	日本教育学会 第71回大会 大会研究発表要項 pp.322-323	幼児の体格(BMI)と運動能力(筋力・瞬発力・調整力・柔軟性など)の関連性について調査し、考察した。
4. 体力の向上を目指した幼児の運動遊びに関する研究	(単)	2012年9月	日本幼児体育学会 第8回大会 研究発表抄録集 pp.42-43	短期間での縄跳び遊びの実践が運動能力(筋力・瞬発力・調整力・柔軟性など)に与える影響について検討した。
5. 祖父母との世代間交流と女子大学生の生活・運動習慣	(共) (代表)	2012年10月	日本世代間交流学会 第3回大会 全国大会要旨集 pp.17-18	兵庫県下の女子大学生を対象に、現在の生活習慣と祖父母との関係(世代間における交流)について調査を行い、考察した。(竹安知枝・樋口勝一)
6. 未来へはばたく子どもたちのために	(共)	2013年5月	兵庫県青少年団体連絡協議会・兵庫県青少年本部(青少年フォーラム)	子どもの頃の体験が、その後の生活習慣、人間形成に与える影響についての調査報告会である。(速水順一郎・清水勲夫・樋口勝一・ <u>竹安知枝</u>)
7. 保育士養成校における学習支援の試み(1)	(共)	2013年9月	全国保育士養成協議会第52回研究大会研究発表論文集 pp.542-543	保育士を目指す学生に対して、一般教養を習得させるための試みについて、兵庫県下の女子大学生を対象とした研究である。(中田尚美・浅井由美・尾崎秀夫・ <u>竹安知枝</u> ・樋口勝一)
8. 保育者養成におけるリメディアル教育の取り組み	(共)	2014年3月	第20回大学教育研究フォーラム	保育者養成に関わる科目において、一般教養や子どもに関する基礎知識の習得を目指

事例				した、授業の内容について検討を行なった。
9. 児童期の体験とその効用について ー遊びを中心にー	(単)	2014年8月	日本幼児体育学会 第10回大会 研究発表抄録集 p.80	兵庫県下全域において成人を対象に、児童期の様々な体験が、その後の社会性にどのような影響を及ぼしているかについて、アンケート調査を実施し、考察を行なった。
10. 6ヶ月間の運動トレーニングが一過性の運動ストレス時の口腔内免疫機能の低下を予防するか?	(共)	2014年8月	日本教育医学会 第62回大会	一過性の運動ストレス時の唾液免疫機能の低下を予防するために、6ヶ月間の運動トレーニングを行い、定期的な運動実践がストレス時の唾液免疫機能の低下を抑制するかどうかを検討した。(臼井達矢・織田恵輔・ <u>竹安知枝</u> ・辻慎太郎)
11. 運動に対する主観的評価と運動能力との関連 ー小学校体育に着目してー	(共) (代表)	2014年9月	日本体力医学会 第69回大会 予稿集 p.181	運動に対する主観的評価(好き・嫌い)と運動能力との関連、また小学校体育に対する主観がその後の運動の対する主観及ぼす影響についての研究である。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎)
12. 運動ストレスに伴う口腔内免疫機能と虫歯菌活性との関連	(共)	2014年9月	日本体力医学会 第69回大会 予稿集 p.228	運動によるストレスが、口腔内の免疫機能と虫歯菌の活性に与える影響に関する研究である。(臼井達矢・織田恵輔・ <u>竹安知枝</u> ・辻慎太郎)
13. 要支援・要介護高齢者における3分間パネル運動の有効性の検討	(共)	2014年9月	日本体力医学会 第69回大会 予稿集 p.179	要支援・要介護高齢者に対し、3分間のパネル(座位姿勢による足踏み動作)による運動を行い、その有効性について検討した。(辻慎太郎・臼井達矢・織田恵輔・ <u>竹安知枝</u>)
14. テニスの普及に関する重要な要素について	(共) (代表)	2014年12月	日本テニス学会第26回大会抄録集 pp.100-101	生涯スポーツとしてテニスに注目し、テニスの普及に関して重要な要素についてアンケート調査を実施し考察を行なった。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎)
15 短期間の Terrasensa を用いた運動介入が要支援・要介護高齢者の転倒因子に及ぼす影響	(共)	2015年1月	日本体力医学会第29回近畿地方大会	短期間における Terrasensa を使用した運動介入が、要支援・要介護高齢者の運動能力にどのように寄与し、その結果、転倒因子に与える影響について調査した研究である。

16. 運動ストレス時の口腔内免疫機能の低下を6ヶ月間の定期的な運動トレーニングで予防できるか？	(共)	2015年1月	日本体力医学会第29回近畿地方大会	(辻慎太郎・臼井達矢・織田恵輔・ <u>竹安知枝</u>) 6ヶ月間の定期的な運動トレーニングが、運動ストレス時の口腔内免疫機能の低下に対して、どのような効果を発揮するのかについて調査した研究である。(臼井達矢・織田恵輔・ <u>竹安知枝</u> ・辻慎太郎)
17. きんたくん健幸体操が中高齢者の体力因子に及ぼす影響～川西市地域活性プロジェクト～	(共)	2015年8月	日本教育医学会第63回大会	川西市地域活性プロジェクトとして考案された、きんたくん健幸体操(ストッチ編・ウォーキング編・転倒予防編にてDVD作成担当)の実施により、この体操が中高齢者のバランス能力・注力の向上・反射神経の改善に効果であることが示唆された。(辻慎太郎・臼井達矢・織田恵輔・ <u>竹安知枝</u>)
18. 現在の体力レベルに幼児期の外遊びが与える影響	(共) (代表)	2015年9月	日本体力医学会第70回大会 予稿集 p.211	幼児期の外遊びがその後の運動習慣(中学校・高校時代の運動部の所属経験)と現在(大学)における運動能力に与える影響について、兵庫県下の女子大学生103名を対象に体力測定とアンケート調査を実施し考察した。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎)
19. 中高齢者における敏捷性と注意機能との関連	(共)	2015年9月	日本体力医学会第70回大会 予稿集 p.214	50～70歳代の男女70名を対象全身反応および注意課題測定(trail making test(TMT))を実施し考察を行なった結果、体力(敏捷性)注意機能に相関が認められた。このことから運動により敏捷性を向上させることは中高齢者の注意機能の改善・向上に効果的であることが示唆された。(織田恵輔・臼井達矢・ <u>竹安知枝</u> ・辻慎太郎)
20. 1年間のレッドコード運動が要支援・要介護高齢者の体力因子に与える影響	(共)	2015年9月	日本体力医学会第70回大会 予稿集 p.245	要支援・要介護高齢者男女計41名を対象にレッドコード運動を実施した。そして介入前後に体力測定を実施した。その結果その下肢筋力および歩行能力の項目において有意に改善されたことから、レッドコ

21.週1回の実践でも運動ストレス時の口腔内免疫の低下を予防できるか？	(共)	2015年9月	日本体力医学会 第70回大会 予稿集 p.271	<p>ード運動が動的バランス能力の改善に有効であることが示された。(辻慎太郎・織田恵輔・<u>竹安知枝</u>・松尾貴司・臼井達矢)</p> <p>一般家健常者14名を対象に調査を行なった(運動介入群7名(自転車運動を1回60分、週1回、6ヶ月間)とコントロール群7名)。その結果、週1回の運動実践は、運動ストレス時の口腔内免疫を高め、翌日においてもその低下を予防することが示唆された。 (臼井達矢・織田恵輔・<u>竹安知枝</u>・上田真也・桂良寛・辻慎太郎・松尾貴司)</p>
22.きんたくん健幸体操が注意機能及び全身反応時間・重心動揺性に及ぼす影響～家庭用エクササイズDVDを用いた運動効果の検証～	(共)	2016年2月	日本体力医学会第30回近畿地方会予稿集 p.5	<p>地域高齢者において身近で継続できる運動を実践することが望まれている。そこで川西市で地域活性プロジェクトとして健康寿命の延伸に向けた運動プログラムを我々と共同開発し、その有効性について調査を行ない検証(重心動揺性・全身反応時間・TMTテストにより)したものである。その結果、それらの向上に有効であることが示唆された。(辻慎太郎・織田恵輔・<u>竹安知枝</u>・松尾貴司・臼井達矢)</p>
23.高齢者における注意機能と体力の関係について	(共)	2016年2月	日本体力医学会第30回近畿地方会予稿集 p.6	<p>高齢者が転倒する要因は体力低下だけではなく、認知機能の1つである注意機能の低下や記憶力の低下なども関係していると考えられている。そこで注意機能の向上・改善のためにどのような運動が効果的かについて検討した。その結果 TMT と垂直跳び及び TMT と全身反応時間において相関関係が認められた。(織田恵輔・<u>竹安知枝</u>・辻慎太郎・松尾貴司・臼井達矢)</p>
24.小学生の姿勢制御能力と足趾把持筋力との関連	(共)	2016年2月	日本体力医学会第30回近畿地方会予稿集 p.18	<p>姿勢制御能力と足趾把持筋力との関連性について探るために、小学生を対象に重心動揺生を測定し考察を行った。その結果、姿勢制御能力向上</p>

25. 児童期の遊びの好み が青年期の運動に対する 主観に与える影響	(共) (<u>代</u> <u>表</u>)	2016年5月	兵庫体育・スポーツ 科学学会 第27回大会発表抄 録集 p.13	のためには足趾把持筋力の 強化が有効である可能性が示 唆された。(松尾貴司・織田恵 輔・ <u>竹安知枝</u> ・辻慎太郎・臼井 達矢) 女子大学生236名を対象に、 児童期に関するアンケート調 査(遊びの好みと食習慣と運 動に対する主観的評価につ いて)を実施した。その結果、 遊びと食習慣との関連性につ いては明らかにできなかった が、児童期の遊びの好みがそ の後の運動に対する主観に影 響を与えている可能性が示唆 された。(竹安知枝・臼井達 矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾 貴司)
26. 長距離マラソンラン ナーにおける唾液抗菌ペプ チドと虫歯菌および上気 道感染症との関連	(共)	2016年6月	関西臨床スポーツ 医・科学研究会第26 回大会 抄録集 p.17	長距離マラソンランナーに着 目し、高強度高頻度の運動ト レーニングの実践が口腔内免 疫環境に及ぼす影響につい て調査を実施し検討したもの である。その結果、オーバート レーニングは口腔内の局所免 疫機能を低下させることが示 唆された。
27. 中高年女性における1 年間の運動実施頻度と口 腔内局所免疫との関連 ～週1回の運動実践でも ストレス時の口腔内免疫 低下を予防できるか?～	(共)	2016年8月	日本教育医学会 第64回大会 大会抄録集 p.62	口腔内免疫機能を高める有効 な運動頻度明らかにするた めに女性73名を対象に唾液免 疫成分および1年間の上気道 感染症の罹患回数を測定し た。その結果、高強度での運 動実践は、口腔内免疫機能を 低下させ、上気道感染症の罹 患回数増加につながるものが 示唆された。(臼井達矢・織田 恵輔・ <u>竹安知枝</u> ・辻慎太郎・松 尾貴司)
28. 小学生における足趾 把持筋力と走能力および 重心動揺性との関連	(共)	2016年8月	日本教育医学会第 64回大会 大会抄録集 p50	小学生における足趾把持筋力 が重心動揺(両足立ち・片 足立ち)および走能力(25m・ 50m)との関連について検討し た結果、足趾把持筋力と走能 力およびバランス能力におい て関連性が認められた。(辻慎 太郎・松尾貴司・ <u>竹安知枝</u> ・織 田恵輔・臼井達矢)

29. 中学校・高校時代の運動部の所属経験とその後の体力との関連	(共) (代表)	2016年9月	日本体力医学会 第71回大会 大会抄録集 p.130	思春期の運動経験がその後の体力に与える影響について103名の女子大学生を対象に体力測定とアンケート調査を実施し考察した。その結果、筋力と筋持久力の要素については、思春期の運動習慣が影響を与えている可能性が高いことが示唆された。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)
30.1 年間の運動トレーニングが口腔内免疫機能および虫歯菌抑制に与える影響	(共)	2016年9月	日本体力医学会 第71回大会 大会抄録集 p.257	1年間の運動トレーニングが口腔内免疫機能および虫歯菌活性に及ぼす影響について検討した結果、1年間の定期的な運動トレーニングの実践は、安静時の唾液 HBD-2 濃度を高め、さらに虫歯菌に対する筋の阻止能力が有意に高まることが示唆された。(臼井達矢・織田恵輔・竹安知枝・辻慎太郎・松尾貴司・上田真也・桂良寛)
31. 要支援・要介護高齢者の運動機能および日常生活動作能力の改善に向けた Redcord を用いた運動療法について	(共)	2016年9月	日本体力医学会 第71回大会 大会抄録集 p.164	要支援・要介護高齢者の運動機能および日常生活動作能力の改善に向けた Redcord を用いた運動療法の有効性について検討した結果、Redcord を用いた運動プログラムは、介護予防の運動療法として有効なプログラムであることが示唆された。(辻慎太郎・松尾貴司・竹安知枝・織田恵輔・臼井達矢)
32. オーバートレーニングが口腔内局所免疫と虫歯菌増加に及ぼす影響	(共)	2017年8月	日本教育医学会 第65回大会	大学陸上部に所属している長距離選手20名と比較対象として非アスリート20名を対象に安静時に唾液採取を行い口腔内免疫機能に関して調査を実施した結果、オーバートレーニングは口腔内局所免疫機能を著しく低下させることが示唆された。(臼井達矢・永井伸人・辻慎太郎・竹安知枝)
33. サッカークラブに所属する幼児の足趾把持筋力と体力因子との関連性	(共)	2017年8月	日本教育医学会 第65回大会	大阪府のサッカースクールに所属する幼児20名を対象に対体力測定や重心動揺(バランス能力)のテストを実施し、体力因子と足趾機能との関連

34. 幼少期の遊びがその後の人格形成に与える影響	(共) <u>(代表)</u>	2017年10月	日本子ども学会第14回大会抄録集 p.37	性について検討した。その結果、足趾把持筋力が強い者ほどバランス能力・脚力が高いことが示された。(辻慎太郎・永井伸人・ <u>竹安知枝</u> ・臼井達矢) 幼少期の遊びの好み(外遊び・室内遊び)がその後の人格形成(集中力・創造力・注意力・社会性など)に与える影響について大阪市内の女子大学生236名を対象にアンケート調査を実施し、遊びの好みと社会性との関連性について考察した。(竹安知枝・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)
35. 幼児期におけるキッズバイクの使用経験と運動能力との関連	(共)	2018年2月	日本体力医学会第32回近畿地方会	幼児期のキッズバイクの使用が運動能力に与える影響について、調査し考察した。その結果、キッズバイクの経験年数が多い者は、経験年数が少ない者と比較して、走能力や足趾機能・全身反応性などにおいて有意に高い水準であることが示唆された。(織田恵輔・ <u>竹安知枝</u> ・辻慎太郎・松尾貴司・臼井達矢・木村晴尚)
36. 障がい者(こども)のスポーツイベントの普及に向けて	<u>(単)</u>	2018年8月	日本産業科学学会第24回全国大会発表抄録集 pp.35-36.	障がい者(こども)のスポーツイベントの参加者41名(無作為抽出、保護者が回答)を対象にイベントに参加する際に重要視する事柄について調査を実施した。その結果、「身体を動かす内容」「自然遊び」「初心者でも楽しめる内容」「教育や発達に影響を与える内容」などについて重要視している保護者が多いということが明らかになった。
37. 児童期における外遊びの多寡がその後の運動に対する主観的評価に与える影響	(共) <u>(代表)</u>	2018年9月	日本体力医学会第73回大会 大会抄録集 p.185	児童期の外遊び(頻度)と青年期の運動に対する主観的評価(好き・嫌い)との関連性について、女子大学生を対象にアンケート調査を実施した。その結果、外遊び(頻度)が小学校体育に対する主観的評価に影響を与えていることが示唆され($p < 0.01$)、またその後(青年期)の運動に対する

38.高齢者におけるオーラルフレイル予防に向けた運動療法の有効性の検討	(共)	2018 月 9 月	日本体力医学会 第 73 回大会 大会抄録集 p.178	主観的評価にも影響を与える可能性が高いということが示唆された(p<0.01)。(竹安知枝・青木敦英・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司) 地域在宅高齢者(女性 48 名)に対する週1回(3ヶ月間)の健康運動教室がオーラルフレイル(口腔機能低下)予防に有効であるか検討した。その結果、自律神経バランスが整えられ、口腔内免疫機能が高まることが確認され、週1回の健康運動教室の開催は、オーラルフレイル予防に有効であることが示唆された。(臼井達矢・辻慎太郎・永井伸人・ <u>竹安知枝</u> ・織田恵輔)
39. 地域在宅高齢者に対する健康増進活動はオーラルフレイル予防に有効か?	(共)	2019 年8月	日本教育医学会第 67 回大会	地域在宅高齢者に対する週1回の健康増進活動(健康に関する学習・健康体操等を実施)がオーラルフレイル(口腔機能低下)に予防に有効であるかについて検討した。その結果、この実践は自律神経バランスを整えるとともに、口腔免疫機能や口腔機能を高めることが示され、オーラルフレイル予防に有効であることが示唆された。(臼井達矢・辻慎太郎・永井伸人・ <u>竹安知枝</u> ・織田恵輔)
40. 男子大学生における足趾把持筋力と動作遂行能力の関係ー走力、跳躍力および敏捷性に着目してー	(共)	2019 年8月	日本教育医学会第 67 回大会	男子大学生の足趾把持筋力と動作遂行能力である走力、跳躍力および敏捷性の関係について、検討した。その結果、男子大学生(18~19 歳、23 名)において、足趾把持筋力と動作遂行能力(跳躍力・敏捷性)との間に有意な相関関係が認められた。(辻慎太郎・臼井達矢・永井伸人・ <u>竹安知枝</u> ・織田恵輔・涌井忠昭)
41. 障がい者のスポーツイベントに関する一考察	(共) (<u>代</u> <u>表</u>)	2019 年9月	日本体育学会 第 70 回大会 大会予稿集 p.138	国内初の3つの取り組み【[障害の有無に関係なく実施][夏のナイター開催][民間出資100%]】により行われた「パラ陸上」に着目し、ボランティア・スポンサー企業の視点より、大

42. バスケットボールにおける「流れ」と勝敗の関係—関西学生バスケットボール2部リーグについて—	(共)	2019年9月	日本体育学会 第70回大会 大会抄録集 p.113	<p>会の有用性について検討を行った。その結果、ボランティア・スポンサー企業の両者にとって好意的に捉えられ、さらにボランティアだけでなく協賛企業にとっても価値のあるイベントである可能性が高いということが推察された。(竹安知枝・青木敦英・石川峻)</p> <p>関西バスケットボール連盟2部リーグを対象にピリオドごとの得点の変化に着目し、その違いについて検討を行った。対象となった2部リーグの全試合(90試合)についてピリオドごとの得点、得失点差を記録し、勝ちチームと負けチームで比較を行った。その結果、バスケットボール競技において「流れ」をつかむために、ハーフタイム以降のピリオドにおいて得点を積み重ねることが重要であると考えられた。(青木敦英・石川峻・竹安知枝)</p>
43. ミニテニスの普及に関する一考察	(共) (代表)	2019年9月	日本体力医学会 第74回大会 予稿集 p.281	<p>「年齢・性別を問わず誰でも楽しめる」特徴を持ったスポーツである「ミニテニス」に着目し、このスポーツの認知度やイメージについて、大学生103名を対象に調査を行った。その結果、15%の人にしか認知されていないが、約9割の人は好意的なイメージを持っているということがわかった。今後は、学校体育や社会的なスポーツイベントで積極的に取り上げられることが普及に向けて効果的であると思われる。(竹安知枝・青木敦英・臼井達矢・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)</p>
44 中年女性におけるオーラルフレイル予防に向けた水中運動トレーニングの有効性	(共)	2019年9月	日本体力医学会 第74回大会 予稿集 p.309	<p>中年女性に対する水中トレーニングがオーラルフレイル(口腔機能低下)の予防に有効であるかを検討(唾液免疫成分・口腔内機能・自律神経活動の測定の実施により)した。その結果、週1回(計12回)の水中運動トレーニングの実践は、自律神経のバランスを整え、</p>

45. 中高年女性の足趾把持筋力と体力因子の関係	(共)	2019年9月	日本体力医学会 第74回大会 予稿集 p.294	<p>口腔機能を高めることが示唆され、オーラルフレイル予防に有効であることが示唆された。(臼井達矢・辻慎太郎・永井伸人・<u>竹安知枝</u>・織田恵輔)</p> <p>中高年女性40名(60～89歳)を対象に足趾把持筋力と体力因子(注意機能(TMT)・重心動揺・全身反応時間・垂直跳び)との関連性について調査した。その結果、中高年女性の足趾把持筋力と体力因子において、有意な相関関係が認められた。転倒防止に関係するバランス機能を高めるには、足趾把持へのアプローチが効果的であると考えられる。(辻慎太郎・臼井達矢・永井伸人・<u>竹安知枝</u>・織田恵輔・涌井忠昭)</p>
46. ミニテニスの意識に対する調査－経験者を対象に－	(共)	2020年6月	兵庫体育・スポーツ 科学学会 第31回大会 発表抄録集 p.8	<p>ミニテニスの経験者男女55名(40～80歳代)を対象に、このスポーツに対する意識についてアンケート調査を実施した。その結果、ミニテニスに対して「健康に良く安全に実施でき、かつ経済的である」と捉えている人が大半を占めていることが明らかになり、今後の我が国における生涯スポーツの一つとして、ミニテニスが普及していくことが望ましいと考えられる。(竹安知枝・青木敦英・石川峻・臼井達矢)</p>
47. 片脚および両脚のプライオメトリックトレーニングの効果に関する研究－大学バレーボール選手を対象として－	(共)	2020年6月	兵庫体育・スポーツ 科学学会 第31回大会 発表抄録集 p.1	<p>関西学生バレーボール連盟1部に所属する女子バレーボール選手を対象に、片脚と両脚のそれぞれのプライオメトリックトレーニングを行うグループを設定し、トレーニング前後のジャンプ能力、パワー発揮能力の変化を調査し、いずれのトレーニング方法が効果的であるのか検証を行った。その結果、バレーボール選手のプライオメトリックトレーニングにおいて、片脚でのトレーニングを積極的に取り入れるべきであることが示唆された。(青木敦英・石川峻・<u>竹安知枝</u>)</p>

48. テニスの UTR(Universal Tennis Ratings)システムについて	<u>(単)</u>	2020年8月	日本産業科学学会 令和2年度 第1回 関西部会 発表概要集 p.21	テニスの UTR(Universal Tennis Ratings)システム(テニスのレーティングシステム、いわゆる選手の「格付け」を示すものであり、アメリカを中心にヨーロッパに広まっている。日本を含むアジアでは、まだあまり認知されていない)について取り上げ、国内の普及に向けた課題について考察した。
49. 女子大学生における低体重および痩せ願望と口腔内局所免疫機能との関連	(共)	2021年2月	日本体力医学会第 35回近畿地方会抄 録集 p.6	女子大学生の低体重や痩せ願望と口腔内局所免疫機能との関連について検討した。その結果、女子大学生において低体重および痩せ願望が強い場合は心理的ストレスが高くなり、口腔内局所免疫機能である唾液 HBD-2 が低下していることが示された。 (臼井達矢・竹安知枝・永井伸人・織田恵輔・辻慎太郎・松尾貴司)
50. テニピン(テニス型の教材)の普及に関する一考察	<u>(単)</u>	2021年3月	日本幼児体育学会 第16回大会研究発 表抄録集 pp.56-57	テニピン(テニス型の教材)が、最近、小学校の体育授業で注目されてきている。現在は、関東を中心に小学校体育の授業において取り入れられてきている。そこで、テニピンのこれまでの実施状況をふまえ、今後の普及(全国の小学校体育授業での)に向けて考察した

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 丹下 秀夫						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆ペー ジ数(総 ページ 数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない 場合は執筆箇所を詳述)
中等 教科 教育 法 英語 ⅠⅡ	(著書) 1 大学生生活入門	共	令和 元年4月1日	開成出版株式 会社	8ページ (75ペ ージ)	幼・小・特支教員、保育士を目指す学 生のためのキャリアデザインとして児童 教育学科の学生の基礎学力及び一般 常識の基礎を培うための学習書であ る。 一般常識の英単語・英語表現として小 学校教諭に必要な教室英語に関する 基本単語や表現を記載した。 (執筆担当分:知っておきたい英単語・ 英語表現)
	2教育実習ハンドブ ック	共	令和2年 4月1日	芦屋大学	4ペー ジ (71ペ ージ)	本学の学生が教員免許状を取得する にあたり必要な基礎知識や資質向上 に必要な内容を織り込んだものであ る。 筆者は中学校英語科学習指導案(例) として現行教科書単元を取り上げ、教 材観・生徒観・指導観、評価規準、単 元計画、本時指導案などの具体例を 記載した。
	(実践報告) 1 芦屋大学特別 支援教育冬季研修 会報告 「保護者とのつな がりを求めて」	単	平成29年 7月18日	芦屋大学	9ページ (61ペ ージ)	本学特別支援教育冬季研修会での講 義内容をまとめた。 筆者の学校現場で扱った事例を紹介 しながら、「保護者との良好な人間関 係の構築」に必要なものを整理した。 校長、教頭、教諭など様々な立場に課 せられた課題対応の役割も整理してい る。 「学校教育の抱える矛盾との共存」や 「義務教育の役割」を見つめ直す機会 とした。
教職 論 中等	2英語教育におけ る小中連携		平成29年 12月18日	芦屋大学	12ページ (111ペ ージ)	小中学校学習指導要領の特徴を整理 し <u>外国語教育における小中の接続の 重要性</u> 、「 <u>絵本や子供向けの歌</u> 」など を扱い方、「 <u>聞く力、話す力(やり取 り)</u> (発表)、「 <u>読む力、書く力</u> 」の4技能5 領域を育てる効果的な指導の在り方を まとめている。加えて、「 <u>小学校外国語 教育の変遷</u> 」、「 <u>これまでの小学校外</u>

					<p>国語活動の成果と外国語教育における小中連携」、「新学習指導要領の特徴を背景に様々な指導環境に対応する基礎事項の整理」「国語教育等の他教科との連携を図りながら子どもの気づきを促す指導」「発達段階に応じたインプットの在り方」や「パワーポイントやデジタル教材などICT等の効果的な活用方法」「小学校教師に必要な英語指導者としての資質」に関する授業実践をまとめた。</p>
--	--	--	--	--	---

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
<p>【著書】 大学生生活入門 (一般常識 知っておきたい英単語・英語表現 P39～P46)</p>	共著	2019年4月1日	開成出版株式会社	<p>幼・小・特支教員、保育士を目指す学生のためのキャリアデザインとして児童教育学科の学生の基礎学力及び一般常識の基礎を培うための学習書である。 一般常識の英単語・英語表現として小学校教諭に必要な教室英語に関する基本単語や表現を記載した。</p>
<p>教育実習ハンドブック (学習指導案の参考⑦ 中学校英語科学習指導案(例) P61～P64)</p>	共著	2020年4月1日	芦屋大学	<p>本学の学生が教員免許状を取得するにあたり必要な基礎知識や資質向上に必要な内容を織り込んだものである。 筆者は中学校英語科学習指導案(例)として現行教科書単元を取り上げ、教材観・生徒観・指導観、評価規準、単元計画、本時指導案などの具体例を記載した。</p>
<p>芦屋大学臨床教育学部教育 ジャーナル 創刊号 P9～14</p>	共著	2021年3月28日	芦屋大学臨床教育学部	<p>2020年度に児童教育学科2年生後期授業の選択授業として開設された「教室授業」についての実践をまとめた。 小学校教師が授業やALTとの打ち合わせに等に使う英語を教科書を使いながら学び合い、実践力の基礎を養うことを目標にした。実践の具体と学生の感想も織り込んだものとした。</p>

<p>【実践報告】</p> <p>1 芦屋大学特別支援教育冬季研修会報告 「保護者とのつながりを求めて」</p> <p>2 英語教育における小中連携</p>	<p>単</p> <p>単</p>	<p>平成 29 年 7 月 18 日</p> <p>平成 29 年 12 月 18 日</p>	<p>芦屋大学論叢第 67 号 (P53~61)</p> <p>芦屋大学論叢第 68 号 (P 99 ~ P 111)</p>	<p>本学特別支援教育冬季研修会での講義内容をまとめた。 筆者の学校現場で扱った事例を紹介しながら、「保護者との良好な人間関係の構築」に必要なものを整理した。 校長、教頭、教諭など様々な立場に課せられた課題対応の役割も整理している。 「学校教育の抱える矛盾との共存」や「義務教育の役割」を見つめ直す機会とした。</p> <p>小中学校学習指導要領の特徴を整理し<u>外国語教育における小中の接続の重要性</u>、「<u>絵本や子供向けの歌</u>」などを扱い方、「<u>聞く力、話す力(やり取り)(発表)、読む力、書く力</u>」の4技能5領域を育てる効果的な指導の在り方をまとめている。加えて、「<u>小学校外国語教育の変遷</u>」、「<u>これまでの小学校外国語活動の成果と外国語教育における小中連携</u>」、「<u>新学習指導要領の特徴を背景に様々な指導環境に対応する基礎事項の整理</u>」、「<u>国語教育等の他教科との連携を図りながら子どもの気づきを促す指導</u>」、「<u>発達段階に応じたインプットの在り方</u>」や「<u>パワーポイントやデジタル教材などICT等の効果的な活用方法</u>」、「<u>小学校教師に必要な英語指導者としての資質</u>」に関する授業実践をまとめた。</p>
<p>【その他(講演や発表)】</p> <p>1 芦屋大学夏季研修講座講師</p> <p>2 芦屋大学冬季研修講座講師</p> <p>3 平成 29 年度猪名川町</p>	<p>単</p> <p>単</p>	<p>平成 27 年 8 月</p> <p>平成 29 年 2 月</p> <p>平成 29 年 6 月</p>	<p>芦屋大学教育研究所</p> <p>芦屋大学教育研究所</p> <p>猪名川町教育教育</p>	<p>テーマ 「学校現場における生徒指導の課題」 中学校現場での生徒指導に係る体験を紹介し、多感期の生徒指導の在り方を示唆した</p> <p>テーマ 「保護者とのつながりを求めて」 中学校現場での特別支援教育に係る実践例から生徒支援の在り方や課題を提示した。</p> <p>テーマ</p>

学校園経営研究会講師			委員会	「学校運営におけるそれぞれの職の在り方」 学校教育法37条にある職の違いを軸に、管理職を目指す教員を対象に、生徒の個性を伸ばす学校の在り方や課題を提示した。
4 芦屋市小中学校教科等研究会講師	単	平成 30 年 10 月	芦屋市立小中学校教科等研究会	テーマ 「英語教育の小中連携の在り方」 英語の授業構築における小中の連携の在り方を具体的な教材を提示しながら示唆した。小中で共通に扱える題材を小中学校教員を対象に提示した。
5 芦屋市立山手中学校授業研究会講師	単	令和 2 年 10 月	芦屋市立山手中学校	テーマ 「主体的に自らを深める授業づくり」 中学 1 年生の授業を参観した後、小中連携の視点から具体的な英語の授業づくりについて助言した。

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 中村 整七						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ペー ジ数)	概 要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
数 学 概 論	(教育実践記録等) 1.平成23・24年度 芦屋市立山手中 学校研究紀要 平成23年 平成24年	共	平成24年3月 平成25年3月	芦屋市立山 手中学校		学校教育目標・教育課程・人権教育・生徒指導・授業研究などまとめ発刊した。授業研究では、「基礎学力の定着を図り、主体的に学ぶ力を育てる」ための教育課程づくりの研究実践をまとめた。特に、数学科における授業研究では、「 <u>学習集団における核となる生徒への指導方法の工夫を視点にした研究を行った際に、「教師用授業チェックリスト」など、どの生徒にもわかりやすい学習にするための指導者の細やかな方策立案と運用に係る指導助言をし、実践記録と考察を監修した。1～4P 中村整七・今村一美・大石健二・坪井政人・比嘉美智子・米田直樹・村上秀作・上月ちひろ</u>
	(その他) 1.平成28年度 芦屋市教育研究 部会委嘱研究報 告書	共	平成29年3月	打出教育文 化センター	150	芦屋市教育委員会が研究を委嘱する「 <u>ユニバーサルデザイン授業づくり部会</u> 」の算数数学科の授業研究で「 <u>焦点化</u> 」「 <u>視覚化</u> 」「 <u>共有化</u> 」の3つの視点を意識的に取り入れた実践研究を指導した。 <u>子どもの側に立った3つの視点でわかり易さを作る研究成果をリーフレットや報告書にまとめ、報告会で発表するとともに市内の教職員に配布した。1P中村整七・山下正記・佐伯千紘・八木美子・田淵雅樹・林優也・田中義明・森洋樹・小西三枝</u>
	2.平成29年度 芦屋市教育研究 部会委嘱研究報 告書	共	平成30年3月	打出教育文 化センター	170	芦屋市教育委員会が研究を委嘱する「 <u>情報教育部会</u> 」の算数数学科の授業で、 <u>学習支援ソフト「スカイメニュー」を活用して「誰もが授業で使えるタブレットPC」をテーマにした研究の指導を行う。児童生徒がペアやグループで考えたものを個々のタブレットから大型提示装置に映し出し、それらの考えの共通点や違いを話し合い、学びを深めていく授業づくりの成果を報告書にま</u>

						とめた。これを報告会で発表するとともに市内の教職員に配布した。1P中村整七・柳本耕平・加島太成・坂東龍二・池田兼資・陰山圭一・眞崎幹雄・伊藤佑輔・今若孝広・大川隼寛・長野伸哉・垣内あゆみ
初等 教科 教育 法 Ⅲ (算 数)	(教育実践記録等). 1 平成 28・29 年度 芦屋市立打出教 育文化センター所 報	共	平成 29 年 3 月 平成 30 年 3 月	打出教育文 化センター	12 16	芦屋市立学校園教職員の研修等(一般研修・課題別研修 38 講座、新規採用教員研修及び2~5年目教員研修8講座、教師力向上支援事業)の実施し、研修内容をとりまとめたもの。それぞれを監修した後に冊子化し、教育現場や各教育研究機関に配付した。 <u>教師力向上支援事業においては、算数科1年「大きな数」・2年「長さ」の単元全時間において授業者とともに単元構想を練り、毎時間の指導の実際を考察し、子どもの理解度を観点にした研究を掲載している。</u> 1P中村整七・大林亮・幸谷省吾
	2.平成 25 年度 芦屋市立山手小 学校研究紀要	共	平成 26 年 3 月	芦屋市立 山手小学校	128	教育目標「みんながかがやく」を実現させる研究実践をまとめ発刊した。授業研究では、「共に学びを創り合う子どもを求めて」を研究テーマに算数科の学習における言語活動の充実を目指し、「対話力」を育てるための方策を探る研究に取り組んだ。研究授業を実施するごとに「一般化できる方策」を取りまとめた実践記録を監修したものを掲載している。1~3P 中村整七・栖田千聡・石原恭子・櫃田麻衣・村岡宏美・大森一彦・新屋敷恵美子・三浦望帆・高橋知子・森洋樹・森本良子
	3.平成27年度 芦屋市立山手小 学校研究紀要	共	平成 28 年 3 月	芦屋市立 山手小学校	199	教育目標「みんながかがやく」を実現させる研究実践をまとめ発刊した。算数科教育では、子どもたちが、「算数(数学)用語」を駆使して、言葉を生かした対話ができることで知識や技能を更新していくことを観点にした実践研究を行う。考えた道筋を聴き合い、創り合うことで「仲間との応答のある学び」が具現できることを目指した研究実践を監修し掲載している。 1~3P 中村整七・垣内あゆみ・佐伯千紘・塩山利枝・延原勝哉・村岡 宏美・上殿敦子・宮尾陽子・澁谷英明・西嶋大輔・西尾節子
	令和 2 年度 芦屋大学臨床教	単	令和 3 年 3 月	芦屋大学	7	実践研究『「算数科」における「主体的・対話的で深い学び」を実現させる

	育学部教育ジャーナル					指導法に係る一考察』を掲載した。初等教科教育法「算数科」の教育実践の中で「主体的・対話的で深い学び」を算数科の授業でどのように実現させていくのかを学生と共に見つけようとした実践をふり返り、考察したものを掲載した。子どもたちが主体的な学べるようにする指導法、深く考えられるように誘う指導法やその学習過程の創り方などについてまとめている。
教職実践演習(幼・小)	(教育実践記録等) 1.平成 25・26・27 年度 芦屋市立山手小学校「学校要覧」	単	平成 25 年 4 月 平成 26 年 4 月 平成 27 年 4 月	芦屋市立山手小学校		学校経営の基本的構えを明示し、学校教育目標との関連、目指す地域の姿、目指す学校の姿、目指す家庭の姿を相互に関連づけ、 <u>幼児教育との連携を視野に入れて教育課程編成に反映させている。さらに、学校の教育課程において実践する人権教育、授業、特別活動を3本柱に据え、年間計画に基づいた具体的な実践の様子を著し考察を加えている。同時に、各学年及び専科における年間目標を監修したものを掲載している。</u>
	2.平成 25・26・27 年度 芦屋市立山手小学校「学校だより」	単	平成 25 年 4 月より平成 28 年 3 月 各月発刊配付	芦屋市立山手小学校		<u>学校での学習や生活の中で子どもたちの良いところや、入学前から入学を経て成長する具体的な姿などを保護者に宛てて紹介している。また、教育目標「みんながかがやく」を実現させる様々な教育活動の具体的な実践やその意味・価値を記している。毎月刊行し、学校長として目指す教育の在り方を具体的に説明してきたもの。教職員への指導用としても活用してきた。</u>
	3.平成 26 年度 芦屋市立山手小学校研究紀要	共	平成 27 年 3 月	芦屋市立山手小学校		教育目標「みんながかがやく」を実現させる研究実践をまとめ発刊した。 <u>人権教育では、「確かな人権感覚を持ち、互いに認め合い、共に生きる子の育成をはかる」を基本方針にして、7つ(差別解消, いじめ・心, 特別支援, 国際理解, 平和, 男女共生, 命)の柱を立て、幼児教育との連携の視点も加えて取り組んだ教育活動の具体的な実践方法と実践記録をまとめ発刊した。</u> 1～4P 中村整七・西尾節子・村岡 宏美・佐伯千紘・上殿敦子・宮尾陽子・澁谷英明・西嶋大輔・櫃田麻衣・福本洋子・延原勝哉・中村珠貴
	令和元年度 芦屋大学論叢第7	共	令和 2 年 3 月	芦屋大学		研究論文「学校インターンシップの実態と効果に関する一考察」-芦屋大学と地域の小学校を結ぶ取組を通して-

2号					を芦屋大学論叢に掲載した。学校インターシップの活動を通して、学生たちが小学校の教育現場での体験で何を学び、思いがどう変化したのかについて考察し、学生の進路形成にどのように寄与したのかをまとめたものを掲載している。
----	--	--	--	--	--

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【学術論文】 平成30年度 芦屋市教育研究部会委嘱 研究報告書	共	平成31年3月	打出教育文化センター	芦屋市教育委員会が研究を委嘱する「授業改善部会」「外国語教育部会」「特別支援部会」「体力向上部会」「食育部会」の5つの研究部会の成果を報告書にまとめ、報告会で発表するとともに市内の教職員に配布した。 各部会の研究内容の指導と報告書の監修を行った。
令和元年度 芦屋大学論叢第72号	共	令和2年3月	芦屋大学	研究論文「学校インターンシップの実態と効果に関する一考察」-芦屋大学と地域の小学校を結ぶ取組を通して-を芦屋大学論叢に掲載した。学校インターシップの活動を通して、学生たちが小学校の教育現場での体験で何を学び、思いがどう変化したのかについて考察し、学生の進路形成にどのように寄与したのかをまとめたものを掲載している。
令和2年度 芦屋大学臨床教育学部教育ジャーナル創刊号	単	令和3年3月	芦屋大学	実践研究『「算数科」における「主体的・対話的で深い学び」を実現させる指導法に係る一考察』を掲載した。初等教科教育法「算数科」の教育実践の中で「主体的・対話的で深い学び」を算数科の授業でどのように実現させていくのかを学生と共に見つけようとした実践をふり返り、考察したものを掲載した。子どもたちが主体的な学べるようにする指導法、深く考えられるように誘う指導法やその学習過程の創り方などについてまとめている。

<p>【その他(講演や発表)】</p> <p>1 芦屋市立小中学校新規採用教員研修会</p> <p>2 芦屋市2年次～5年次教員研修会</p>		<p>平成31年2月12日</p> <p>令和元年5月13日</p>	<p>芦屋市教育委員会主催初任者教員研修会</p> <p>芦屋市教育委員会主催2年次～5年次教員研修会</p>	<p>初任者の一年間の取り組みの振り返りを基に今後の取り組み方について講話を行う。</p> <p>『主体的・対話的で、深い学び』を実現するために」をテーマにして、新学習指導要領完全実施に伴う授業改善の意義や具体的方法等について講演を行う。</p>
--	--	------------------------------------	---	---

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 福山 恵美子					
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は発 表学会等の名 称	概 要
特別支援教育 総論	(著書) 1. 特別支援教育 総論	共著	平成 26 年 10 月	風間書房	本書は、特別支援教育の全容を理解しやすくするために、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱、言語障害、発達障害、情緒障害、重複障害のそれぞれの障害ごとにその歴史、心理、生理・病理、教育課程・指導法、検査法を体系的にまとめたものである。筆者は <u>知的障害教育の歴史</u> を執筆した。 編著:守屋國光 分担執筆:山本晃、金森裕治、中村貴志、杉田律子、西山健、井坂行男、 <u>福山恵美子</u> 、藤田裕司、吉田昌義、武部綾子、小田浩伸、徳永亜希雄、行本舞子、平賀健太郎、横田雅史、上村逸子、小坂美鶴、山下光、小西嘉朗、高田昭夫、須田正信、富永光昭、氏間和仁 pp.133-143(498 項)
	(学術論文) 2. 知的障がい特別 支援学校における チーム・ティーチ ングに関する実践 的な研究－授業分 析とATの支援に焦 点をあてて－」第 I 報～第 III 報	単著	第 I 報 平成 26 年 9 月	大阪教育大学 紀要第 IV 部門 教科教育 63 巻第 1 号	チーム・ティーチングの歴史や課題を踏まえ、より効果的な「ATの支援評価」表及び「長所項目」表を作成した。 pp.155 -169
		単著	第 II 報 平成 27 年 9 月	大阪教育大学 紀要第 V 部門 教科教育 第 64 巻第 1 号	特別支援学校の授業をこれらの表を活用し、授業の中で効果的なチーム・ティーチングが行われていることを明らかにした。 pp.85-98
		単著	第 III 報 平成 28 年 3 月	大阪教育大学 紀要第 V 部門 教科教育 第 64 巻第 2 号	授業分析し、授業の特徴、「ATの支援評価」表を活用してその変容を探った。 pp.75-91
	(著書) 3. 保育と表現	共著	平成 27 年 4 月	嵯峨野書院	第1章から第 12 章で成り立っている。筆者は、第 11 章、1 節、2

	<p>(学術論文)</p> <p>4. 特別支援教育におけるチーム・ティーチングに関する一考察—知的障害特別支援学校におけるチーム・ティーチングの長所項目表とATの支援評価表作成を通して—</p>	<p>単著</p>	<p>平成30年3月</p>	<p>大阪総合保育大学紀要第12号</p>	<p>節において、<u>聾重複児が指文字や簡単な手話を使用して、ことばを獲得した事例について述べた。</u>(編著:石上浩美 分担執筆:矢野正、吉井英博、小松正史、長尾牧子、藤崎亜由子、藤井真理、手良村昭子、澤田真弓、湊田陽子、宮前佳子、<u>福山恵美子</u>、池永真義) pp.90-94(108項) 第11章1節～2節</p> <p>第I章では、チーム・ティーチングの定義・歴史を述べた。第II章では、知的障害の特別支援学校のチーム・ティーチングの課題について検討した。第III章では、先行研究からチーム・ティーチングの長所項目表の作成の過程、第IV章では、ATの支援評価表の作成の経緯を述べた。 pp.111-132</p>
	<p>5. 特別支援教育におけるチーム・ティーチングの多様化に関する研究—共生社会を見据えたチーム・ティーチングのあり方を探る—</p>	<p>単著</p>	<p>平成31年3月</p>	<p>大阪総合保育大学大学院 博士学位論文</p>	<p>特別支援教育の現状に鑑み、通常学級及び特別支援学校の授業におけるT・Tの実態と課題、専門スタッフ、外部人材が参画しているT・Tの実態と課題を明らかにするとともに、授業におけるT・Tから多様な人材が教育活動に参画するT・Tへと視点を広げ、共生社会を見据えたT・Tのあり方を探った。</p>
	<p>6. 高等教育における障害学生支援—先行研究から見出された支援に着目して—</p>	<p>単著</p>	<p>令和2年12月</p>	<p>発達人間学研究 生涯発達科学会 第20巻 第2号</p>	<p>高等教育における障害学生支援に関する先行研究では、当事者の課題、家庭や地域社会の課題等を挙げ、大学においても適切な支援の提供や対応が今後の課題であると指摘している。このことを踏まえ、本研究では先行研究から見出された支援を、「支援する者」「支援のあり方」「支援の場」に整理し、障害学生支援について検討した。特に私立小規模大学においては、小規模ならではの細やかで顔が見える支援の実施が明らかになった。さらに多様な学生一人一人の教育的ニーズに応えるべく、大学も変わっていかねばならないこと新たな気づきを得た。 pp.45-60</p>

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【著書】 1 大学生活入門～幼・小・特 支教員、保育士を目指す学 生のためのキャリアデザイン ～	共著	令和元年4月	開成出版株式会社	大学生として必要な心構え、一般 常識、実習に向けて及び教員と して働くための基礎知識を簡潔 に記載している。 <u>筆者は特別支 援学校での教育実習、現場で使 え割れる用語について担当した。</u> p.48,49,51,57,61,62(75項) 監修:笠原清次,渡康彦 編者:石田愛子,竹安知枝 著者:安藝雅美,大江まゆ子,大谷 彰子,木下隆志,種田香,丹下秀 夫, <u>福山恵美子</u>
【学術論文】 1 特殊教育から特別支援教 育への転換—その歴史的背 景と近年の動向— (査読付)	単著	平成29年3月	大阪総合保育大学紀 要第11号	第I章では、ノーマライゼーシ ョンの理念ニリエのノーマライゼ ーションの思想と国連及び日本 におけるノーマライゼーション実 現のための動向について述べ た。第II章では、国際連合及び 日本における障害者施策につい て述べた。第III章では、障害の 概念の変遷として、ICIDHから ICFへの転換の経緯、ICFの各 要素について述べた。第IV章で は、教育の場に注目しながら特 別支援教育に至るまでの歴史的 経緯について述べた。 pp.91-113
2 聾重複児のコミュニケーション 指導の事例 (査読付)	単著	平成30年2月	発達人間学研 究 生涯発達科学会 第18 巻第1号	聾重複児のコミュニケーション指 導をテーマに、ことばの発達、発 達の観点、聾重複児のコミュニ ケーション指導とは、ティーム・テ ィーニング、聾重複児の実際のコミ ュニケーション指導を通して考察 した。 <u>山中矢展、上村逸子、福山恵美 子、小田多佳子</u> pp.27-34
3 特別支援教育におけるティ ーム・ティーチングに関する 一考察—知的障害特別支 援学校におけるティーム・テ ィーチングの長所項目表と ATの支援評価表作成を通し て— (査読付)	単著	平成30年3月	大阪総合保育大学紀 要 第12号	第I章では、T・Tの定義と歴史 を述べた。第II章では、知的障 害特別支援学校のT・Tの課題に ついて先行研究等を通して考察 した。第III章では、先行研究から T・Tの長所を検討した。第IV章 では、先行研究及び授業分析を 通して、ATの支援評価表作成の 経緯について述べた。 pp.111-132
4 特別支援教育におけるティ ーム・ティーチングの多様	単著	平成31年3月	大阪総合保育大学大	特別支援教育の現状に鑑み、通

<p>化に関する研究—共生社会を見据えたティーム・ティーチングのあり方を探って—</p>			<p>学院 博士学位論文</p>	<p>常学級及び特別支援学校の授業における T・T の実態と課題、専門スタッフ、外部人材が参画しているT・Tの実態と課題を明らかにするとともに、授業における T・T から多様な人材が教育活動に参画する T・T へと視点を広げ、共生社会を見据えた T・T のあり方を探った。 pp.1-271</p>
<p>5 高等教育における障害学生支援-先行研究から見出された支援に着目して-</p>	<p>単著</p>	<p>令和2年12月</p>	<p>発達人間学研究 生涯発達科学会 第20 巻 第2号</p>	<p>高等教育における障害学生支援に関する先行研究では、当事者の課題、家庭や地域社会の課題等を挙げ、大学においても適切な支援の提供や対応が今後の課題であると指摘している。このことを踏まえ、本研究では先行研究から見出された支援を、「支援する者」「支援のあり方」「支援の場」に整理し、障害学生支援について検討した。特に私立小規模大学においては、小規模ならではの細やかで顔が見える支援の実施が明らかになった。さらに多様な学生一人一人の教育的ニーズに応えるべく、大学も変わっていかねばならないことの新たな気づきを得た。 <u>福山恵美子</u>、遠藤愛・若林上総、瀧本一夫、古川紀子 pp.45-60</p>

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 毛利 康人						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ペー ジ数)	概 要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
生活 概論 (単 独)	(著書) 1. 奈良市副読本 「奈良と自然」	共 5名	平成17年3月	奈良市教育 委員会	34 (67)	奈良市小学校で配布する副読本(総合 的な学習や生活科・理科で使用)。 奈良の身近な自然・生き物や奈良のま ちの紹介を執筆。 共著(毛利康人 崎山泰彦 梅田真寿 美 竹原康彦 森下良介)
	2. 奈良市副読本 「奈良大好き世界 遺産学習」	共 14 名	平成26年6月 改定	奈良市教育 委員会	18 (76)	奈良市立学校で使用する副読本(総合 的な学習や生活科・理科で使用)。奈良 の身近な自然や生き物、奈良の地域、 文化、文化財の紹介を執筆。 共著(河合摩香 大西浩明 勝谷征彦 菊山清美 本車田達郎 森井祐幸 西 口美佐子 関東利幸 的場宏純 深澤 吉隆 水上雅裕 上田喜彦 毛利康人 中澤静雄)
	(学会誌) 1. ESDを視野に 入れた奈良市世界 遺産学習(奈良市 版ESD)	単	平成23年6月	理科の教育 日本理科教 育学会	3 (71)	理科の教育 2011/06/Vol.60/No.707 日本理科教育学会編集 東洋館出版社発行 奈良市立学校で推進しているESDの全 体構想について執筆。
	2. SDGs達成のた めのESD —小学校におけ る実践例—	単	令和元年10 月	理科の教育 日本理科教 育学会	4 (65)	理科の教育 2019/10/Vol.68/No.807 日本理科教育学会編集 東洋館出版社発行 奈良市立飛鳥小学校におけるSDGs達 成のための具体的な学習実践事例(生 活科・理科・社会科・総合的な学習の 時間)について執筆。
(教育実践記録) 1. 博報賞受賞報 告	単 (団 体 代 表)		令和2年10月	博報堂教育 財団	1 (20)	奈良市立飛鳥小学校で取り組ん でいる「ESDの視点を踏まえた世 界遺産学習・地域学習」の実践報 告。小学校6年間の学習計画を学 習内容とSDGsの達成目標を関 連づけた指導計画を作成。生活 科、理科、社会科、総合的な学習 の時間を中心として、地域の豊か な自然やまちの様子、文化財など を主体的に調べる学習。6年生は 飛鳥地域から世界をより良くする ために自分たちにできることを考え 実行する、「飛鳥スマイル・キッズ(ボラ

						ンティア活動)」を6年間の学習の総仕上げとしている。
初等 教科 教育 法Ⅳ 【理 科】 (単 独)	(著書) 1. 奈良市副読本 「奈良と自然」	共 5名	平成17年3月	奈良市教育 委員会	34 (67)	再掲(生活科概論)
	2. 奈良市副読本 「奈良大好き世界 遺産学習」	共 14 名	平成26年6月 改定	奈良市教育 委員会	18 (76)	再掲(生活科概論)
	(学会誌) 1. ESDを視野に 入れた奈良市世界 遺産学習(奈良市 版ESD)	単	平成23年6月	理科の教育 日本理科教 育学会	3 (71)	再掲(生活科概論)
	2. SDGS達成のた めのESD ー小学校におけ る実践例ー	単	令和元年10 月	理科の教育 日本理科教 育学会	4 (65)	再掲(生活科概論)
初等 教科 教育 法Ⅴ 【生 活】 (単 独)	(著書) 1. 奈良市副読本 「奈良と自然」	共 5名	平成17年3月	奈良市教育 委員会	34 (67)	再掲(生活科概論)
	2. 奈良市副読本 「奈良大好き世界 遺産学習」	共 14 名	平成26年6月 改定	奈良市教育 委員会	18 (76)	再掲(生活科概論)
	(学会誌) 1. ESDを視野に 入れた奈良市世界 遺産学習(奈良市 版ESD)	単	平成23年6月	理科の教育 日本理科教 育学会	3 (71)	再掲(生活科概論)
	2. SDGS達成のた めのESD ー小学校におけ る実践例ー	単	令和元年10 月	理科の教育 日本理科教 育学会	4 (65)	再掲(生活科概論)
	(教育実践記録) 1. 博報賞受賞報 告	単	令和2年10月	博報堂教育 財団	1 (20)	再掲(生活科概論)
教職 論 【初 等】 (単 独)	(教育実践記録・研 究紀要) 1. 平成27年度 奈良県小・中学校 研究紀要	単	平成27年	奈良県小中 学校長会	3 (53)	管理職として、教育の今日的な課題を踏まえ、教員の専門性を効果的に活かした校務を分担し、チームとして組織的な学校運営実践、学校が校外の専門家や家庭、地域とより連携するために、法的根拠のある学校運営協議会(コミュニティ・スクール)設置し、「地域とともにある学校づくり」の実践を執筆。
	2. 第72回全国	単	令和2年	全国連合	4 (209)	変化が激しい社会、Society5.0の社会で求められる学校像・教師像を追求し、

小学校長会研究協議会京都大会			小学校長会研究協議会	学校長として取り組んでいる特色ある教育(小中一貫教育、コミュニティ・スクール、世界遺産学習・地域学習、キャリア教育)、そして、誰もが経験したことのない非常事態(新型コロナウイルス禍)における学校運営についての実践研究。
----------------	--	--	------------	---

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【その他(講演や発表)】 教育講演会				
1. 保護者研修	単	平成28年	PTA主催	「幼稚園と子育て」
2. コーディネーター研修	単	平成29年	奈良市教育委員会主催	「コミュニティ・スクール」
3. 保護者研修	単	令和元年	PTA主催	「子どもの学び」
4. 家庭教育講座	単	令和2年12月	奈良県教育振興会主催	「未来を見据えた子育て」

教育研究業績書					
					氏名 安藝 雅美
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は発 表学会等の名 称	概 要
保育内容領域 「人間関係」	(学術論文) 『子育て支援にお ける縦割り懇談会 の試み —保育内容領域 「人間関係」の示唆 に向けて—』	単	平成 30 年 4 月	芦屋大学論叢 69 号	子育て支援の一つでもある、「懇談 会」に対する新たな取り組みと、 <u>養成校における「保育者の質」向上 に対する授業「人間関係」への応 用を考え、検討した。</u>
保育内容領域 「言葉」	(教育実践記録等) 「楽しい」絵本と「悲 しい」絵本の読み聞 かせ時の幼児の情 動反応	共	平成 21 年 10 月	日本小児保健 学会講演集 第 56 回 pp.202	幼稚園での読み聞かせ場面をビ デオ録画し、行動や表情を分析し た結果、 <u>楽しい内容の絵本と悲し い内容の絵本では、同じ読み聞か せでも幼児の情動反応に変化が 見られた。</u> 「楽しい」絵本の読み聞 かせでは、行動・表情の表出や発 話を増加させるが「悲しい」絵本 では情動表出がほとんど見られな かった。 (共著者:松村京子、 <u>安藝雅美</u>)
	子どものつぶやき から捉えた言葉の 育ち	単	平成 29 年 11 月	関西教育学会 69 回	幼稚園での子どもの「つぶやき」を 米田の分類を用いて行い、さらに 年齢別や男女別での違いも検討 し、 <u>そこから浮かび上がる言葉の 育ちを考察した。</u>
	絵本を通して心の 育ちを考える—絵 本読みの新たな試 みを通して—	単	平成 31 年 3 月	兵庫県私立幼 稚園協会教員 研修大会	<u>絵本読みの実践を通して、子ども の育ちを見る。</u>
教育実習 教育実習事前・ 事後指導 参加実習 観察実習	(著書) 『成長し続ける教 育・保育実習』 『大学生活入門～ 幼・小・特支教員、 保育士を目指す学 生のためのキャリア デザイン』2019.4.1	共 共	平成 30 年 4 月 令和元年 4 月	教育情報出版 2-8 開成出版 p59-62, 59	<u>学生が実習に行くまでのオリエン テーションについてを解説した。</u> (p p66～69) 著者: <u>安藝雅美</u> 、浦田雅夫、他
保育内容指導 法 I・II	(論文) 「幼稚園年長児を 対象とした鍵盤ハ ーモニカ指導に関 する—考察」	共	令和元年 7 月	芦屋大学論叢 71 号	附属幼稚園にて年長児への実践 指導を通して <u>保育実践の在り方を 考察する。</u> (共著者:石田愛子、 <u>安藝雅美</u> 、)
	「幼稚園における課 外活動について の—考察—鍵盤ハー	共	令和 3 年 3 月	芦屋大学論叢 74 号	附属幼稚園にて年長児への実践 指導を通し <u>課外活動実践の在り方 を考察する。</u> (共著者:石田愛子、 <u>安藝雅美</u> 、)

	モニカ指導の場合 -」 (教育実践記録等) 異年齢保育における 年長児の協同的 学び(2)	共	平成 23 年 5 月	日本保育学会 第 64 回大会 発表論文集 pp.753	劇遊びを中心とする協同的学びに 関する実践例を実際に使用した教 材や資料の紹介とともに <u>行う。</u> (共著者: <u>安藝雅美</u> 、中田尚美)
--	--	---	-------------	---------------------------------------	--

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【著書】 1 成長し続ける教育・保育実習 2 大学生生活入門～幼・小・特支 教員, 保育士を目指す学生のため のキャリアデザイン～	共	平成 30 年 4 月	教育情報出版 2-8	再掲のため、略
	共	平成 31 年 4 月	開成出版 Ⅲ-2～3, IV-2(2)	学生としても心構えと, 教員になるための基礎知識と練習問題
【学術論文】 1『子育て支援における縦割り懇談会の試み ー保育内容領域「人間関係」の示唆に向けてー』 2(論文) 「幼稚園年長児を対象とした鍵盤ハーモニカ指導に関する一考察」	単	平成 30 年 4 月	芦屋大学論叢 69 号	再掲のため、略
	単	令和元年 7 月	芦屋大学論叢 71 号	再掲のため、略
【その他(講演や発表)】 1 幼稚園における「2 歳児保育」の在り方についての一考察 2 園舎建替工事を活かしたモンテッソーリ教育的保育の取り組み 3 子どものつぶやきから捉えた言葉の育ち 4 「乳児保育」の検討Ⅰー「乳児保育」科目の変遷ー 5 「乳児保育」の検討Ⅱー教科書目次からの分析ー	共	平成 26 年 5 月	日本保育学会第 67 回 大会発表論文集 pp.597	2 歳児保育を導入している2園の実践事例を通し検討した結果、共通して保護者への育児支援と子どもへの自立援助につながっていることが示された。 (共著者: <u>安藝雅美</u> 、益岡時美、山村悦子)
	共	平成 28 年 5 月	日本保育学会第 69 回 大会発表論文集 ID:18020	幼稚園などの建替工事においては、音や臭いや苦情など、マイナスなイメージが多い。しかし本研究では、同敷地内での工事を通して直接子どもが建築の様子を目の当たりに出来る環境を生かし、日常保育の中に積極的に教材として取り入れることで子どもたちの工事に対する思いが変化していった実践例を紹介する。 (共著者: <u>安藝雅美</u> 、齋藤香織)
	単	平成 29 年 11 月	関西教育学会 69 回 発表論文集	再掲のため、略
	共	平成 30 年 9 月	保育教諭養成課程研 究会研究大会	「乳児保育」科目設置の背景・科目の性質の変遷、教授内容の変遷の具体の整理を目的とする。
	共	平成 30 年 9 月	保育教諭養成課程研 究会研究大会	新カリキュラムにおける保育士養成課程で求められている「乳児保育Ⅰ」

<p>6 「乳児保育」の検討Ⅲー 「子どもの保健」科目を中心 とした近隣科目との関連ー</p>	<p>共</p>	<p>平成 30 年 9 月</p>	<p>保育教諭養成課程研 究会研究大会</p>	<p>「乳児保育Ⅱ」の方向性について、教 科書目次からの分析をする。</p>
<p>7 絵本を通して心の育ちを 考えるー絵本読みの新たな 試みを通してー</p>	<p>単</p>	<p>平成 31 年 3 月</p>	<p>兵庫県私立幼稚園協 会教員研修大会</p>	<p>再掲のため、略</p>

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 西光 晴彦					
教職課程における担当授業科目に関する研究業績等					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は 発表学会等 の名称	概要
情報社会と情報倫理(Ⅰ) ・情報社会と情報倫理(Ⅱ)	マスコミ環境の改善と現代の子ども達へのメディア教育1 現代メディアの状況を踏まえてマス・メディアを考える	単著	平成14年11月	芦屋大学論叢第37号	教育学論説資料保存会優秀論文として掲載保存。人類の進化・成長過程で言語が生まれ文字が創り出され人間社会のコミュニケーションの媒体となった。科学技術の発達により視聴覚メディアが誕生。更にこれを一斉に電送するマスメディアを開発した。情報化時代は高度通信情報化社会を誕生させた歴史的経緯を論述すると共に、「コミュニケーションとは」についての諸説を紹介している。そしてこれらのマスメディアから発信される膨大な情報を <u>正しく取捨選択する処理能力を養うためのマスメディア教育の重要性</u> について論究している。
	マスコミ環境の改善と現代の子ども達へのメディア教育2 現代メディアの状況を踏まえてマス・メディアを考える	単著	平成15年3月	芦屋大学論叢第38号	教育学論説資料保存会優秀論文として掲載保存。 <u>変貌したマスメディアの注目すべき事例(報道)を取り上げ、その報道のあり方が社会に対してどのような影響を与えたのかを検証と考察として論述した。</u> また、これらのことから「ジャーナリズムの倫理」について言及し、更には「言論の自由と知る権利」とは如何なるものなのかについても論述している。また、 <u>報道のあり方の問題点とマスメディア(ジャーナリズム)の本来あるべき任務と使命、そして存在意義を確認することによってマスメディアから発信される情報にアジテートされないメディアリテラシーを養成することを論述している。</u>
・視聴覚教育Ⅰ放送教育Ⅱ	:伝達(教育)方法の発達過程とその歴史的背景の一	単著	平成17年6月	芦屋大学創立40周年記念論文集Ⅱ	教育と伝達について、その歴史的経緯・発達過程を探りながら、その発達過程の中で、こ

	<p>考察 -視聴覚教育を中心に-</p>			<p>れまで開発された視聴覚教育や視聴覚教材について紹介している。そしてこれらの視聴覚教材が教育にどのように役立っているかを論究している。また、視聴覚教育・視聴覚教材についての諸説を紹介し、現代の視聴覚教育・視聴覚教材と比較し解説している。そして高度情報通信社会で育った現代の子供たちの教育に視聴覚教育・視聴覚教材は必要であることを論述・展開しているが、これらはあくまでも教育の補助であり、これを活用する教師の役割が重要であることを結論づけている。</p>
--	-----------------------	--	--	--

教職課程以外の教員個人に関する研究業績等

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表 雑誌又は発 表学会等の 名称	概 要
<p>【学術論文】 マス・メディアの大衆操作とメディア教育(その1) 子供の食品(お菓子)選択吟味に与える影響[CommunicabilityとLiteracy]</p>	<p>単著</p>	<p>平成4年 12 月</p>	<p>平成4年度 日本産業教育研究会研究紀要</p>	<p>教育学論説資料保存会優秀論文として掲載保存。現在の子ども達は急激に発達した情報化社会の中で生活している。特にテレビの発達普及により自分から働きかけなくとも容易に情報が得られ、その断片との接触に終始という状況を作ってきた。このために子ども達の学習に対する姿勢は受動的な傾向が強く、無感動であり、探求心に乏しい。しかし情報化社会で育った子ども達の感性に訴えた情報伝達はかえって効果が高められると考える。感性に訴えた情報伝達すなわちテレビを媒体とする情報伝達である。この効果を論究している。</p>
<p>マス・メディアの大衆操作とメディア教育(その2) テレビ・メディアの虚構と現実 [CommunicabilityとLiteracy]</p>	<p>単著</p>	<p>平成8年9月</p>	<p>芦屋大学論叢 第25号</p>	<p>教育学論説資料保存会優秀論文として掲載保存。現代の子ども達を取り巻く環境は、その得る情報の質・量共に大人の社会に迫っている。しかも、これらの情報が子ども達に悪影響を与えていることも事実である。そして、この傾向は今後益々深まって行くことは容易に予測される。そこで、本研究の目的はマス・メディアから発信される情報伝達を正しく各々の</p>

<p>伝達(教育)方法の発達の一考察 視聴覚教育の史的展開を中心に</p>	<p>単著</p>	<p>平成 10 年8月</p>	<p>大阪府立小学校・科学教育部(視聴覚教育分科会)特別紀要</p>	<p>映像メディアや活字メディアと比較判断すると共に取捨選択し、自分のものとして正しく理解するためのリテラシー(Literacy「情報処理能力」)を養成するためのメディア教育の必要性と、そのあり方と効果について報告するものであるが、現代メディアの状況を踏まえてマス・コミュニケーションを考える(近年の事例を検証しながら報道のあり方に一石を投じる)ことによって、マス・メディア(情報発信者)に警鐘を鳴らし、本来あるべきマス・メディア(ジャーナリズム)の使命と存在意義を確認し、その問題解決のための方途を論述してゆきたい。</p> <p>当然のこととして視聴覚教材を活用した教育伝達(映像記号伝達)は、これをまったく活用しなかった教育伝達(文字記号伝達)よりも、その効果が高いのは自明の理である。このことは文字だけによるコミュニケーションと大きく異なることであり、文字は原則として就学することによってはじめて教えられ、文字と共に難しい意味や法則・論理を学んでいくのであるが、現代の情報化社会で生きる子ども達は就学以前の家庭のなかで、無意識の中で映像記号伝達(テレビが中心)を習得しているのである。そこで、人類がコミュニケーションを取る手段として言語や文字を開発してきた経緯と知識の伝達(教育)方法がどのように発達してきたのか、また、その過程の中で開発された視聴覚教育(教材)は、どのような必要性で誕生したのか、そして、代表的な学者や教育者の諸説の解説を通して、その発展過程と歴史的背景と意義を探ることによって現在の伝達(教育)に役立てようとするものである。</p>
<p>小学生における情報機器(コンピュータ・放送機器)に関する実態調査研究</p>	<p>共著</p>	<p>平成 11 年5月</p>	<p>平成 11 年度日本産業教育研究会研究紀要</p>	<p>情報機器(コンピュータ・放送教材)を活用することによって、学習者である子供たちは、新鮮な感動を得ることができるの</p>

<p>マスコミ環境(テレビを中心に)が現代の子ども達に与えた功と罪</p>	<p>単著</p>	<p>平成 14 年5月</p>	<p>日本産業教育研究会研究紀要</p>	<p>ではないかと考えることができる。そしてこのことによって、学習意欲が高められ、事物事象の認識を容易にさせるとともに、クリエイティブな思考と発展的な学習を促すことにつながると思われる。そして、何よりもこれらの情報機器(コンピュータ・放送教材)を正しく活用することによって、洪水のように氾濫するさまざまな情報を正しく比較判断するリテラシー(Literacy)も養成することになると考えられるのではないか。</p> <p>現代を生きる子供たちは情報機器に関して、どの程度の興味や知識を持っているのか、そして活用する環境作りはできているのか、また活用しようとしているのかということについて実態調査を行った結果を分析し、その実態を把握することによって、次代を担う子供たちに、少しでも正しい情報機器(コンピュータ・放送教材)の活用の仕方や情報機器(コンピュータ・放送教材)の設置・環境作り役に役立ててゆく為の方途を探りゆくものである。</p> <p>今世紀初頭に開発されたテレビによって、たしかに、コミュニケーション能力は高められ、私達の生活は便利になり、世界は狭まった。私達の住んでいる地球の裏側で起こった出来事が、テレビ画面を通じて自宅に伝達され、私達は、それらの情報をもとにして出来事を認識している。しかし、その情報は事実として直接、自分の感覚器で確かめたわけではない。もちろん地球の裏側で起こった出来事を誰もが直接確認することはできないが、いつのまにか私達は、それはテレビ画面に映った一部であるということを忘れている。その出来事が起こるに至るまでの背景や、その土地の環境まで、克明に認識する必要はないかも知れないが、少なくとも私達の生活に直接影響することや、私達の判断によっては社会情勢に変化をもた</p>
---------------------------------------	-----------	------------------	----------------------	---

<p>マス・メディアの大衆操作とメディア教育(その3) テレビ・メディアの虚構と現実 [Communicability と Literacy]</p>	<p>単著</p>	<p>平成 25 年3月</p>	<p>日本産業科学学会研究論叢 第18号</p>	<p>らすようなことについては慎重な判断と、それにとまなう行動をしなければならない。そこで、本研究ではマス・メディアより発信される情報伝達を正しく比較判断するリテラシー(Literacy)を養成するためのメディア教育の必要性と、そのあり方と効果について報告するものであるが、本稿では、サブタイトルにあるように[マスコミ環境(テレビを中心に)が現在の子ども達に与えた功と罪]について論述してゆきたい。</p> <p>私たちの日常生活での情報源は未だテレビ放送から発信されるものが、その大半を占めているのが現状である。このことから映像による情報伝達の媒体として、凄まじい影響力を持つテレビは弊害も与えていることは紛れもない事実である。家庭の茶の間に座ってテレビを見ながらくつろいでいるだけなのに、実際にはエネルギーを消費しているし、テレビを見すぎると精神活動が低下してしまうという精神科医からの報告もあげられている。また、テレビ映像の持つ特殊技法の発達には虚構と現実の境界をぼかしていることにも気づかねばならない。このことにより、マス・メディア(テレビ放送)より発信される情報伝達を正しく比較判断するリテラシー(Literacy)を養成するためのメディア教育の必要性を報告するものである。</p>
---	-----------	------------------	--------------------------	--

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 藤本 光 司					
教職課程における担当授業科目に関する研究業績等					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は 発表学会等 の名称	概 要
中等教科教育 法【技術】	(著書) 『技術・家庭科 【技術分野】』	共著	平成 27 年 2 月	開隆堂	主な執筆は、「ガイダンス p2-14」、「材料と加工に関する技術 p20-84」である。本教科書は、全国の中学校技術科で6割が利用している文部科学省検定済教科書である。
	『技術・家庭科 【技術分野】学習 ノート』、開隆堂	編著	平成 27 年 11 月 発行予定	開隆堂	全国の中学校技術科で生徒が使用する学習用ノートの編著。「ガイダンス：p1-7」、「材料と加工に関する技術：p8-43」、「エネルギー変換に関する技術：p44-63」について、本学卒業のベテラン技術科教員 6 名を招集し、新たな視点による生徒の学び支援の学習ノートとしてまとめた。
	『アクティブラーニングで深める技術科教育（自己肯定感が備わる実践）』	共著	平成 27 年 10 月 30 日	開隆堂	グローバル化に対応した学校教育として、個々人の潜在的な能力を最大限に引き出し、よりよい社会を築いていけるような教育が重要である。本著は、技術科教育の意義を改めて見直し、実践的な内容で編集した。「倫理観を養いやさしさを育む情報教育」 pp128-135
	『主体的に学び意欲を育てる教学改善のすすめ』	編著	平成 28 年 4 月 15 日	ぎょうせい	教育学を学ぶ学生、教職に従事している教員に対して、これからの「教学」を考え、その在り方、道筋を示すために教育方法学的な側面から執筆した。全 238 ページ編著

	『技術科教材論』	共著	2021.4 刊行予定	竹谷書房	問題発見と課題設定の教材化, インストラクショナルデザインを活用した技術科の授業, ADDIE モデルと ARCS モデルによる授業設計, 魅力的な授業を提供するための授業設計, チームビルディングなど執筆
	『技術・家庭科 (技術分野)』 ※ 文科省検定教科書	共著	2021.4 刊行予定	開隆堂出版 株式会社	内容 A の「材料と加工の技術」に関する領域を編集
	(学術論文) 藤本光司、他 15 名:「工業高校に おけるコミュニ ケーション演習 と能動的学習(1) ~(6)」	共著	平成 26 年 3 月~ 28 年 3 月	情報コミュニ ケーション学 会 研究報告 CIS (2014~ 2018)	工業高校の特色を活かし、チーム学習、ものづくりを通して、コミュニケーション能力や表現能力を身につけさせることを目的に授業内容や学習の効果と課題、評価方法について 5 年間の取組を論述した。第 13 回全国大会にて優秀発表賞を受賞
	(教育実践記録等) 「循環型社会形成をめざした環境学習の実践、~ミミズ・コンポストによる給食残菜の堆肥化と野菜の栽培・調理・販売~」	単著	平成 19 年 3 月	『シティ・サクセス・ファンド第3回実践報告集』、(財)消費者教育支援センター	技術科の「生物育成に関する技術」における教材として、給食から排出される残菜を活用して、ミミズを育て、そこから生まれた堆肥を活用し生物を育成する学習モデルを作成し循環型環境教育の授業実践を行った。本稿では、その取組についての概要を論じた。pp.92-95
	「アクティブラーニングに求められる学習成果の測定と活用」	共著	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会 第 30 回年会論文集(京都市立芸術大学)	学習者が教科の到達目標に達したか否かは形成的評価を経て定期考査などで判定される。その過程で情意形成が関連しているが、生徒の自主性について視覚化できる評価の方法論について調査に基づき報告した。pp18-21

	(著書) 『中学校技術・家庭科地域別教材「技術分野の実践例・授業提案集(近畿編)」』	編著	平成 27 年 5 月	開隆堂	本著の編著者として「巻頭言」を執筆し次の学習指導要領の方向性を述べた。近畿地区 2 府 4 県の技術科教員から集めた教育実践集であり、地域の特色を取り入れた実践でまとめた。技術科全 4 領域を網羅し各地区から 15 編を選んだ教育実践集である。 pp2-31
	(学術論文) 「中学校技術科における材料加工分野の研究(1) — 木工具に視点をおいた教材の考察 —」	共著	平成 28 年 2 月	情報コミュニケーション学会 第 13 回全国大会発表論文集	材料加工分野についての基礎研究として、平成 28 年度から使用される文部科学省検定済の『技術・家庭科(技術分野)』の 3 社に記載された木材加工の「木工具」について比較調査した。その結果、多様に掲載されているものの各社かなりの差が見受けられた。
	「主体的・対話的で深い学び」に挑む技術科教育の研究(1) — 兵庫県中学校技術・家庭科教育の研究と試行的取組からの学び —」	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会 第 33 回年会論文集	次期学習指導要領を教育現場で実践するために、県内の教科部会との共著で投稿した。主に技術科としての「見方・考え方」について、生物育成の内容の授業実践を含めて論述した。
	教員採用試験における専門分野への対応 — オリジナル問題集の制作と学生調査による評価 —	共著	2020.2.29	情報コミュニケーション学会 第 16 回全国大会発表論文集	地方自治体が実施する教員採用の 5 都市を対象に調査研究を行った。採用試験の教職問題や各教科に関する問題を分析し、院生と採用試験問題集を制作した。さらに、本学学生に調査を実施して採用試験に関する課題や展望を整理した。
	中学校技術科における SDGs と STEAM 教育との関連(1) — 理論背景の整理と学習モデルの開発に向けて —	共著	2020.2.29	情報コミュニケーション学会 第 16 回全国大会発表論文集	持続可能な開発目標(以下、SDGs)は、昨今、国際的な行動規範として産官学のビジョンに位置づけられている。本稿では、大学教育における教学面での SDGs への方策について、他大学の先進的な取り組みと、本学的に実施できる活動や取り組みを紹介した。
	技術科教育としての異校種連携におけるカリキュラムマネジメント(1) — エネルギー変換分野における試作モデルの評価と課題 —	共著	2020.2.29	情報コミュニケーション学会 第 16 回全国大会発表論文集	教科間連携や異校種連携(幼少中など)などカリキュラムマネジメント(CM)を取り入れた教育活動が注目されている。技術科教育のさらなる可能性を探るためにCMを導入することによって得られる成果を探り、これらの理論背景を整理した。また、技術科教育と他教科

					との関連性や異校種連携の事例紹介と今後の課題並びに評価を述べた。
教育の方法と技術(中等)	(著書) 『元気になる学び力 世の中の本質が見えてくる学びのヒント』	編著	平成 23 年 4 月	ぎょうせい	教員が軸とするこれからの教育的視点を論じた。コミュニケーションなどの古典的教授法はもとより、ピアジェの行動主義やジューイの構成主義の考え方などを現代の教育事例に透かして考える内容を掲載している。さらに、学習者が主体的に学ぶアクティブラーニングの手法として、e-learning や学習環境のラーニングコモンについても執筆した。林徳治、奥野雅和らと編著、pp1-202
	(学術論文) 「アクティブラーニングに求められる学習成果の測定と活用」※方法論からのアプローチ(テーマ別セッション)	共著	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会 第 30 回 年会論文集、pp18-21	学習者が教科の到達目標に達したか否かの形成的評価について情意形成の側面から自主性の因子分析を行い、高等学校 1 年生と 3 年生の変容を統計分析して研究成果を報告した。
	(教育実践記録) 「工業高校におけるコミュニケーション演習と能動的学習(1)～(5)」	共著	平成 25 年～平成 27 年	情報コミュニケーション学会第 10 回～13 回全国大会発表論文集	高大連携校での 3 年間の取り組みについて、授業内容、ものづくりを通じたコミュニケーション演習、生徒主体の展示活動、チーム学習の効果と課題、などについて報告した。
	教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(1) - ARCS モデルに基づく学習意欲を引き出す授業の取り組みと手だて -	共著	2017.3.4	情報コミュニケーション学会 第 14 回全国大会発表論文集	教科教育法で求められる指導内容は、教科の歴史的経緯を理解し、学習指導要領の読み解き、授業の実践力に必要な知識・技能の習得などである。本研究では、ARCS モデルに基づく学習意欲を引き出す授業の取り組みと手だてを報告した。

	<p>対話的で深い学びを取入れた自己調整学習の研究－多人数授業におけるレポート分析調査と書き行動方略への影響－</p>	<p>共著</p>	<p>2018.8.24</p>	<p>日本教育情報学会 第34回年会論文集</p>	<p>「教育と方法の技術 [中等教育]」は、多人数授業であるが対話的で深い学びを展開している。本授業で、形成的に評価した12回分のレポート成績をカテゴリ別に分析するとともに自由記述の階層的クラスタ分析を行った。その結果、自己調整学習の理論に示された「書き行動方略」の指導段階で第4段階まで到達していることが判明した。</p>
	<p>8. 教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開 (3)－中学校技術科教育における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業モデルの検討－</p>	<p>共著</p>	<p>2018.3.10</p>	<p>情報コミュニケーション学会 第15回全国大会発表論文集</p>	<p>技術科の「材料と加工に関する技術」領域では、設計→試作→検討→製作という新しい授業プロセスが示されている。特に「試作→検討」は、主体的で対話的な深い学びを推進するためのコミュニケーションの単元とも考える。本稿ではインストラクショナルデザインを意識した授業モデルを検討した。</p>
	<p>(著書) 『主体的に学び意欲を育てる 教学改善のすすめ』</p>	<p>編著</p>	<p>平成28年4月</p>	<p>ぎょうせい</p>	<p>本著は、知識基盤社会を生き抜く力の学生の学びについて主に教職履修の学生を対象とした著書である。構成主義や行動主義、ガニエの9教授事象など基礎・基本的な学習理論を網羅しつつ、アクティブラーニング型授業の設計プロセス(ADDIEモデルやロジックツリーなど)について、これから求められている21世紀型能力のキーコンピテンシーを軸に展開している。また、ICTを活用した反転授業や情報モラルの指導方法など、最新のICT活用の実践も掲載している。全238ページを編著</p>

	(学術論文) 『学習情報研究 (2007、3月号)』、 特集：国際交流学 習の成功の秘訣、 「国際理解教育に おける成功の秘 訣」	共著	平成 19 年 3 月	(財)学習ソ フトウェア情 報研究センタ ー	国際社会では自己を確立し、人 権感覚を育み、広い視野で異文 化を吸収し、違った立場や違う 国の人との共生をめざした資 質や能力を育成する必要がある。 本稿では、日本人学校や国 際協力の教育活動(JICA)につ いて社会教育を軸に論述した。 林徳治との共著、pp.9-13、
	(教育実践記録) 「中学校技術科教 育におけるエネル ギー変換に関する 教材研究(1) - ESD の観点から LED 教材の一考 察 -」	共著	平成 26 年 11 月	情報コミュニ ケーション学 会 研究報告 CIS Vol.11、 No4	中学校技術科において、持続可 能な開発のための教育 (ESD) の観点からエネルギー変換の 領域で扱う教材について考察 した。pp14-15
	「中学校技術科に おける自尊感情育 成の研究(1) - 電子黒板の効果的 活用法 -」	共著	平成 28 年 2 月	情報コミュニ ケーション学 会 第 13 回全 国大会発表論 文集	授業に参加できない生徒の中 には「意欲」に問題があるの ではなく「発達障害」が原因で あると推定される者も少なく ない。これらの生徒に対する「合 理的配慮」についても検討して いく必要がある。本稿では、電 子黒板(スマートボード)を活 用した授業実践について報告 した。pp24-27
教職実践演習 (中等)	(著書) 『必携！相互理 解を深める コ ミュニケーショ ン実践学(改訂 版)』	共著	平成 22 年 3 月	ぎょうせい	心理学カウンセリング手法 の「アサーション」や地図的 概念法(KJ法、強制連結法) など、21の教材コンテンツ。 全教材が90分のグループ演 習とし、学習者がPDCAサ イクルマネジメントによる 振り返り学習が可能な学 習者参加型教材。教員が学級 経営や授業作りに活用でき る配布プリント教材も全て の編に揃えている。林徳治、 沖裕貴監修、pp1-186

	(学術論文) 「主体的な学びを支援するためのチーム学習に関する研究」	共著	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会 第 30 回年会論文集	学校の教科指導や特別活動において班編成を軸とした学習をすすめることが多いが、無作為抽出型の班編成では、学習者の情意的特性が偏り、班の活気や学習到達度に影響する場合もある。FFS 理論を活用して中高生のリーダー特性を分析し、リーダータイプの出現率や因子特性を一般社会人と比較した。 pp206-207
	プログラミング的思考における各思考スキルの体系化の試み — 小学校学習指導要領改訂において —	共著	2019.2.23	情報コミュニケーション学会 第 16 回全国大会発表論文集	中教審答申(2008)は思考する手順に焦点を当てた思考スキルが注目され、新学習指導要領でも各教科等の特質に応じて、「プログラミング的思考」の育成が求められる。そこで本研究ではプログラミング的思考に関する思考スキルを教科ごとに整理することで、各思考力がどの教科で身に付く機会があるのかを分析し報告した。
	「中学校技術科の教職課程における課題と展望 (1) — 全国の動向と本学の現状について —	共著	2019.8.24	日本教育情報学会 第 34 回年会論文集	中等教科教育法(技術科)における教員養成において、本稿では、本教科としての教員養成の課題を概観するとともに、今後の教師力に関する課題と展望について述べた。
	中学校技術科の教職課程における課題と展望 (2) — 教職必修科目の成績と教員採用試験の合否結果との関連性について —	共著	2020.8.29	日本教育情報学会 第 35 回年会論文集	全国の技術科教員養成課程の設置状況を調査し、本コースの免許状取得状況(2011-2018)や採用試験の合否、採用倍率等から本学的な課題や展望を述べた。本稿では、筆者が担当する「中等教科教育法技術Ⅲ(前期)・Ⅳ(後期)」の定期試験の点数と採用試験合否結果をもとに分析を行った。その結果、定期試験の成績別にみると、採用試験の合否によって有意差が表れた。
	家庭科教育の住生活分野における地域とのつながりを意識した学習活動の研究 — 学校周辺の	共著	2020.8.29	日本教育情報学会 第 35 回年会論文集	工業高校での「創造基礎」の授業で取り入れていた自主性尺度や FFS 理論を取り入れて、チーム分けや生徒自身の成長度を確認した。本稿は、「プロゼロ」を学んだ生

	住環境調査を通して誰もが快適な暮らしを考える -				徒たちがゼミとは違う授業の中で、その手法をどのように活用し実践しているかを家庭科の授業を通して得た成果を報告した。
	グローバル人材育成を視野に入れた授業の研究 (1) - 「主体的・対話的で深い学び」を主眼においた海外研修の考察 -	共著	2020.8.29	日本教育情報学会 第35回年会論文集	主体的・対話的で深い学びを教育現場で具現化し、グローバル人材の育成を実践可能なものにするための研究として、グローバル人材に求められる資質を考察した。芦屋学園高等学校・中学校が、これまで実践してきた海外研修を振り返り明らかになった課題を提起した。また、海外の授業実践例もふまえたうえで、今後の海外研修が担うべき役割を考察した。
	(教育実践記録) 『学習情報研究 (2009、3月号)』 「Web活用によるフォトランゲージ手法 ～情報を構造化する力の育成～」	単著	平成21年3月	(財)学習ソフトウェア情報研究センター	Web上に発信された情報を学習教材として活用する場合、その情報の信憑性を精査しなければならない。言語情報の整合性を確認するのは容易であっても、視覚情報が与える影響は意図に反した解釈がなされる場合もある。フォトランゲージ (Photo Language) 手法に応用し、授業実践で得た視覚情報の取り扱いに関する知見について述べた。pp1-2
	(学術論文記録) 「職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開(1) - ARCSモデルに基づく学習意欲を引き出す授業の取り組みと手だて -」	共著	平成29年3月	情報コミュニケーション学会 第14回全国大会発表論文集	教科教育法で求められる指導内容は、教科の歴史的経緯を理解し、学習指導要領の読み解き、授業の実践力に必要な知識・技能の習得などである。本研究では、15回の授業を通じたアクティブラーニングの実施と技術科教員に必要な知識と実践力を対話的かつ主体的に身に付け、深化できる能力を求め、インストラクショナルデザインの知見を取り入れ実践を重ね知識と実践力を効果的に身に付けさせたいと考えた。本稿では、特に ARCSモデルに基づく学習意欲を引き出す授業の取り組みと手だてを報告した。pp28-29

	「教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開 (3) — 中学校技術科教育における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業モデルの検討 —」	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会 第 15 回全国大会 発表論文集	中学校技術科の教職科目において、授業設計を行うための授業デザインを論述した。特に、次期学習指導要領に掲載された、設計と試作について、学生たちと取り組んだ試作モデルの製作と授業時数との関連性について述べた。 pp149-149
教育実習【技術】	(学術論文記録) 「教育実習中における教育実習支援モデルに関する検討 — SNS を利用したコミュニケーション活動を通じて —」	共著	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会 第 32 回年会論文集	教育実習は、実習生自らが教職への適性や進路を考える貴重な機会である。一方で、多くの実習生は教育実習に対して様々な期待とともに悩みや疑問を抱いていることが多い。教育実習用 SNS を通じて様々なコミュニケーション活動を行い、実習に関する情報の共有などに対して積極的な助言や励ましという支援を行った。実習生をはじめ3回生においても成果が得られた。教育実習支援モデルについての概要とその成果について報告した。 pp24-27
	「中学校技術科の教職課程における課題と展望 (1) — 全国の動向と本学の現状について —」	共著	2019.8.24	日本教育情報学会 第 34 回年会論文集	中等教科教育法(技術科)における教員養成において、本稿では、本教科としての教員養成の課題を概観するとともに、今後の教師力に関する課題と展望について述べた。
	中学校技術科の教職課程における課題と展望 (2) — 教職必修科目の成績と教員採用試験の合否結果との関連性について —	共著	2020.8.29	日本教育情報学会 第 35 回年会論文集	全国の技術科教員養成課程の設置状況を調査し、本コースの免許状取得状況(2011-2018)や採用試験の合否、採用倍率等から本学的な課題や展望を述べた。本稿では、筆者が担当する「中等教科教育法技術Ⅲ(前期)・Ⅳ(後期)」の定期試験の点数と採用試験合否結果をもとに分析を行った。その結果、定期試験の成績別にみると、採用試験の合否によって有意差が表れた。

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 齋藤 治						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発 表学会等の名 称	執筆ペー ジ数(総 ページ 数)	概要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
電気電子工学Ⅰ実験実習Ⅰ	<学術論文> 小学校理科教育における活動記録措置の導入報告～簡易ミニ電卓を用いた計測カウンタの教員免許状更新講習講座での利用事例～	共	令和3年3月	芦屋大学論叢74号	4(6) P119-124	齋藤治、黒木出、渡康彦 齋藤治がベースの昆虫行動観測装置を開発した接続端末に、簡易ミニ電卓を用いたインターフェイスの導入を実施した記録。 <u>エネルギー変換領域での具体的な実践教材事例紹介。</u>
電気電子工学Ⅰ実験実習Ⅰ	<学術論文> ブレッドボード電子回路実習教材研究	共	平成29年8月	日本教育情報学会第33回年会	(抽出不可)(2)	齋藤治、森寄功、森下博行 <u>ハンダを用いず、電子回路図から実体配線を展開学習する際に有用となる教材の考え方を述べている。エネルギー変換分野での電子回路実習教材のコア的教材論を述べた。</u>
電気電子工学Ⅰ	<学術論文> 演習用合成抵抗ボードを用いた電気配線構築力育成の考察	共	平成29年8月	日本教育情報学会第33回年会	(抽出不可)(2)	森寄功、齋藤治、渡康彦 <u>電気回路配線技術の基本習得となる合成抵抗計算と実習に関する論述。エネルギー変換分野での基礎コア領域教材となる考察である。</u>
電気電子工学Ⅰ実験実習Ⅰ	<学術論文> アクトグラフを用いたタマネギバエの自然条件下での歩行活動の記録	共	平成27年7月	芦屋大学論叢第63号	1(10)	渡康彦、齋藤治、田中一裕 筆者らが持つ専門電子技術およびソフトウェアが特異な生物学研究分野での装置作成と実務運用に帰する論文の紹介。(執筆担当部分:実用的専門的計測装置の紹介と開発過程の記述が、 <u>エネルギー変換分野においての応用電子装置の紹介(p34-35)</u> となる。

電気電子工学Ⅰ実験実習Ⅰ	<学術論文> 齋藤治、C++MFCによる アクトグラムソリューション の移植構築	単	平成 26 年 1 月	芦屋大学論 叢第 60 号	9(9)	筆者の持つシステムエンジニアリング技術、C++言語にて電子応用装置であるアクトグラム装置の全移植構築をした記述内容。 <u>エネルギー変換分野では、実務、応用電子分野での開発過程を論述している箇所</u> に有意性がある。
電気電子工学Ⅰ実験実習Ⅰ	<学術論文> ブレッドボード配線方式 による電子回路作成の技 術教育	共	平成 25 年 8 月	日本産業教育学会第 56 回全国大会 (山口)	(抽出不可)(1)	齋藤治、渡康彦、藤本光司 筆者の教育現場で実演しているハンダ付けを必要としないブレッドボードによる電子回路学習作製状況を発表。 <u>エネルギー変換分野での電子回路論理の理解と配線技法修得に学習者の躓き易いポイントを提示、紹介(P41)</u> した。
電気電子工学Ⅰ実験実習Ⅰ	<学術論文> 齋藤治、昆虫活動記録 装置の高速計測システム ソフトウェア移植	単	平成 22 年 12 月	芦屋大学論 叢 54 号	10(10)	筆者が持つ特異なインターバルタイム操作技術を Win-PC 上に C++言語で移植構築した、電子制御分野での高速サンプリング技術を紹介している。 <u>エネルギー変換技術分野では、応用計測の基幹技術となり、電子計測の基本分野である。</u>

研究業績等に関する事項(5年以内)

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学 会等の名称	概 要
1【講演や発表】 教員免許状更新講習講座 昆虫を使った理科の実験～アクト グラフで昆虫の活動を記録する～	共	令和 2 年 8 月	芦屋大学 教員免許更新講座講習	齋藤治、黒木出、渡康彦 簡易ミニ電卓をインターフェイスに用いた 昆虫計測実験装置導入事例の実践紹 介。 <u>エネルギー変換分野領域に該当。</u>
2【実践報告】 芦屋大学自己点検評価委員会 2016 年度上半期活動の軌跡	共	平成 29 年 1 月	芦屋大学論叢 66 号 3(10) P51-61	河村繁、齋藤治、石田愛子、青木敦英、 中村卓司、猪田裕子、森下博行 筆者が持つ ICT ソリューション技術を、大 学認証評価業務での基幹システムとし、リ サイクル PC、および共有サーバ構築を運 用し、劇的な実務効率改善を行った記 録。(P52～P54)
【その他】 (講演や発表、運営委員会等) 1.大学自己点検評価委員会 芦屋大学認証評価業務遂行で の副委員長職を担当 2.日本教育情報学会実行委員 会 3.芦屋大学卒論プレゼンテー ション大会 司会進行等企画実行 委員長		令和 3 年 3 月 (平成 28 年 4 月 ～) 平成 29 年 8 月 平成 27 年 1 月 迄実施 (平成 24 年 1 月 ～)	芦屋大学 自己点検評価委員 会 日本教育情報学会第 33 回 芦屋大学経営教育学部卒論 発表運営委員会	毎年作成をする大学認証評価書編 纂と 7 年毎の实地調査実務業務運営 を継続して担当。 大会実行委員会運営委員一員として 大会運営業務を担当。 卒業論文発表会の企画運営司会進 行および専門分野(電気電子エレクト ロニクス分野)での講評、コメント等。

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 瀧 巖						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ページ 数)	概 要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
	芦屋大学論叢第2 9号	単	1998 年 11月		6	一般教養としての 技術科教育方法の考察 －大学生の木材加工の基礎技術評価 を通して はさみやのこぎりが無器用で上手に使 えることが少なくなってきたといわれる 1970年から80年代にかけて育った 子供たちが現在、大学生になっている。 その学生たちに対して木材加工の 技術について指導した内容について 考察した。
	芦屋大学論叢第3 6号	単	2002 年 3月		16	中学校技術分野の教育課程の編成と 「技術とものづくり」指導の在り方 平成14年度より学習指導要領が改訂 され、技術科の授業数に変化が生じ た。今後の授業形態はどのように運営 すればよいのか、学生にアンケートを 実施し今後の技術教育の在り方につ いて考察した。
	芦屋大学卒の事 業家たち	共	2005 年 7月		14	芦屋大学卒の事業家たち 芦屋大学を卒業したOBたちに、大学 時代の思い出や現在の会社経営など について現在に至る現在に至る現 在に至るインタビューし、まとめた。
	芦屋大学論叢第4 2号	単	2005 年 11月		12	中学校技術分野における改訂教育課 程の編成 ー学校教育適用への課題 に関する考察ー 兵庫県の某中学校において現行の教 育課程実施の実態調査を行った。こ れについての考察。
	芦屋大学論叢第4 5号	共	2007 年 6月		12	アジア太平洋における武道国際交流 ーハワイにおける空手国際交流を中 心にー ハワイでの武道国際交流における異 文化交流と日本本土と違った空手道 の歴史について
	芦屋大学論叢第7 0号	共	2018 年 11月	講演論文	1	北村絵梨加、藤本光司、盛谷亨、若 杉祥太、瀧巖:「教職科目におけるイ ンストラクショナルデザインを用いたア クティブラーニングの展開 (3) ー 中 学校技術科教育における「主体的・対 話的で深い学び」を実現するための授 業モデルの検討 ー」

					Development of Active Learning using Instructional Design in Teacher Training Courses (3)— Teaching model for realizing “self-directed、interactive、and deep learning” in the Industrial Arts Education of the Junior High School — 情報コミュニケーション学会 第15回全国大会発表論文集(大手前大学)、pp148-149、2018.3.11
--	--	--	--	--	--

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【その他(講演や発表)】 1 神戸東ロータリークラブ		2006年 4月		兵庫県武道国際交流団の報告 —日本武道の必要性— 日本の武道の魅力と必要性は、国内以上に世界で認められ、盛んに指導が行われている。
2 ひょうご講座		2006年 7月		武道国際交流における英語異文化の理解について

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 中村 宏 敏						
※1 担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ページ 数)	概 要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
情報 機器 の操 作	『生活と経営』	共	平成 20 年 4 月	株式会社 一 灯館		「情報機器の操作」について モラル教育を中心に解説
ネッ トワ ーク 技 術	『経済学入門-個別 現象から学ぶ-』	共	平成 30 年 3 月	ニシダ印刷製 本	(p11 5～ 125)	webページ制作 著者:中村宏敏 全体を松井温文が編著 13章(最終章)で授業ネットワーク技術 で行っているwebページ制作を、わかり やすく、解説をしながら目的を持ったwe bページ作成について執筆
情報 通信 ネッ トワ ーク	(学術論文) 1.『教育現場のネ ットワークセキュ リティの現状と提言』	共	平成 20 年 12 月	日本産業科 学学会関西 部会		学校教育現場、特に中学校・高等学校にお いてのネットワークのセキュリティと現状につ いての調査報告です、学生や生徒が使うネ ットワークのネットワークセキュリティとそれを 管理する責任者について報告と提言をした もの

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【学術論文】 1『教育現場のネットワーク セキュリティの現状と提言』 情報通信ネットワーク	共著	平成 20 年 12 月	日本産業科学学会関 西部会	学校教育現場、特に中学校・高等学 校におけるネットワークのセキュリ ティと現状についての調査報告で す、学生や生徒が使うネットワークの ネットワークセキュリティとそれを管理 する責任者について報告と提言をし たもの
2『インターネット利用のメリ ットとリスクーこどものネット 環境においてー』 コンピュータネットワーク	共著	平成 21 年 12 月	日本産業科学学会関 西部会	学校教育現場、特にこどもの教育現 場でのインターネット活用した調べ 学習について、その必要性とリスクにつ いて考えた。学校のネットワーク環境 も踏まえながら報告
3『教育現場におけるネット ワークセキュリティと情報教 育の必要性 コンピュータネットワーク	共著	平成 21 年 12 月	日本産業科学学会関 西部会	学校教育現場におけるネットワ ーク環境のセキュリティと現状につ いて調査報告した。学生や生徒が使う ネットワークのセキュリティとそれを管理 する責任者について、とくに教育現 場における提言

4『学生相談における携帯電話相談システムの構築』	単著	平成 22 年 4 月	日本産業科学学会関西西部会	平成 21 年度文部科学省採択事業である学生支援推進事業の[教職協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施の中のシステムである「携帯電話による相談システム」の部分について開発時の報告についてセキュリティをどのように保つのかを個人情報、相談情報を含め報告
5『携帯電話相談システムの構築と稼働』	単著	平成 22 年 7 月	日本産業科学学会第 16 回全国大会	平成 21 年度文部科学省採択事業である学生支援推進事業の[教職協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施のシステムの中の特に「携帯電話による相談システム」の部分について構築・稼働やこれからの問題点について報告
6『教職員協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施 平成 21 年度取組経過報告』	共著	平成 22 年 12 月	芦屋大学論叢 54 号	平成 21 年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業学生支援推進プログラムの補助事業として実施している「教職員協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施」の平成 21 年度取組経過報告書である。 本稿は、本取組の目的と概要、取組の体制と実施計画、本年度の活動経過、評価委員会、目的の達成状況、などの項目に分けて、本年度の活動内容を紹介し、最後に本年度活動を総括するとともに、次年度活動の方向などに言及している。
7『外出先でのネット接続について-Wi-Fi 接続-』 情報通信ネットワーク	単著	平成 22 年 12 月	日本産業科学学会関西西部会	出張時などの外出先で、インターネットへの接続に関する調査報告(フリースポットとはなんなのか、どこでどのように接続ができるのかを)と、特に Wi-Fi 接続器機(i-PodTouch や i-Pad・ノートパソコン)について、今後の動向と可能性についての調査報告、学部生においては、自宅と変わらないネットワークへの接続環境にするためには報告
8『学生連絡システムの構築』 (大学教育・学生支援推進事業【テーマ】学生支援推進プログラム)	単著	平成 23 年 4 月	日本産業科学学会関西西部会	平成 21 年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業学生支援推進プログラムの補助事業として実施している「教職員協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施」の平成 22 年度から 23 年度に開発をした教職員から学生への連絡システムを構築した取組経過報告である。 本稿は、本取組の目的と概要、取組の体制と実施計画、本年度の活動経過、評価委員会、目的の達成状況、などの項目に分けて、本年度の活動内容を紹介し、最後に本年度活動を総括するとともに、次年度活動の方向などに言及している。
9『リアルタイムサポートシステム学生連絡システムの構築』	単著	平成 23 年 7 月	日本産業科学学会第 17 回全国大会	平成 21 年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業学生支援推進プログラムの補助事業として実施している「教職員協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施」の平成 22 年度から 23 年度に開発をした教

<p>(大学教育・学生支援推進事業【テーマ B】学生支援推進プログラム)</p> <p>10『平成21年度 文部科学省 大学教育・学生支援推進事業 学生支援推進プログラム 教職員協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施 平成22年度取組経過報告』</p>	共著	平成 24 年 1 月	芦屋大学論叢 56 号	<p>職員から学生への連絡システムを構築した報告である。</p> <p>本稿は、本取組の目的と概要、取組の体制と実施計画、本年度の活動経過、評価委員会、目的の達成状況、などの項目に分けて、本年度の活動内容を紹介し、最後に本年度活動を総括するとともに、次年度活動の方向などに言及している。</p> <p>平成 21 年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業学生支援推進プログラムの補助事業として実施している「教職員協働による学生リアルタイムサポートシステム体制構築と実施」の最終年度改良報告と 22 年度の経過報告</p>
<p>11『リアルタイムサポートシステム学生連絡システムの構築』 (大学教育・学生支援推進事業【テーマ B】学生支援推進プログラム)</p>	単著	平成 23 年 3 月	日本産業科学学会研究論叢 17 号	<p>平成 21 年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業学生支援推進プログラムの補助事業として実施している「教職員協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施」の平成 22 年度から 23 年度に開発をした教職員から学生への連絡システムを構築したことで双方向連絡システムを構築した報告である。</p> <p>本稿は、本取組の目的と概要、取組の体制と実施計画、活動経過、評価委員会、目的の達成状況、などの項目に分けて、本年度の活動内容を紹介し、今後の活動の方向などに言及している。</p>
<p>12『携帯電話とパソコンを賢く上手に使う』</p>	共著	平成 24 年 12 月	日本産業科学学会関西西部会研究報告集	<p>スマートフォンの無料通話アプリ比較、利用する学生目線での便利な点、気をつけなければいけない点をアプリ毎に比較をしながら学生生活でどのように使えるかを報告</p>
<p>13『平成21年度 文部科学省 大学教育・学生支援推進事業 学生支援推進プログラム教職員協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施』平成22年度取組経過報告</p>	共著	平成 25 年 1 月	芦屋大学研究論叢第 58 号	<p>平成 21 年度文部科学省大学教育・学生支援推進事業学生支援推進プログラムの補助事業として実施した「教職員協働による学生リアルタイムサポート体制の構築と実施」が平成 23 年度で完了したので、その成果を報告するものである。</p> <p>本稿は、本取組の目的と概要、実施体制と実施経過、成果物の概要と得られた効果、などの項目に分けて、活動内容を紹介し、最後に今後の運用に言及している。</p>
<p>14『心理学を応用した WEB デザインによる経営戦略』</p>	共著	平成 25 年 12 月		<p>色彩や配色、コンテンツが与える心理学効果を期待し、本学学生を対象に賃貸住宅のホームページを調査研究した。学生が賃貸住宅を考える場合にホームページが与える企業イメージがどのように作用するかをアンケート調査により調査研究し、実際に学生の実家で経営をされている賃貸住</p>

				宅ホームページに適應してみてもどのような効果が得られるかを研究したものである
【その他(講演や発表)】 1 学生拳法リーダーズ研修会 1996～2021年	単独	1996年,1997年 1998年,1999年 2000年,2001年 2002年 2003年 2004年 2005年 2006年 2007年 2008年 2009年 2010年 2011年 2012年 2013年 2014年 2015年 2016年 2017年 2018年 2019年 2020年 2021年 毎年3月実施	ラマダホテル 大阪キャッスルホテル	学生拳法におけるデータ整理と伝達方法について、ホームページをどう活用するかなどを各大学の主将や主務に毎年講演

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 森 下 博 行					
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は発 表学会等の名 称	概 要
マルチメディア 概論ⅠⅡ 教育の方法と技 術	初等教育における 情報教育の考え方	単	平成 27 年 1 月	芦屋大学論叢 第 62 号	近年の教育を取り巻く環境を構成する種々の要素の中で、最も変化・進化の度合いが著しいものの一つに「情報」がある。日本では平成元年以降、インターネット利用の一般化に歩調を合わせるように携帯電話が普及してきた。同時にインターネットの発展は学校に通う児童生徒にさえ危険を与えるに至っている。 <u>初等教育における情報教育の背景と歴史、必要性や問題点、また今後に取り組むべき課題などについて考察した。</u>
マルチメディア 概論ⅠⅡ 教育の方法と技 術	ICT教育について の一考察	単	平成 28 年 1 月	芦屋大学論叢 64 号	大学教育に ICT を導入すべく考察した。 <u>初等教育における情報教育の背景と歴史、必要性や問題点、また今後に取り組むべき課題などについて考察した。</u>
マルチメディア 概論ⅠⅡ 教育の方法と技 術	ICT環境における 自己表現力の育成 について ー 児童・生徒への 情報機器を用いた 自己表現方法ー	共	平成 28 年 7 月	芦屋大学論叢 第 65 号	<u>森下博行・塚本邦昭。</u> 近年、自己表現能力の向上が求められており、社会的なニーズや大学教育にも自己表現力の導入が求められている。その育成方法として、 <u>ICT の活用を前提とした表現力の育成について考察した。</u>

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(2)	共	平成28年8月	日本教育情報学会第32回年会	藤本光司・森下博行・池田聡・若杉祥太。 本学の初年次教育「大学生活入門」について、 <u>研究経緯と授業内容、実践例</u> についてまとめた。共同研究により抽出不可能。
芦屋大学自己点検評価委員会2016年度上半期活動の軌跡	共	平成29年1月	芦屋大学論叢第66号	河村繁・齋藤治・石田愛子・青木敦英・中村卓司・猪田裕子・森下博行。 本学が本年受審した大学機関別 <u>認証評価の報告書</u> を編纂及び作成する過程をまとめたものである。ワークフローを開示することで、7年後の受審に向けての準備の一助としたい。共同研究により抽出不可能。
教授法が大学を変える「コミュニケーションスキルの向上を通じた大学生活への適応支援 芦屋大学、大学生活入門、基礎演習Ⅰ」	共	平成29年3月	教育学術新聞第2678号	藤本光司・森下博行・池田聡・若杉祥太。 本学の初年次教育において、 <u>コミュニケーション実践のための教授法</u> について探求。実際に講義での実習を通してコミュニケーションスキルの向上研究についてまとめた。共同研究により抽出不可能。
初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(3)-運用マネジメントおよび学習活動の質的評価と量的評価に関する考察-	共	平成29年8月	日本教育情報学会第33回年会	藤本光司・森下博行・池田聡・西藤治・井村薫子・成瀬優享・若杉祥太。 本学の初年次教育「大学生活入門」について、 <u>研究経緯と授業内容、実践例</u> についてまとめた。共同研究により抽出不可能。
ブレッドボード電子回路実習教材研究	共	平成29年8月	日本教育情報学会第33回年会	齋藤治・森寄功・森下博行。 複数電子部品の相互接続配線において <u>電子回路図から実体配線までの教材開発等の立場から</u> 考察した。

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 盛谷 亨					
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発 表雑誌又は発 表学会等の名 称	概 要
プログラムと計測・制御 機械工学実験・実習	1. 競技用ソーラーカー	共著	平成 22 年 3 月	トランジスタ技術 第 47 巻 第 3 号 通巻第 546 号 (CQ 出版社)	芦屋 Sky Ace TIGA に搭載した電気系計測装置の機能と計測法、および競技会における運用方法について。
プログラムと計測・制御 機械工学実験・実習	2. 太陽電池活用の基礎と応用	共著	平成 23 年 5 月	CQ 出版 株 式会社	ソーラーカー「芦屋 Sky Ace TIGA」に搭載された電気・電子系装置の紹介と、太陽電池の発電制御に関する技術について。
情報処理基礎 プログラムと計測・制御 機械工学実験・実習	3. 中学校技術科「プログラムによる計測・制御」における教材研究－自動演奏ピアノの製作－	共著	平成 25 年 3 月	情報コミュニ ケーション学 会 第 10 回全 国大会発表 論文集	玩具のピアノに小型電磁ソレノイドを取り付け、コンピュータ制御することによって自動演奏をさせる教材の提案と製作。

研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
【学術論文】 1. 「ソーラーカーを活用したアクティブラーニングの研究(1)－ 教学として学生のマネジメント活動に視点をあてて－」	共著	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会 第 30 回年会論文集	ソーラーカーを活用したプロジェクト活動について、学生の積極的な参加と主体性を促すための方策として取り入れた、PBL の学びとその方向性について。
2. ソーラーカーを活用したアクティブラーニングの研究(2) －産学協働による PBL とマネジメント活動の充実－	共著	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会 第 31 回年会論文集	ソーラーカーを活用したプロジェクト活動について、学生を主体とした産学連携、スポンサー誘致活動のあり方を考えた、PBL の学びとその方向性について。
3. ソーラーカープロジェクトのフィールドワークを重視したアクティブラーニング(1) －学生主体のマネジメント活動について－	共著	平成 28 年 2 月	情報コミュニケーション 学会 第 13 回全国大会発表 論文集	ソーラーカープロジェクト活動における、アクティブラーニングを重視した学生主導による産学連携、スポンサー誘致活動のあり方について。

4. ソーラーカーを活用したアクティブラーニングの研究(3) ーPBLの実際と学生が主体となった社会貢献活動についてー	共著	平成 28 年 7 月	日本教育情報学会 第 4 回年会論文集	ソーラーカーを活用したプロジェクト活動について、学生を主体とした産学連携、スポンサー誘致活動のあり方を考えた、PBL の学びとその方向性について。
5. 2 級自動車整備士養成課程における PBL 授業プログラムの開発と導入効果 (1)	共著	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会 第 33 回年会論文集	2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力獲得を目的とした PBL 授業プログラムの開発及び実践研究。
6. 教職科目におけるインストラクショナルデザインを用いたアクティブラーニングの展開 (3) ー中学校技術科教育における「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業モデルの検討ー	共著	平成 30 年 3 月	情報コミュニケーション学会 第 15 回全国大会発表 論文集	中学校技術科の教職科目において、授業設計を行うための授業デザインを論述。特に、次期学習指導要領に掲載された、設計と試作時において、学生たちと取り組んだ試作モデルの製作と授業時数との関連性について。
7. 2 級自動車整備士養成課程における PBL 授業プログラムの開発と導入効果 (2) 車両製作の取り組みと報告	共著	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会 第 34 回年会論文集	2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力獲得を目的とした PBL 授業プログラムの開発及び実践研究に準じた各年度の比較及び実践報告。
8. 中学校技術科の教職課程における課題と展望(1) ー全国の動向と本学の現状についてー	共著	令和元年 8 月	日本教育情報学会 第 35 回年会論文集	文科省が実施した教職課程の再課程認定審査に基づき、技術科教育の全国的な養成課程の状況を整理した。一方、本学学生の教員としての学校への着任状況を過去 8 年間に遡り整理するとともに、本学の課題と展望を述べた。
9. 中学校技術科の教職課程における課題と展望(2) ー教職必修科目の成績と教員採用試験の合否結果との関連性についてー	共著	令和 2 年 8 月	日本教育情報学会 第 36 回年会論文集	文科省が実施した教職課程の再課程認定審査に基づき、技術科教育の全国的な養成課程の状況を整理した。前報告に続き、本学学生の教職必修科目の成績と教員採用試験の合否結果との関連性について考察した。

① 教育研究業績書						
教育研究業績書						
氏名 池田 聡						
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)						
担当 授業 科目	著書、学術論文等の 名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表 雑誌又は発表 学会等の名称	執筆 ページ 数(総 ペー ジ数)	概 要 (共著の場合は全員の著者名を記載) (共著及び執筆ページ数が抽出できない場 合は執筆箇所を詳述)
研究業績等に関する事項(5年以内)						
著書、学術論文等の名称		単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要	
(著書1) 大学生の基礎教養	編 著	平成22年 4月1日	大学生の基礎教養 出版元:株式会社 一灯館 印刷・製本:藤成 印刷株式会社 編著者:池田聡	昨今の大学教員には研究だけではなく、教育も重要な課題とな っておりまた、テキスト作成に係わる業績も問われるようになった。 この様な状況の中で他大学の教員や民間有識者の協力の下、様々 な分野から大学生の基礎教養を考えてもらい、一冊にまとめている。		
(著書2) 環境問題と教育の 重要性について	単	平成22年 4月1日	大学生の基礎教養 出版元:株式会社 一灯館 印刷・製本:藤成 印刷株式会社 編著者:池田聡	メディアを通して報道される環境問題は正しい知識を持ってい なければ誤った解釈をしかねない。そのためには、学校での環 境教育が重要となり、各年代に合わせた教育も重要となる。こ のような考えから学校教育における体験型の教育を考察してい る。		
(著書3) 学校教育における 旅行型環境教育	単	平成22年 4月1日	大学生の基礎教養 出版元:株式会社 一灯館 印刷・製本:藤成 印刷株式会社 編著者:池田聡	実践型の環境教育であるピオトープの重要性について学校教育 を通して考え、得た知識をいかに教育的効果が高い修学旅 行に活かせるのかを考察している。		
(著書4) 心配り・心遣いを学 ぶ	単	平成22年 4月1日	大学生の基礎教養 出版元:株式会社 一灯館 印刷・製本:藤成 印刷株式会社 編著者:池田聡	人間関係の希薄化が影響でコミュニケーション能力の低下が問 題となっている。学生時代にはこの問題を解決する絶好の機会 である。大学生活での心配り・心遣いを考察している。		
(著書5) 継承 ― 夢へのス タート ―	単	平成24年 3月10日	芦屋大学卒の事業 家たちの教え 出版元:株式会社 晃洋書房 発行者:上田芳樹 印刷者:藤森秀夫 編者:芦屋大学経 営教育学部 芦屋大学ビジネス 研究 センター	芦屋大学で学び卒業後に事業家として活躍する数名をピック アップし、在学生に講義の一環として体験談を語ったものであ り、本著は山陽企業株式会社の代表取締役である吉岡一博氏 の経営哲学や経営方針をインタビュー形式でまとめたもので る。		

(学術論文1) 児童虐待の現状と 防止対策 —富山県を中心とし て—	共	平成 22 年 12 月 12 日	芦屋大学論叢 第 54 号	児童虐待の現状を中心に、虐待の種類、母親の育児負担、その問題の原因を考察し、現場の最前線で問題に直面している児童福祉司・子育て支援職員等の人物にヒアリング調査し、富山県を中心に考察している。
(学術論文2) 長期宿泊における 体験型環境教育 —青少年の現代的 課題を中心として—	単	平成 25 年 3 月 31 日	日本産業科学学 会 研究論叢第 18 号 発行所: 日本産業 科学学会(本部事 務局) 出版所: 株式会社 荒川印刷	長期集団体験活動において体験型環境教育の意義と目的について青少年の現代的課題と問題点を中心に今後の活動についての考察をしている。
(学術論文3) 発育期における子 どもの現代的運動課 題について	共	平成 26 年 3 月 31 日	日本産業科学学 会 研究論叢第 19 号 発行所: 日本産業 科学学会(本部事 務局) 出版所: 株式会社 荒川印刷	生活環境の変化に伴い子どもの発育と運動能力、健康問題を課題とし、あそび・レクリエーション・自然活動を通して問題解決を考察している。
(学術論文4) ケース・メソッド教育 とキャリア教育	共	平成 27 年 3 月 31 日	高田短期大学紀 要 第 33 号	ケース・メソッド教育を用いた実践的なキャリア教育について事例を参考に今後の発展性を考察している。
(学術論文5) スポーツツーリズム の現状と課	単	平成 27 年 3 月 31 日	日本産業科学学 会 研究論叢第 20 号 発行所: 日本産業 科学学会 出版所: 株式会社 荒川印刷	これまで技術大国・物づくり大国として国際社会の中で不動の位置を確立してきた我が国は、東日本大震災による原発事故以降第3次産業に着目してきた。2007年観光立国基本法が施行されさらなる方向性の変化が急速に進みつつある。本研究はスポーツに特化した旅行形態である「スポーツツーリズム」の現状と課題を主題とし、2020年に東京で開催が決定したオリンピック・パラリンピックの波及効果についても今後の研究としている。
(学術論文6) 初年次教育におけ るアクティブラーニ ングの研究(2) —5年間の「大学生 生活入門」を通じた省 察—	共	平成 28 年 8 月 20 日	日本教育情報学 会 第 32 回年会誌	ここ数年の学生調査・学習評価について概観するとともに新たに授業に加えた「18歳選挙・有権者教育」について、スマホ・REAS(リアルタイム評価支援システム)を活用したアクティブラーニングについての見解。
(学術論文7) 環境の構成と人間 社会～人為起因と 自然起因～	単	平成 29 年 3 月 31 日	日本産業科学学 会 研究論叢第 22 号 発行所: 日本産業 科学学会 出版所: 株式会社 荒川印刷	人間社会から考察する環境の構成を明確にし、地球規模での環境変動と時系列、産業革命以降の環境問題、地球温暖化を中心に見解を考察している。

(学術論文 8) 初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(3) —運用マネジメントおよび学習活動の質的評価に関する考察—	共	平成 29 年 8 月 20 日	日本教育情報学会 第 33 回年会誌	ここ数年の学生調査・学習評価について概観するとともに新たに授業に加えた「18 歳選挙・有権者教育」について、スマホ・REAS(リアルタイム評価支援システム)を活用したアクティブラーニングについての見解。(2)の継続研究。
(学術論文 9) スマート化に対する大学生の意識調査と考察	共	令和元年 8 月 25 日	日本教育情報学会 第 35 回年会誌	日本教育情報学会第 35 回年会報告をまとめた内容でスマート化社会を大学生がどの様に捉えているかの調査をまとめたものである。
(学術論文 10) 地域環境と安全教育 —社会性昆虫とその特性—	共	令和元年 8 月 25 日	日本教育情報学会 第 35 回年会誌	日本教育情報学会第 35 回年会報告をまとめたものである。社会性昆虫の中からハチにテーマを絞り、その危険性、習性等対策と駆除についてまとめたものである。
(学術論文 11) 「中学校技術科の教材開発におけるSDGsとの関連(1) —理論背景の整理と学習モデルの開発に向けて—	共	令和2年 3 月 1 日	情報コミュニケーション学会 第 17 回全国大会 発表論文集	2030 年までの国連採択事項である SDGsと日本における教育の関連性を考え中学技術科教材開発を念頭に理論背景の整理と学習モデルを考察している。
(学術論文 12) 江戸時代と現代の環境問題に関する考察	単	令和 2 年 8 月 22 日	日本教育情報学会 第 36 回年会誌	現代の大量消費型社会とは大きく異なり、わずかなエネルギーしか消費しなかった江戸時代に注目しており、自然的起因と人為的起因の内訳は人為的起因を中心に述べ、省エネに貢献したであろう当時の多様な職種を中心に循環型社会の可能性について考察している。
(学術論文 13) 江戸時代の循環型社会—衣類と灰その中心的人物—	単	令和 3 年 3 月 31 日	日本産業科学学会 研究論叢第	人為的起因の視点から現在とは異なり、循環型社会が構築できていた江戸時代を中心に、衣類における最終形態とも呼べる「灰」に注目し、この循環型社会構築の中心となった人物を中心に論じている。
(研究ノート 1) 児童虐待の現状と防止対策	共	平成 22 年 6 月 12 日	芦屋大学論叢 第 53 号	児童虐待により、悲惨な報道がされる昨今において、その傾向を中心に考察している。また、事例を加えながらその対策についても考察している。
(研究ノート 2) エコツーリズムにおける環境教育の現状と課題	単	平成 23 年 6 月 14 日	芦屋大学論叢 第 55 号	エコツーリズムの現状とツアーで実施される内容にどのような教育的効果があるのか。世界的な視点から日本の現状を考察している。
(研究ノート 3) 女性の雇用問題と政策に関する一考察 —女性を取り巻く社会環境—	共	平成 30 年 11 月 21 日	芦屋大学論叢第 70 号	女性の社会進出増加により、雇用者全体に占める女性比率も上昇傾向にあり、現在では約 4 割を占めるに至っている。現代の働く女性の労働環境及び子育て等の問題点を考察し、法整備を含めた今後の展開を研究目的としている。

(新聞記事掲載1) 教育学術新聞 「コミュニケーション スキルの向上を通じた 大学生活への適 応支援、芦屋大学 『大学生活入門』基 礎演習 I pp3」	—	平成 29 年 3 月 8 日	教育学術新聞 平成 29 年 3 月 8 日掲載	本学で実施している 1 回生の講義「基礎演習」を取り上げた新聞掲載。少人数教育を活かしたコミュニケーション能力向上を目的とする講義内容に関連させた記事である。
(雑誌掲載2) 環境問題と江戸の 循環型社会	単	令和 3 年 3 月 31 日	中部大学大学院 GLOCAL2021	昨今問題となっている温暖化や砂漠化などの多様な環境問題は、産業革命以降に浮き彫りとなってきた、我々に直接ないし間接的に影響がある問題である。本論では、現在とは異なり、循環型社会が構築できていた江戸時代に焦点を絞り人為的起因からの視点で論じている。
(学会報告1) 長期宿泊における 体験型環境教育	—	平成 24 年 4 月 21 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:高田短 期大学	学校教育における体験活動の現状と青少年の現代的課題を中心に文部科学省が平成 23 年に位置づけた「長期集団体験活動」の取組みについての部会報告である。
(学会報告2) 長期宿泊における 体験型環境教育 —青少年の現代的 課題を中心として—	—	平成 24 年 8 月 26 日	日本産業科学学会 全国大会 開催場所:芦屋大 学	平成 24 年 4 月 21 日実施の関西部会において報告した長期宿泊における体験型環境教育に青少年の現代的課題と実施の問題点を中心とした学会報告である。
(学会報告3) 体験型環境教育か ら考察した 子どもの現代的課題 について	—	平成 25 年 4 月 20 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:芦屋大 学	体験型環境教育を実施するにあたり、子どもの成長段階において必要な運動能力と精神機能についての生体リズムを「スキヤモンの発達・発育曲線を参考に報告している。
(学会報告4) 観光立国におけるス ポーツツーリズム	—	平成 26 年 4 月 12 日	人材活用研究会 関西部会 開催場所:近江八 幡商工会議所	2007 年に観光立国宣言をした我が国におけるスポーツツーリズムの発展と今後の展開についての報告をしている。
(学会報告5) スポーツツーリズム について	—	平成 26 年 4 月 19 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:芦屋大 学大阪キャンパス	過去 10 年間の訪日外客数を調査し、その目的と希望を考察している。また、国際大会等のイベントを調査し 2020 年、東京で開催されるオリンピック・パラリンピックでの訪日外客者数増の可能性についての学会報告。
(学会報告6) 地域の特性を活かした スポーツツーリズム	—	平成 26 年 8 月 23 日	日本産業科学学会 全国大会 開催場所:青森公 立大学	地域に特化したスポーツツーリズムの現状と課題を考察し継続的なスポーツツーリズムの在り方についての学会報告であった。
(学会報告7) 環境の構成と保 全管理	—	平成 28 年 5 月 13 日	日本産業科学学会 関西部会 開催場所:大阪産 業大学	環境の構成を明確化し、地球規模での気候変動及びその影響による生命の変化について現状の生命体の中で高度な知能を持つと考えられる人間(ホモサピエンス)の観点から環境保全管理を考察している。

(学会報告 8) 環境の構成と人間社会～人為起因と自然起因～	—	平成 28 年 8 月 21 日	日本産業科学学会 全国大会 開催場所:大阪産業大学	環境の構成と人間社会の関わり合いを明確にし、地球に与える影響を人為起因と自然起因と線引きし、その関わり合いについて全国大会での報告であった。
(学会報告 9) ファッション業界を支える職人 ※ゼミ生指導報告	—	平成 29 年 12 月 16 日	日本産業科学学会 関西西部会 開催場所:芦屋大学	ファッション業界の現状と日本の産地と文化について実地調査を踏まえての学会報告となっている。(指導教員として)
(学会報告 10) 日本における社会性昆虫による年間被害と損害	—	平成 30 年 9 月 1 日	日本人間関係学会 第 59 回関西地区大会 開催場所:大阪体育大学同窓会館(アネックス)	社会性昆虫に襲われる危険性は、ある一定の割合で毎年必ず確認されており、最悪の場合は死亡に繋がるケースも珍しくない。その種類及び習性、活動時期、襲われる危険を伴う行動等、その対策と駆除、また損害賠償等を含めた内容についてのハチを例としての報告。発表者の体験例及び法律と判例の解説を加え、毎年ハチによる死に至るケースを含め被害があること、行政の対応は地域により異なること、ハチの駆除には経済的負担と危険を伴うこと、私有地にあるハチの巣による被害が発生した場合損害賠償責任の可能性のあることを結論とした。
(学会報告 11) 地域環境と安全教育—社会性昆虫とその特性—	—	令和元年 8 月 25 日	日本教育情報学会 第 35 回年会 開催場所:岡山理科大学	社会性昆虫の中からテーマをハチに絞りその危険性、種類、習性、活動時期、襲われる危険性を伴う行動等、その対策と駆除についての報告。
(学会報告 12) 江戸時代の循環型社会—古着屋・紺灰業を中心として—	—	令和 2 年 8 月 29 日	日本産業科学学会 関西西部会 開催場所:リモート	江戸時代の多様な職種を中心に循環型社会の可能性について報告した日本教育情報学会第 36 回年会の中から古着屋・紺灰業を中心に考察することを目的として述べている。
(公開講座 1) SDGs(持続可能な開発目標)から考える次世代に伝えること	—	令和 3 年 2 月 22 日	芦屋大学公開講座 開催場所:芦屋市立公民館	貧困に終止符を打ち、地球を保護し、すべての人が豊かさを享受できる持続可能な社会を 2030 年までに実現するという統一目標(SDGs)が国連で採択され数年となり、その考え方や取組は徐々に浸透してきている。生物間・世代間・世代内倫理の観点から次世代に伝えることを考える。

① 教育研究業績書				
教育研究業績書				
氏名 井上 徹				
研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
【学術論文】 1 WEDGWOOD におけるマ ネジメントとデザインの関係 について	単著	2014 年 1 月	甲南大学大学院 修士論文	本研究は、18 世紀～19 世紀のイ ギリスの業者ウエッジウッドのマ ネジメント手法とデザインとの関 係性を明らかにし、デザインを企 業経営における経営資源と捉え マネジメントにデザインを活用し た最初の事例であった事の詳細 を明らかにした。
2. 日本インテリア学会 30 周年記念号 「63 人のインテリア論」	単著	2018 年 4 月	日本インテリア学会	「インテリアとイノベーション」 インテリアデザインにおける今後 の課題とイノベーションの必要性 について執筆。
【その他(講演や発表)】 1. 近世イギリスにおける陶磁 器とインテリアの関係に関す る考察その 2	単著	2014 年 10 月	日本インテリア学会 第 26 回大会 研究発表梗概集	18 世紀後半～19 世紀前半に描 かれたカリカチュアを中心に近世 イギリス社会における中流階級の インテリアと陶磁器の関係を検 証・考察
2. 近世イギリスにおける陶 磁器とインテリアの関係に関 する考察その 3	単著	2015 年 10 月	日本インテリア学会 第 27 回大会 研究発表梗概集	18 世紀後半～19 世紀前半に描 かれたカリカチュアを中心に近世 イギリス社会における中流階級の インテリアと陶磁器の関係を検 証・考察
3. 超高層・高層マンションの 居室と収納関係の調査・考 察と提案	共著	2016 年 10 月	日本インテリア学会 第 28 回大会 研究発表梗概集	2012 年の調査から 4 年、超高層・ 高層マンションの収納がどのよう に変化したかを調査・考察・提 案。共同研究により抽出不可： 著者：小宮容一、井上徹
4. インテリアのカラーコーデ ィネイトに適応した色相環の提 案	共著	2017 年 10 月	日本インテリア学会 第 29 回大会 研究発表梗概集	インテリアデザインにおける新た なカラーコーディネイトの提案。 共同研究により抽出不可： 著者：小宮容一、井上徹
5. インテリアデザインに於ける IoT(Internet of Things)に 関する考察	共著	2017 年 10 月	日本インテリア学会 第 29 回大会 研究発表梗概集	インテリアデザインを取り巻くスマ ート化・IoT の現状調査及び課題 と考察。 共同研究により抽出不可： 著者：井上徹、中村孝之
6. 第 1 回スマートインテリア研 究部会—スマートインテリア 趣旨説明—	共同	2017 年 12 月	スマートインテリア研究 部会	研究部会設立経緯及び、建築・ インテリアと ICT・IoT のあらし 及び研究方法、研究計画・目的。

7 第 2 回スマートインテリア研究部会-IoT 活用事例の現状(住宅・オフィス等)-	単独	2018 年 1 月	スマートインテリア研究部会	1.時代毎のスマートハウスの進展及び、HEMS の概略 2.現状報告ハウスメーカーの取組・オフィスの現状等
8 第 3 スマートインテリア研究部会-スマートインテリア研究に関する検討項目-	単独	2018 年 8 月	スマートインテリア研究部会	スマートインテリア設計の為の要件を抽出・提案。
9.インテリアのスマートに向けたデザイン要件の枠組み検討-スマートインテリア研究その 1-	共著	2018 年 10 月	日本インテリア学会 第 30 回大会 研究発表梗概集	インテリアのスマート化に向けたデザイン要件を抽出する為の枠組みを、ICF(国際生活機能分類)を使用し検討。その上で環境(空間)と活動(行為)のガイドラインになり得る項目を決定。
10.デジタルネイティブ世代の超スマート社会感の考察-スマートインテリア研究その 2.-	共著	2018 年 10 月	日本インテリア学会 第 30 回大会 研究発表梗概集	その 1 と連動し、デザイン要件抽出の事前調査として、デジタルネイティブ世代の超スマート社会に対する認知・受容性の調査と考察。
11.スマート化に対する大学生の意識調査と考察	共著	2019 年 8 月	日本教育情報学会 第 35 回年会	スマートインテリア研究その 2 のアンケートを他大学で実施し母集団を増やし、傾向の再確認を行った。
12. デジタルネイティブ世代の超スマート社会感の考察-スマートインテリア研究その 3.-	共著	2019 年 10 月	日本インテリア学会 第 31 回大会 研究発表梗概集	デジタルネイティブ世代の超スマート社会に対する認知・受容性の調査と考察。その 3
13 デジタルネイティブ世代の超スマート社会感の考察-スマートインテリア研究その 4.-	共著	2020 年 10 月	日本インテリア学会 第 32 回大会 研究発表梗概集	デジタルネイティブ世代の超スマート社会に対する認知・受容性の調査と考察。その 4
14.デジタルネイティブ世代の超スマート社会感の考察-スマートインテリア研究その 5.-【執筆中】	共著	2021 年 10 月	日本インテリア学会 第 33 回大会 研究発表梗概集	デジタルネイティブ世代における超スマート社会に対する認知・受容性の調査と考察。 スマート研究その 5

① 教育研究業績書					
教育研究業績書					
氏名 林 泰子					
担当授業科目に関する研究業績等(10年以内)					
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行年月	出版社又は 発行雑誌等 の名称	概要
教育の方法と技術(オムニバス) 教職実践演習中・高(オムニバス) 教育実習事前・事後指導(情報) 教育実習(情報)	(著書) 1.『元気がでる学び力』	共	平成23年4月	ぎょうせい (202頁)	知識基盤社会を生き抜くために、主体的に生きる喜びに繋がる学習意欲を芽生えさせ、課題解決に向けた適切な判断に基づく行動力を身につける事を目的とした書である。他者や社会を考慮した実践態度の重要性を説き、道徳的判断力を育成する内容を執筆した。 pp.152-162 担当執筆 奥野雅和、林徳治、 <u>林泰子</u> 、他 5名
	2.『主体的に学び意欲を育てる 教学改善のすすめ』	共	平成28年4月	ぎょうせい (235頁)	初等・中等・高等教育での教学改善において、学習者の学習活動や教員の教育・研究活動が効果的に遂行できるために、教育課程、教育方法・技術、教育評価などの方略、実践、評価、改善について記した書である。主体的な学びの授業実践について執筆した。 pp.87-95 担当執筆 林徳治、藤本光司、若杉翔太、 <u>林泰子</u> 、他 11名
	3.『アクティブラーニングに導く 教学改善のすすめ』	共	令和2年4月	ぎょうせい (251頁)	上記 4. の改訂版である。主体的な学びや論理的な考えで用いる手法と実践例について執筆した。 pp. 91-99 執筆担当 林徳治、藤本光司、若杉翔太、 <u>林泰子</u> 、他 16名
	(学術論文等) 1.「幼児教育課程におけるコミュニケーション能力の育成と検証 -保育活動別のコミュニケーションに着目して-」	共	平成31年3月	芦屋学園短期大学研究紀要第45号 (149頁)	「教育の方法および技術」の授業のコミュニケーション能力の育成を目的とした演習で修得した技術を、学生が実習園での「生活活動」「遊び活動」「課題活動」の中でどの程度実践できたのか調査した。学生の実習の振り返りとして行った調査の結果から、コミュニケーション能力の育成に対する演習の効果について検証した。

情報処理実習 I・II (単独)	2.PFF (Preparing Future Faculty) プログラム開発への取り組み-実践的 FD プログラムを 応用した PFF の構築-	共	平成 24 年 5 月	大学教育学 会第 34 回大 会 発表要 旨収録	pp.43-64○林泰子、若杉祥太、中 谷有里 立命館大学では 2009 年度より新 任教員対象 FD 研修を実践してい る。この実践的 FD プログラムの開 発手法やコンテンツを、大学教員 を目指す大学院生を対象とした大 学教員準備プログラム(以下 PFF プログラム)の開発に応用し、その 取り組みについて提案した。 pp.222-223○林泰子、沖裕貴、前 田真志、松村初
	3.北米の大学における PFF の現状	共	平成 24 年 6 月	日本高等教 育学会第 15 回大会 発 表要旨収録	大学教員を目指している立命館大 学の大学院生を対象とした大学教 員 養 成 (Preparing Future Faculty:PFF)プログラムの開発を 目的として、最も先進的に PFF を 開発・運営している北米の3大学 を訪問し、その取り組みについて 調査した。大学教員に必要とされ る獲得すべき能力や、それに対応 したプログラムに関する情報や大 学院生へのインタビューなどの現 状を調査した内容を報告した。 pp.155-156○林泰子、沖裕貴、前 田真志、松村 初
	(著書) 1.『元気がでる学び力』 2.『留学生のための日本語 で学ぶパソコンリテラシー』 (学術論文等) 1.「幼児教育課程における 情報モラル教育と今後の展 望-情報モラルセミナーの 実施とアンケート評価をもと に-」	共 共 共	平成 23 年 4 月 平成 27 年 1 月 平成 30 年 3 月	ぎょうせい (202 頁) 共立出版 (187 頁) 芦屋学園短 期大学研究 紀要第 44 号 (264 頁)	(再掲のため、略) 大学、専門学校や高等学校、日 本語学校等でパソコンリテラシー を学ぶ留学生を対象とした、情報 教育のための教科書である。情報 倫理の章において、情報社会や 情報の特性、著作権、個人情報、 道徳的判断等について執筆した。 pp.110-124 担当執筆 橋本恵子、金子大輔、 <u>林泰子</u> 、他 3 名 実習先で知り得た情報の適切な 取り扱いの重要性を、学生が再認 識することを目的とする「情報モ ラルセミナー」を実施した。事前・事 後に情報モラルに関するアンケ ート調査を行った。実習直前の 1 年 生に着目し、その事前・事後アン ケート調査の分析・検証の結果か ら、今後の保育者養成校での情報 モラル教育について検討した。 pp.105-125○林泰子、若杉翔太、 中谷有里

2.地域社会における「ネット社会と人権」に関する情報モラル教育	単	平成 25 年 11 月	日本教育情報学会第 29 回年会論文集	滋賀県において筆者が担当した、人権教育機関や地域総合センターなどの関係者・職員、学校関係者、市議会議員などを対象とした講演をもとに、ネット上での誹謗中傷や人権侵害がおこる社会的背景、ネット利用する人の道徳的判断の育成などの研修内容と取組みについて報告した。 pp.294-295○林泰子
3. 情報科教育関連科目を受講する理系学生を対象とした学修に関する実態調査	共	平成 25 年 11 月	日本教育情報学会第 29 回年会論文集	教職課程の情報科教育関連科目を受講している理系学生を対象に、教授・学習に関するアンケート調査を実施した。調査概要は、教員の授業評価、学生の生活面での情報に関する実態、学生が今後の教育活動をするうえで有用と捉えている授業内容などである。その結果から受講生の学修の実態を把握し、情報科教育関連科目における授業内容の改善について検討した。本研究は平成 23-25 年度科研費補助金(大学のコミュニケーション能力の改善が主体性に及ぼす効果の実証研究, 課題番号 23531030, 2013, 代表林徳治)の一環として実施した。 pp.350-353○林泰子、林徳治
4. 地域社会における「ネット社会と人権」に関する情報モラル教育(2)	単	平成 26 年 8 月	日本教育情報学会第 30 回年会論文集	前回より継続して、滋賀県内での「ネット社会と人権」をテーマに取り組んでいる、情報モラル教育の活動について報告した。なかでも今回で 2 回目となる高等学校では、事前に対象者にインターネット利用やスマートフォンなどに関するアンケートを実施し、その結果をもとに道徳的判断を用いた情報モラル教育について検討した。 pp.64-65○林泰子
5. 中学生を対象とした「ネット社会と人権」に関する情報モラル教育	単	平成 27 年 8 月	日本教育情報学会第 31 回年会論文集	中学 3 年生を対象に実施した情報モラル教育において、受講者へ実施したケータイ(スマートフォンなど)や SNS の利用に関するアンケートの調査結果と、道徳的判断を用いた情報モラル教育の結果を検討し報告した。 pp.308-309○林泰子
6. 中学生を対象とした道徳的判断を用いた情報モラル教材	単	平成 28 年 8 月	日本教育情報学会第 32 回年会論文集	前年度実施の中学校の依頼で、さらに早い段階の中学 2 年生に、道徳的判断を用いた情報モラル教育を実施することとなった。今回は、そこで用いた中学生を対象とした道徳的判断力を高めるための情報モラル教材を提示し、その工

	7. 幼児教育課程履修者を対象とした情報モラル教育に関する実践と評価(1)ー短期大学生を対象としたアンケート調査と取り組みー	共	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会第 33 回年会論文集	夫・改善点や効果について検討した。 pp.270-271○林泰子 保育者を目指す学生が、実習先での個人情報や実習内容などの情報に対する責任を再認識するための情報モラルセミナーを開催した。セミナー前後のアンケート調査をもとに、今後の保育者養成校での情報モラル教育への取り組みについて検討した。 pp.300-301○林泰子、若杉祥太、納庄聡、中谷有里
	8. 幼児教育課程における情報モラル教育に関する実践と評価(2)ー役割取得能力の向上への試みー	共	平成 30 年 8 月	日本教育情報学会第 34 回年会論文集	学生が情報を取り扱ううえで、他者や社会への影響を考慮した広い視野を持ち、保育者としての道徳性や人間力を高めるため、その基盤となる役割取得能力の向上を目指した情報モラル教育の学習方法を試みた。その方法を報告し検討した。 pp.336-337○林泰子、若杉祥太、中谷有里
	9. 留学生の情報リテラシーに関する調査と授業への取り組み	共	令和元年 8 月	日本教育情報学会第 35 回年会論文集	留学生の国籍が多様化していることから、情報処理技術に関するスキルの差や、情報社会での考え方の違いなどを把握し、大学生としての情報教育を行うことが望まれる。基本的なパソコン操作のスキル調査とは別に、情報リテラシーに関する意識について 1 年生全員を対象にアンケート調査を行い、本稿では留学生(1 年生)の情報リテラシーへの意識調査の結果について検討した。 pp.230-231○林泰子、若杉祥太、中谷有里
	10. オンデマンド授業による学習観の変容に関する調査研究	共	令和 2 年 8 月	日本教育情報学会第 36 回年会論文集	LMS を導入したオンデマンド授業に不慣れな学生がどのような学習観をもってオンデマンド授業に取り組んでいるのか、その実情を把握するために市川(1995)の学習観尺度を用いたアンケート調査を実施した。今回は、主体的な学修への取り組みと学習観との関係について検討した。○林泰子、若杉翔太、中谷有里

① 教育研究業績書				
教 育 研 究 業 績 書				
氏 名 成瀬 優享				
研究業績等に関する事項 (5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表 の年月	発行所、発表雑誌又 は発表学会等の名称	概 要
【著書】 アクティブラーニングに 導く教学改善のすすめ	共	令和 2 年 4 月	ぎょうせい	コラム「技能伝承 急がば回 れ」を執筆 pp118-119
【学術論文】 1. 潤滑剤性能・特性評価 試験機の開発提案	単	平成 28 年 7 月	芦屋大学論叢	競技用自転車チェーンを対象 とした潤滑剤において、実用 環境を再現した評価試験機が 無い事から、実用される環境 を調査し、これに基づいた潤 滑剤性能及び特性評価試験機 開発に関わる提案を実施し た。 芦屋大学論叢第65号 pp79-90 <u>成瀬優享</u>
2. 2 級自動車整備士養成 課程における深い課題解 決能力の獲得 (1)	共	平成 29 年 8 月	日本教育情報学会	2 級自動車整備士養成課程に おいて、整備士に求められる 深い課題解決能力の構成要素 である技術、知識、社会人基 礎力の向上を目的とし、車両 製作を主軸としてゼミ活動と 授業を連携させた P B L 授業 プログラムの開発と実践の 1 年目の経過報告行った。 日本教育情報学会 第 33 回 年会 論文集 (芦屋大学)、 pp276-277、2017.8.26-27 <u>成瀬優享</u> 、大西昌哲、藤本光 司、盛谷亨、齋藤治、若杉祥 太

3. 初年時教育におけるアクティブラーニングの研究 (3)	共	平成 29 年 8 月	同上	<p>本学のリメディアル教育について整理し、初年次教育を円滑に推進するためのクラス編成やマネジメントについて述べ、学生レポート評価に関する質的評価・量的評価の課題について報告した。</p> <p>日本教育情報学会 第 33 回年会 論文集 (芦屋大学)、pp288-289、2017.8.26-27 藤本光司、森下博行、池田聡、齋藤治、井村薫子、<u>成瀬優享</u>、若杉祥太</p>
4. 2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力の獲得 (2)	共	平成 30 年 8 月	同上	<p>2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力獲得を目的とした PBL 授業プログラムの開発及び実践研究に準じた各年度の比較及び実践報告を行った。</p> <p>日本教育情報学会 第 34 回年会論文集日本教育情報学会 第 34 回年会論文集 (松蔭大学) pp294-295、2018.8.25-26 <u>成瀬優享</u>、盛谷亨、藤本光司、若杉祥太、大西昌哲、齋藤治</p>
5. 2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力育成を目的とした包括的教材開発に関する研究	単	平成 31 年 1 月 15 日	芦屋大学修士論文	<p>2 級自動車整備士養成課程における深い課題解決能力の獲得 (2017) (2018) の実践を元に、整備士に求められる深い課題解決能力を育成するために必要な要素と、教材として求められる要素を併せ持つ教材開発に関する研究を行った。この研究により、計算された不完全さをもつ包括的な教材が提案された。</p> <p>芦屋大学 大学院 平成 30 年度修士論文 2019.1.15 <u>成瀬 優享</u></p>

6. 2級自動車整備士養成課程におけるPBL授業プログラムの開発と導入効果(3)	共	令和1年8月24日	日本教育情報学会	同研究の最終報として、一連して行われたPBL授業プログラムの成果と課題に関する報告を行った。また、これらの研究に伴い明らかとなった課題を解決するための手段として、包括的教材の開発提案を行った。 日本教育情報学会第35回年会論文集(岡山理科大学) pp214-215 2019.8.24/25 <u>成瀬優享</u> 、若杉翔太、盛谷亨、大西昌哲、藤本光司、斎藤治
2級自動車整備士養成課程における包括的教材の開発と実践(1)	共	令和2年8月22日	日本教育情報学会	養成課程で用いる教材として、専門性と社会人基礎力を同時に高めていくための包括的教材に求められる要件と構成について、考察を行った。 日本教育情報学会第36回年会論文集(札幌学院大学) pp312-313 2020.8.22/23 <u>成瀬優享</u> 、若杉祥太
オンデマンド教育下での空間・構造認識能力訓練—ロープワークを活用した訓練の試み—	単	令和3年8月(発表予定)	日本教育情報学会	オンデマンド・オンライン授業の併用が不可欠となった年に実施した整備士関連科目実技試験において、成績の悪化や作業ミスが多く見られた。回答や作業ミスのパターンから、機械構造を理解するために不可欠な空間認識能力の不足が原因の一つであるという仮説を立てた。自宅などの整備実習が出来ない環境においても、この能力を鍛錬するために、ロープワークを活用した空間認識能力向上の試みを企画し、報告する。 2021.8 <u>成瀬優享</u>
【その他(講演や発表)】 1.FD研修 救急	単	令和元年11月	芦屋大学	大学での事故や災害時に伴う負傷者発生に対して、積極的介入が必要なケースと、その対処法に関する講習を実施 <u>成瀬 優享</u>
2.FD研修 救急	単	令和3年5月	芦屋大学	新型コロナウイルス流行に対応した脳心肺蘇生法に関する講習を実施(予定) <u>成瀬 優享</u>

① 教育研究業績書				
教育研究業績書				
氏名 井村 薫子				
研究業績等に関する事項(5年以内)				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
【学術論文】 1「“妖精”が“賢女”に書き換えられた理由—グリム兄弟はなぜフランス語からの借用語に満足せず、ドイツ語派生の言葉にこだわったのか—」	単	平成 25 年 3 月	学位論文	これまで、私自身バレエやディズニー映画を通じて「眠れる森の美女」の存在を知っていたのだが、これには類話があることを知った。その中でも影の主人公といえる“妖精”に焦点を当て、グリム兄弟の行った書き換えを元に、なぜグリム兄弟はドイツ語起源の単語にこだわったのかということをはっきりさせる。
2「日本におけるバレエ教育に関する研究」	単	平成 29 年 2 月 平成 29 年 5 月	・学位論文 ・日本アーツビジネス学会口頭発表	今日までの日本バレエ界の発展は先人たちの努力によって作り上げられてきたが、日本バレエが更なる発展を遂げるにはバレエ教育を根本から見直す必要があると考える。現在日本国内で活躍しているバレエダンサーたちはどのようなバレエ教育を受けてきたのか、ということの研究し、現在の日本国内のバレエ教育における問題を明らかにし、今後のバレエ教育について提言を行った。
3「初年次教育におけるアクティブラーニングの研究(3) — 運用マネジメントおよび学習活動の質的評価と量的評価に関する考察 — 」	共	平成 29 年 7 月	日本教育情報学会第 33 回年会論文集, (pp274-275)	入学時の学生は、不安や期待を感じつつ徐々に大学生活に馴染んでいく。本稿では学生同士のつながりを深めさせる手立てについて、入学前のリメディアル教育および初年次教育の取組を報告する。また成績評価の量的／質的評価の側面を概観する。
4「日本におけるバレエ教育に関する研究—芦屋大学バレエコースのカリキュラムをもとに考察—」	共	平成 29 年 7 月	日本教育情報学会第 33 回年会論文集, (pp 288-289) ・日本教育情報学会第 33 回年会 口頭発表	井村薫子・新谷佳冬・佐藤真左美・藤本光司 芦屋大学経営教育学部経営教育学科では平成 24 年度よりバレエコースが開講した。日本において、私立大学にクラシックバレエに特化したコースの開設というのは初の試みといえる。本研究では、コース設立の意義を述べ、バレエ界の更なる発展のために過去 6 年間のカリキュラムをもとに実績と現状を踏まえ、今後の課題に

5「日本におけるバレエ教師教育の必要性について(1)―芦屋大学バレエ教師課程ディプロマコースの試み―」	共	平成 29 年 12 月	芦屋大学論叢第 68 号	<p>ついて報告する。</p> <p><u>井村薫子</u>・新谷佳冬 大正時代に西洋及びロシアからバレエという芸術が日本に伝来し約一世紀が経過した。バレエ鑑賞が大人の社交や楽しみとなる文化を持つ西洋の国とは異なり、日本ではバレエ公演を観る観客層も薄く、バレエを見に来る観客の大半は出演者の関係者が客席を占めるという状況である。本稿では、一種の歪な形態のまま発展を遂げた日本のバレエの問題点、特に教師養成の側面に焦点を当て 2013 年度より開講した芦屋大学バレエ教師課程ディプロマコースの意義と、コース内容等について報告する。</p>
6「芦屋大学バレエコース卒業公演実践報告(1)-制作側からの視点-」	共	令和 2 年 9 月	芦屋大学論叢第 73 号	<p><u>井村薫子</u>・佐藤真左美 芦屋大学バレエコースでは第一期卒業生を輩出した 2015 年から毎年、芦屋市民センター・ルナホールにて卒業公演を開催している。大学コースにおいての卒業公演ということで、教室の発表会との違いは明らかである。卒業公演が、ただの発表の場ではなく、学生教師共に学びの場として、様々な成果・課題が挙げられる。本稿ではそれらに重点を置き、実績報告とする。</p>
7「芦屋大学バレエコース卒業公演実践報告(2)」	共		芦屋大学論叢第 75 号 ※掲載予定	
<p>【その他(講演や発表)】</p> <p>1.カンパニーでこぼこ 第 10 回公演「眠れる森の美女」出演</p> <p>2.生誕 200 年記念オペラセレクション 歌劇王ヴェルディの肖像 出演</p> <p>3.トモコアートダンスカンパニー「MASK」出演</p> <p>4.衣裳デザイナー 時広真吾プロデュース 第 5 回美の種「華心～打・舞・歌・調・装」出演</p> <p>5.0 歳からのプロムナードコンサート「ピアノとうたの贈り物 Vol.2」出演</p>		<p>平成 24 年 4 月</p> <p>平成 25 年 9 月</p> <p>平成 26 年 6 月</p> <p>平成 27 年 10 月</p> <p>平成 27 年 4 月</p>	<p>兵庫県立芸術文化センター 大ホール</p> <p>フェスティバルホール</p> <p>びわこホール 中ホール</p> <p>京都府民ホール アルティ</p> <p>西宮市プレラホール</p>	

6.0 歳からのプロムナードコンサート「ピアノとうたの贈り物 Vol.3」 演出・出演	平成 28 年 9 月	西宮市ブレラホール	
7.0 歳からのプロムナードコンサート「ピアノとうたの贈り物 Vol.4」演出・出演	平成 30 年 3 月	西宮市ブレラホール	
8. 芦屋大学バレエコース卒業公演 指導・演出助手	平成 27 年 12 月 平成 28 年 12 月 平成 29 年 12 月 平成 30 年 12 月 令和元年 12 月	芦屋市民センター ル ナホール	
9.CTB Studio クリスマスパフォーマンス 指導・演出助手	平成 25 年 12 月 平成 26 年 12 月 平成 27 年 12 月 平成 28 年 12 月 平成 29 年 12 月 平成 30 年 12 月 令和元年 11 月	京都府立文化芸術会 館	